嵯　峨　遺　跡

2020

有限会社 京都平安文化財

例　　言

1．本書は、京都市右京区嵯峨天龍寺若宮町 25-1 他における集合住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

[文化財保護課受付番号　15S055・15S246]

2．本調査は、株式会社大京の委託により、有限会社 京都平安文化財が実施した。

3．発掘調査面積は、1,302㎡である。

4．発掘調査は、平成 28 年 (2016)3 月 22 日から 10 月 21 日まで実施した。整理・報告書作成は、

平成 28 年 (2016)11 月から平成 31 年 (2019)4 月まで実施した。

5．発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の体制で行った。

指 導 機 関　　京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

調査検証委員　京都外国語大学教授 南　博史

同志社女子大学教授 山田 邦和

調 査 主 体　　有限会社京都平安文化財（取締役・栗田尚典）

調 査 主 任　　植山 茂

調査補助員　　入江 正則、卜田 健司

作　業　員　　有限会社 京都平安文化財、安西工業株式会社

測量・図化　　有限会社 京都平安文化財　　浅川 永子、小林 雅幸、田中 侑

遺 物 実 測　　有限会社 京都平安文化財　　木建 梓、川端 玲子

なお、調査中は随時小森俊寛（有限会社 京都平安文化財顧問）の助力を得た。

6．遺構には、概ね検出・確認した順に番号を付し、適時遺構の種類名を添えている。

7．挿図掲載の遺物は、図ごとに番号を付し、原則として図版掲載の遺物は挿図の番号とした。

8．本書の執筆は、第 4 章 1. と第 5 章 2.（1）の項は小森による。

その他は植山が担当した。

9．編集は植山が担当した。

凡　　例

1．調査に使用した座標値は、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に基づいている。水準点は T.P. 値（東京湾平均海面値）を使用した。

2．使用した地図は京都市都市計画局発行の 1：2500「清滝」「北嵯峨」「宇多野」「小倉山」「大覚寺」「鳴滝」を参考にし編集した。

3．色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。

4．検出遺構には、概ね遺構と認定した順に「S」字を付けた番号を与え、遺構の種類を適時その先につけて、「井戸Ｓ＊＊」のように表した。

番号は、第 1 調査区は 1 ～、第 2 調査区は 501 ～とした。

5．遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 50・100 分の 1 とした。

6．土器類の型式・編年は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺構から出土する土器の編年的研究」（『研究紀要』第３号所収、京都市埋蔵文化財研究所、1996 年 11 月 29 日）、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』（京都編集工房、2005 年 11 月 15 日）による。

7．遺物実測図は各図スケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。

8．図版 23 ～ 37 の遺物に付けた番号は、挿図第 26 ～ 63 図の遺物の番号に同じとした。

目　次

例言　・　凡例

第 1 章　調査の経緯と経過 …… 1
1. 調査の経過 …… 2
2. 調査日誌抄 …… 4
3. 基本層序 …… 7

第 2 章　調査地の歴史的環境 …… 11

第 3 章　検出遺構 …… 21
1. 検出遺構の概要 …… 21
2. 平安時代の遺構 …… 23
3. 室町時代の遺構 …… 24
4. 江戸時代の遺構 …… 40

第 4 章　出土遺物 …… 43
1. 土器・陶磁器類 …… 43
2. 瓦磚類 …… 63
3. その他の出土遺物 …… 75

第 5 章　調査の成果 …… 79
1. 遺構について …… 79
2. 遺物について …… 83

参考文献 …… 89

報告書抄録

図版

図版目次

図版 1　第 1 調査区　検出遺構（1）
調査前全景（南東より）／調査前全景（北より）
図版 2　第 1 調査区　検出遺構（2）
調査区東半部（北より）／調査区東半部（南より）
図版 3　第 1 調査区　検出遺構（3）
調査区東半部（南東より）／自然流路部分（南東より）
図版 4　第 1 調査区　検出遺構（4）
調査区南半部（東より）／調査区南半部（西より）
図版 5　第 1 調査区　検出遺構（5）
調査区下層裁ち割り（北端部）／調査区下層裁ち割り（東端部）
図版 6　第 1 調査区　検出遺構（6）
土坑 S307 遺物出土状況（東より）／土坑 S307 埋土断面（西より）／土坑 S307 完掘状況（北より）
土坑 S364（西より）／土坑 S380 付近（北西より）
図版 7　第 1 調査区　検出遺構（7）
溝 S9（東より）／溝 S9 東壁南端土層 ／溝 S9 埋土断面（東より）／溝 S9 埋土の堆積状況（東より）
溝 S9 完掘状況（東より）
図版 8　第 1 調査区　検出遺構（8）
溝 S14（北西より）／溝 S14（南より）
図版 9　第 1 調査区　検出遺構（9）
溝 S14（東南より）／溝 S14（南より）／溝 S14（西より）／溝 S14 東西方向部埋土断面（西より）
溝 S14 屈曲部遺物出土状況（北より）／溝 S14 南北方向部埋土断面（北より）
図版 10　第 1 調査区　検出遺構（10）
柱穴 S239（建物 1）／柱穴 S294（建物 1）／柱穴 S237（建物 1）／柱穴 S169（建物 1）
柱穴 S151（建物 1）／柱穴 S154（建物 1）／柱穴 S140（建物 2）／柱穴 S230（建物 2）
図版 11　第 1 調査区　検出遺構（11）
柱穴 S139（建物 2）／柱穴 S230（建物 2）／柱穴 S256 ／柱穴 S143 ／柱穴 S146 ／柱穴 S205
柱穴 S327 ／柱穴 S130
図版 12　第 1 調査区　検出遺構（12）
井戸 S41（北より）／井戸 S41 半裁状況（北より）
図版 13　第 1 調査区　検出遺構（13）
井戸 S41 半裁状況（北東より）／井戸 S41 最下部（北より）／井戸 S41 石積と土台（北西より）
井戸 S41 石積の土台木材
図版 14　第 1 調査区　検出遺構（14）
炉状遺構 S95（南より）／炉状遺構 S95（東より）／炉状遺構 S185（北東より）／土坑 S345・346（南より）
土坑 S386（東より）／土坑 S98（南より）／土坑 S138・190（南より）／瓦溜 S11（北より）
図版 15　第 2 調査区　検出遺構（1）
調査前全景（北西より）／重機掘削後（南より）
図版 16　第 2 調査区　検出遺構（2）
全景（北より）／全景（南より）
図版 17　第 2 調査区　検出遺構（3）
溝 S546（北より）／溝 S546（南東より）／溝 S546（ 北東より）／溝 S546 遺物出土状況（南より）

溝 S546 遺物出土状況（東より）
図版 18　第 2 調査区　検出遺構（4）
建物 4 柱穴列（東より）／建物 4 柱穴列（南より）／柱穴 S528（建物 4）／柱穴 S530（建物 4）
柱穴 S531（建物 4）／柱穴 S533（建物 4）
図版 19　第 2 調査区　検出遺構（5）
井戸 S509（北西より）／井戸 S509 石積残存部（西より）
図版 20　第 2 調査区　検出遺構（6）
土坑 S557（南より）／土坑 S527（東より）／土坑 S549（東より）／土坑 S548（東より）／土坑 S582（南より）
図版 21　第 2 調査区　検出遺構（7）
土採取坑群（東より）／土採取坑群（西より）
図版 22　第 2 調査区　検出遺構（8）
土採取坑群　中央部（東より）／土採取坑群　全景（北より）
図版 23　出土遺物（1）
土坑 S364 出土土器／土坑 S307 出土土器／平安時代の土器／鎌倉時代の土器
図版 24　出土遺物（2）
溝 S546 出土土器
図版 25　出土遺物（3）
溝 S546 出土土器
図版 26　出土遺物（4）
土坑 S574 出土土器／土坑 S552 出土土器／土坑 S576 出土土器／土坑 S549 出土土器・軒平瓦
発掘区出土青磁
図版 27　出土遺物（5）
溝 S9 出土土器・陶磁器
図版 28　出土遺物（6）
溝 S14 出土土器
図版 29　出土遺物（7）
溝 S14 出土土器・陶磁器
図版 30　出土遺物（8）
井戸 S41 出土土器
図版 31　出土遺物（9）
井戸 S41 出土土器・陶磁器
図版 32　出土遺物（10）
溝状遺構 S26 出土土器・陶磁器／井戸 S509 出土土器・陶磁器
図版 33　出土遺物（11）
井戸 S509 出土土器・陶磁器／第 2 調査区 土採取坑群出土陶磁器／集石遺構 S508 出土土器・陶磁器
図版 34　出土遺物（12）
溝 S9 出土軒平瓦／溝 S14 出土軒平瓦／瓦溜 S11 出土軒丸瓦／溝 S9 出土磚
図版 35　出土遺物（13）
溝 S9 出土丸瓦／溝 S9 出土平瓦
図版 36　出土遺物（14）
井戸 S509 出土木製品
図版 37　出土遺物（15）
石製硯／石材片

挿図目次

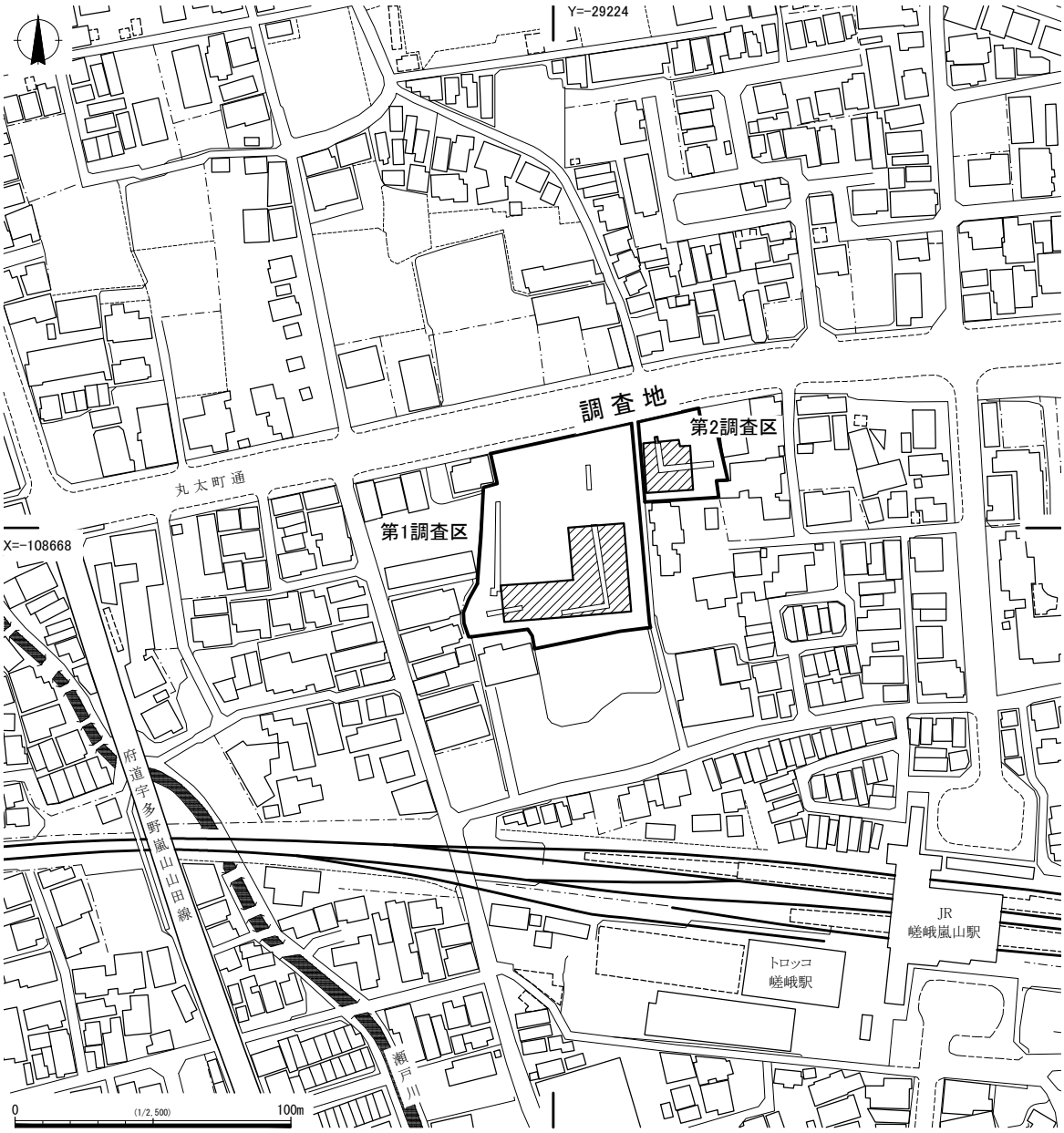
第 1図　調査地位置図 …… 1
第 2図　第 1 調査区南壁土層断面図 …… 8
第 3図　第 1 調査区東壁土層断面図 …… 9
第 4図　第 2 調査区南壁・西壁土層断面図 …… 10
第 5図　周辺遺跡分布図 …… 12
第 6図　第 1 調査区検出遺構平面図 …… 22
第 7図　第 2 調査区検出遺構平面図 …… 23
第 8図　土坑 S307 遺構図 …… 23
第 9図　土坑 S364 遺構図 …… 24
第 10 図　建物 1 遺構図 …… 25
第 11 図　建物 2 遺構図 …… 26
第 12 図　建物 3 遺構図 …… 27
第 13 図　建物 4 遺構図 …… 28
第 14 図　井戸 S41 遺構図 …… 29
第 15 図　井戸 S41 石積土台木材組合図 …… 30
第 16 図　井戸 S41 石積土台木材実測図 1 …… 30
第 17 図　井戸 S41 石積土台木材実測図 2 …… 31
第 18 図　井戸 S509 遺構図 …… 32
第 19 図　溝 S9 遺構図 …… 34
第 20 図　溝 S14 遺構図 …… 35
第 21 図　溝 S546 遺構図 …… 36
第 22 図　土坑 S12・S75・S76 遺構図 …… 37
第 23 図　土坑 S548・S552 遺構図 …… 38
第 24 図　炉状遺構 S95・S185 遺構図 …… 39
第 25 図　第 2 調査区土採取坑群遺構図 …… 41
第 26 図　平安時代の土器類実測図 …… 43
第 27 図　土坑 S364 出土土器類実測図 …… 44
第 28 図　土坑 S307 出土土器類実測図 …… 44
第 29 図　鎌倉時代の土器類実測図 …… 45
第 30 図　溝 S546 出土土器・陶磁器類実測図 …… 46
第 31 図　土抗 S557・S574 出土土器・陶器類実測図 …… 47
第 32 図　土坑 S552 出土土器・陶器類実測図 …… 47
第 33 図　土坑 S576・S549・S536・S583 出土遺物実測図 …… 48
第 34 図　溝 S9 出土土器・陶磁器類実測図 …… 49
第 35 図　溝 S14 出土土器・陶磁器類実測図 …… 51
第 36 図　溝 S14 出土遺物実測図 …… 53
第 37 図　井戸 S41 出土土器・陶磁器類実測図 …… 55
第 38 図　井戸 S41 出土瓦器類実測図 …… 56
第 39 図　溝状遺構 S26 出土遺物実測図 …… 57
第 40 図　発掘区出土青磁類実測図 …… 58
第 41 図　井戸 S509 出土土器・陶磁器類実測図 …… 59
第 42 図　土坑 S527 出土土器・陶器類実測図 …… 60
第 43 図　土坑 S79 出土土器・陶器類実測図 …… 61
第 44 図　土坑 S548 出土土器・陶器類実測図 …… 61
第 45 図　第 2 調査区土採取坑群出土土器・陶磁器類実測図 1 …… 62
第 46 図　第 2 調査区土採取坑群出土土器・陶磁器類実測図 2 …… 62
第 47 図　集石遺構 S508 出土土器・陶磁器類実測図 …… 63
第 48 図　溝 S9 出土軒平瓦実測図 …… 63
第 49 図　溝 S9 出土丸瓦実測図 …… 64
第 50 図　溝 S9 出土平瓦実測図 1 …… 65
第 51 図　溝 S9 出土平瓦実測図 2 …… 66
第 52 図　溝 S9 出土平瓦実測図 3 …… 67
第 53 図　溝 S9 出土磚実測図 …… 68
第 54 図　溝 S14 出土瓦類実測図 …… 69
第 55 図　井戸 S41 出土瓦類実測図 …… 70
第 56 図　井戸 S509 出土遺物実測図 …… 71
第 57 図　瓦溜 S11 出土瓦類実測図 1 …… 72
第 58 図　瓦溜 S11 出土瓦類実測図 2 …… 73
第 59 図　平安・鎌倉時代の瓦類実測図 …… 74
第 60 図　土坑 S307 出土鉄製品実測図 …… 75
第 61 図　井戸 S41 出土鉄製品実測図 …… 75
第 62 図　井戸 S509 出土木製品実測図 …… 77
第 63 図　石製品・石材実測図 …… 78
第 64 図　調査地と周囲の地割 …… 80
第 65 図　検出遺構の方位 …… 81
第 66 図　第 1 調査区 建物遺構の配置 …… 82

表目次

第 1 表　主要検出遺構一覧 …… 42

第 1 章　調査の経緯と経過

今回の調査地は、平安時代から鎌倉・室町時代にかけて、天皇の離宮やその後建立された臨川寺・天龍寺などの大寺院を中心に街区を形成していたと考えられる複合遺跡「嵯峨遺跡」の一画に該当し、往時の嵯峨街区の南北方向の「薄(芒)馬場」と東西方向の「今厨子」（現在の丸太町通）の交点の南東部にあたる。この度、遺跡地内に集合住宅建設が計画され、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査を、京都市の文化財保護課の指導と事業主の協力を得て実施した。調査地は、京都市内中心部から嵯峨に通じる主要道路のひとつである丸太町通（市道 187 号線）の南側で、JR 嵯峨嵐山駅の北西約 200m にあたる地点である。



第 1 図　調査地位置図

嵯峨野地域は、昭和 51 年度（1976 年度）から平成 6 年度（1994 年度）にかけて京都市埋蔵文化財研究所により下水道管敷設工事に伴う広域立会調査が行われ、また、天龍寺周辺や嵐電（京福電気鉄道嵐山線）嵐山駅周辺では比較的多く発掘調査が行われてきた。ただ、今回の調査地近辺ではあまり調査例がなかったが、平成 27 年度（2015 年度）に実施された京都市の文化財保護課による試掘調査で、鎌倉～室町時代の遺物・遺構などが検出された。今回の調査はこの成果を受けて、当該地の土地利用の歴史的変遷などを明らかにする目的で実施した。

1. 調査の経過

建築予定地は小道を挟んで東西に分かれているため、西側の広い部分を第 1 調査区、東側の狭い部分を第 2 調査区とした（第 1 図）。実際の発掘区は、試掘調査の結果を踏まえて遺構が存在するとみられる箇所に設定した。第 1 調査区は 978㎡、第 2 調査区は 324㎡（計 1,302㎡）である。

また、遺物の取り上げや遺構の認定などのため、第 1・第 2 調査区を通して平面直角座標系の方位・数値に基づく 4m 方眼網を設定した。便宜上、南西角を起点（x= － 108704.0m、y= － 29244.0m）にして 4m ごとに南から北に A ～ R 区、西から東に 1 ～ 18 区とし、各方眼は A-1 区…、Q-18 区のように表した。

調査は第 1 調査区から始めた。第 1 調査区は調査前には東部（5 ～ 12 区）は農地、西寄り（1 ～ 4 区）が駐車場として利用されていた。その後、更地になる時点で北側の丸太町通路面の高さ（標高約 44m）に揃えて整地されたため、旧農地部分は厚さ 1m 程度の盛り土があった。盛り土直下は、農地であったときの厚さ約 30㎝の黒褐色耕作土で、これが西寄りの部分以外の全面にあった。重機による掘削は南東角から開始し、盛り土と旧耕作土までを排除した。耕作土層の下面の標高は 42.7m となり、旧農地部分はこの高さでほぼ水平になっていた。

耕作土の下層は、調査地の北東寄りでは耕作土直下から砂利層が現れていたが、南は室町時代の遺物を含む褐色土が地山のシルト層の上に広がっており、本来の地形は北から南にごく緩く傾斜するようであった。包含層の上面を出した段階で現代の耕作関係の溝などを掘り上げ、近世以前の遺構検出を行った。また、北東部の砂利層は自然流路とみられ、遺物は全く含まれていなかった。確認のため掘り下げて、便宜上これも遺構番号を付した（自然流路 S10）。北東部では遺構が希薄であったが、平安時代の墓と考えられる長方形土坑 1 基を検出している（土坑 S307）。

第 1 調査区南西角部には現代の大きな撹乱坑があったが、その近くでは鍵の手に曲がる溝（溝 S14）が検出され、南端東角部でも東西方向の溝（溝 S9）が検出された。東半部では、包含層を削平したところ掘立柱建物の柱穴などの小土坑が多数検出され、間隔に規則性のある柱穴列も認められた（建物 1 ～ 3）。柱穴は底に礎盤石を入れているものもあった。また東半部の北寄りでは、石組み枠の井戸（井戸 S41）も検出した。これらはいずれも室町時代後期に属すると思われた。第 1 調査区の遺構の状況が判明した段階で現地説明会を開催し、約 200 人の参観者があった。

第 1 調査区は遺構精査の後、写真撮影と電子平板による最終的な記録をとり、井戸と自然流路

部分の裁ち割り調査を行って下層の状況を確認した。井戸 S41 は石組枠の最下部に角材を井桁に組んで土台にしていた。なお柱穴列は、それぞれ関連が想定される位置で未検出の柱穴について探っていったが、いずれも想定位置での柱穴は見当たらなかった。

西端部では、南西角部の現代撹乱坑の北壁面と溝 S14 の南北壁面に同様の暗褐色土の落ち込みが見えた。これをつなぐと幅約 1.2m でやや不整形の南北方向の溝状遺構（S380）になった。埋土中には多くはないがいずれも平安時代の遺物が含まれていた。また、この溝状遺構の西側も平安時代の遺物包含層が調査区外に続くようであった。

第 1 調査区はその後、重機による埋め戻しを行って更地の状態に戻し、第 2 調査区の調査にかかった。

第 1 調査区での遺構精査終盤で、第 2 調査区の重機掘削を先行した。第 2 調査区の敷地は更地になる前には住宅で、建物と庭園があったため、東半では植木の根を整地の際に重機で掘り起こしたらしい穴が随所に目立ち、大小の現代掘り込み・撹乱が及んでいた。

第 2 調査区は重機で掘削した現代の整地土の直下（標高約 43m）が、自然堆積とみられる砂利層とシルト層になっていた。近代以前の土坑や溝などの遺構は西半部（M ～ Q-14・15 区）に集中しており、東半部（M ～ Q-16 ～ 18 区）では若干の小土坑と井戸を検出した程度であった。

西半部の北寄りで南北方向の柱穴列（建物 4）を、その南側では墓の可能性のある土坑（土坑 S527・536）を検出した。また南西角部では南北方向の溝（溝 S546）を検出した。これらは、東半部の井戸（井戸 S509）と併せ、第 1 調査区の遺構の状況と同様に室町時代後期に属すると思われた。江戸時代以前の遺構は、東半部の井戸や南西角部の溝などは深く掘り込まれているが、柱穴など多くは浅いものであった。

西半部のシルトの堆積層部分には、連続する多数の土坑が近接あるいは切り合いながら検出された。これらの土坑の形状は多くが方形を呈していて底面はほぼ水平である。埋土には室町時代の遺物が含まれていて、当初は室町時代の遺構かと思われた。しかしシルト層だけを掘り込み、砂利層や砂層部分は避けているようであり、また埋土中の遺物には僅かながら江戸時代の陶磁器片や桟瓦片などが混在していたことから、この連続する土坑群は江戸時代に土を採取した跡と判断した。

井戸 S509 は北西の一部が現代の撹乱坑で削り込まれていたが、井戸はさらに深かった。井戸内を掘り下げていくに従い湧水が多くなり、排水ポンプを入れていたがほとんど手探りの状態であった。埋土中から曲物などが出土したため、底に近いと考え安全のためこの段階で掘り下げを断念し、写真や測量記録をとり井戸の調査を終えた。

北端部で検出した柱穴列（建物 4）の北への延びを確認するため R-15 区に拡張トレンチを設けたが、この拡張部分は現代の撹乱が深く及んでいた。その後、重機によって第 2 調査区も埋め戻しを行い、機材の撤収も済ませて現場作業を終えた。

2. 調査日誌抄

平成 28 年（2016）3 月 22 日～ 10 月 21 日

3 月 22 日 (火)　現場調査開始。第 1 調査区の設定。
京都市確認。
3 月 23 日 (水)　調査前全景写真撮影。ハウス搬入、設置。
3 月 24 日 (木)　重機掘削。盛り土層と耕作土層までを排除。
～ 4 月 1 日 (金)　掘削部分整形。
4 月　4 日 (月)　調査区内基準点測量。国土座標に基づく 4m 方眼を設定。
4 月　5 日 (火)　試掘坑再堀。現代耕作溝掘削。
・　6 日 (水)　壁面整形。
4 月　7 日 (木)　雨で掘削作業は中止。
4 月　8 日 (金)　東北部の現代撹乱坑を掘る。
4 月 11 日 (月)　東、南壁際に土層観察用溝を掘る。
4 月 12 日 (火)　南端東寄りで土坑状遺構検出。東端砂利層掘削、蛇行する流路か。現代耕作溝掘削。
4 月 13 日 (水)　東端流路の砂利層、現代耕作溝掘削。
～ 19 日 (火)　東半・西半部遺構検出。
4 月 20 日 (水)　南半部遺構検出。東半部包含層掘削。
京都市検査。
4 月 21 日 (木)　東半部包含層、東端流路掘削。
～ 27 日 (水)　京都市検査 (26 日)。
4 月 28 日 (木)　雨のため、作業中止。
5 月　6 日 (金)　西端部重機掘削。東半部包含層掘削。
京都市検査。
5 月　7 日 (土)　西端部現代撹乱坑掘削。重機掘削終了。
5 月　9 日 (月)　雨のため、作業中止。
～ 11 日 (水)
5 月 12 日 (木)　東半部包含層掘削。北部遺構掘削。
・ 13 日 (金)
5 月 14 日 (土)　西端部再度重機掘削。東半部包含層掘削、流路砂利層掘削。
5 月 16 日 (月)　包含層掘削、炉状遺構検出。
・ 17 日 (火)
5 月 18 日 (水)　西半部撹乱坑掘削、その周囲の遺構検出。
・ 19 日 (木)
5 月 20 日 (金)　東半・西半部包含層掘削、遺構検出。
～ 25 日 (水)　京都市検査 (23 日)。
5 月 26 日 (木)　南端・西端部遺構精査。
5 月 27 日 (金)　東半・西半部遺構検出、遺構精査。
～ 30 日 (月)　検証委員・南氏視察 (27 日)。
5 月 31 日 (火)　西半部溝 S14 清掃、写真撮影。東半部遺構精査。
6 月　1 日 (水)　西端部写真撮影。東半部遺構掘削、精査。
6 月　2 日 (木)　西半・東半部遺構掘削、精査。
6 月　3 日 (金)　遺構掘削、精査。溝 S9・井戸 S41 撮影。
調査区壁面の撮影・測量。
6 月　6 日 (月)　遺構掘削、精査。遺構測量。検証委員・山田氏視察。

2016 年 3 月 22 日　第 1 調査区設定

2016 年 3 月 29 日　第 1 調査区（東部）
重機掘削（南東から）

2016 年 4 月 5 日　第 1 調査区
調査風景（北から）

2016 年 4 月 14 日　第 1 調査区（東部）
自然流路 10 掘下げ（南東から）

6月　7日(火)　雨のため、掘削作業は中止。
午前中、平面測量(4～6区)。
6月　8日(水)　西半・東半部遺構精査。
～14日(火)
6月15日(水)　南半東部平面測量。
6月16日(木)　雨のため、外作業は中止。
6月17日(金)　遺構精査。南半東部平面測量。
第2調査区設定。京都市検査。
6月18日(土)　遺構掘削、精査。
6月20日(月)　遺構掘削、精査。平面測量。
・21日(火)
6月22日(水)　全景写真撮影。
6月23日(木)　雨のため、外作業は中止。
6月24日(金)　午後、雨のため外作業中止。遺構平面測量。
6月27日(月)　遺構精査。平面測量。京都市検査。
6月28日(火)　遺構精査。
・29日(水)
6月30日(木)　遺構精査。午後、記者発表(7社)。
検証委員・南氏視察。
7月　1日(金)　現地説明会準備。調査区内、全面清掃。
7月　2日(土)　現地説明会。参加者約200人。
7月　4日(月)　南半部清掃、遺構精査。
7月　5日(火)　南半部写真撮影。遺構精査。遺構測量。
第2調査区設定。
7月　6日(水)　第1調査区調査区壁面清掃。
7月　7日(木)　第2調査区重機掘削。第1調査区壁面測量。
・　8日(金)　遺構精査。
7月11日(月)　第2調査区重機掘削終了。第1調査区自然流路部分地山裁ち割り。井戸S41清掃。
7月12日(火)　第2調査区壁面整形。
7月13日(水)　雨のため、外作業は中止。
7月14日(木)　井戸S41の北側を重機裁ち割り。西部北寄り重機掘り下げ。土層測量。
7月15日(金)　第1調査区、東の流路部分重機裁ち割り。
井戸S41写真撮影。京都市検査。
7月16日(土)　井戸S41石組み内掘り下げ。
西部重機掘削部分整形・精査。
7月18日(月)　第1調査区、重機により埋め戻し開始。
井戸S41底まで裁ち割り。西端部精査。
7月19日(火)　第1調査区埋め戻し。遺構追加精査。
・20日(水)　第2調査区壁面整形。
7月21日(木)　第1調査区調査終了。
7月25日(月)　第2調査区壁面整形。現代撹乱坑掘削。
7月26日(火)　器材など第2調査区へ移動。
7月27日(水)　遺構検出作業。現代撹乱坑等掘削。
～8月1日(月)
8月　2日(火)　西半部の遺構・遺物包含層掘削。
・　3日(水)　井戸S509掘り下げ。
8月　4日(木)　遺構・遺物包含層掘削。
・　5日(金)　京都市検査(5日)。
8月　8日(月)　遺構精査。全面清掃。平面測量。

2016年5月24日　第1調査区（西部）
溝S14掘下げ（南から）

2016年6月3日　第1区調査区（東部）
溝S9掘下げ（東から）

2016年6月18日　第1調査区（東部）
井戸S41掘下げ（西から）

2016年6月18日　第1調査区（東部）
建物柱穴列

8月　9日(火)　調査区内外全面清掃・整頓。
8月10日(水)　午前中、全景写真撮影。午後、遺構掘削。
8月17日(水)　西半部の遺構掘削・精査。
～25日(木)
8月26日(金)　西半部の遺構掘削・精査。
東半部井戸S509掘り下げ。
8月29日(月)　雨のため、外作業は中止。
8月30日(火)　西半部の遺構掘削・精査。
～9月7日(水)
9月　8日(木)　雨のため、外作業は中止。
9月　9日(金)　西半部の土採取坑掘削・精査。
9月12日(月)　西半部の遺構掘削・精査。京都市検査。
9月13日(火)　雨のため、外作業は中止。
9月14日(水)　西半部の遺構掘削・精査。
～16日(金)　東半部井戸S509掘削・精査。
9月20日(火)　雨のため、外作業は中止。
台風16号接近、待機。
9月21日(水)　遺構内流入土除去。溝S546の遺物取り上げ。
9月23日(金)　井戸S509内部精査。西半の土採取坑群・溝S546精査。
9月26日(月)　東半部平面精査。井戸S509内部精査。西半の土採取坑群整形。
9月27日(火)　調査区全周の壁面整形。北東部未堀遺構掘る。
井戸S509内部写真撮影。
9月28日(水)　雨のため、外作業は中止。遺物等点検。
・29日(木)
9月30日(金)　井戸S509内部精査。土採取坑群の整形・清掃。
北東部未堀遺構掘る。
10月3日(月)　雨のため、外作業は中止。
10月4日(火)　土採取坑群の整形・清掃。
井戸S509内部掘り下げ。
10月5日(水)　台風18号接近で、外作業中止。
10月6日(木)　全面清掃。
10月7日(金)　全景写真撮影。京都市検査。
10月11日(火)　井戸S509内部掘り下げ。土採取坑群再撮影。
遺構実測。
10月12日(水)　測量続き。井戸S509掘り下げ(-3.4mまで)。
京都市検査。
10月13日(木)　柱穴列の延長確認で北に拡張。
井戸S509、ほぼ底まで掘削。
10月14日(金)　壁面土層・調査区西部遺構測量。
井戸S509写真撮影。
10月17日(月)　器材・用具、整理。検証委員・山田氏視察。
10月18日(火)　重機により埋め戻し。
10月19日(水)　器材・用具、整理撤収。
・　20日(木)　ハウス撤収。
10月21日(金)　現場調査終了。

2016年7月2日　第1調査区
現地説明会風景

2016年7月20日　第1調査区（西部）
埋め戻し

2016年7月28日　第2調査区
調査風景

2016年8月1日　第2調査区
調査風景

2016 年 9 月 7 日　第 2 調査区
調査風景

2016 年 10 月 18 日　第 2 調査区
埋め戻し

3. 基本層序

今回の調査地は、北方の丘陵地と南西方の桂川の間の平坦地で、調査地の西約 200m に瀬戸川が北北西から南南東に、東約 300m に有栖川が北から東南東に流れ、この 2 本の小河川に挟まれた地点である。南約 700m には桂川が西から東に流れており、基本的には北から南にごく緩く傾斜する地形である。調査地付近では、北方の山地から南に流れた砂礫・シルト層が堆積し、埋没している小規模な流路が随所に形成されているようである。

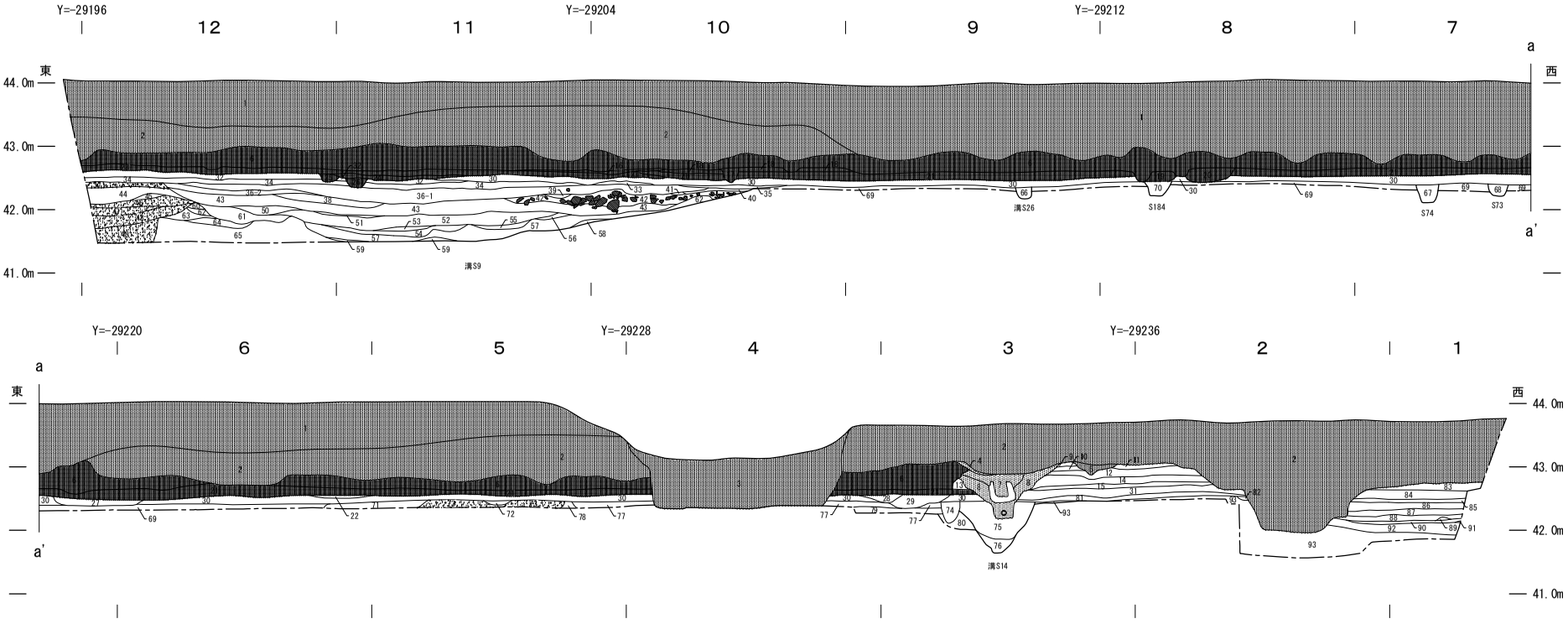
前述のように、第 1 調査区の旧農地部分は黒褐色耕作土の直上から厚さ 1m 程度の盛り土で整地されていた（第 2・3 図 1 ～ 3 層）。第 1 調査区南壁の土層でみると、耕作土の下面の標高はほぼ 42.4m で東西に水平になっている。耕作土上面は畑の畝の凹凸がみえ、一部ではビニールハウスの支柱片や防草シートなどが残っていた。第 1 調査区東壁の土層でみると、耕作土と床土（第 3 図 7 ～ 12 層）の下面の標高は北端部で標高 42.7m、南端部は 42.4m で、ごくわずか北から南に傾斜している。

耕作土の下層は、第 1 調査区北半部では自然堆積層とみられる砂礫層とシルト層になっていたが、南半部では自然堆積層の褐色シルト上を室町時代の遺物を含む褐色砂質土が広く覆っていた。この層は南端で厚さ 15㎝前後であった（第 2 図南壁 30 層、第 3 図東壁 35 層）。北半部も本来この層があったと思われるが、現代の農地で自然堆積層まで削平されており、北半での検出遺構も浅いものが大半であった。10 ～ 12-E ～ J 区の砂利層には自然流路の部分があり、元の地山にあたる砂利とシルトの堆積層を削り込んだ流路が形成されていた。

第 1 調査区の農地の西端は 3-A ～ D 区で、この位置には南北方向に塩ビ管とコンクリート製 U 字溝が敷設されていた。ここより西の 1・2 区では室町時代の遺物包含層の上に江戸時代の遺物を含む層（第 2 図 14・15 層）がある。

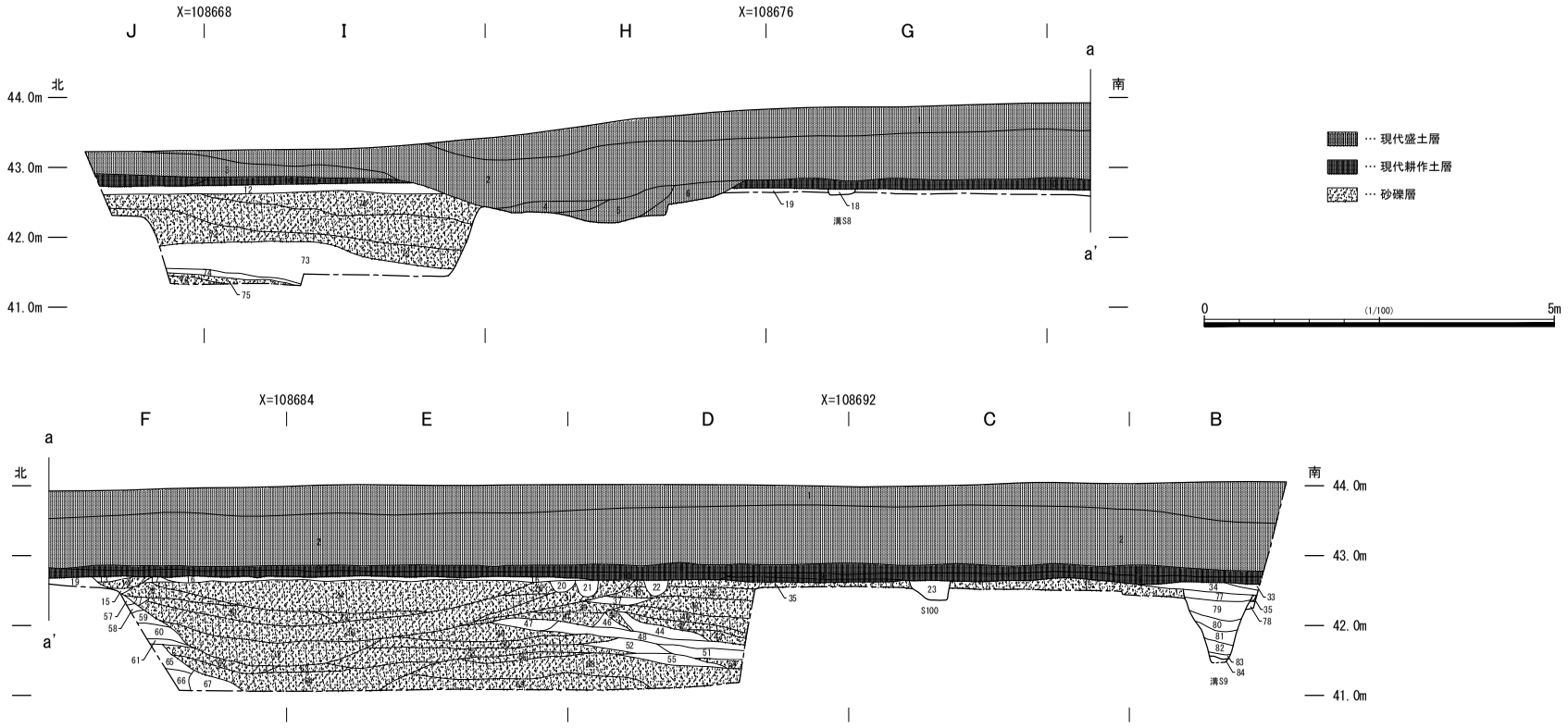
第 2 調査区は、大部分が地山直上まで近現代の掘り込みと盛り土で、近代以前の遺構検出面は南端でおよそ標高 42.8m、北端で 43.1m である。第 2 調査区の地山も、概ね自然流路であった砂礫層で、西寄りにはシルト層の部分があった。

第２図　第１１調査区南壁土層断面図



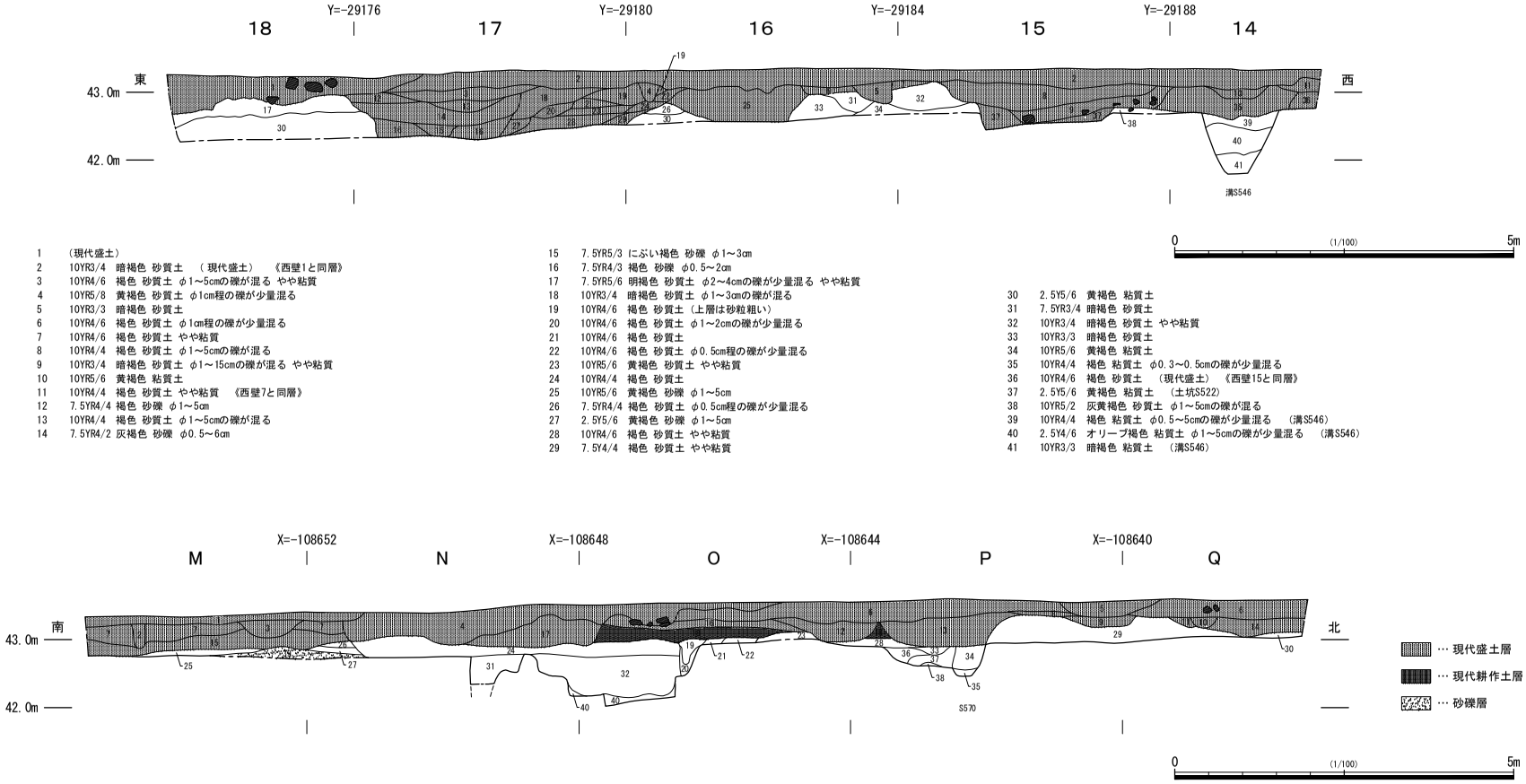
0　(1/100)　5m

1	7.5YR6/6 橙色 砂泥 φ1～10cmの礫が多量に混る （現代盛土）	25	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ2～10cmの礫が混る	48	10YR5/6 黄褐色 砂礫 φ0.5～4cm	72	10YR4/6 褐色 砂質土
2	（現代盛土）	26	10YR4/4 褐色 砂質土 φ2cm程の礫が混る	49	2.5Y4/6 オリーブ褐色 砂礫 φ0.5～4cm	73	2.5Y5/3 黄褐色 砂礫 φ1.5～6cm
3	10YR6/4 にぶい黄橙色 泥砂 φ1～15cmの礫が混る （現代盛土）	27	10YR3/4 暗褐色 砂質土	50	10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土 （溝S9）	74	10YR4/6 褐色 砂質土 φ1～2cmの礫が少量混る やや粘質
4	（現代盛土）	28	2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂質土 φ1～4cmの礫が少量混る やや粘質	51	10YR4/6 褐色 粘質土 炭化物多く含む （溝S9）	75	7.5YR3/4 暗褐色 粘質土 φ1cm程の礫が少量混る （溝S14）
5	10YR7/4 にぶい黄橙色 砂質土	29	10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ1～2cmの礫が少量混る やや粘質	52	10YR4/4 褐色 粘質土 （溝S9）	76	10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ2cmの礫が少量混る （溝S14）
6	10YR3/1 黒褐色 泥砂 （耕作土）	30	10YR4/4 褐色 砂質土	53	10YR3/3 暗褐色 粘質土 （溝S9）	77	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ2～5cmの礫が少量混る やや粘質
7	（現代排水溝埋土）	31	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5～1cmの礫が少量混る 鉄分を少量含む	54	10YR3/4 暗褐色 粘質土 （溝S9）	78	10YR4/4 褐色 砂質土 φ0.5cm程の礫が少量混る
8	（現代排水溝埋土）	32	10YR6/3 にぶい黄橙色 砂質土 φ1～3cmの礫が混る 《東壁33と同層》	55	10YR4/4 褐色 粘質土 （溝S9）	79	10YR3/3 暗褐色 砂質土 φ2～5cmの礫が少量混る 粘質
9	10YR2/3 黒褐色 砂質土	33	10YR5/6 黄褐色 砂質土 φ0.5～2cmの礫が混る	56	10YR3/4 暗褐色 粘質土 （溝S9）	80	10YR4/4 褐色 砂質土 φ0.5～4cmの礫が少量混る やや粘質
10	10YR3/3 暗褐色 砂質土 φ2cm程の礫が混る	34	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5～3cmの礫が混る 《東壁34と同層》	57	2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘質土 （溝S9）	81	10YR4/4 褐色 砂質土 やや粘質
11	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ1～3cmの礫が混る	35	2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂質土 やや粘質	58	7.5YR3/4 暗褐色 粘質土	82	10YR4/6 褐色 砂質土 粘質
12	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5～2cmの礫が少量混る	36-1	10YR3/3 暗褐色 砂質土 φ1～10cmの礫が混る （溝S9）	59	2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘質土（地山）	83	2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土 φ0.3cm程の礫が少量混る 粘質
13	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘質土 φ1cm程の礫が少量混る	36-2	36-1に類似	60	10YR4/2 灰黄褐色 砂質土 やや粘質	84	2.5Y5/4 黄褐色 砂質土 φ0.2～1cmの礫が少量混る
14	10YR4/4 褐色 砂質土 φ0.5～2.5cmの礫が混る	37	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂礫 φ0.5～5cm 《東壁35と同層》	61	10YR2/2 黒褐色 粘質土 （溝S9）	85	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質土
15	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5cm程の礫が少量混る	38	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ15cm程の礫が少量混る （溝S9）	62	2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質土	86	2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂質土
16	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ3cm程の礫が混る	39	10YR3/4 暗褐色 砂質土 やや粘質 （溝S9）	63	2.5Y4/4 オリーブ褐色 粘質土	87	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土
17	2.5Y5/4 黄褐色 砂質土	40	10YR3/4 暗褐色 砂質土 やや粘質 （溝S9）	64	7.5YR4/6 褐色 粘質土	88	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ1cm程の礫が混る
18	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質土	41	10YR3/3 暗褐色 粘質土 （溝S9）	65	2.5Y5/6 黄褐色 粘質土（地山）	89	2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂質土 粘質強い
19	10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ0.2cm程の礫が少量混る	42	10YR6/4 にぶい黄橙色 砂泥 礫・瓦類が多量に混る （溝S9）	66	7.5YR3/1 黒褐色 砂質土（溝S26）	90	10YR4/4 褐色 砂質土 φ1～2cmの礫が混る
20	2.5Y4/6 オリーブ褐色 砂質土 やや粘質	43	10YR5/6 黄褐色 砂質土 やや粘質 （溝S9）	67	10YR2/3 黒褐色 砂質土 φ0.5～1cmの礫が少量混る （S74）	91	10YR4/6 褐色 砂質土 φ2～4cmの礫が少量混る やや粘質
21	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5～2cmの礫が少量混る	44	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質土 やや粘質 《東壁78と同層》	68	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘質土 φ0.5～1cmの礫が少量混る （S73）	92	10YR4/2 灰黄褐色 砂質土
22	7.5YR3/3 暗褐色 砂質土 φ0.5～1cmの礫が少量混る	45	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂礫 φ0.5～2cm	69	10YR4/4 褐色 砂質土 φ1.5～2cmの礫が少量混る	93	10YR3/3 暗褐色 粘質土
23	10YR3/3 暗褐色 砂質土《東壁9と同層》	46	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂礫 φ0.5～4cm	70	10YR3/3 暗褐色 砂質土 粘質強い （S184）		
24	10YR4/4 褐色 砂質土 φ0.5～2cmの礫が混る	47	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂礫 φ0.5～2cm	71	10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ1～4cmの礫が少量混る やや粘質		



第３図　第１調査区東壁土層断面図

1	7.5YR6/6 橙色 砂泥 φ1～10cmの礫が多量に混る （現代盛土）	23	10YR4/6 褐色 砂質土（S100）	45	10YR4/2 灰黄褐色 砂礫 φ0.5～2cm	67	10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ3cm程の礫が混る
2	10YR6/4 にぶい黄橙色 泥砂 φ1～15cmの礫が混る （現代盛土）	24	10YR5/6 黄褐色 砂礫 φ0.5～15cm	46	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土	68	10YR3/2 黒褐色 砂礫 φ1～10cm
3	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 φ1～5cmの礫が混る （現代盛土）	25	10YR4/4 褐色 砂礫 φ2～5cm	47	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土	69	10YR2/1 黒色 砂礫 φ0.5～2cm
4	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫 φ3cm	26	2.5Y5/4 黄褐色 砂礫 φ0.5～5cm	48	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 細砂	70	10YR5/2 灰黄褐色 砂礫 φ1～5cm
5	10YR5/3 にぶい黄褐色 粘質土	27	2.5Y4/6 オリーブ褐色 砂質土 φ1～3cmの礫が混る	49	10YR4/2 灰黄褐色 砂礫 φ0.2～10cm	71	10YR3/3 暗褐色 砂礫 φ1～5cm
6	10YR4/2 灰黄褐色 砂質土 φ3～5cmの礫が混る	28	10YR4/4 褐色 砂礫 φ1～10cm	50	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂礫 φ2～10cm	72	10YR4/6 褐色 砂礫 φ1～2cm
7	10YR3/2 黒褐色 泥砂 （耕作土）	29	10YR4/6 褐色 砂礫 φ1～10cm	51	10YR4/4 褐色 砂質土 粗砂	73	10YR4/6 褐色 砂質土 φ2～5cmの礫が多量に混る
8	10YR3/1 黒褐色 泥砂 （耕作土）	30	10YR4/4 褐色 砂礫 φ1～10cm	52	10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ2～5cmの礫が多量に混る	74	10YR5/6 黄褐色 砂質土 やや粘質
9	10YR3/3 暗褐色 砂質土 （耕作土）	31	2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂礫 φ1～5cm	53	10YR4/6 褐色 砂礫 φ1～7cm	75	10YR4/4 褐色 砂礫 φ2cm程
10	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 （耕作土）	32	10YR4/6 褐色 砂礫 φ2～15cm	54	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫 φ1～3cm	76	10YR3/3 暗褐色 砂礫 φ2cm程
11	10YR7/2 にぶい黄橙色 砂質土 （耕作土）	33	10YR6/3 にぶい黄橙色 砂質土 φ1～3cmの礫が混る	55	10YR4/6 褐色 細砂 φ2cm程の礫が混る （溝S9）	77	2.5Y5/3 黄褐色 砂質土 φ1～2cmの礫が混る （溝S9）
12	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 （耕作土）	34	10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ0.5～3cmの礫が混る	56	10YR3/3 暗褐色 砂礫 φ1～10cm	78	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質土 やや粘質
13	10YR4/6 褐色 砂質土 φ0.5cm程の礫が少量混る	35	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂礫 φ0.5～5cm	57	10YR4/4 褐色 砂質土	79	10YR4/6 褐色 砂質土 （溝S9）
14	10YR3/4 暗褐色 砂礫 φ0.5～5cm	36	10YR4/6 褐色 砂礫 φ0.5～10cm	58	10YR3/3 暗褐色 砂質土 φ1～2cmの礫が少量混る	80	10YR3/3 暗褐色 粘質土 φ2～7cmの礫が混る （溝S9）
15	10YR5/6 黄褐色 砂質土	37	2.5Y4/6 オリーブ褐色 砂質土 φ2～5cmの礫が少量混る	59	10YR5/6 黄褐色 砂質土 やや粘質	81	2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質土 φ0.5～2cmの礫が混る （溝S9）
16	2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂泥 φ5～10cmの礫が少量混る	38	10YR3/4 暗褐色 砂礫 φ1～2cm	60	10YR4/6 褐色 砂質土 φ3cm程の礫が少量混る	82	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘質土 φ0.5～3cmの礫が多量に混る （溝S9）
17	10YR4/4 褐色 砂質土 φ10cm程の礫が混る	39	2.5Y4/6 オリーブ褐色 砂礫 φ1～5cm	61	2.5Y4/6 オリーブ褐色 粘質土	83	10YR4/4 褐色 粘質土 （溝S9）
18	10YR4/4 褐色 砂質土 （溝S8）	40	10YR3/2 黒褐色 砂礫 φ0.5～2cm	62	10YR4/6 褐色 砂礫 φ0.5～3cm	84	10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ1cm程の礫が少量混る
19	10YR4/4 褐色 砂質土 φ0.5～5cmの礫が少量混る	41	10YR3/4 暗褐色 砂礫 φ0.2～5cm	63	10YR4/4 褐色 砂礫 φ1～5cm		
20	10YR4/4 褐色 砂質土 φ1～10cmの礫が少量混る	42	10YR3/4 暗褐色 砂礫 φ0.2～0.5cm	64	10YR4/2 灰黄褐色 砂礫 φ1～3cm	24～32,35～76（自然流路S10）	
21	10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ3cm程の礫が少量混る	43	10YR4/6 褐色 砂礫 φ0.1～2cm	65	2.5Y5/6 黄褐色 砂礫と同色の粘質土 φ2～5cmの礫が混る		
22	2.5Y5/4 黄褐色 砂礫 φ0.5～10cm	44	10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ3cm程の礫が混る	66	10YR4/6 褐色 砂礫と同色の粘質土 φ3cm程の礫が混る		



1 （現代盛土）
2 10YR3/4 暗褐色 砂質土 （現代盛土） 《西壁1と同層》
3 10YR4/6 褐色 砂質土 φ1～5cmの礫が混る やや粘質
4 10YR5/8 黄褐色 砂質土 φ1cm程の礫が少量混る
5 10YR3/3 暗褐色 砂質土
6 10YR4/6 褐色 砂質土 φ1cm程の礫が少量混る
7 10YR4/6 褐色 砂質土 やや粘質
8 10YR4/4 褐色 砂質土 φ1～5cmの礫が混る
9 10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ1～15cmの礫が混る やや粘質
10 10YR5/6 黄褐色 粘質土
11 10YR4/4 褐色 砂質土 やや粘質 《西壁7と同層》
12 7.5YR4/4 褐色 砂礫 φ1～5cm
13 10YR4/4 褐色 砂質土 φ1～5cmの礫が混る
14 7.5YR4/2 灰褐色 砂礫 φ0.5～6cm
15 7.5YR5/3 にぶい褐色 砂礫 φ1～3cm
16 7.5YR4/3 褐色 砂礫 φ0.5～2cm
17 7.5YR5/6 明褐色 砂質土 φ2～4cmの礫が少量混る やや粘質
18 10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ1～3cmの礫が混る
19 10YR4/6 褐色 砂質土（上層は砂粒粗い）
20 10YR4/6 褐色 砂質土 φ1～2cmの礫が少量混る
21 10YR4/6 褐色 砂質土
22 10YR4/6 褐色 砂質土 φ0.5cm程の礫が少量混る
23 10YR5/6 黄褐色 砂質土 やや粘質
24 10YR4/4 褐色 砂質土
25 10YR5/6 黄褐色 砂礫 φ1～5cm
26 7.5YR4/4 褐色 砂質土 φ0.5cm程の礫が少量混る
27 2.5Y5/6 黄褐色 砂礫 φ1～5cm
28 10YR4/6 褐色 砂質土 やや粘質
29 7.5Y4/4 褐色 砂質土 やや粘質
30 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土
31 7.5YR3/4 暗褐色 砂質土
32 10YR3/4 暗褐色 砂質土 やや粘質
33 10YR3/3 暗褐色 砂質土
34 10YR5/6 黄褐色 粘質土
35 10YR4/4 褐色 粘質土 φ0.3～0.5cmの礫が少量混る
36 10YR4/6 褐色 砂質土 （現代盛土） 《西壁15と同層》
37 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土 （土坑S522）
38 10YR5/2 灰黄褐色 砂質土 φ1～5cmの礫が混る
39 10YR4/4 褐色 粘質土 φ0.5～5cmの礫が少量混る （溝S546）
40 2.5Y4/6 オリーブ褐色 粘質土 φ1～5cmの礫が少量混る （溝S546）
41 10YR3/3 暗褐色 粘質土 （溝S546）

1 10YR3/4 暗褐色 砂質土 （現代盛土） 《南壁2と同層》
2 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土
3 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土
4 10YR7/3 にぶい黄橙色 砂質土 φ1～15cmの礫が混る （現代盛土）
5 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 φ3cm程の礫が少量混る
6 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ5cm程の礫が少量混る （現代盛土）
7 10YR4/4 褐色 砂質土 φ1～5cmの礫が混る 《南壁11と同層》
8 10YR4/6 褐色 粘質土
9 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土
10 10YR3/4 暗褐色 砂質土
11 10YR4/6 褐色 砂質土 φ1cm程の礫が少量混る
12 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土
13 10YR4/6 褐色 砂質土
14 10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ1cm程の礫が混る
15 10YR4/6 褐色 砂質土 （現代盛土）《南壁36と同層》
16 10YR4/4 褐色 砂質土 （耕作土）
17 10YR4/4 褐色 砂質土 φ3～10cmの礫が少量混る
18 10YR5/6 黄褐色 砂質土 やや粘質 （耕作土）
19 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 （土採取抗埋土）
20 10YR4/6 褐色 砂質土 （土採取抗埋土）
21 10YR4/6 褐色 砂質土 やや粘質
22 10YR4/4 褐色 砂質土
23 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 やや粘質
24 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土
25 7.5YR4/4 褐色 砂質土
26 10YR6/6 明黄褐色 粘質土
27 10YR6/4 にぶい黄褐色 砂質土 φ3～5cmの礫が混る
28 10YR3/4 暗褐色 砂質土
29 2.5Y4/6 オリーブ褐色 砂質土 φ5cm程の礫が少量混る
30 10YR3/4 暗褐色 砂質土 φ2～5cmの礫が混る
31 10YR4/4 褐色 砂質土 （土採取抗埋土）
32 10YR3/4 暗褐色 砂質土 やや粘質 （土採取抗埋土）
33 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土
34 10YR3/4 暗褐色 粘質土 （土採取抗埋土）
35 7.5YR4/3 褐色 粘質土 （土採取抗埋土）
36 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土 やや粘質
37 10YR4/4 褐色 砂質土 φ2cm程の礫が少量混る
38 7.5YR4/4 褐色 砂質土 やや粘質
39 10YR4/2 灰黄褐色 砂礫
40 10YR4/6 褐色 砂質土 （土採取抗埋土）

第４図　第２調査区南壁・西壁土層断面図

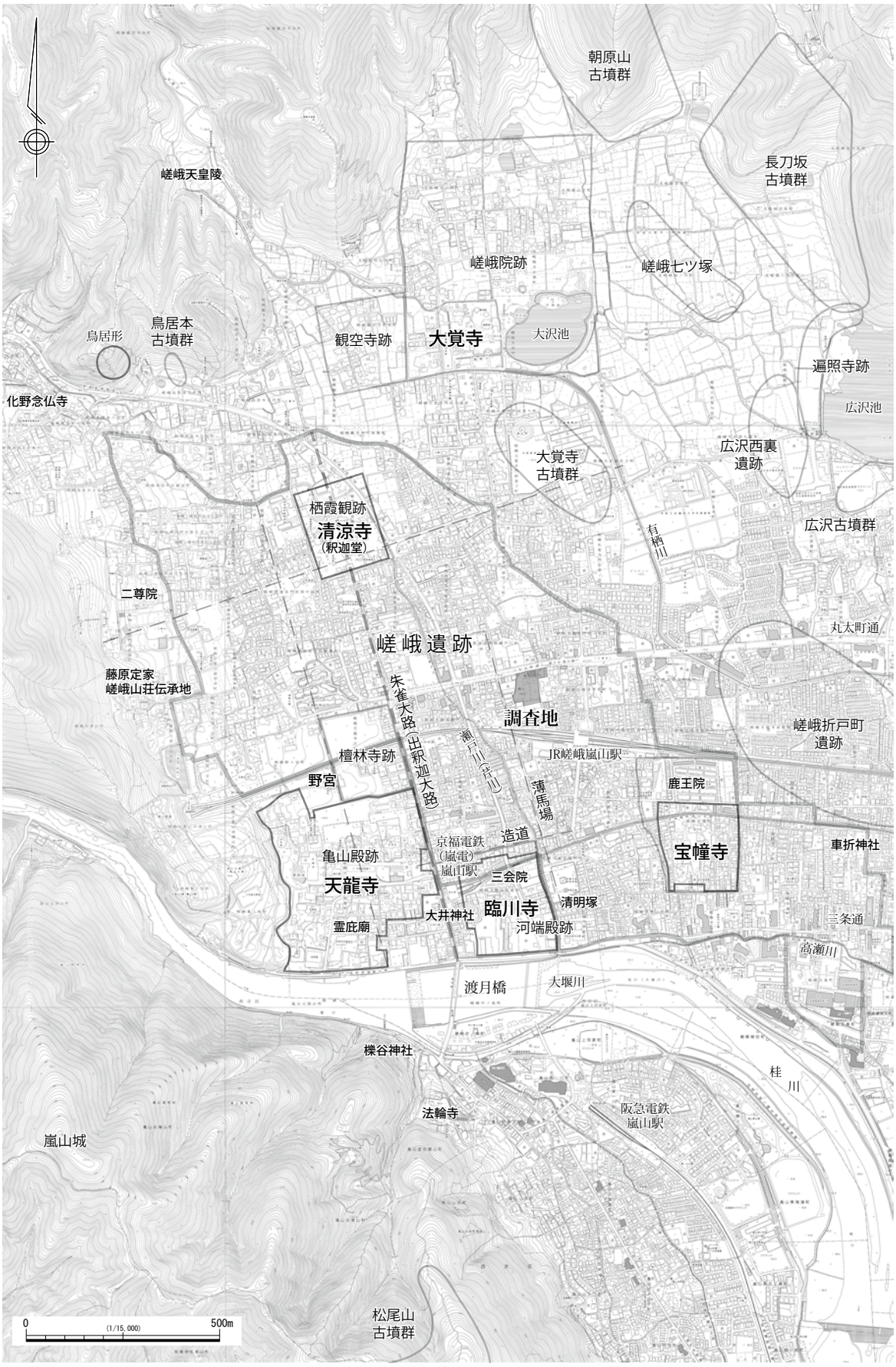
第２章　調査地の歴史的環境

調査地付近の嵯峨地域では、嵯峨院下層遺跡で縄文時代中期の土器が出土しており、縄文時代からの人の営みが認められる。現在のところ、調査地近辺では確実な弥生時代の遺跡は知られていないが、古墳時代には嵯峨地域北方の山地辺には多くの古墳群が分布する。6 世紀末になると大沢池の南に円山古墳、南天塚古墳、入道塚古墳、狐塚古墳の大覚寺古墳群が形成される。これらの古墳は、嵯峨地域を開発したとされる秦氏の関連が考えられている。また、広沢池の南の嵯峨折戸町遺跡では飛鳥時代の遺構・遺物が検出されている。

大宝元年（701）、秦都里が松尾社を造営する（『本朝月令』）と伝わる。奈良時代になると、大堰川（桂川）の両岸や嵯峨地域の広い範囲で開発が進んでいたのであろう。『行基年譜』によると葛野郡大井村に「大井院」が、いわゆる「行基四十九院」のひとつとして開かれる。ただ、この実態は明らかではない。また、天応元年（781）には愛宕山に愛宕大権現を祀る白雲寺が建立されたという。そして延暦 3 年（784）の長岡京遷都にあたっては、上下賀茂・松尾・乙訓の神に加階され、延暦 5 年には松尾神が従四位下に叙されている（『日本紀略』）。

平安京遷都の前後の時期には『日本紀略』によると、桓武天皇は延暦 11 年（792）より同 23 年まで毎年のように葛野川あるいは葛野に行幸することが見える。また延暦 16 年（797）8 月 21 日、斎内親王が葛野川で禊し野宮に入る記事がある（『日本紀略』）。これより 11 世紀始め頃まで、斎王が伊勢に赴くまでに葛野川（大堰川、西河）や賀茂川で禊を行い、京外の野宮に滞在する。野宮の場所は必ずしも明らかではなく嵯峨地域に限らないようであるが、葛野川（大堰川）での禊の例が大半で、野宮の多くは嵯峨に営まれたと考えられる。現在の野宮神社は平安時代の野宮の跡地の一つで、嵯峨地域には斎明神社（神明神社）など伊勢皇太神を祀る神社があり、これらも野宮の故地らしい。

桓武天皇の葛野行幸の中で、『類聚国史』によると延暦 21 年（802）8 月 8 日に「神野皇子（嵯峨天皇）の嵯峨荘に御す」とある。嵯峨天皇の嵯峨院（嵯峨離宮）についての最初の記事資料とされる。嵯峨天皇の即位後は頻繁に嵯峨院に行幸があり、譲位後の承和元年（834）からは嵯峨院が上皇御所（仙洞）となり、同年 10 月 7 日には嵯峨院の寝殿が新たに完成した（『日本紀略』）。仁明天皇は、翌年から承和 9 年（842）の嵯峨上皇崩御まで、ほぼ毎年のように嵯峨院に朝観行幸をしている（『日本紀略』）。承和 3 年（836）頃には、太皇太后橘嘉智子（檀林皇后）が嵯峨庄内に檀林寺を営む（『続日本後紀』）。承和 9 年 7 月の嵯峨上皇崩御の後、9 月 4 日には檀林寺で御斎が行われている（『日本紀略』）。また、貞観 18 年（876）には嵯峨院を仏寺とし大覚寺とされた（『日本三代実録』）。現在の清涼寺も、もとは源融（822 ～ 895）の別業の棲霞観であった。元慶 4 年（880）8 月に清和上皇が棲霞観を訪れている（『日本三代実録』）。源融は寛平 7 年（895）8 月 25 日に東六条第で没するが、その一周忌にあたり、別業棲霞観を寺院とし棲霞寺とされた。


朝原山
古墳群
嵯峨天皇陵
長刀坂
古墳群
嵯峨院跡
嵯峨七ツ塚
鳥居形
鳥居本
古墳群
観空寺跡
大覚寺
大沢池
遍照寺跡
化野念仏寺
広沢池
大覚寺
古墳群
広沢西裏
遺跡
栖霞観跡
清涼寺
(釈迦堂)
有栖川
広沢古墳群
二尊院
丸太町通
嵯峨遺跡
藤原定家
嵯峨山荘伝承地
朱雀大路(出釈迦大路)
調査地
嵯峨折戸町
遺跡
檀林寺跡
JR嵯峨嵐山駅
野宮
鹿王院
薄馬場
造道
宝幢寺
車折神社
京福電鉄
(嵐電)
嵐山駅
亀山殿跡
三会院
天龍寺
清明塚
臨川寺
大井神社
河端殿跡
霊庇廟
三条通
高瀬川
渡月橋
大堰川
櫟谷神社
桂
川
法輪寺
阪急電鉄
嵐山駅
嵐山城
松尾山
古墳群
0
(1/15,000)
500m

第 5 図　周辺遺跡分布図

天長 5 年（828）に成ったと考えられる『山城国葛野郡班田図』は、葛野郡の一条・二条に属する 9 里分があり、加筆で 4 坪分の寺域の範囲と棲霞寺の文字が示されている。

嵯峨地域は平安時代初期には耕作地が広がる中でも、嵯峨離宮をはじめ皇族の別業が営まれ、貴人が遊覧する風光明媚な地であった。また伊勢斎王の禊を行うような清浄な場所でもあった。ただし隔絶された土地ではなく、都からも近く、川運も利用できる便利な地でもあった。なお、貞観 12 年（870）に新鋳の「貞観永宝」は葛野鋳銭所で製作された（『日本三代実録』）。葛野鋳銭所の所在地は定かでないが、新鋳銭が鋳銭所近くの宗像・櫟谷・堰の神に奉納されていることから、大堰川畔にあったと考えられる。

大堰川は耕作地の灌漑用水の水源として、また丹波方面からの木材などの運搬経路としても大井津が重要視されていたようである。『延喜式』には丹波国から運上される木材関係の規定が記されている（巻 34 木工寮車載条）。ただ、大堰川はしばしば氾濫もおこしており、延暦 19 年（800）の葛野川堤修造の記事（『日本紀略』）をはじめ、天長元年（824）には防葛野川使が置かれ（『類従国史』）、仁和 3 年（887）にも修理大井堰使が置かれる（『日本三代実録』）。応和元年（960）には山城国が大井堰料舗設三百枚の支給を申請する（『日本紀略』）など、平安時代前半期には葛野川（大堰川）の改修に関わる記事が多く見受けられる。

嵯峨地域は、禊の場であり、また皇族や殿上人の遊興に訪れる地ではあったが、嵯峨院が大覚寺となり、棲霞観が棲霞寺に、そして檀林寺を含めて次第に仏寺の並ぶ地域になっていった。もとより愛宕山や松尾社にも近く、斎王の禊の地で野宮が設けられるような聖地であったが、寺院の参拝を目的にすることも多くなるようである。特に、永延 2 年（988）に奝然が宋から将来した釈迦像を棲霞寺釈迦堂に祀ると、この像への参拝が目立つようになる。長保元年（999）9 月 12 日には、藤原道長が嵯峨野大堰川を遊覧し大覚寺と棲霞寺にも参詣している（『権記』）。奝然は長和 5 年（1016）に没したが、弟子の盛算が奝然の意志を継ぎ、その後に棲霞寺釈迦堂を清涼寺とした。なお、嵯峨地域には、貞観 12 年（870）に定額寺に列せられた観空寺がある。観空寺は、『山城国葛野郡班田図』に示される栗原寺を継いだものと考えられている。さらに、永祚元年（989）供養の遍照寺もある。長保 4 年（1002）には棲霞寺と観空寺が寺領を巡って争いになった（『権記』）。

『小右記』によると、万寿 4 年（1027）2 月 7 日夜、日記の筆者・藤原実資の従者・車副助光が、「嵯峨住所」に向かう途中で殺害されたといい（2 月 11 日条）、検非違使に犯人逮捕を命じている。藤原実資の居所は左京二条三坊の小野宮第である。車副など従者は普段はその近辺に居住していたはずで、助光の嵯峨住所というのが本来の助光の家（実家？）なのかは分からないが、嵯峨と京の繋がりを知る事例になろう。なお、実資は長元 4 年（1031）3 月 10 日に棲霞寺に参詣している（『小右記』）。

その後も嵯峨地域は、貴人の寺社参詣や遊覧・別業の地として記事があるが、また木材の集積地として繁栄したようで、『梁塵秘抄』に「嵯峨の筏流し」を詠み込んだ歌が収録されている（『歌

詞集』巻二)。保元元年（1156）には「嵯峨木守」の藤井延時が、観空寺領田一町の所当・雑公事の免除を申請している(『平安遺文』2841)。この田地は、左大臣女房筑前局山庄垣内にあったが、その左大臣藤原頼長は保元の乱で失脚して都を逃れ、流れ矢で重傷を負いながら嵯峨の大井河辺から乗船して木津に向かったという（『兵範記』保元元年 7 月 21 日条)。嵯峨には権門勢家や院近臣の領地も多くあり、河川運送の利便もある地であったことを物語る事件と思われる。

裏書により承元元年（1207）に成ったと考えられる天龍寺に伝わる『山城国遮那院御領絵図』には、遮那院の周辺に多くの所領地の書き込みがある。鎌倉時代の嵯峨地域では、正治元年(1199)に藤原定家が清涼寺の南西方に山荘（中院草庵）を設けている（『明月記』)。後に定家は、嵯峨に別荘（小倉山荘）を持つ御家人で歌人でもあった宇都宮頼綱の要請で、百人一首を選んだ（『小倉百人一首』)。

建長 7 年（1255）10 月 27 日、後嵯峨上皇が新造なった亀山殿に移徙する（『百錬抄』)。上皇はその以前の建長 5 年 8 月 28 日にも嵯峨御所（大井川辺新造御所）に行幸していることから、数年をかけて亀山殿の造営が進められていたようである。御所内には吉野の桜も移植された。亀山殿周辺には、院の近臣やその関係者の宿舎、武家邸などがあり、亀山殿の北方には、建長 8 年（康元元年 1256）に檀林寺跡に建立された浄金剛院が供養されるなど、都市の景観をみせていた。この様子は、1320 年代頃に作成されたと考えられる『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷指図』に表されている。亀山殿では、文永 2 年(1265)9 月 13 日に「五百首御歌合」が開催される(『外記日記』『増鏡』）など、院の文化サロンの場でもあった。その後、後嵯峨上皇は文永 5 年に亀山殿で出家し、大覚寺に入るが、文永 9 年（1272）2 月 17 日亀山殿の如来寿量院で崩御した。翌年、浄金剛院に法華堂を新造し後嵯峨院の遺骨が安置された。亀山殿は亀山上皇に伝領され仙洞御所となり、上皇は嘉元 3 年（1305）9 月 15 日に亀山殿で崩御した（『続史愚抄』)。

後宇多法皇と嵯峨との関わりでは、大覚寺に関する記録が多く見られる。延慶元年（1308)、伏見殿上御所の寝殿を大覚寺に移し、8 月 2 日に後宇多法皇は大覚寺南の今林殿から大覚寺殿に移行し、寺内の蓮華峰寺を御所とする。翌年にも古紫宸殿を大覚寺に移すという（『続史愚抄』)。元享元年（1321）には、法皇により大覚寺の金堂・僧坊が再建される（『大覚寺門跡略記』)。法皇は大覚寺を御所とし、元享 4 年（正中元年：1324）大覚寺御所で崩御した。大覚寺はその後、建武 3 年(1336)8 月 28 日に足利勢によって焼かれ、ほとんどの堂舎を失っている(『続史愚抄』)。

元徳 2 年（1330)、亀山殿の東にあった別宮の川端殿が禅院に改められる。翌年、元弘の乱により後醍醐天皇が隠岐へ配流になるが、正慶 2 年（1333）には京に帰還し、翌建武元年（1334）いわゆる「建武の新政」を行うこととなる。後醍醐天皇はさらに建武 3 年（1336)、吉野に逃れ南朝をたてることになるが、その前年、天皇は川端殿跡の禅院を「臨川禅寺」と改め、に夢窓国師を開山に迎えて勅願寺とした。なお臨川寺の造営では、それまで川端殿の北部を通って大堰川に合流していたと見られる瀬戸川（芹川）の流路が、臨川寺の寺域東側を通して大堰川に合流するよう変更されたらしい。

後醍醐天皇は暦応２年（興国元年：1339）８月 16 日に吉野で崩御するが、夢窓国師は足利尊氏に後醍醐天皇の菩提を弔うため、亀山殿を仏寺とすることを勧めたという。同年 10 月、光厳上皇は亀山殿跡の寺院を「暦応資聖禅寺」とし、翌年４月 21 日に暦応寺の木作始が行われた。暦応４年（興国３年：1341）７月 22 日に暦応寺は「天龍資聖禅寺」と改称され、12 月には足利義直が天龍寺の造営費用調達のため貿易船２艘を元に派遣することを許可した（天龍寺船）。天龍寺は、延暦寺衆徒の天龍寺破却の要求などもあったが、貞和元年（康永４年、興国７年：1345）８月 29 日、後醍醐天皇の七回忌に合わせて落慶法要が営まれた（『天龍寺供養記』）。

貞和３年（正平２年：1347）、臨川寺と天龍寺などの寺域・寺領を明確にするために『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』が製作される（以下、『大井郷界畔絵図』と表記する）。図には臨川寺境内地の東側の寺領の他、諸所にも「寺領」（臨川寺領）の表示があり、他領とも入り組んでいる状況が伺える。また周辺に「在家」の表示も多数あり、この時期の嵯峨は臨川寺と天龍寺を中心に一般宅も建ち並ぶ都市的な街区の様相であったことがわかる。臨川寺の東辺には「吉田後家地」とあり、吉田家（角倉家）の宅地の一つがあった。この付近は現在も「嵯峨天龍寺角倉町」の地名を残している。とくに臨川寺周辺では、延文元年（正平 11 年：1356）の『足利義詮御判御教書』（10 月 12 日付）で、臨川寺領内の土倉・酒屋が愛宕社の神事料を負担することで勅役免除であることが幕府によって確認されている。ちなみに今回の調査地周辺は、『大井郷界畔絵図』では「釈迦堂領」（清涼寺領）となっている。

『大井郷界畔絵図』には臨川寺と天龍寺の間の道路が「出釈迦大路」とある。この道路は、清涼寺門前から大堰川まで南北に通じ、『山城国葛野郡班田図』に「栖霞寺路」、『山城国遮那院御領絵図』には「朱雀大路」とされ、現在の長辻通（京都府道 29 号線の一部）にあたる。古代から現代まで継続する嵯峨地域の主要道で、古代の条里制の区画に基づいていると考えられ、南北軸が西におよそ 15 度振る方位をとる。「出釈迦」とは、「朱雀」と清涼寺の「釈迦」堂を掛けた語とみられている。清涼寺は、弘安２年（1279）３月、円覚上人（導御）が清涼寺で大念仏会を修して（『皇代記』）以来、暦応４年（興国３年：1341）３月 11 日に中原師守一家が清涼寺大念仏を見物（『師守記』）するなど、奝然が将来した釈迦像に参詣することが流行した。なお、現在も清涼寺で行われている「嵯峨大念仏狂言」は、嘉吉３年（1443）３月に大念仏狂言が初めて行われる（『管見記』）とされ、応仁の乱で中断していたが、文明 13 年（1481）３月６日には再興され、長享２年(1488)3 月 9 日に足利義政が清涼寺大念仏会に参詣している(『山科家礼記』)。

南北朝期の天龍寺と臨川寺は度々火災に見舞われた。延文３年（正平 13 年：1358）１月４日、天龍寺で火災があり雲居庵など４宇を残すのみ（『園太暦』）という。翌年、幕府は再建のため棟別銭を徴収する。康安元年(正平 16 年:1361)10 月 27 日には臨川寺が炎上する(『後愚昧記』)。貞治６年（正平 22 年：1367）は天龍寺に高麗の使節団を迎えることになっていたが、その直前の３月 29 日に火災があり、塔、塔頭以外は全焼した（『愚管記』）。高麗使節団は４月 18 日に火災を免れた雲居庵に滞在し、足利義詮が引見した(『善隣国宝記』)。その後も天龍寺は応安６年(文

中 2 年：1373）10 月 28 日に火災があり、仏殿、法堂、僧堂、衆寮、東司、三門が焼失し（『愚管記』『花営三代記』）、康暦 2 年（天授 6 年：1380）にも文庫・庫裏などを焼く火災があり、文書多数が焼失している（『空華日工集』）。臨川寺も永和 4 年（天授 4 年：1378）11 月 30 日の夜半に炎上している（『花営三代記』）。天龍寺も臨川寺も、度重なる火災を被ったが直ぐに諸堂の復興が成ったようである（『花営三代記』）。

臨川寺は、観応 2 年（正平 6 年：1351）9 月 30 日に夢窓国師が塔頭三会院で入寂したことから夢窓の塔所となり、その後は夢窓を師と仰ぐ天皇や足利将軍が頻繁に三会院に拝塔している。康暦元年（天授 5 年:1379）、臨川寺の東方に興聖禅寺の建設が始まる。興聖禅寺は至徳元年（元中元年：1384）11 月に「宝幢寺」と改名され、翌年 3 月に落慶供養が行われた。併せて十刹の第五となり（『覚雄山大福田宝幢寺鹿王院記』）、嵯峨地域に臨川寺、天龍寺と並ぶ大きな禅宗寺院が出現した。そして、夢窓国師の後継者である春屋妙葩の寿塔を守るため、宝幢寺に塔頭鹿王院が創建される。

明徳 3 年（元中 9 年：1392）閏 10 月 2 日、後亀山天皇が吉野より還京となり大覚寺に入ったことで（『続神皇正統記』）、ここに南北朝の合一が成った。応永元年（1394）には後亀山上皇が天龍寺に行幸し、足利義満を招いている。なお、応永 27 年（1420）2 月 9 日には宝幢寺で義満の十三回忌法要が営まれている（『看聞日記』）。

応永 33 年（1426）9 月、足利義持の命により『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』が製作される（以下、『応永鈞命絵図』と表記する）。この絵図には、天龍寺、臨川寺、宝幢寺、釈迦堂（清涼寺）を中心に 100 以上の子院・塔頭が表示されており、中世嵯峨が一大宗教都市であった観を見せている。また、道路に沿って 140 余りの「在家」の表示があり、相当数の民家が建ち並んでいた様子も伺える。当時の京内と周辺地域の「酒屋」リストである『応永三十二・三十三年 酒屋交名』（『北野天満宮史料』古文書六二）には 347 軒の酒屋があげられており、そのうち「嵯峨」の地名を冠する酒屋が 17 軒ある。絵図に記された「在家」の中には、このような「酒屋・土倉」といった有力商人の店も含まれると考えられる。その以前の康暦 2 年（天授 6 年：1380）の『室町幕府御教書』（五月十二日付）では、臨川寺境内の土倉・酒屋各 10 ヶ所が課役免除になっている。なお、この『応永鈞命絵図』に描かれている道路は現在でもその位置を踏襲している道があり、それによって今回の調査地を当てはめて見ると、第 1 調査区の場所は「在家」となっており、調査区の南側は天龍寺子院の「永安院」にあたる。

嘉吉元年（1441）6 月、守護赤松満祐が将軍足利義教を暗殺する事件がおこり（嘉吉の乱）、世情の混乱の中、各地で一揆が発生する。同年 9 月 3 日には嵯峨で徳政一揆が発生し、侍所が嵯峨の土倉の質物を洛中に移すよう命じた（『建内記』）。文安 4 年（1447）には、「近日、嵯峨辺大略、土一揆の嗷議に従う」（『建内記』七月十日条）ことになる。応仁元年（1467）、もともと幕府管領家や将軍家の内輪の争いが全国的に広がり、11 年に及ぶ大乱となる「応仁・文明の乱」

が起こる。権力の中心であった京都の地が長引く争いの主戦場となったため、京都は結果的に壊滅に近い損害を受けた。嵯峨地域でも戦で大堰川にかかる法輪寺橋が落ち、翌応仁２年（1468）９月には天龍寺、臨川寺、宝幢寺、それに大覚寺も灰燼に帰した。清涼寺はこのとき難をのがれたが、文明２年（1470）に釈迦堂本尊の釈迦像を京五条の浄教寺に避難させている。文明９年（1477）になってようやく乱が終息した。この年、清涼寺釈迦像も浄教寺から清涼寺に戻ったが、当時嵯峨を訪れた中御門宣胤は、一帯が「…諸寺諸院以下悉以焼失、荒野」の状態であったと記している（『宣胤卿記』文明 12 年９月７日条）。その後も、乱で荒廃した嵯峨の寺院跡での耕作放牧が禁止される（文明 14 年 12 月３日付「室町幕府奉行人連署奉書」『天龍寺文書』）という状態であった。応仁の乱以前の嵯峨の最盛期を描いていると考えられる『応永鈞命絵図』にある天龍寺、臨川寺以下、多数の子院・塔頭も壊滅状態になっていた。乱後、嵯峨地域では清涼寺を中心に復興が進んだようである。大念仏会も再興され、文明 16 年（1484）に寄進された清涼寺の梵鐘の銘には、足利義政、日野富子などの名がある。臨川寺もこの頃に再建が進められ、明応２年（1493）には、足利義澄が臨川寺三会院に拝塔している。ただ、世情はまだ平穏ではなく、明応６年（1497）に香西元近が嵐山に城を構え、この城をめぐる攻防、大永７年（1527）の桂川での幕府軍と細川晴元軍の合戦（『言継卿記』２月 13 日条）、天文５年（1536）の「天文法華の乱」にからみ大覚寺が山城国下郡守護代・木沢長政勢によって放火され、天文 15 年（1546）には丹波に逃れる細川晴元を嵯峨で遊佐・上野勢が攻めるなど、16 世紀前半まで嵯峨周辺は争いの余波を受け続けていた。

一方でこの時期、「嵯峨酒屋吉田」「嵯峨角蔵吉田」と言った、角倉一族に関わる記録が目につく。「酒屋」とあることや、『言継卿記』に「スミノクラニテ酒候了」（享禄元年：1528、３月 13 日条）などから角倉家（吉田家）が酒屋・土倉を営んでいたことは確かであるが、吉田家はもともと医業に携わっていた。それだけではなく、公家や武家の所領の管理、また天文 13 年（1544）には洛中帯座座頭職を継いでいる。『応永鈞命絵図』は応仁の乱以前の嵯峨の姿を伝えるが、描かれていた多数の寺院が乱で廃絶した後も、角倉の酒屋･土倉などの復興は早かったようである。天文８年（1539）、医師であった吉田宗桂（角倉了以の父）は、天龍寺妙智院の策彦周良の随行員として大内氏の仕立てた遣明船団で寧波に着く。宗桂は天文 16 年（1547）にも遣明船に乗船している。後に角倉が船を仕立てて（角倉船）海外貿易事業を発展させる前史であろう。

永禄 11 年（1568）９月、織田信長が足利義昭を奉じて上洛し、義昭は歴代将軍の例のとおり臨川寺三会院に拝塔している。この時期の嵯峨の様子は、天正２年（1574）に信長が上杉謙信に贈ったとされる『洛中洛外図屏風』（上杉本、国宝）左隻に、渡月橋・天龍寺・臨川寺・釈迦堂から大覚寺あたりが描かれている。天正 10 年（1582）６月２日、明智光秀により本能寺の変が起きるが､その数日前の５月 28 日に愛宕社で連歌会が催された。信長の跡を継ぎ天下人となった豊臣秀吉は伏見指月に城を築くが、文禄５年（慶長元年:1596）閏７月 13 日、京都地方を襲った「慶長伏見大地震」で秀吉の指月城は倒壊する。この地震は京都一帯に大きな被害を及ぼした

が、嵯峨地域でも鹿王院が倒壊、清涼寺伽藍も損壊し、天龍寺・法輪寺も被災した。清涼寺では、翌年に仁王門が再建され、慶長 7 年（1602）には豊臣秀頼の寄進により釈迦堂が造営されている。

慶長 11 年（1606）、角倉了以による大堰川の開削がなされる。大堰川は古代より丹波から嵯峨に材木ほかの物資を運搬する重要なルートであったが、諸所に急流の難所があった。了以はこの開削工事を、3 月に起工し 8 月に竣工させるという短期間で成し遂げた。角倉了以と素庵の親子は、慶長 19 年（1614）には京と伏見を結ぶ高瀬川を開通させており、角倉の土木事業への力を知らされる。さらに角倉は同時期に出版事業も興している。慶長 13 年（1608）頃から、臨川寺東の角倉邸内の工房で製作されたと考えられる「嵯峨本」である。嵯峨本は、用紙や墨にも趣向を凝らした美麗な装丁の書籍で、『伊勢物語』などの古典文学や、百番組みの謡本などが出版された。文字の書体は能書家でもあった角倉素庵の筆跡をもとにしており、古活字版と整版のものがある。さらに角倉は、豊臣政権下の文禄初年から海外貿易で船を出している。徳川政権下では、江戸幕府が開府された慶長 8 年（1603）に「角倉船」が長崎から安南に向けて出航した（『徳川実記』）。最後の角倉船は寛永 11 年（1634）に帰国し、清水寺に今ものこる角倉船を描いた大絵馬を奉納している。

寛永 14 年（1637）10 月 9 日、嵯峨で大火が起こり清涼寺の諸堂も焼失した。慶安 5 年（承応元年：1652）4 月 22 日には、鹿苑寺の鳳林承章が清涼寺の桟敷で嵯峨祭を見物しており（『隔蓂記』）、この時期までには清涼寺もある程度回復していたようである。元禄 14 年（1701）に将軍家や住友家の支援を得て本格的な再建に至り、元禄 16 年に釈迦堂供養となった。なお、この事業を契機に財源確保の一部として、元禄 13 年に本尊釈迦像の江戸ほかへの出開帳が始まった。享保 7 年（1722）2 月 2 日、釈迦堂前の旅籠屋 15 軒が焼ける火事がおこったが（『月堂見聞集』）、清涼寺門前には当時旅館が建ち並び賑わっていた状況が伺える。江戸時代の嵯峨地域では、清涼寺をはじめ大覚寺や鹿王院などの諸社寺でも再建や修復が行われ、嵯峨の社寺の景観が整ってきていた。

大堰川・桂川を利用する材木運送の中継地としての嵯峨の地位も続いている。天和元年（1681）に大堰川の筏の企画が定められ、元禄 9 年（1696）には大堰川筏に上積みする薪の運上が始まった。享保 19 年（1734）4 月には、「嵯峨組」16 軒、「梅津組」 6 軒、「桂組」11 軒の材木屋株仲間が公認されている。また、寛保 2 年（1742）に、丹波国山方村々が下嵯峨に材木の直売所を出したという。後、安政 3 年（1856）に丹波国山方村々と嵯峨・梅津・桂材木株仲間の申合せがなされる。文久 3 年（1863）には、嵯峨と千本三条を繋ぐ運河の西高瀬川開鑿計画が許可されて工事が始まり、これにより嵯峨から京の中心部近くまで直接に木材の運送が可能になった。

近世の嵯峨は、木材・川魚など山川の物産の取引が盛んであったが、寺社詣でや平安時代以来の旧跡巡り、風光を愛でる観光地としても賑わった。松尾芭蕉は、元禄 4 年（1691）の 4 月 18 日から 5 月 4 日まで向井去来の「落柿舎」に滞在している（『嵯峨日記』）。文化人の来訪だけでなく、『山城名勝志』（宝永 2 年：1705）をはじめとし、『都名所図会』（安永 9 年：1780）・『拾遺都名

所図会』（天明 7 年：1787）など、江戸時代に発刊された京都の地誌・名所案内記の類には嵯峨・嵐山辺が紹介され、現在と同様に多くの観光客を呼んでいたようである。江戸の幇間・富本繁太夫の著した『筆満可勢』（天保 6 年：1835）にも、この頃の嵐山の行楽の様子が描かれている。なお、盆行事として京都の夏の風物詩となっている五山送り火で嵯峨地域では鳥居本の曼荼羅山（仙翁寺山）に「鳥居形」が点火されるが、この記録上の初見は安永元年（1772）刊行の『翁草』の記載になる。

幕末に、京都の大半が焦土となった「蛤御門の変」では嵯峨地域でも被害が出ている。元治元年（1864）6 月 28 日、尊王攘夷派であった長州勢が天龍寺を事実上接収し陣とした。7 月 19 日に長州兵は京に向けて出陣したが、翌日に長州兵を追って薩摩兵が天龍寺に入った。薩摩兵は無人になっていた天龍寺で略奪の上、ほぼ全山を焼失させた。この時、法輪寺や二尊院も焼けている。明治維新は日本の大きな転機となり、明治 10 年（1877）の太政官布告で寺社の境内地も大半が上地の対象となり、元治の兵火で打撃を受けた天龍寺もほとんどの土地を失った。なお、天龍寺塔頭の招慶院の地には、明治 5 年（1872）に上嵯峨校（現京都市立嵯峨小学校）が創立されている。

明治時代以降の嵯峨地域の大きな変革の一つは鉄道の開通であろう。明治 30 年（1897）、京都鉄道（現 JR 西日本山陰線〔嵯峨野線〕）の二条～嵯峨間が開通、明治 32 年には嵯峨～園部間が開通した。これにより、物資および旅客の輸送に大きな変化が起こった。明治 43 年（1910）に、嵐山電車軌道（現京福電鉄嵐山本線、愛称：嵐電）京都（現四条大宮）～嵐山間も開通し、昭和 3 年（1928）には新京阪鉄道（現阪急電鉄）の桂～嵐山間も開業した。さらに昭和 4 年には愛宕山鉄道が嵐山電車軌道（当時は京都電灯本線）嵐山駅から清滝、清滝～愛宕（鋼索線、ケーブルカー）の路線を開業した。これらにより、京都市内や大阪方面から嵯峨までの交通が飛躍的に便利になり、多くの観光客・参拝客を運ぶことになった。ただし、賑わう観光地は寺社・旧跡周辺で、嵯峨の多くの地点は水田・畑地・竹薮の広がる景観であった。大正 11 年（1922）に京都市土木局が製作した 3 千分の 1 地図によると、清涼寺・天龍寺・臨川寺の門前から三条通沿いに宅地が広がるが、その他の場所は耕作地や竹林が目立つ。この地図で今回の調査地を見ると、第 1 調査区は水田、第 2 調査区は宅地になっている。

大正 8 年（1919）に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が制定され、嵯峨地域では、大正 11 年（1922）に「大沢池・名古曽滝址」が「名勝」、翌年「天龍寺庭園」が「史蹟及名勝」、昭和 2 年（1927）に「嵐山」が「史蹟及名勝」、昭和 13 年（1938）に「大覚寺御所址」が「史蹟」に、それぞれ指定されている。嵯峨地域は平安時代以来、恵まれた自然的・文化的環境を求め別荘や離宮が営まれたが、これは近現代になっても続いていた。明治 32 年（1899）に実業家の川崎正蔵が天龍寺の西に別荘（延命閣）を建設している（旧嵐亭、現翠嵐）。大正初期には画家の竹内栖鳳が嵯峨駅近くに別邸を建て（霞中庵）、昭和初期には時代劇俳優の大河内傳次郎が小倉山に山荘を作り始めている（大河内山荘）。

戦後の嵯峨地域の変革は道路の整備であろう。昭和 44 年（1969）には、「京都府道 29 号宇多野嵐山山田線」の天龍寺前を通る部分（長辻通）の混雑緩和のため、戦時中に「不要不急線」として廃止された愛宕山鉄道の跡地を利用してバイパス道路（清滝道）が建設された。この道路はJR 線と嵐電の線路を高架橋で越えており、その工事区間が臨川寺の旧境内にあたるため、事前の埋蔵文化財発掘調査が行われている。翌年には、円町（西大路丸太町）から嵯峨釈迦堂大門町までの新丸太町通が開通し東西方向の幹線となる。嵯峨地域は、鉄道や道路によって交通の便が整備されるにつれ、宅地化も進んでいる。一方で、多くの観光客の訪れる景勝の地であることから、歴史的景観を守るための措置もとられている。昭和 25 年（1950）に、戦前の「史蹟名勝天然紀念物保存法」を継ぐ「文化財保護法」が制定され、昭和 41 年（1966）の「古都保存法」の制定で嵯峨野が「歴史的風土特別保存地区」に指定された。昭和 54 年（1979）には「嵯峨鳥居本地区」が「伝統的建造物群保存地区」に指定され、平成 6 年（1994）に天龍寺境内が「古都京都の文化財」の一部としてユネスコの「世界文化遺産」に指定された。

第３章　検出遺構

1. 検出遺構の概要

第 1 調査区・第 2 調査区とも、ほぼ全面から何らかの各時期の遺構が検出されている。このうち近現代の耕作や宅地に関わるもの以外の、近代以前の時期では平安時代から江戸時代にいたる各種の遺構が検出された。ただし京洛中地域に比べると遺構の密度はやや疎らであった。

第 1 調査区では、H・I-11 区で検出した長方形土坑（S307）、C-8 区の小土坑（S364）、C・D-2 区の溝状遺構（S380）が平安時代前期に属するとみられる。土坑 S307 は墓と考えられるが、調査区内ではこの時期の類似の遺構は他に見当たらなかった。今回の調査では、確実に平安時代と考えられる遺構はこの 3 件だけであった。

主に第 1 調査区の東半部で多数の小土坑が検出されている。形状から柱穴と判断される遺構も多いが、建物あるいは柵列として認識できる柱穴列は、第 1 調査区で「建物 1 ～ 3」、第 2 調査区で「建物 4」とした柱穴列だけであった。建物 1 ～ 3 は、柱穴列の間隔や方位・柱間などに規格性がみられる。また H-8 区で検出した石積枠の井戸（S41）も、その位置が建物の規格との関連が考えられ、同時に計画された遺構の可能性が高いと思われる。柱穴からの遺物の出土は僅少であるが、周辺や井戸 S41 の出土遺物の年代観から、これらは室町時代後期の遺構群とみられる。

第 1 調査区では、土地の区画溝かと思われる 2 条の溝が検出された。調査区西端部の溝（S14）は L 字状で、調査区南端の溝（S9）は東西方向であった。どちらの溝も埋土中の遺物は比較的多く、いずれもほぼ室町時代後期とみられるものであった。なお、溝 S9 からは瓦磚類が目立って出土した。

第 2 調査区では、南西隅部で南北方向の溝（S546）、東寄り N・O-17・18 区で井戸（S509）を検出した。溝 S546 は M-N 区の境あたりが北端で、南の調査区外に続く。出土遺物はいずれも室町時代後期とみられる。P・Q-15 区で「建物 4」とした南北方向の柱穴列があり、年代的にも第 1 調査区の遺構群と似た状況であるが、柱穴列の方位などが微妙に異なり、当該期の第 2 調査区域は第 1 調査区域とは別の区画になるかと思われる。

第 2 調査区では後述の江戸時代の土採取坑と重複して、N-15 区で墓の可能性も考えられる土坑（S527・536）が検出された。2 基ともごく浅いものであったが、遺物や遺構軸線の傾きから室町時代に属すると思われる。その西の土坑（S557）も当該期とみられる。

第 1 調査区の C-6 区と F-9 区で方形の炉状遺構（S95・S185）を検出した。周囲の壁面が熱を受けて赤変している。どちらも深さが 10cm 程度で、かなり削平されているとみられる。遺構内の遺物は若干の土器細片と炭化物だけであったが、これも遺構軸線の傾きなどから江戸時代以前の遺構と思われる。

第 1 調査区では、建物 1・2 の南側あたりに偏円形の土坑（S12・S75・S76）や溝状を呈する

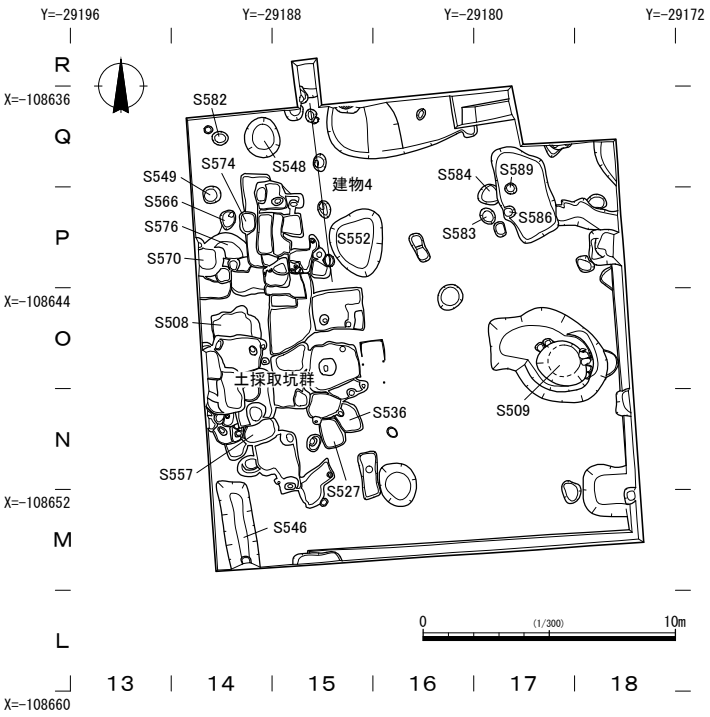
掘り込み（S26）が検出された。これらの遺構は、出土遺物の年代から室町時代後期とみられ、いずれも地山の砂礫部分を避けるように掘り込まれていることから土採取に関わる可能性が考えられた。

第１調査区で江戸時代にかかる遺構として、西寄り南端のA-2･3区で瓦溜（S11）を検出した。遺物はほとんど室町期の瓦類であったが、若干の江戸時代の陶磁器片も混在していた。

第２調査区の西半部では、概ね方形の土坑が連続して多数検出された。これらの土坑は地山の砂礫部分の間のシルト層部分だけに掘り込まれていることから、土採取の土坑と判断した。埋土中の遺物はほとんど室町時代のものであったが、わずかに江戸時代の桟瓦片や陶磁器片が含まれていた。

以下、およそ年代別に遺構の種類ごとに個別の遺構の状況を記していく。

第６図　第１調査区検出遺構平面図



第 7 図　第 2 調査区検出遺構平面図

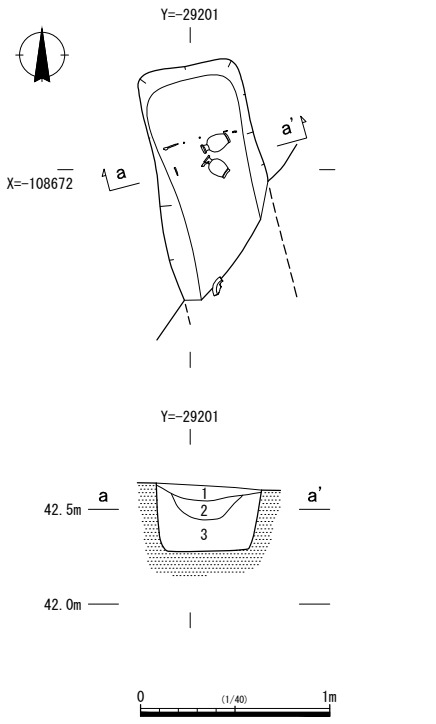
2.　平安時代の遺構

土坑 S307（図版 6-1 ～ 3、第 8 図）

第 1 調査区北東部（H・I-11 区）で検出した平面形が南北に長い長方形の土坑で、南北の中軸線の方位は N 14° W となる。東西幅約 55㎝で、南端部は、自然流路の砂礫層を掘り下げる過程で削り込んでしまったが、南北長は 1.3m 以上である。深さは検出面から 35㎝であるが、第 1 調査区北部はかなり削平されているため、もとはさらに深かったとみられる。

土坑底部の、北端から 40㎝の位置にほぼ東西横一線に並んで鉄釘が出土した。その南からも数点の釘が出土している。釘には木質が残るが、個々の釘の向きは乱れていて、出土状況からはどのように木材に打ち込まれていたかは不明瞭である。

土坑内やや東寄りに完形の須恵器小壺が 2 点、口縁を西に向けるように横位で出土した。また、土坑内南西寄りで土師器皿が出土した。掘削時に欠損しているが完形であったと思われる。他には、土師器甕の小片



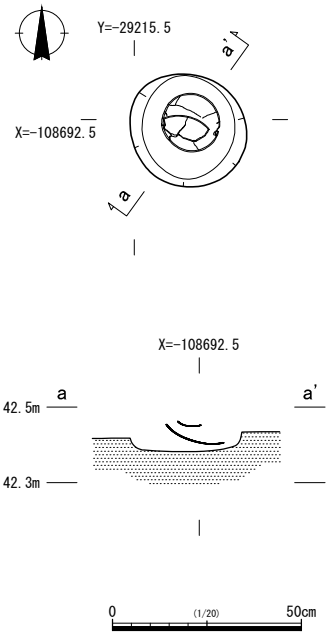
1　10YR4/6　褐色 砂質土（φ0.5～1.5㎝の砂粒を含む）
2　10YR3/4　暗褐色 砂質土（φ0.1～0.2㎝の砂粒を多く含む）
3　10YR4/4　褐色 粘質土（やや砂粒を含む）

第 8 図　土坑 S307 遺構図

と若干の炭化物だけであった。遺構の状況から、土坑墓になる可能性が考えられよう。

土坑 S364（図版 6-4、第 9 図）

第 1 調査区（C-8 区）で検出した径約 30㎝の円形の小土坑で、深さは検出面から 10㎝ほどである。かなり削平されているとみられる。土坑中央で土師器皿が上向きに 2 枚重なった状態で出土した。ただし密着しているわけではなく、上下とも南西側からずれてきたように傾斜していた。下の皿は完形になるが、上の皿は半分程度の残存で、本来 2 枚だけであったかどうかはわからない。



第 9 図　土坑 S364 遺構図

溝状遺構 S380（図版 6-5、第 6 図）

第 1 調査区西端部（C･D-2 区）で検出した。溝 S14 南壁と、その南の現代撹乱坑北壁面に、溝の断面のような暗褐色の層が認められていた。その上層の調査後にこの部分を掘り下げると、南北方向の溝状遺構となった。少し蛇行気味で、側面も一定ではなかった。なお、この遺構の西側も僅かに平安時代の遺物を含む層があり、調査区外に延びている。

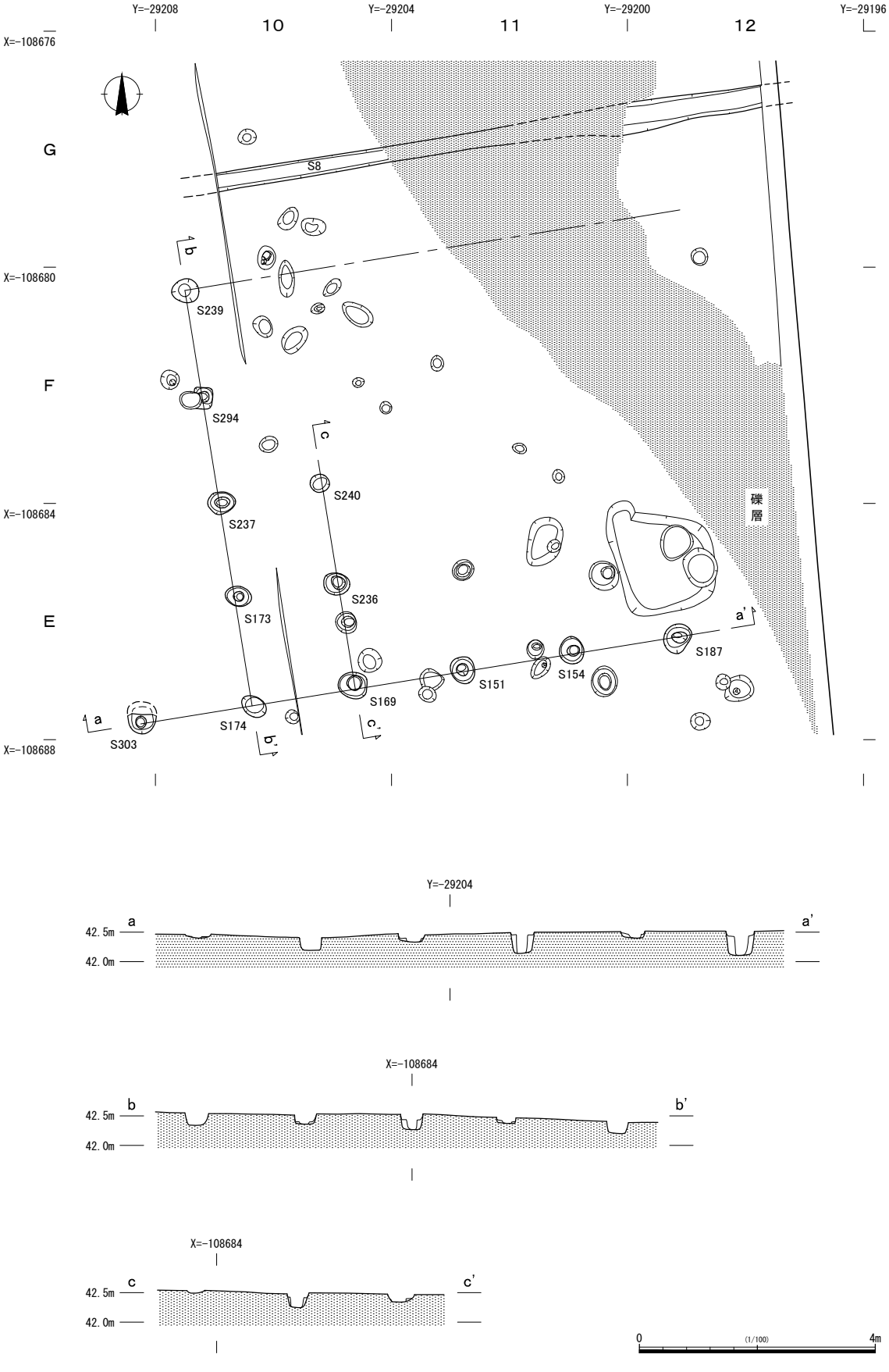
3.　室町時代の遺構

（建　物）

第 1 調査区東部北寄りでは、掘立柱建物の柱穴とみられる小穴を多数検出し、底部に礎板石らしい石を据えている穴もあった。その中で、方位を揃え間隔に規格性をもった配置が認められる 3 組の柱穴列が見出せた。いずれも L 字形に連続する柱穴列である。関連性を認定したこれらの柱穴だけでは建物として完結しないため、柱穴列は塀状の構築物の可能性も考えられるが、ここでは建物と想定して扱う（建物 1 ～ 3)。また、第 2 調査区北部東寄りでも南北方向の柱穴列を見出した。これも塀かも知れないが、とりあえず建物とする（建物 4)。なお、いずれの柱穴内からも少量の土器細片程度でほとんど遺物が出土していないが、柱穴列の方位や周辺の遺物出土状況などから当該期に含める。

建物 1（図版 2、第 10 図）

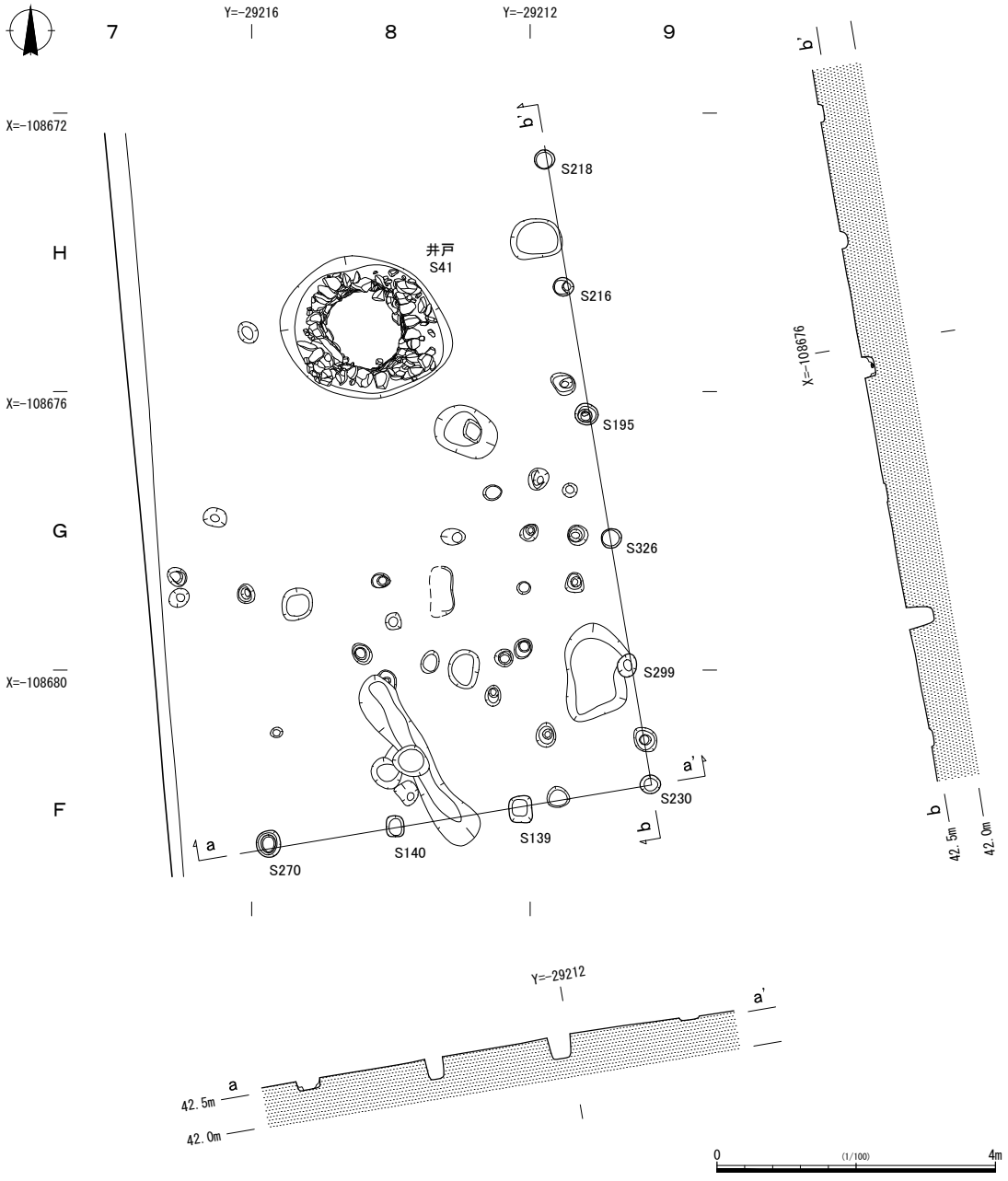
第 1 調査区の E~G-10~12 区で検出した、東西 4 間分（西から、S174・S169・S151・S154・S187)、南北 4 間分（南から、S174・S173・S237・S294・S239）の柱穴列である。柱穴の平面形は概ね 40 × 45㎝ほどの偏円形または方形を呈する。深さは、深いもので検出面から 40㎝前後、浅いもので 15㎝ほどの 2 種類あり、深浅交互に配置されている場所もあるが、すべてではない（第 10 図断面)。各柱間はほぼ 1.8m で、6 尺間隔で割り付けられていると思われる。ただし、東西


Y=-29208
Y=-29204
Y=-29200
Y=-29196
10
11
12
X=-108676
X=-108680
X=-108684
X=-108688
G
F
E
S8
S239
S294
S240
S237
S236
S173
S187
S154
S151
S169
S174
S303
礫層
a
a'
b
b'
c
c'
42.5m
42.0m
0
(1/100)
4m

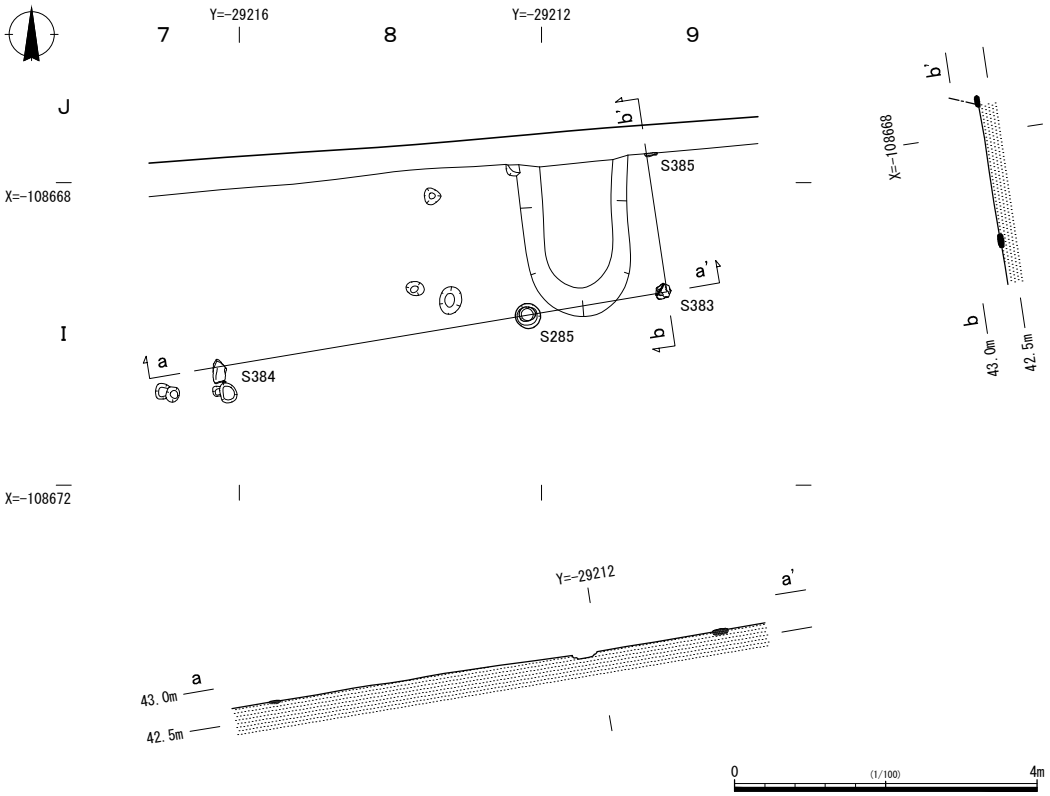
第 10 図　建物 1 遺構図

方向では 1.95m（6.5 尺）の柱間（S151-S154）、南北方向では 1.65m（5.5 尺）の柱間（S173-S237）になっている個所がある。また建物の内部にあたる場所の柱穴（S236・S240）も、方位や間隔・規模が同規格とみられ、この建物に関連する柱穴かと思われる。さらに、南西角の柱穴（S174）から西に 1.95m（6.5 尺）の位置にも柱穴（S303）があり、これも関連するかも知れない。柱穴列の南北方位の振れはＮ 9° Ｗで、東西方位はＮ 81° Ｅになり、正しく直角になっている。

なお、南北列の北端になっている柱穴（S239）から北に 1.8m の位置に東西方向の溝（S8）を検出している。この溝は幅 30㎝前後で深さは数㎝程度であるが、9m 余り連続し、方位は柱穴列の東西方向に一致している。位置や方位から、柱穴列とこの溝は一連の施設と考えられる。



第 11 図　建物 2 遺構図



第 12 図　建物 3 遺構図

建物 2（図版 2、第 11 図）

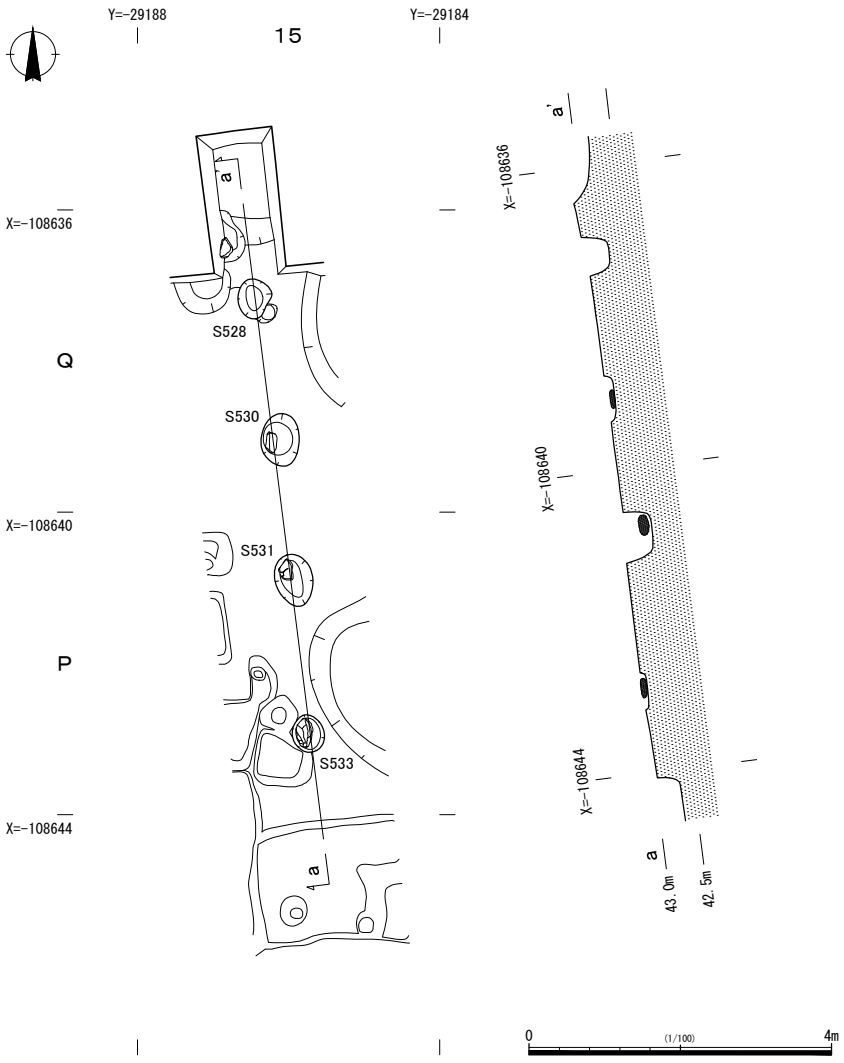
第 1 調査区の F ～ H-8・9 区で検出した、東西 3 間分（東から、S230・S139・S140・S270）、南北 5 間分（南から、S230・S299・S326・S195・S216・S218）の柱穴列である。南北の柱穴列は、建物 1 の南北柱穴列の方向に平行し、その間隔は約 3m（10 尺）であることから、建物 1・2 は同一の割り付けにより建設されたと考えられる（第 66 図）。各柱穴の平面形は 35 ～ 40 × 45㎝の偏円形または方形で、建物 1 の柱穴と同様である。深さも深浅があり、ほぼ交互になっている（第 14 図）。柱間は、東南角とその西の柱穴間（S230-S139）が 1.95m（6.5 尺）になっているが、その他は 1.8m（6 尺）である。

建物 3（第 12 図）

第 1 調査区の北端部 I-7 ～ 9 区で、建物 2 の南北柱穴列の北端の柱穴（S218）から北に約 3m（10 尺）のところで、建物 1・2 の東西方位に平行する 3 基の柱穴の並びを見出した。ただし、2 基は礎板石として柱穴の底に据えられていたと思われる扁平な石を検出しただけである。間隔も S383-S285 は 1.8m（6 尺）であるが、S384-285 は 4.2m 離れる。しかし、列の東端とした S383 から北に 1.8m の位置でも扁平な石（S385）を検出しているため、建物になる可能性を考えた。

建物 4（図版 18、第 13 図）

第 2 調査区の P・Q-15 区で南北に並ぶ 4 基の柱穴（南から、S533・S531・S530・S528）を確認した。柱間は S533-S531 が 2.1m（7 尺）で、他は 1.8m（6 尺）間隔で割り付けられていると思われる。この柱穴列の方位は N 7° W で、建物 1 ～ 3 の方位とは微妙に異なっている。北の柱



第 13 図　建物 4 遺構図

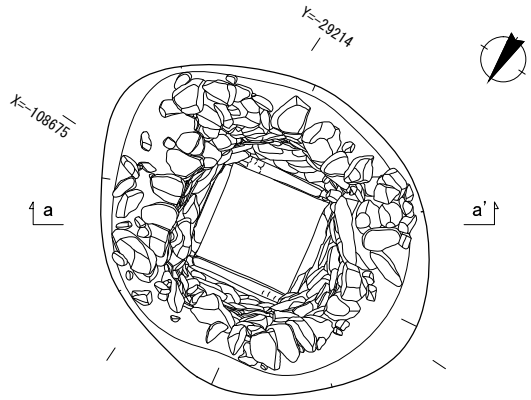
穴（S528）が調査区北端の位置であったため、調査区を一部拡張して柱穴列の続きを探ったが、S528 の北側は大きな現代の掘り込みになっていた。S528 より南側も江戸時代の土採り土坑の掘り込みがあり、柱穴列が南へ続くかどうかはわからない。この柱穴列の東側には柱穴らしい遺構がない。柱穴列の西側も広く土採り土坑の掘り込みがあるが、P-14 区の S566 は柱穴列の S531 の西に 3.8m（12 尺）の位置にあり、関連する柱穴になるかも知れない。なお、柱穴の深さは、深浅 2 種類あり交互の配置になっている。浅い柱穴（S533）は、底に据えられた礎板石が遺構検出時点で露呈しているような状況で、このあたりは、かなり削平を受けているようである。

（井　戸）

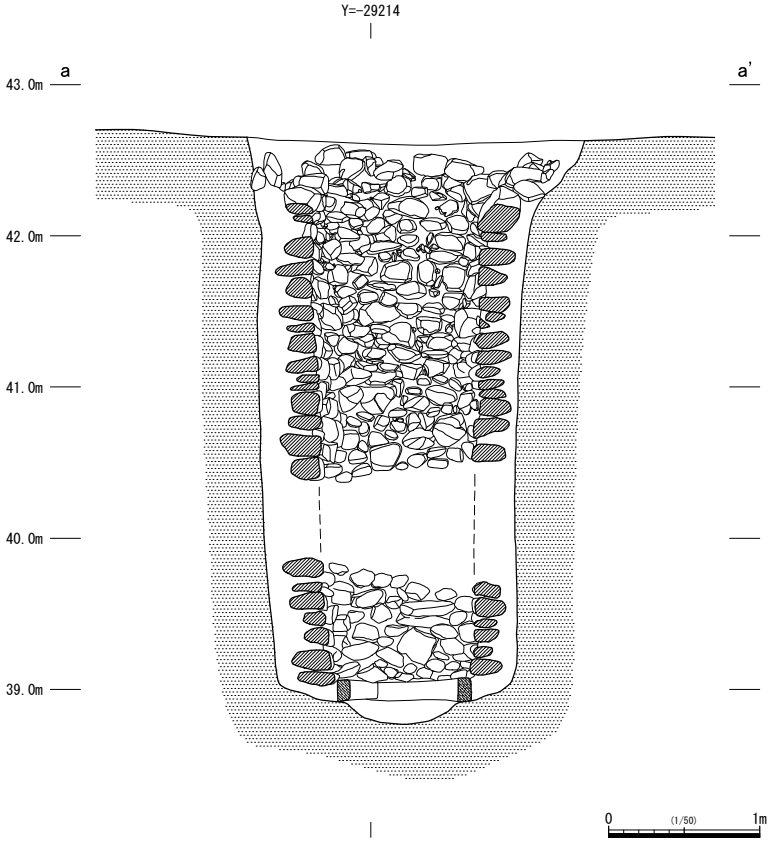
井戸 S41（図版 12・13、第 14 ～ 17 図）

第 1 調査区の北部 H-8 区で検出した石積み側の井戸である。深さは検出面から－ 3.8m（標高 38.7m）を測る。井戸の堀方は、南北 2m、東西 2.5m ほどの偏円形を呈し、石積みはほぼ正円形で、内径は上端で 1.2m、下端で 1m である。底部に角材を井桁に組んで石積みの土台としている。

土台内側の井戸底中央部は窪んでいる。土台の直上から人頭大前後の河原石を積んで井戸側にする。石は左回り（反時計回り）に積み上げていったらしく、石の横の並びが左上がりになっている。積み方はやや粗く、石と石の間の隙間が目立つ部分もあった。土台から検出面まで 3.5m ほど石積みされているが、井戸内にも底面近くまで石積みの石材と思われる石が多数落ち込んでお



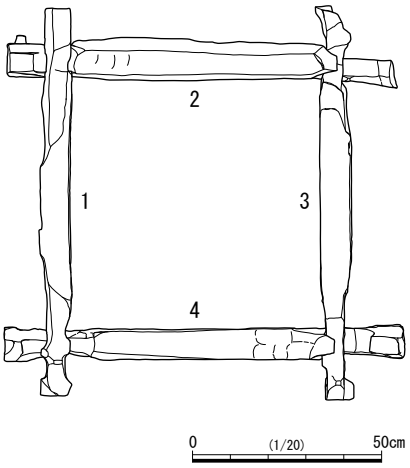
遺構41
（井戸）



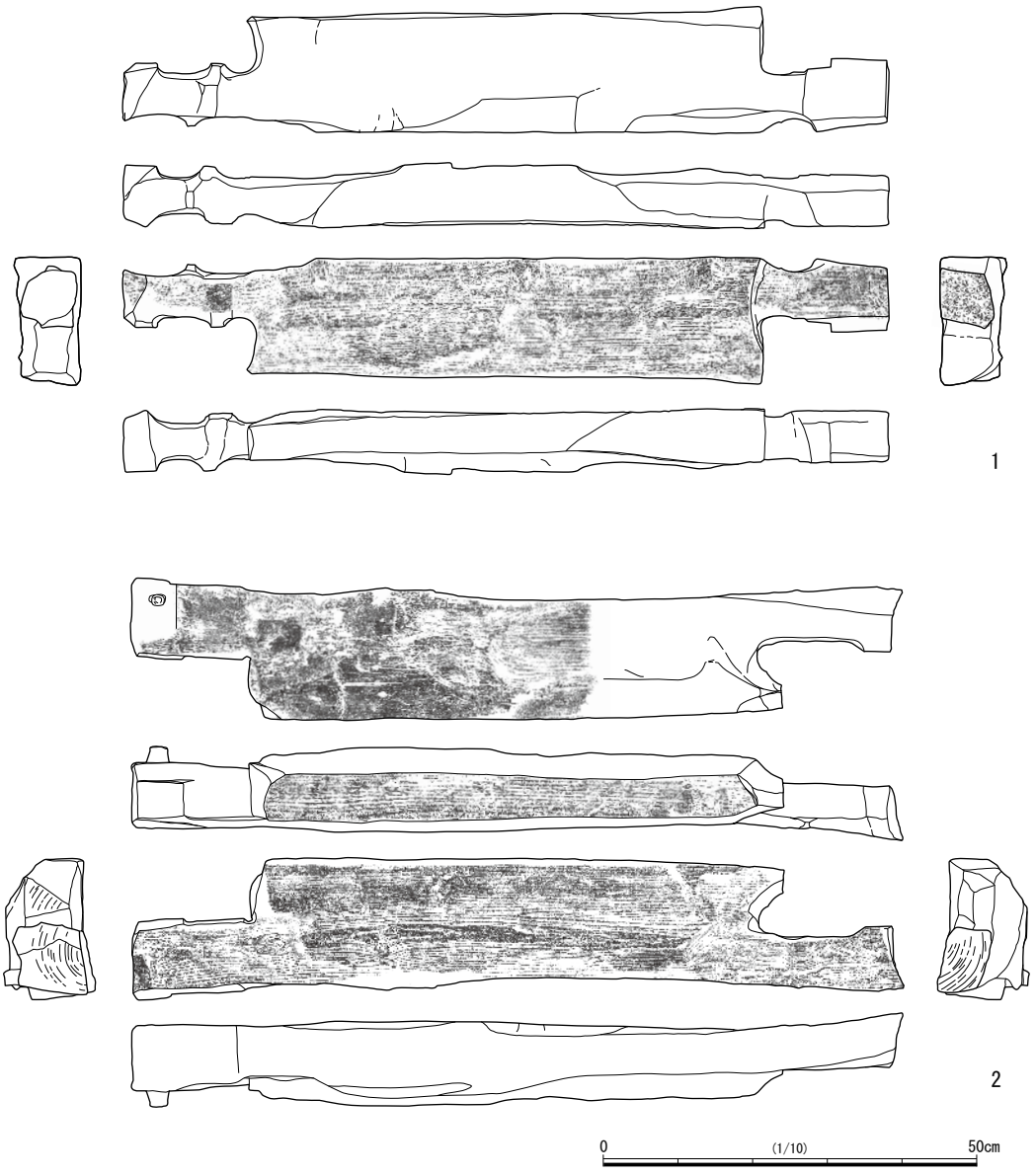
第 14 図　井戸 S41 遺構図

り、石積みはもう少し上まであったらしい。井戸を埋める際に石積み上部を壊しているようで、遺構の輪郭検出時点では石材は見えていなかった。落ち込んでいた石には、やや大きな一抱え程度のものも数個あったため、石積み最上部は大きな石で囲んで地上の枠が作られていた可能性も考えられる。

井戸の埋土は、検出面から－ 1.5m あたり（標高 41m）までは暗茶褐色で、土器・陶磁器・瓦・粘板岩片などが多く含まれていた。この埋土に含まれていた遺物は接合・復元できるものが少なく、おそらく井戸



第 15 図　井戸 S41 石積土台木材組合図

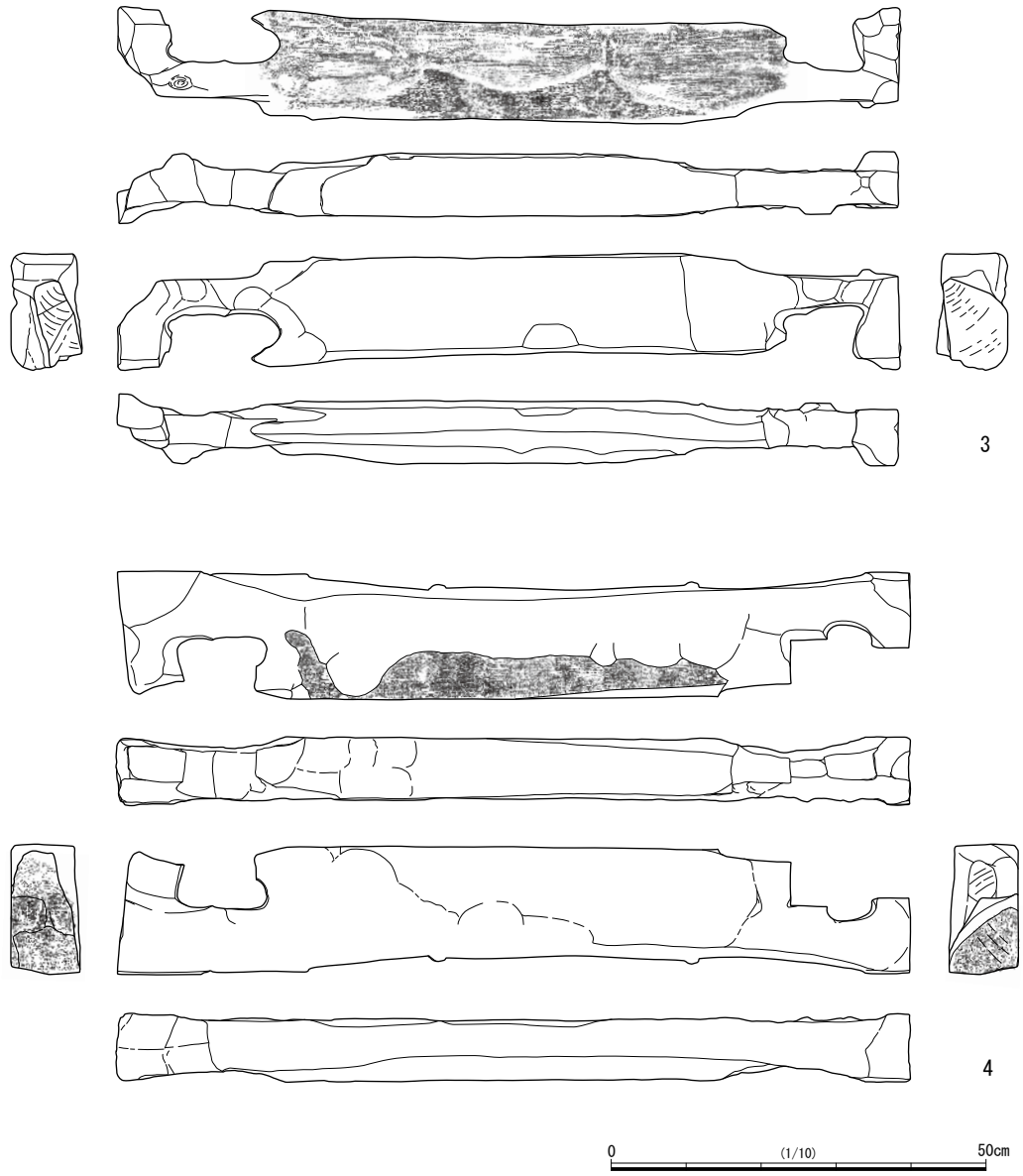


第 16 図　井戸 S41 石積土台木材実測図 1

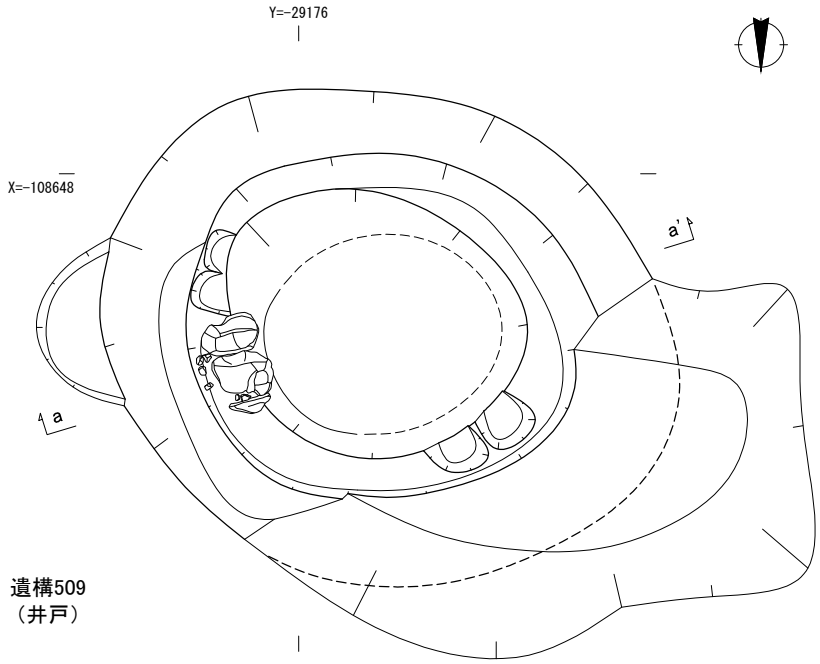
の周辺の土で埋め戻す際に周囲に散乱していた、あるいは包含層の遺物が混入したものと思われる。埋め戻しは遺物の流れ込みなどの状況から、おもに北西方向からなされたようである。

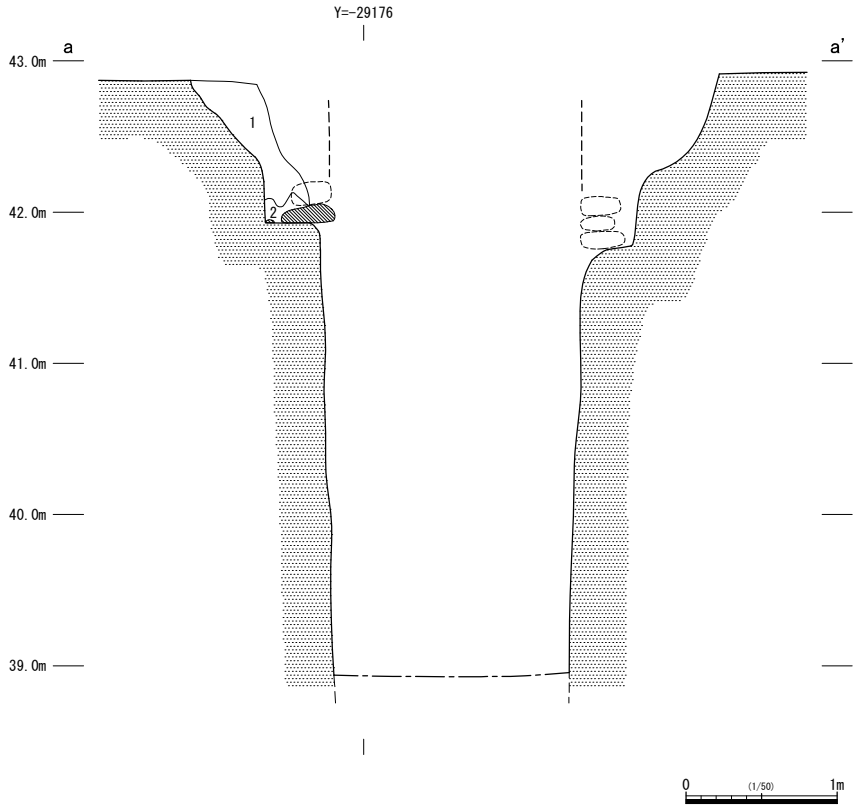
埋土中層は暗灰褐色粘質土で、この層には完形に近い土師器皿など、また植物の根や種子などの有機質の自然遺物が含まれていた。利用されなくなってから、しばらくは「古井戸」の状態で放置されていたのであろう。標高 39.5m あたりから下の埋土は灰色の粘質土になり遺物はほとんど含まれていない。これが最下層になる。

なお、この井戸は建物 2 の中にあたり、井戸の中心が建物 2 の東側柱穴列からほぼ 3m（10 尺）の位置になることや、石組み土台の井桁の方向が建物の方位と同様であることから、この井戸は建物 1 ～ 3 と同時に設けられた可能性がある。



第 17 図　井戸 S41 石積土台木材実測図 2





1　10YR4/6　褐色 砂質土（φ0.5～8cmの礫多量混る）
2　7.5YR4/3　褐色 粘質土（炭やや含む）

第 18 図　井戸 S509 遺構図

井戸 S509（図版 19、第 18 図）

第 2 調査区東寄りの N・O-17・18 で検出した。井戸の北西部は現代の掘り込みで損なわれているが、検出面での堀方の平面は、およそ東西 3.8m、南北 3.2m の偏円形を呈するとみられる。深さは検出面から 3.9m（標高 39m）まで掘り下げたが、湧水が激しく底面は確認できなかった。ただ、掘り下げた部分の埋土が暗灰色の泥土になるなどの状況から、ほぼ底に近いと判断された。埋土下層からは曲物などの木製品も出土している。標高 41m あたりでは、植物の根や種子などの自然遺物を含んでいた。この井戸も、利用されなくなってからしばらく放置されていたと思われる。これより上層は埋め戻し時の暗褐色土で、S41 の井戸と同様の遺物を含んでいた。

井戸の縦断面は、検出面から－ 1m（標高 42m あたり）までは擂鉢状を呈し、それより下部はほぼ垂直で径 1.5m の円筒形に掘り込まれている。屈曲部に狭い段が作られ、その東側部分にやや扁平な石が据えられていた。段には他に少なくとも 4 個所で石の据えられていたらしい窪みが認められた。井戸の内部には石積みの石材とみられる人頭大前後の川原石が多数落ち込んでいたことから、この屈曲部の段に石を廻らせ、上部に石積みがなされていたと思われる。ただし、落ち込んでいた石の量は、石積みが上までなされていたにしては少なく、井戸の廃絶後にある程度は石が抜き取られたことが考えられる。下部の垂直部分は周囲に枠を設けたような痕跡はなく、埋土と壁面との剥離が明瞭で壁面には錆の付着も顕著であることから、もともと素掘りであったとみられる。

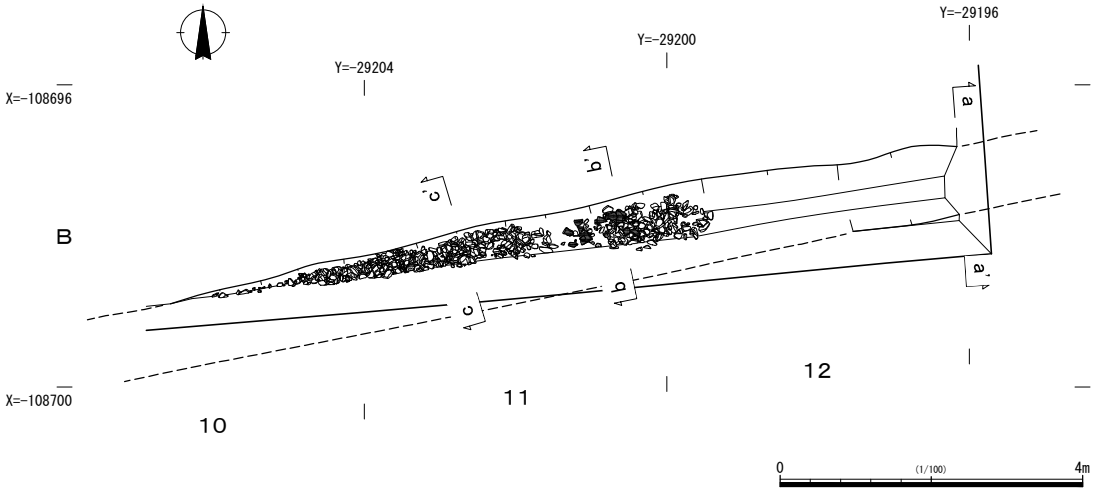
（溝）

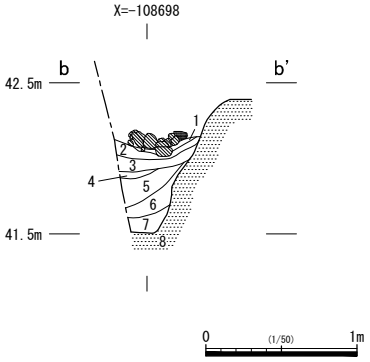
溝 S9（図版 7、第 19 図）

第 1 調査区東南端部の B-10 ～ 12 区で検出した東西方向に延びる溝で、5.5m 分を確認した。方位は N 79° E である。検出面での溝の上端幅は約 1m、深さ約 1m、溝底幅は 0.2m で、横断面形はほぼ V 字形である。溝底の標高は、東端部で 41.5m、11 区でも 41.5m を測り、検出した範囲では高低差がない。埋土最下層は粘質土の堆積があるが、常に水を溜めていた、あるいは水の流れていた状況はみられない。埋土中層には、礫、瓦磚類が多数含まれ、土器類も含む。溝が半分ほど埋没していたところを、瓦礫を含む土で埋めたものであろう。瓦磚類は二次的な火を受けて赤褐色を呈するものが多いことが注意される。護岸の設備もなく素掘りの溝で、土地の境界を区画するものと思われる。

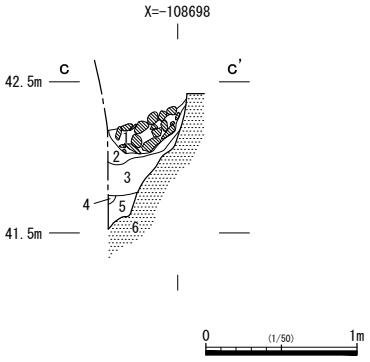
溝 S14（図版 8・9、第 20 図）

第 1 調査区西部（A ～ D-1 ～ 3 区）で検出した、東西方向から南北方向に鍵の手に曲がる溝である。検出面での上端幅は 0.9 ～ 1.2m で、深さは西端部で 1.3m、屈曲部で 1.4m、南端部も 1.4m を測る。東西方向部分はほぼ正方位、南北方向部分の方位は N 7° E で、今回の調査で検出した、他の溝や柱穴列などの方位が確かめられる遺構とは、かなり異なっている。南北方向溝の北寄りの屈曲部分より南側で、土器類などの遺物がとくに集中して出土した。素掘りの溝で、護岸されていた痕跡は見当たらなかった。

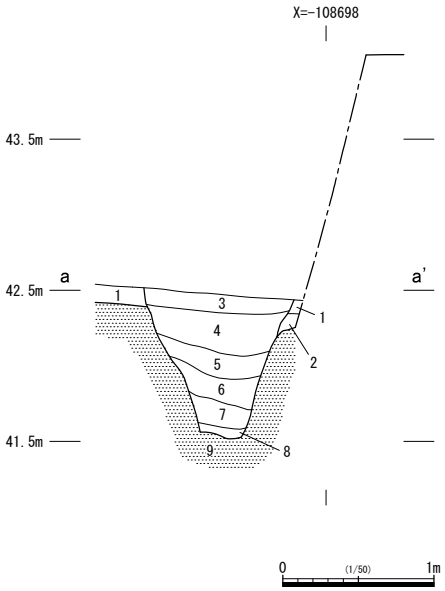




1　10YR6/4　にぶい黄橙色 砂泥（φ5～20cmの礫が多量に混る）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色 砂質土（φ15cm程の礫が少量混る
3　10YR5/6　黄褐色 砂質土（やや粘質）
4　10YR4/6　褐色 粘質土（炭層）
5　10YR4/4　褐色 粘質土
6　10YR3/4　暗褐色 粘質土
7　2.5Y4/4　オリーブ褐色 粘質土
8　2.5Y4/4　オリーブ褐色 粘質土（地山）

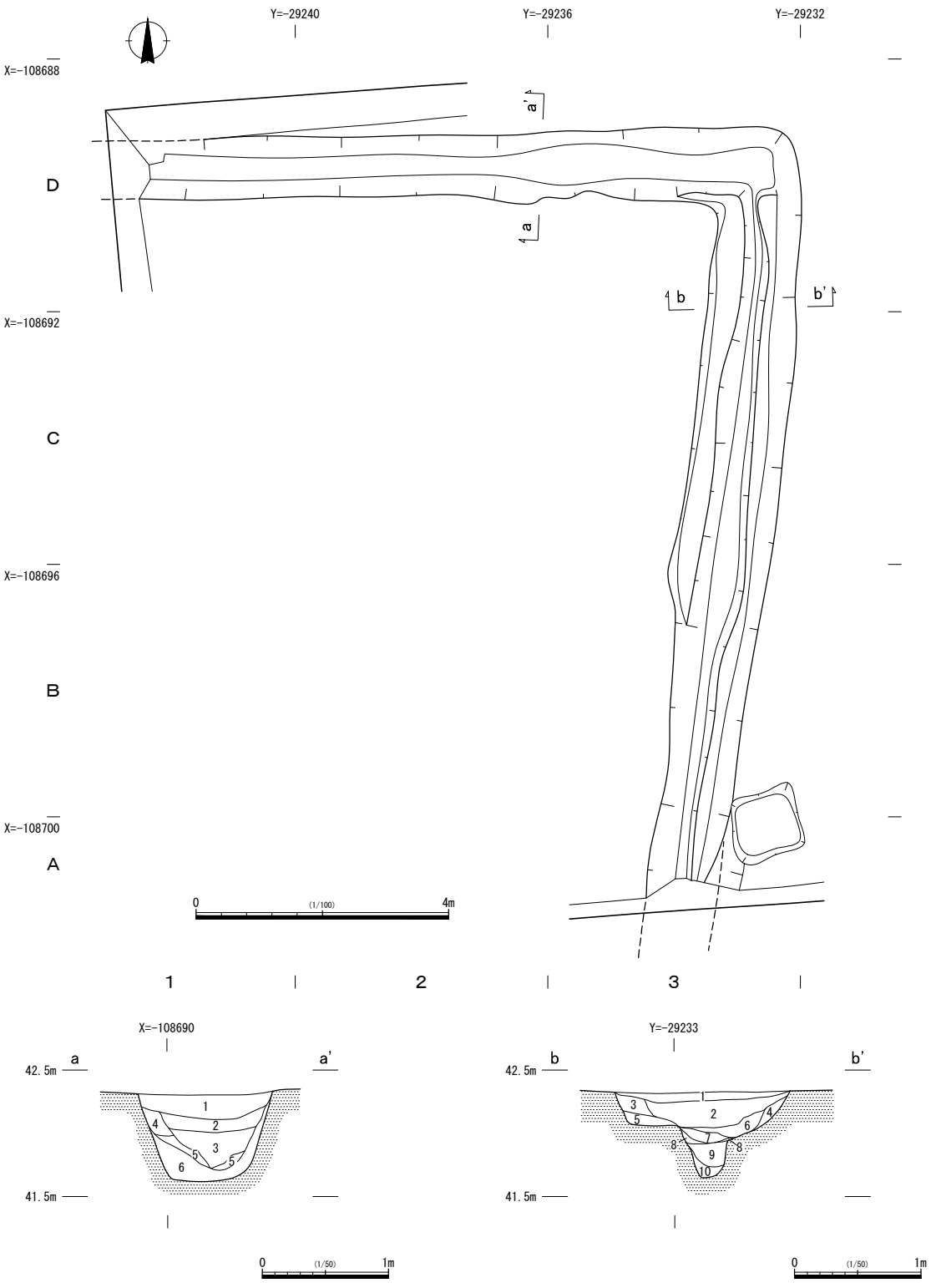


1　10YR6/4　にぶい黄橙色 砂泥（φ5～20cmの礫が多量に混る）
2　10YR5/6　黄褐色 砂質土（やや粘質）
3　10YR4/4　褐色 粘質土
4　10YR4/4　褐色 粘質土
5　2.5Y4/4　オリーブ褐色 粘質土
6　2.5Y4/4　オリーブ褐色 粘質土（地山）



1　10YR5/4　にぶい黄褐色 砂質土（φ0.5～5cmの礫が多量に混る）
2　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土（やや粘質）
3　2.5Y5/3　黄褐色 砂質土（φ1～2cmの礫が混る
4　10YR4/6　褐色 砂質土
5　10YR3/3　暗褐色 粘質土（φ2～7cmの礫が混る）
6　2.5Y4/3　オリーブ褐色 粘質土（φ0.5～2cmの礫が混る）
7　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色 粘質土（φ0.5～3cmの礫が多量に混る）
8　10YR4/4　褐色 粘質土
9　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土（φ1cm程の礫が少量混る）（地山）

第 19 図　溝 S9 遺構図



1	10YR3/4	暗褐色 砂質土
2	10YR4/3	にぶい黄褐色 砂質土（φ5～20cmの礫が混る）
3	10YR4/4	褐色 砂質土（やや粘性）（φ2～5cmの礫が混る）
4	10YR3/4	暗褐色 砂質土
5	10YR5/3	にぶい黄褐色 砂質土
6	2.5Y4/4	オリーブ褐色 粘質土

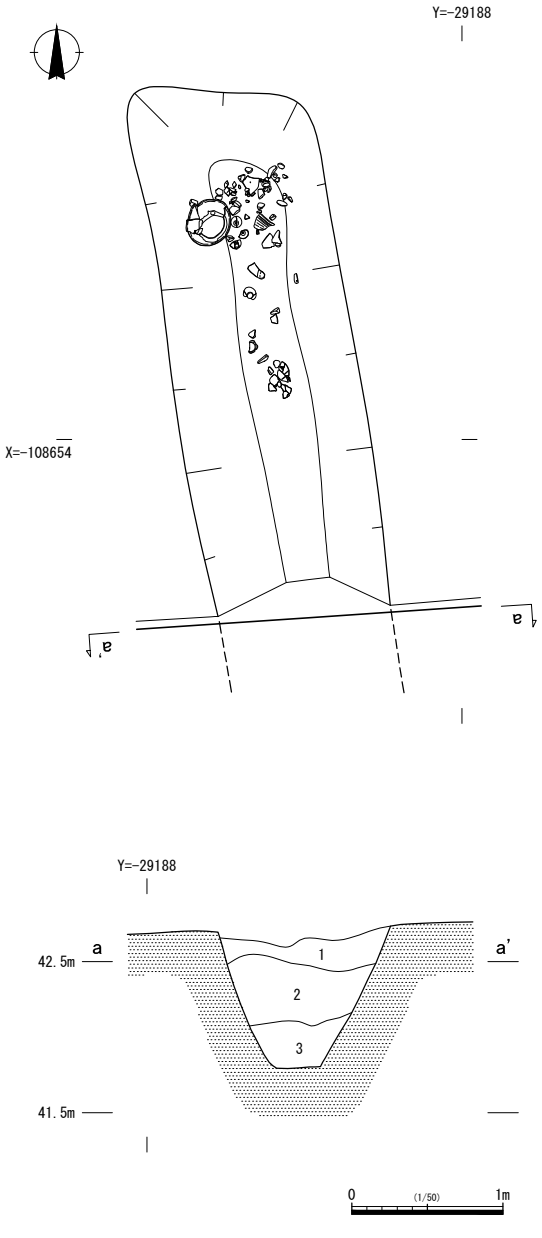
1	10YR3/3	暗褐色 砂質土
2	10YR3/4	暗褐色 砂質土（φ2～5cmの礫が混る）
3	10YR4/3	にぶい黄褐色 砂質土（やや粘性）
4	10YR3/4	暗褐色 粘質土
5	7.5YR4/4	褐色 粘質土
6	10YR4/2	灰黄褐色 粘質土（φ1～4cmの礫が少量混る）
7	7.5YR3/2	暗褐色 粘質土
8	10YR2/3	黒褐色 粘質土（土師器片を含む）
9	10YR3/3	暗褐色 粘質土（φ1～10cmの礫が少量混る）
10	10YR4/2	灰黄褐色 砂質土（やや粘性）

第 20 図　溝 S14 遺構図

この溝の南北方向の方位は、他の検出遺構の方位だけでなく、調査地周辺の嵯峨地域の道や土地区画の方向とも異なっている。ただ、調査地の東西の隣地との境がこの溝の向きと似ており、特に西隣との境界線が溝の方位に近いことから（第 64 図）、この溝も何らかの区画のために設けられたものと思われる。

溝 S546（図版 17、第 21 図）

第 2 調査区南西部（M・N-14 区）で検出した南北方向の溝である。N-14 区の南端あたりが溝の北端になり、ここから南に約 3.5m 分を検出したが、さらに南の調査区外に続く。溝の方位は N 10° W である。南端部での上端幅は 1.2m、底部の幅は 0.3m ほどで、断面形は逆台形を呈する。深さは検出面から 0.8m 程度である。溝の埋土は、下層 30㎝ほどは周囲から流れ込んだらしい暗褐色土で、その上層は遺物を多く含む褐色土になる。遺物は特に北端寄りに集中して出土した。ほぼ完形に復元できる瓦器の鍋・羽釜、土師器皿などがあり、これらは溝北端の北西側から投入されたような状況であった。護岸の設備はなく素掘りの溝で、これも土地の境界を区画するものかと思われる。



第 21 図　溝 S546 遺構図

溝状遺構 S26（図版 2）

第 1 調査区中央部南寄りで検出した南北方向の溝状遺構。E-8 区東寄りが北端になり、約 14m 延び、B-9 区で調査区外に続く。上端幅は 50 ～ 80㎝と一定せず、底も凹凸がある。深さは検出面から 30 ～ 40㎝程度である。この遺構の北端部と途中に不定形の掘り込み（S130・S190・S79・S281）がある。これらは S26 との切り合いというより、溝を部分的に掘り広げたような状況で、埋土も同様の褐色土で同時に埋め戻されたようにみられた。

（土　坑）

土坑 S12・S75・S76（第 22 図）

いずれも第 1 調査区の南東部で検出した土坑。S75・S76 は、径 1.3 ～ 1.5m の偏円形の平面で、一部に段がある。中央部の深さは 50㎝ほどである。S12 はかなり削平されていたと

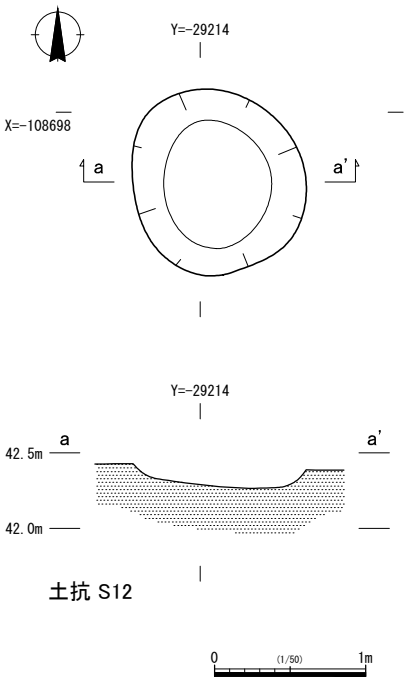
ころで検出したもので、深さは 15㎝程度である。S75・S76 と同様の土坑の底部分かとみられる。これらの土坑は茶褐色土の広がる個所で掘り込まれており、底が砂利層や暗褐色土に変わる深さで掘削を止めている。埋土には土器片などの遺物を含むが、量的に多くはない。塵芥類を処理する土坑というより、小規模な土採取坑であったように思われる。

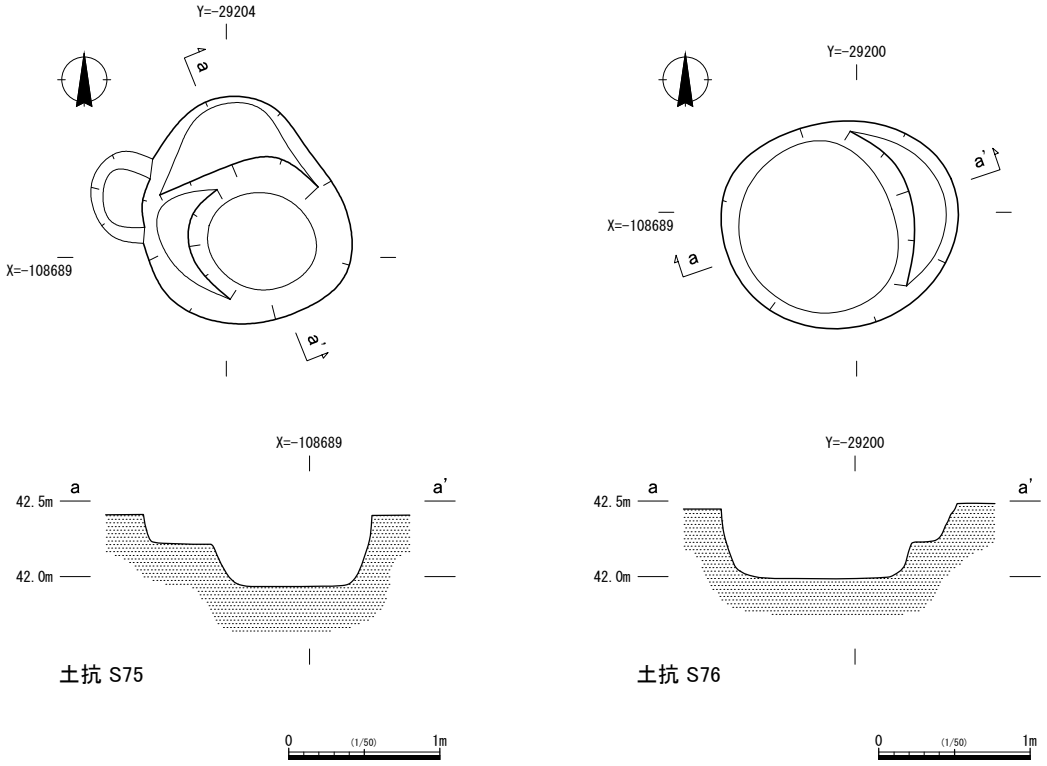
土坑 S583・S584・S586・S589

第 2 調査区北東部の P-17 区で検出した浅い小土坑。いずれも元は径 60 ～ 80 ㎝程度のほぼ円形の土坑と思われるが、S586・S589 は現代の撹乱で削平され底部だけが残っていた。廃棄土坑かとみられる。

土坑 S552（第 23 図）

第 2 調査区の P-15・16 区で、建物 4 の柱穴列のすぐ東で検出した、南北 2.7m、東西 2.1m の不正円形の土坑で、深さは 20 ～ 30㎝である。砂利層に掘り込まれているため、輪郭が不明瞭な部分もある。





第 22 図　土坑 S12・S75・S76 遺構図

埋土は小礫を多く含み、北東寄りから白色系の土器が多く出土した。

土坑 S548（図版 20-4、第 23 図）

第 2 調査区北西部の Q-14・15 区で検出した少し歪な円形の土坑。深さは 30cm 程度で、底面は東寄りがやや深くなっていた。砂礫層に掘り込まれているが、土坑埋土は比較的均質な茶褐色砂質土であった。

土坑 S549（図版 20-3）

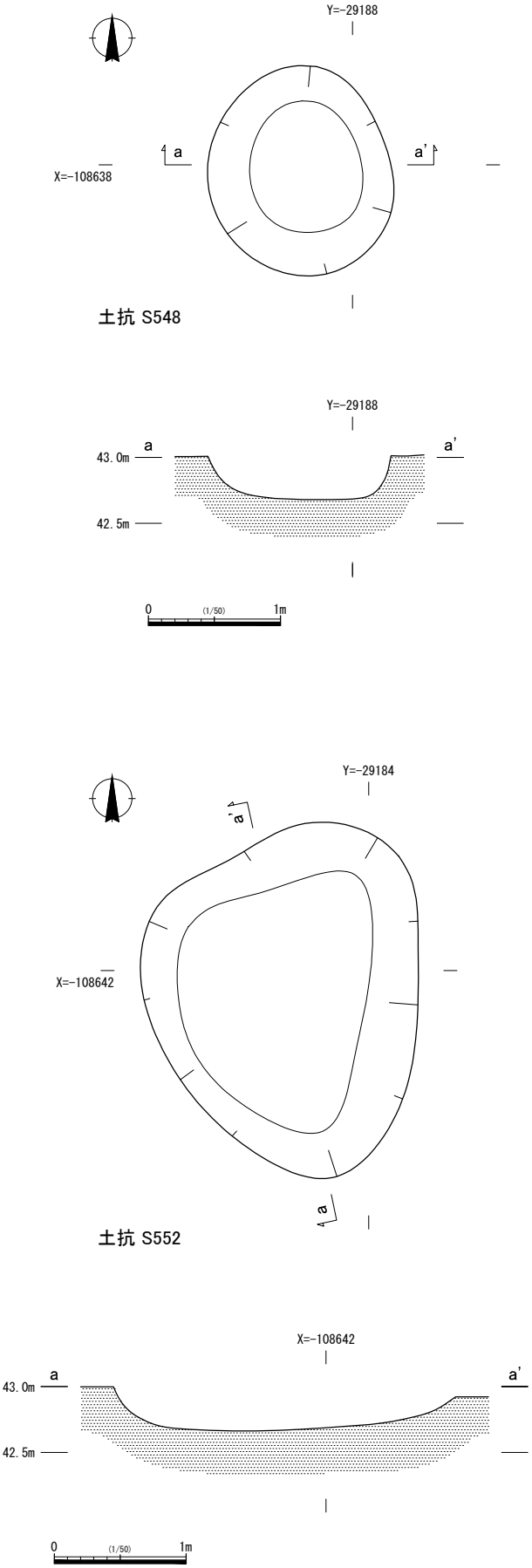
第 2 調査区の P-14 区で検出した土坑。平面形は径 70㎝ほどの円形で、深さは検出面から 50㎝であった。今回検出した土坑の中では、平面の大きさの割に深さがある遺構と感じられた。埋土は遺物を含む均質な茶褐色砂質土であった。

土坑 S574・S576

S576 は P-14 区の土坑 S549 の南で検出した土坑。土採取坑群の北端あたりになるが、底部はやや擂鉢状で土採取坑の状況とは異なる。平面形もおよそ円形になるようであるが、周囲は削り込まれており明確ではない。S574 も P-14 区で検出した小土坑で、東半は土採取坑で削られていた。

土坑 S527、S536（図版 20-2）

第 2 調査区の N-15 区で検出した、隣り合う土坑。どちらも平面形は幅 0.9m、長さ 1.3m 程度で南北に長く、長手方位の軸線は N 17° W ほど振れている。かなり削平されているらしく、深さは S527 が 20㎝、S536 は 5㎝ほどで、どちらも底部分だけが残っていたものと思われる。S527 の中央部には土器片などがあったが、S536 からは数点の土器細片だけであった。この遺構の北は後述の江戸時代の土採取坑群になるが、規模・軸線方位などが土採取坑とは



第 23 図　土坑 S548・S552 遺構図

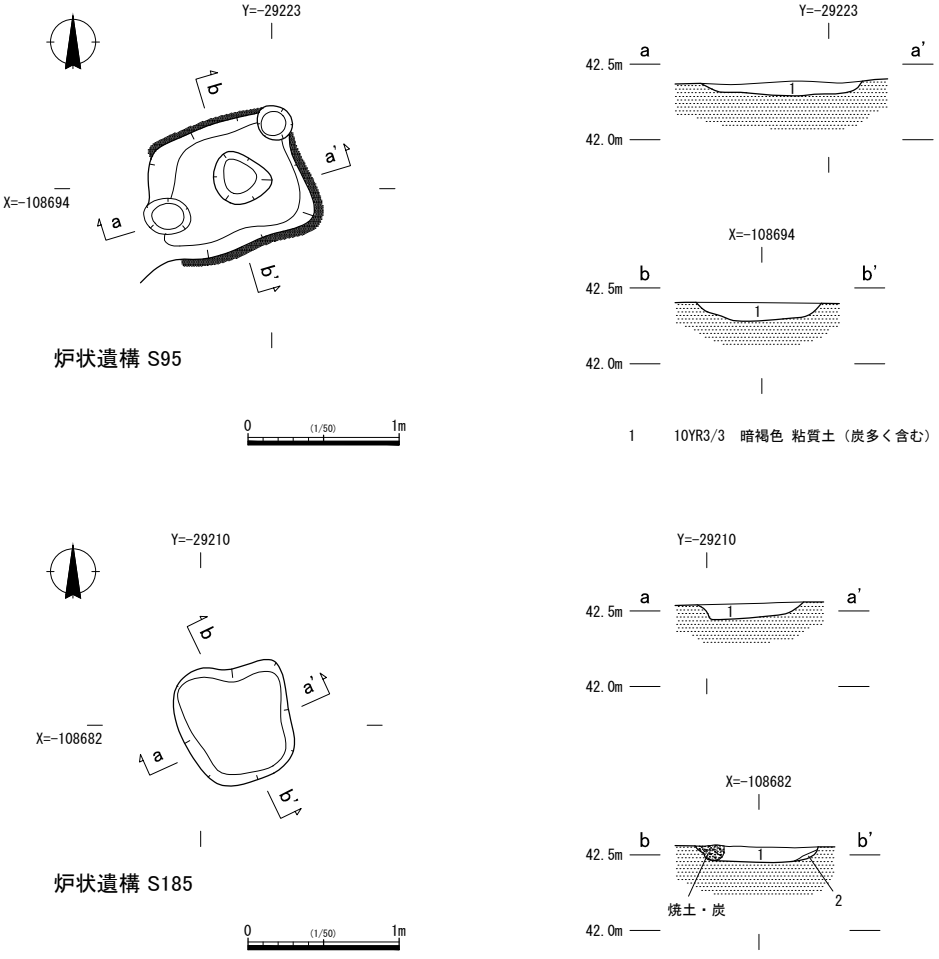
明らかに異なり、S527 の遺物の集中状況などから墓の可能性も考えられる。

土坑 S557（図版 20-1）

第 2 調査区の N-14 区で検出した土坑。深さは検出面から 60㎝程度である。東西 1.4m、0.9m ほどの小判形の平面形を呈し、東西の軸線方位は N 70° E である。この土坑は、南北とも後述の土採取坑で少し削り込まれているが、むしろ土採りに際し、この土坑埋土の表れたところで土採りの掘削を停止しているようである。

炉状遺構 S95・S185（図版 14-1 ～ 3、第 24 図）

S95 は C-6 区で、S185 は F-9 区で検出したほぼ方形の土坑で、深さが検出面から 10㎝程度であるため、かなり削平されているとみられる。埋土には灰と少量の炭化物や焼土塊を含むが、他は数点の土器細片だけであった。S95 は 1.0 × 0.8m の規模で、周囲 3 方の土が数㎝幅で熱を受けて赤化していた。東西軸の方位は N 74° E ほどである。S185 は 0.8 × 0.6m 程度の規模で、周囲の壁は部分的に、熱を受けて若干変色し硬化している状況がみられた。南北軸の方位は N 26° W ほどである。また、どちらも底面は直接高熱を受けていないようである。このような状況から、



第 24 図　炉状遺構 S95・S185 遺構図

これらの遺構は何らかの「炉」あるいは「カマド」であった可能性が考えられる。なお、S95 は西側に土坑状遺構（S96・S93）があり、埋土が一部共通するようであったが、一連のものかどうかはわからなかった。

また、直接の関係はわからないが、C-8 区では、径 10㎝前後になった焼土塊が集中している浅い土抗（S345・346）があった。焼土塊は砂粒や小石を混えるがスサは含まず、焼け固まった壁片ではなさそうである。あるいは、カマドの上部構造を廃棄したものかも知れない。

4. 江戸時代の遺構

瓦溜 S11（図版 14-8）

第 1 調査区南端の西角近く（A-2・3 区）で、径 1m ほどの範囲に厚さ約 20㎝で瓦類が集中していた。周囲は現代の掘り込みなどで削平されている部分もあり、南は調査区外に続くため規模は不明確である。数点の江戸時代後期の染付などの陶磁器細片を含むが、遺物の大半は室町時代の瓦類であった。二次的な火を受けている瓦が多いが、焼土や炭化物は見当たらないため、この瓦溜は被災直後ではなく、江戸時代以降に周囲に散乱していた廃瓦を集めて処理したものとみられる。

土採取坑群（図版 21・22、第 25 図）

S525、S526、S539、S541、S542、S553、S556、S558、S559、S560、S561、S563、S565、S568、S569、S571、S575、S577、S580

第 2 調査区の西寄り（N ～ P-14・15 区）で検出した土坑群である。自然流路の砂礫層に挟まれた茶褐色のシルト層部分に掘り込まれた多数の土坑で、方形または不定形の土坑が近接して連続する。方形の土坑は概ね 1 辺が 1.5 ～ 1.8m で、東西・南北の方位は正方位に近い。壁面は垂直か、オーバーハング気味に掘り下げている土坑が多い。土坑と土坑の接する個所では僅かに尾根状に高まりを残し、区画の境を示す部分もある。また、土坑の隅あるいは中央に、深く掘り下げた穴が検出される例があるが、水抜き、または下層の状況を探るための掘り込みかも知れない。

いずれの土坑も底や壁面が砂礫層になるか、あるいは土層が暗褐色土に変わるところ、また前代の土坑埋土が現れるところで掘削を止めていることから、この茶褐色土を採取した跡と判断した。土質は焼物には向かないため、壁や築地などに用いる土を採取したものと思われる。調査区西端あたりでは茶褐色土層（深部では青灰色を呈する）が厚いため土坑の掘削も深くなり、西側の調査区外へも続く。

これらの土坑は比較的短期間の内に掘削され、その後あまり時間を置かずに埋め戻されたように思われる。土坑群の埋土に含まれる遺物は、桟瓦片や染付片など江戸時代後期の遺物も若干あるが、大半は室町時代後半とみられる遺物で、各土坑ごとにも埋土の差はあまり無い。おそらく、土坑掘削の前には、この一帯の耕作土あるいは表土（室町時代の遺物包含層か）を剥いで土を採取できる場所を確かめたかと思われる。その上で土採取の掘削を行い、採取後は速やかに剥いだ

第 25 図　第 2 調査区土採取坑群遺構図

表土や使えなかった掘削土で埋め戻したのであろう。

なお、集石遺構 S508 は O-14 区で検出した浅い土坑で、平面形は、周りの土採取坑と同様であるが、深さは 15㎝程度である。この土坑の個所は砂礫層にかかるところで、掘り下げて直ぐに掘削を止めたようにも思われる。土坑内には多数の石や江戸時代の瓦片が雑多に集中していた。周辺の土採取土坑の掘削時に混じっていた石などを寄せ集めたものかも知れない。

第 1 調 査 区

遺構番号	地 区	遺 構	備 考	遺構番号	地 区	遺 構	備 考	遺構番号	地 区	遺 構	備 考
1	C～J-10	耕作溝	現代	130	C-11	柱穴か		236	E-10	柱穴	建物①
2	A～I-8	耕作溝	現代	138	E･F-8･9	土坑		237	E･F-10	柱穴	建物①
3	A～I-8	耕作溝	現代	139	F-8･9	柱穴	建物②	239	F-10	柱穴	建物①
8	G-10～12	溝		140	F-8	柱穴	建物②	240	F-10	柱穴	建物①
9	B-10～12	溝	東西	143	D-12	柱穴		256	G-10	柱穴か	石
10	D～J-11･12	自然流路		146	D-12	柱穴		263	I･J-8･9	土坑	
11	A-2･3	瓦溜		151	E-11	柱穴	建物①	270	F-8	柱穴	建物②
12	B-8	土採取坑		154	E-11	柱穴	建物①	281	C-9	土坑	
14	A～D-1～3	溝	L字形	169	E-10	柱穴	建物①	285	J-8	柱穴	建物③
15	A～D-3	排水溝	現代	173	E-10	柱穴	建物①	286	E-18	柱穴	
20	C-4	柱穴か		174	E-10	柱穴	建物①	294	F-10	柱穴	建物①
26	B-9	溝		184	B-8	小土坑		299	G-9	柱穴	建物②
41	H-8	井戸	石組枠	185	F-9	方形炉		303	E-9	柱穴	建物①関連か
55	B-6	土採取坑か		187	E-12	柱穴	建物①	307	H･I-11	土坑墓	
73	A･B-7	小土坑		190	E･F～8･9	土坑		326	G-9	柱穴	建物②
74	A･B-7	小土坑		195	G-9	柱穴	建物②	327	F-9	柱穴	
75	D-10･11	土採取坑か		205	G-8	柱穴		343	C･D-1･2	溝	現代
76	D-11･12	土採取坑か		209	G-8	土坑		345	B･C-8	焼土集中部	
79	D-8･9	土坑		216	H-9	柱穴	建物②	346	C-8	焼土集中部	
90	D･C-5	土坑		218	H-9	柱穴	建物②	364	C-8	土坑？	
95	C-6	方形炉		230	F-9	柱穴	建物②	380	C･D-2	溝？	
96	C-5･6	土坑	93と合体	232	F-9	柱穴か		383	I-9	柱穴	建物③
98	D-10	土坑		233	G-9	土坑		384	I-7	柱穴	建物③
99	D-9･10	土坑		234	E-12	土坑		385	J-9	柱穴	建物③
100	C-12	柱穴か		235	E-12	土坑		386	H･I-10	土坑	

第 2 調 査 区

遺構番号	地 区	遺 構	備 考	遺構番号	地 区	遺 構	備 考	遺構番号	地 区	遺 構	備 考
508	O-14	集石	不整形	548	Q-14･15	土坑		574	P-14	土坑	
509	N･O-17･18	井戸		549	P-14	土坑		575	P-14	土採取抗	
526	O-15	土採取坑		552	P-15･16	土坑		576	P-14	土坑	
527	N-15	墓？		553	N-15	土採取抗		577	O-15	土採取抗	
528	Q-15	柱穴	建物④	557	N-14	土坑墓か		579	N･O-15	土坑墓か	
530	Q-15	柱穴	建物④	558	O-15	土採取抗		580	N-14	土採取抗	
531	P-15	柱穴	建物④	565	P-15	土採取抗		582	Q-14	土抗	
533	P-15	柱穴	建物④	566	P-15	柱穴か		583	P-17	土坑	
536	N-15	土坑墓か		568	N･O-14	土採取抗		584	P-17	土坑	
539	N-15	土採取坑		569	N-15	土採取抗		586	P-17	土坑	
541	N･M-14･15	土採取抗		570	P-14	土坑		589	P-17	土坑	
546	M･N-14	溝	南北	571	O-15	土採取抗					

第 1 表　第 1 表　主要検出遺構一覧

第 4 章　出土遺物

今回の発掘調査によって出土した遺物は、土器・陶磁器類と瓦塼類を主体としており、他に少数ずつだが、土製品、石製品、金属製品、木製品など各種のものが含まれていた。出土量は、40 × 60 × 15cm の通用のコンテナバットにして 50 箱程度であり、京中の調査地に比べると、調査面積の割に少なめと言える。

この成果は、遺構群の年代幅が京中と比べるとかなり限定的であり、宅地的土地利用としての遺構密度があまり高くなかったことを示している。しかし、平安京が建都された平安時代以降の遺物は、時代別の出土量に大きな差異はあるものの、平安時代前期から中世、さらに近世の江戸時代、明治時代の近代以降まで、途切れることなくほぼ継続した状態と見てよい出土状況である。

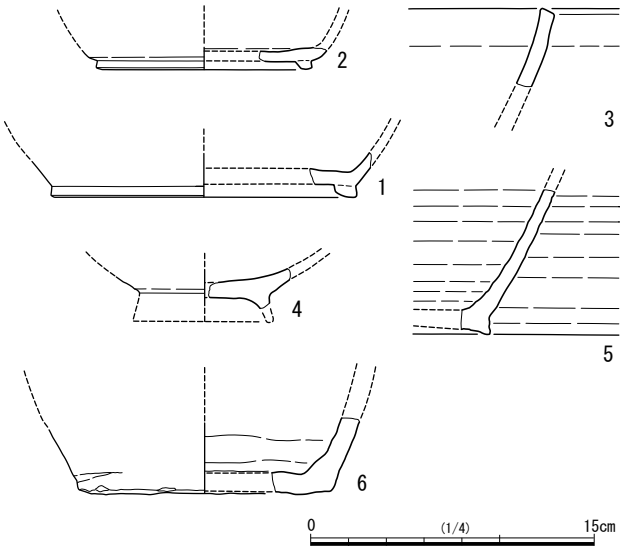
このような遺物の増減を内包してはいるが、継続した出土状況は京中の継続した都市的成長に伴い、それに連動しつつ変化し、発展した近郊遺跡の歴史的発展過程の一端を表しているものと理解出来る。

以下では、実測図・写真図版に掲載した出土遺物について、種類別に時代順の個別的解説を記していく。

1. 土器・陶磁器類

(1)　平安～鎌倉時代の土器・陶磁器類

第 26 図に掲載した須恵器は、すべて新しく位置付けられる層あるいは遺構から出土している。層・遺構には伴わない出土ではあったが、当地の土地利用は平安時代前期から平安時代を通じて行われていた事を示す資料である。1・2 は平底に貼り付けの輪高台を持つ須恵器のいわゆる坏 B の身である。3 は平底の逆ハの字に開く体部から口縁部をもつとみられる須恵器の鉢の口縁部片である。すべて畿内系のものであり、3 点ともに 8 世紀末～9 世紀前半を中心にした平安時代前期に比定出来る。4 は須恵器埦であるが貼り付け高台等の形態的特徴からは、灰釉陶器あるいは同系のいわゆる山茶埦と見ている。平安時代中期後半の 11 世紀以降に比定しておく。5 は、糸切りの平



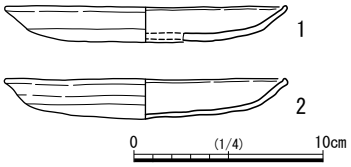
1・4・5　溝 S14 出土　　2・6　井戸 S41 出土
3　溝 S9 出土

第 26 図　平安時代の土器類実測図

底の須恵器鉢の体下部から底部の破片である。やや薄平な体部の内外面に強い轆轤の回転ナデ痕の特徴から、口丹波の亀岡篠窯産の須恵器と見ている。型式特徴からは、平安時代中期前半となる 10 世紀に位置付けておく。6 は高台の付かない平底の須恵器壺の底部片である。11 世紀から 12 世紀の平安時代後半代のものと見ている。

土坑 S364

第 27 図に示した土師器皿 2 点は土坑 S364 とした小坑内から 2 枚重ねで出土している。出土状況からは地鎮と関連する遺物の可能性が高い。両者ともに土師器皿 A Ⅱであり、1 は口径 14.9cm、2 は口径 15.0cm を測る。外面にヘラケズリはみられず、押圧痕をのこす。内面をコテで調整した後、内面から口縁外面をナデ仕上げする。器壁は、少し薄平感が出てきており、口縁部がナデにより少し外反を呈するようになっている。京都Ⅱ期古の新相からⅡ期中の中相の幅には収まる。9 世紀後半代の中頃を含む時期に推定される。



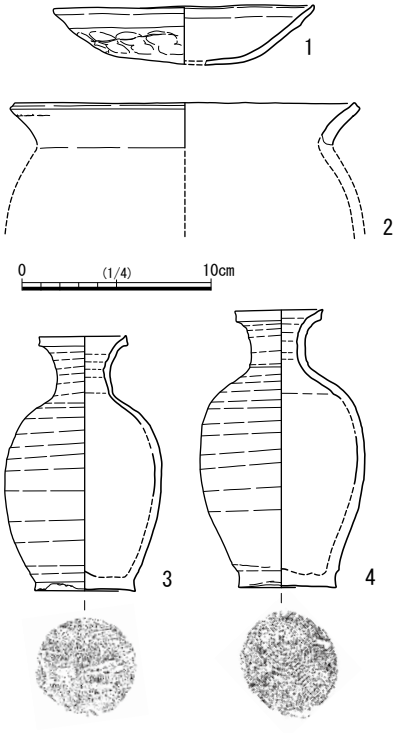
第 27 図　土坑 S364 出土土器類実測図

土坑 S307

第 28 図の 1 ～ 4 は土坑 S307 とした長方形状の土坑から出土した。小振りの木棺を埋設したかとみられる遺構であり、土器の他に鉄釘も出土している（第 63 図）。1 は土師器埦 A であるが、外面の仕上げは押えとナデであり、ヘラケズリ調整は加えられていない。しかし、器壁は薄く仕上げられており、口縁部のナデによる外反も若干明瞭となっている。楠葉産の可能性もあるが、大和からの搬入品の可能性も検討が必要である。2 は推定口径 18.0cm 程の土師器甕の口縁部片である。口縁内端の肥厚は小さ目にみえ生産地の特定は難しいが、基本的には都城系の範疇で理解してよいだろう。

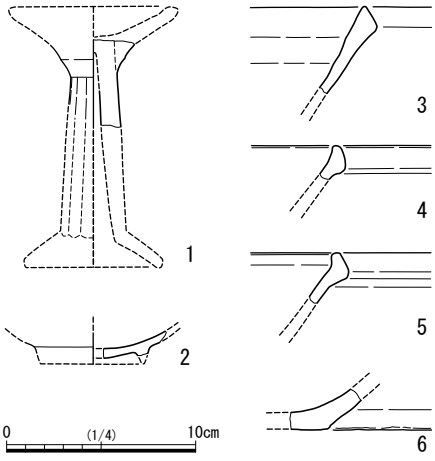
3・4 は完形品で、奈良文化財研究所でいう須恵器のいわゆる壺 M である。須恵器の壺類では最も小振りの壺であり、本来「壺小」あるいは「壺 S」とする方が判りやすい。径 4.6cm の口径や胴径はほぼ同じだが、器高は、3 が 13.4cm、4 が 14.6cm と 4 が少し高い。両者とも底外に糸切痕を残す平底である。京都Ⅰ期の頃のものに比べると、器壁も若干薄手化が進んでいる。口丹波の亀岡・篠窯産と見ている。

土坑 S307 から少数ながら一括出土したこれらの土器類は、土師器埦 A や須恵器の小壺の型式特徴から、京都Ⅱ期古（中）～Ⅱ期中（古）の幅の内に位置付けられる。推定年代は、土坑 S364 出土の土師器皿とほぼ同じ、9 世紀後半の内と見ておく。遺物の性格は、埋葬と同時に埋設された葬儀に使用された器物と見ておく。



第 28 図　土坑 S307 出土土器類実測図

第 29 図に示した遺物は、第 26 図と同様に室町時代後半以降から近世の新しい時期の土層あるいは遺構への古手の混入品として出土したものである。1 は土師質化しているが、白色土器系の高坏である。13 世紀末～14 世紀前半頃、鎌倉時代後半から室町時代初頃と見ている。2 は瓦質土器埦の高台の付く底部であり、鎌倉時代の 13 世紀頃に比定される。3 ～ 5 は須恵器鉢口縁部、6 は須恵器鉢の底部であり、すべて東播磨産と見ている。3 は、鎌倉時代の 13 世紀頃、4・5 は 13 世紀末～ 14 世紀代の鎌倉時代後半から室町時代初頃と推定される。



1・2・4 ～ 6　溝 S14 出土　　3　溝 S9 出土

第 29 図　鎌倉時代の土器類実測図

(2)　室町～江戸時代の土器・陶磁器類

第 30 図から第 47 図は、室町時代後半期以降から江戸時代に位置付けられる遺構からの一括出土遺物を主に図示している。第 1・第 2 調査区を越えて、古く位置付けられるものから順に組んでおり、室町時代末期から桃山時代頃に位置付けられるものが主体であり、その出土量は遺跡の大きな画期をよく示している。

溝 S546

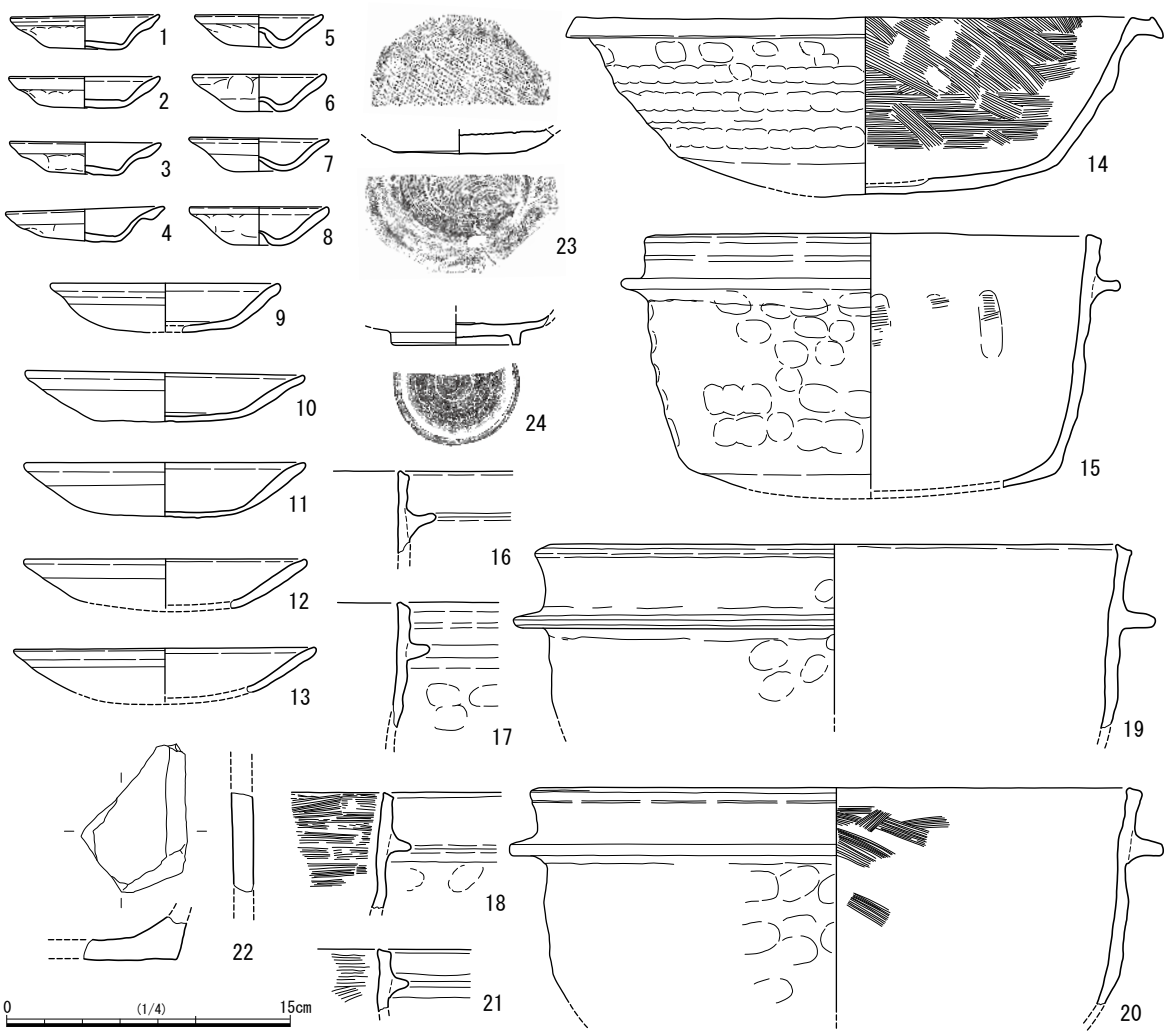
第 30 図は第 2 調査区の S546 とした溝から一括出土した土器・陶磁器類である。1 ～ 4 は橙褐色系の土師器皿 N であり、1 ～ 3 は径 7.9 ～ 8.0cm で N 小、4 は径 8.4cm で N 中とみられる。5 ～ 8 は白色系の土師器皿 S 大のいわゆるヘソ皿であり、口径は 6.8 ～ 7.4cm である。押し上げられた底部外面に爪跡痕が残る。9 は白色系の土師器皿 S 大 1 であり口径は 12.2cm 程を測る。10 ～ 12 は同白色系の土師器皿 S の大 2 であり、口径 14.8 ～ 15.0cm を測る。13 は同白色系の土師器皿 S の大 3 であり、口径 16.0cm を測る。白色系は深さを残すが、体部が口縁部は大きく開き、皿形化が進んでいる。

14 は瓦器の鍋であり、口径 28.5cm を測る。中型程度のサイズである。口縁端部は委縮化し立ち上がりを失っている。体部から口縁部は大きく開いたものとなり、やや浅手の鍋となっている。底部だけが台型成形され体部以上は粘土組成形で従来どおりの成形であり、外面はオサエ痕を明瞭に残し、内面はハケ目で口縁部内外はナデにより仕上げている。手間の省かれた必要最小限の手順で作っていることがよく判る。大阪の枚方楠葉産の鍋である。15 ～ 21 は瓦器の羽釜である。15 は口径 22.9cm を測り、中の小程である。19 は口径 30.0cm、20 は口径 31.4cm を測り、中の大の位置とみられる。16 ～ 18・21 は小片で口径不明である。羽部の大きさ等からは中～小程度のサイズの破片とみられる。製作技法の基本と技法痕跡のあり方からは、瓦器の鍋とほぼ共通しており、生産地も同じ枚方の楠葉産である。型式特徴は、羽部の断面によく現れている。小型は羽部の断面が少し長さを残すが、三角形状に近づいている。中サイズのものは長さを減じてはいるが、まだ三角形化せず本来の鍔状を保っている。22 は方形状を呈する瓦器の火鉢底部片で

あり、大和産と見ている。

23 は底部外面に回転糸切痕を残し、内面はヘラ削りによるオロシ目を付しており、美濃・瀬戸産の灰釉のいわゆるオロシ目皿の底部片である。24 は中国明からの輸入青磁碗の底部片である。

土師器皿類は全体にシャープ感はないが、京域主流派に属するものと見ており、白色系は嵯峨野太秦周辺、橙褐（赤）系は、深草の製品と見ている。型式特徴からは、京都Ⅸ期中の新から同新の幅には収まるとみられる。瓦器の鍋、羽釜、国産の瀬戸・美濃の灰釉陶器、明からの輸入青磁の推定搬入年代とも大きな齟齬はない。室町時代後半（戦国）期の 15 世紀後葉頃に比定しておく。



第 30 図　溝 S546 出土土器・陶磁器類実測図

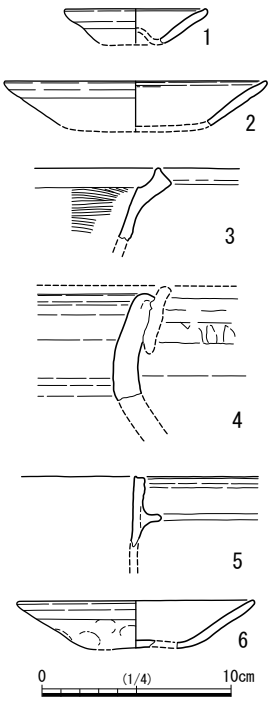
土坑 S557・S574

第 31 図 1 ～ 4 は S557 とした土坑から出土している。1 は白色系の土師器皿 Sb、2 は土師器皿 S であり、全体的な型式特徴は第 28 図の溝 S546 からの出土品に共通すると見る。3 は瓦質土器の鍋の口縁片であり、角度は異なるが口縁部の委縮の様相は、第 28 図 14 と同レベルであり、

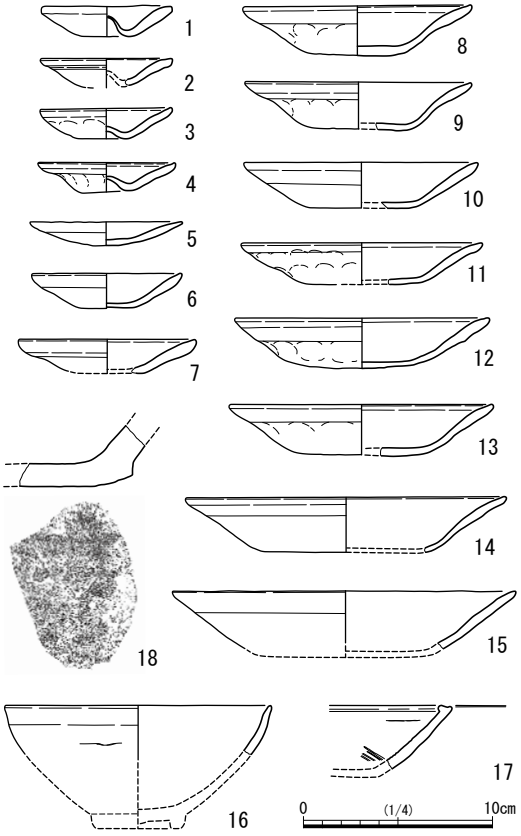
同型式で同じ楠葉産である。4 は焼き締め陶器の甕口縁部である。口縁部の縁帯が口縁部の本体に接着したように、一体化したごとくまで型式変化が進んでいる。室町時代後半期頃に収まるものと見ている。

5 と 6 は S574 とした土坑から出土している。5 は楠葉産の瓦器の羽釜の口縁部片である。6 は白色系の土師器皿 S 大 1 で、口径は 12.8cm を測る。

S557・S574 から出土している土器類は、型式特徴が先の第 28 図の溝 S546 から出土しているものに通じており、15 世紀第 4 四半期頃から 16 世紀初め頃とほぼ重なる時間帯に位置するものと見ている。



第 31 図　土坑 S557・S574
出土土器・陶器類実測図



第 32 図　土坑 S552 出土土器・陶器類実測図

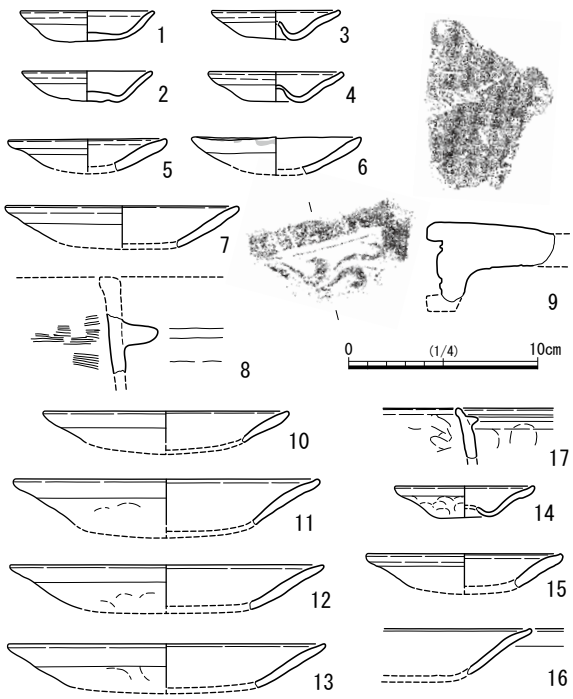
土坑 S552

第 32 図に掲載した土器・陶器類は、S552 とした土坑から出土している。1 ～ 4 は白色系の土師器 S b であり、口径は 6.8 ～ 7.3cm を測る。この S b にも底部外面に爪跡痕を残す。5 ～ 6 は土師器皿 S b とみられ、口径は両者とも 8.0cm を測る。7 は同皿 S 小であり、口径 9.4cm。8 ～ 11 は同皿 S 大 1 であり、口径 12.0 ～ 12.8cm。12・13 は同皿 S 大 2 であり、口径 13.5 ～ 14.0cm。14 は同皿 S 大 4 であり、口径 17.0cm。15 は同皿 S 大 5 であり、口径 18.0cm を測る。溝 S546 から出土する同じ白色系の土師器皿 S 大、同皿 S と比較すると、器高が低く浅くなって、体部の開きがより強くなっているものが主体を成すようになっており、新相への型式変化が読み取れる。16 は灰釉陶器の埦でいわゆる平埦と通称されているものであり、17 は灰釉陶器オロシ

目鉢である。両者ともに美濃・瀬戸産製品である。18 は、大和産とみられる瓦器の火鉢の底部片である。これらの資料は、主体を成す土師器皿類の型式位置から、15 世紀末～ 16 世紀第 1 四半期頃に比定しておく。

土坑 S576・S549・S536・S583

第 33 図の 1 ～ 4 は S576、5 ～ 9 は S549、10 ～ 13 は S536、14 ～ 17 は S583 とした各小土坑から出土した遺物である。1･2 は橙褐（赤）色系の土師器皿 N 小であり、口径は 1 が 7.1cm、2 が 6.9cm を測る。口径はかなり小型化しているが古相を残している。3・4 は白色系の S b であり、3 が口径 6.8cm、4 が口径 7.2cm を測る。底部外面に爪跡を残すが、器高はかなり低く浅い器形となっている。5・6 は、白色系の土師器皿 S b であり、7 は同系だが皿 S の大 1 である。8 は口縁端部を欠失しているが、瓦器の羽釜片であり、羽部の断面形状からは、土師器よりも古相を呈している。9 は軒平瓦の瓦当片である。くすべ瓦であり、文様は唐草文である。室町時代末頃には収まるだろう。10 は白色系の土師器皿 S 大 2、11 ～ 13 は同皿 S 大 3 とみられる。14 は白色系の土師器皿 S 大とみられ、15 は同皿 S 大 1、16 は同皿 S 大 3 以上、17 は瓦器の小羽釜であり、三足が付く可能性が高い。これらは、4 基の遺構からそれぞれ出土しているものであるが、第 35 図の土坑 S552 からの出土資料とほぼ同じ型式に属するものだが、S 大などで体部から口縁の幅が少し狭まくなる様子を示すものや、5・6 など後代へ続く新相のものなどを含んでいる。この様な見方も踏まえて 15 世紀末から 16 世紀前葉の幅でみておく。



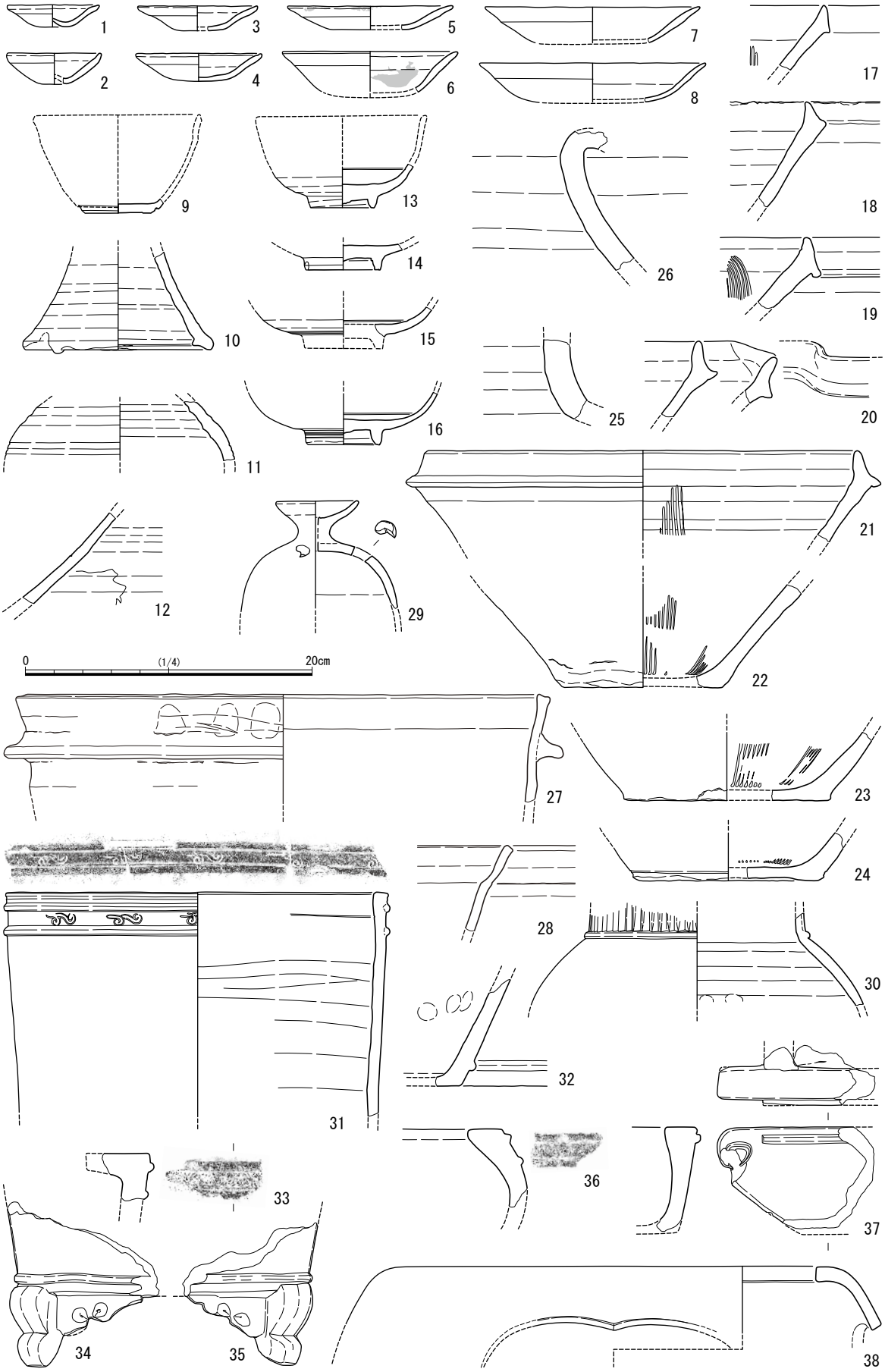
1 ～ 4　土坑 S576 出土　　5 ～ 9　土坑 S549 出土
10 ～ 13　土坑 S536 出土　　14 ～ 17　土坑 S583 出土

第 33 図　土坑 S576・S549・S536・S583 出土遺物実測図

溝 S9

第 34 図は第 1 調査区の S9 とした溝から出土している。溝埋土等からの出土遺物であり、15 世紀後半代に遡る古相のものを多く含んではいるが、主体は京都Ⅹ期古を中心とした 16 世紀前葉頃に収まるものである。

1・2 は白色系の土師器皿 S b であり、口径を 1 は 6.4cm、2 は 6.6cm を測る。小型化がかなり進んでいる。3･4 は同系の皿 S b であり、口径 8.4 ～ 8.8cm を測る。5･6 は同系の皿 S 大 1 であり、口径 11.6cm、12.2cm を測るが、両者とも体部の幅が狭くなり、口縁部内端が短くなり端面化が進んだ新相を呈している。7･8 は同系の皿 S 大 3 であり、口径が 7 は 15.0cm、8 は 15.8cm を測る。大 3 以上はより古相を残すが、体部幅や口縁部内端の端面化が進んでいることは、読みとることができる。



第 34 図　溝 S9 出土土器・陶磁器類実測図

9 ～ 12 は美濃・瀬戸産の国産施釉陶器である。9 は鉄釉のいわゆる天目茶埦の小径のケズリ出し高台の付く底部片である。10 は鉄釉の花瓶の脚部であり、11 は同釉の壺あるいは花瓶の肩部である。12 も同釉の甕の下半部の破片である。

13 ～ 16 は中国明からの輸入青磁埦の体部片である。輸入は、15 世紀後半代に遡る可能性のあるものを含むが、廃棄年代は 16 世紀前半頃の内である。輸入陶磁器は品質が良く、長い期間使用された後に廃棄される例が京都でも珍しくはない。

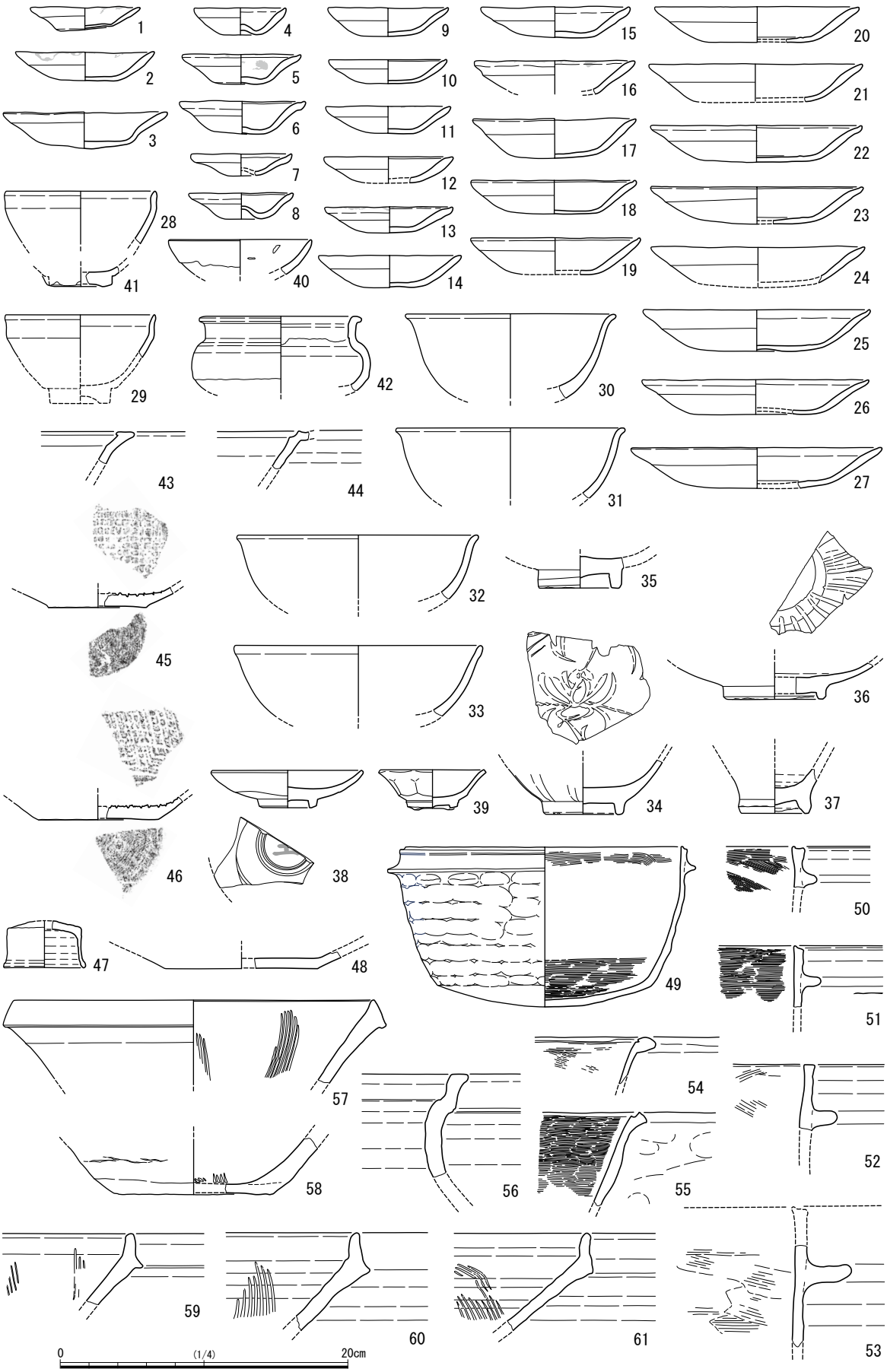
17 ～ 24 は備前産の擂鉢片であり、25 は同じ備前の壺あるいは甕片である。26 は信楽産とみられる甕の破片である。多く出土した備前擂鉢は、口縁部の断面形状から見ると 15 世紀後半から 16 世紀前半くらいの幅を持っている。備前擂鉢は、よく焼き締まって硬質であり、使用期間が長いと見ていい、よくすり減った使用痕跡を持つものが多く、買い足されながら、かなりたくさんが同時に使用されていた可能性が高い。土地柄からは禅宗などの大寺院で大人数に提供する精進料理に、複数以上の擂鉢が使用され続けていた可能性も考えられる。しかし、溝 S 14 や井戸 S 41 他からもよく似た様相の遺物が出土しており、合わせて総合的な形での検討を加えて、その全体像の理解と位置付けが必要であろう。

27 ～ 38 は瓦器の鍋、釜、火鉢、風炉他の諸器形をまとめたものである。27 は羽釜であり、大きさに比して鍔部が若干萎縮している。楠葉産の羽釜と見ている。28 は受け口状に近い口縁形態を持つ鍋である。丹波を含めて在地嵯峨以西の産地からのものとみられる。29 は小振りの瓦灯の蓋と見ておく〔註 1〕。30 は火舎の体上部から口縁への立ち上がり部分である。31 は火鉢とするが火桶的な器形である。32 は丸型火鉢の底部、33 は方形火鉢の口縁部と見ている。34・35 も方形火鉢の脚部である〔註 2〕。36 は円形の火鉢の口縁部、37 も浅い方形の火鉢の一部と見ている〔註 3〕。38 は茶室でも使用される土風炉の口縁部であるが、猪目型の焚口が一部残る。29 ～ 38 の火鉢や風炉を中心とする器形は、すべて大和産もしくは大和系の産地からの水運による搬入商品であろう。

出土土器・陶磁器類の年代に関しては、土師器皿類の型式特徴からは京都Ⅸ期新の新からⅩ期古型式の幅の内に収まると見ており、15 世紀末期～ 16 世紀前葉を中心とした室町時代末期の古い段階に位置付けられる。美濃・瀬戸産の国産施釉陶器類、輸入品の明の青磁、備前の擂鉢の中に、15 世紀代後半の製品が認められるが、それら以外のものや瓦器類は、土師器よりは少し古い側に時間幅を持たせた理解が必要だが、土師器食器類とほぼ同時期の年代観で理解してよいだろう。

溝 S14

第 35・36 図は、第 1 調査区の南西部で検出した溝 S14 から出土した土器類を主に掲載した。溝 S14 から出土した土器・陶磁器類では、皿を主体とした型式的にはまとまりのある土師器食器類が量的にも大きな位置を占めている。次いで多いのは瓦器類であるが、食器類はほとんどみられず、鍋・釜を主とする炊具類と火舎・火鉢・風炉あるいは焜炉また香炉など、火まわりの道具類が中心である。この 2 種類の土器類が、出土遺物の様相の基調とはなっているが、陶磁器



第 35 図　溝 S14 出土土器・陶磁器類実測図

類では、国産よりは量的にも多い中国の明からの輸入品が、質と量の両面で遺物の様相を特徴付けている。輸入陶磁器類では、やはり青磁のそれも碗類が質と量の両面で大きな位置を占め、食器の中でも碗に限れば最も多数を占めている。それらより量は少ないが、天目茶垸なども含まれており、出土食器類の質の高さをよく示している。国産陶磁器は、美濃・瀬戸産が主であり、少数の天目茶垸・灰釉碗や香炉などを含むが、オロシ目皿など調理具が中心である。

第 35 図の 1 ～ 27 は京域主流派の赤系 (N) と白系 (S) が主体を成す土師器類である。1 は皿 N 小で口径 7.5㎝台、2 は皿 N 大で口径 9.5㎝台、3 は皿 N 大 2 で口径 11.0㎝台である。小型化し華奢にはなっているが、形態的にはⅧ期に定型化した形を残している。4 は内湾的な体部に深手感を残した古相を呈した皿 S 大である。口径は 6.0㎝台と小振りである。5・6 も皿 S 大であるが両者とも口径 7.0㎝台に属する。体部が外反的に開き、器高に低さ感が出てきている。押し上げられた底部外面につめ跡を残す点も、室町時代全体の S 大 (ヘソ皿) の内でも新相を示している。7 ～ 13 は皿 S 小であり、口径 8.0 ～ 8.5㎝台が中心である。14･15 は口径 9.5 ～ 10.0㎝台に属し、皿 S 中と見ている。16 ～ 19 は口径 11.0 ～ 11.5㎝台を中心とする皿 S 大 1 である。20 は口径 14.2㎝であり、皿 S 大 2 とみられ、21 ～ 24 は口径 14.5㎝台を中心とした皿 S 大 3 である。25・26 は口径 15.5㎝台が主で皿 S 大 4、27 は口径 17.4 であり、口径 17.0 ～ 18.0㎝台を中心とする皿 S 大 5 と見ている。皿 S の器種分化が、大きい方向へ進んでいるように見える資料の多いⅨ期の皿 S の特徴的様相をよく示している。皿 S 大、皿 S ともに 8 や 14 ～ 17、21・25 などのように深さ観を残し坏形とも言えそうなものが明確に残っている点、逆に 13 や 15・22・26 のように体部の開きがより大きく、浅くなって皿形化が進んでいる点など、皿 S の体部の器高の変異幅がみられる。これらの型式特徴からはⅨ中の新～Ⅹ古の古の幅には収まり、まとまりのあり方からはⅨ新を中心にして見ておきたい。

28 ～ 29 は鉄釉天目茶垸であり、中国の明からの輸入品と見ている。30 ～ 36 は同じく明からの輸入青磁碗であり、輸入品の主体を成している。37 は同青磁壺である。青磁碗は口径が 14.6 ～ 17.3㎝台まで幅はあるが、16㎝以上の大振りのものが多く、腰もゆったりと張っているなど 15 世紀～ 16 世紀の明の輸入青磁の中では、古相なものが主体である。また発色を含む釉調は、いわゆる天龍寺青磁よりも、宋・元代の青磁に近い良好なものがほとんどである。輸入時期が 15 世紀の早い段階からのものを主体としている可能性が高いと見ている。38･39 は白磁であり、38 は口径 10.4㎝程の浅い皿で、39 は口径 7.5㎝程で猪口とも言える小坏である。ここでも輸入の染付碗皿などは出土していない。Ⅺ期新とする 15 世紀代末～ 16 世紀最初頃には、明で染付＝青花磁器の生産は本格化しており、遣明船でも搬入されているが当地では 16 世紀においても出土がほとんどみられない。洛中でも 15 世紀末～ 16 世紀頃には、明の染付はあまり多くみられない。この点に関しては、その当時の京都の嗜好性に大きな理由があると考えている。

40 ～ 48 は美濃・瀬戸産の施釉陶器である。40 は鉄釉の天目茶垸の口縁片とみられ、41 は同じく鉄釉の天目茶垸で削り出しの高台である。42 も鉄釉の香炉であり、丸く張り出す腰部から見て、底部に三足が付く小型の香炉と見ている。43 ～ 48 は灰釉陶器であり、43 ～ 46 はいわゆ

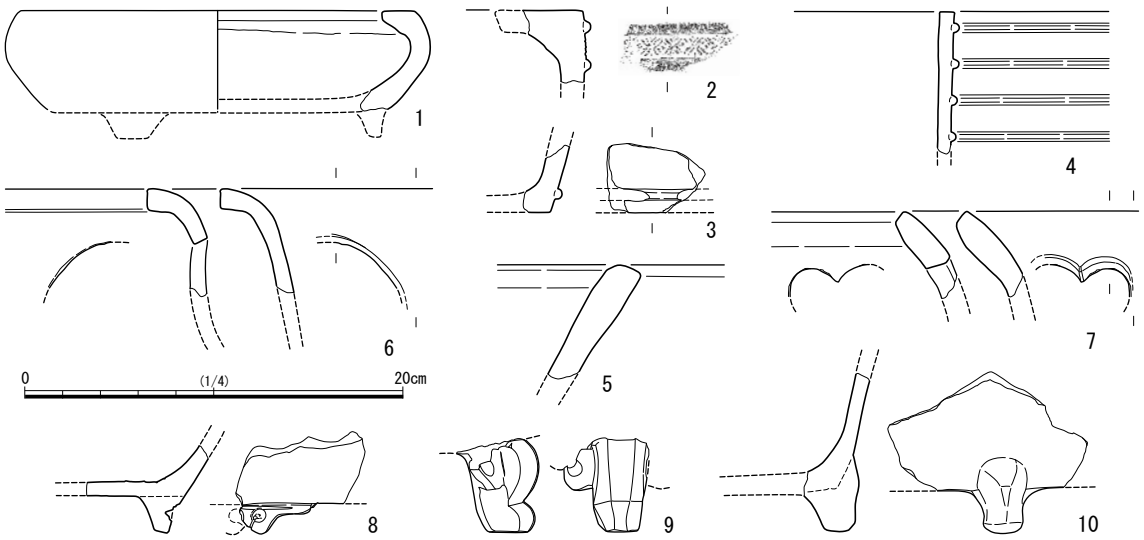
るオロシ目皿あるいは鉢とみられる調理具である。47 は梅瓶形の壺の小径の蓋である。48 は径の大きな浅い鉢の底部とみられる。土師器と型式位置からの年代観と大きな齟齬はない。

49 ～ 55 は瓦器の羽釜と鍋である。口径や羽部の大きさなどから羽釜のうち 49 はやや小振り、50 ～ 52 はレギュラーな中、53 は大振りに属するものと見ている。鍋も含めて粘土紐成形により内面をハケ目調整で、外面はオサエ痕を残し仕上げとする点や形態的特徴などから、すべて枚方楠葉産と言える。羽釜の型式特徴は、羽部の幅（短くなると断面が三角形状となる）と先端の丸味への変化に表れる。鍋は体部の開く浅形（鍋）化と受け部の萎縮化と結果の玉縁状化に表れる。鍋・羽釜の型式特徴からは、既資料との比較からはⅨ期新頃を中心に見てよいだろう。

56 ～ 61 は国産の焼き締め陶器の擂鉢と甕である。56 は信楽産の甕の口縁部片であり、57 ～ 61 は備前産の擂鉢である。口縁形態的には、正三角形に近い 57 が最も古く位置付けられ、15 世紀半頃近くまで上がってもよい。61 は口縁上端が上方へ高く発達しており、外面から見た口縁部は縁帯状を成している。この様相は最も新相を呈するものであり、16 世紀前半の幅のいずれかに位置付けなければならないだろう。59 と 60 は、57 と 61 の中間的形態であるが、61 側にかなり近く位置付けられ、16 世紀に入ってからの製品とみられる。

焼き物の種類別に型式特定を行ったが、Ⅸ新（～Ⅹ古古）の新しい方の頃との見方は共通する。全体的な実年代については、15 世紀第 4 四半期の新しい方から 16 世紀最初の幅に収まる資料が主体を成すものと見ている。もちろん伝世的に使用が続いて、この時期に同時に埋没したとみられる古相の遺物のあり方からは、遺構の成立期は少なくとも 15 世紀後葉頃の古い方に遡り、廃絶が 15 世紀末～ 16 世紀最初頃の時間帯となるものと考えておく。

第 36 図 1 ～ 10 は瓦器の諸器形をまとめている。1 は丸形の浅い火鉢であり、2・3 は方形の火鉢である。2 は外面上端近くの 2 条の小突線間に、小菊の連続文かとみられる帯状の文様を持つ口縁部片である。3 は体外面下端近くに 1 条の突線を持つ、底部を一部含む破片である。この底部角には三足が付くとみられる。



第 36 図　溝 S14 出土遺物実測図

4 は円筒状の体部外面に多条の突線を施す、行器形の瓦器の火鉢である〔註 4〕。

5 は擂目の付く例も多い大和産（あるいは系）の瓦器の鉢である。この資料の場合は同時代の信楽の擂鉢の口縁部形態を模倣したものである。15 世紀代～ 16 世紀前半の同鉢あるいは擂鉢は、断面が三角形状を呈する備前擂鉢の口縁部形状を写すものが主体を占めているが、16 世紀代に入ると信楽産の口縁形状を呈するものがみられるようになるのがその一例となろう。

6・7 は器形が少し異なるが、体上部に焚口あるいは風穴などの残る、いわゆる土風炉の口縁部片である。土風炉は大和産が中心であるが、移動した大和系の工人の製品の可能性もあるだろう。ただ他の遺構から出土している土風炉を含めて、土風炉の出土例としてはかなり古いものである。しかし、洛中にもこの頃の出土資料があり、茶釜の出土例もみられるので問題はないだろう。8 ～ 10 は丸形の火鉢や風炉の底部外に、三足で付く脚の破片である。

1 ～ 10 にまとめて提示した瓦器の諸器形は、火まわり用具を主とするものである。火鉢や風炉は大和産あるいは大和系の製品であり、その他の鉢も同様の理解でよいだろう。製作と搬入年代は土師器食器とほぼ同時期と考える。

この溝 S14 から出土した遺構の年代観に関しては、土師器と瓦器を中心とする土器類の型式年代から、15 世紀末～ 16 世紀前葉頃を中心とする時期に比定できる。ただその他の焼き締め陶器を含めた陶磁器類には、他の遺構と同様に 15 世紀後半代に比定できるものも少なからず含んでいる。これらは伝世使用的器物と理解されるが、16 世紀に入った頃前後に、同期の遺物と共伴廃棄されたと理解される。

井戸 S41

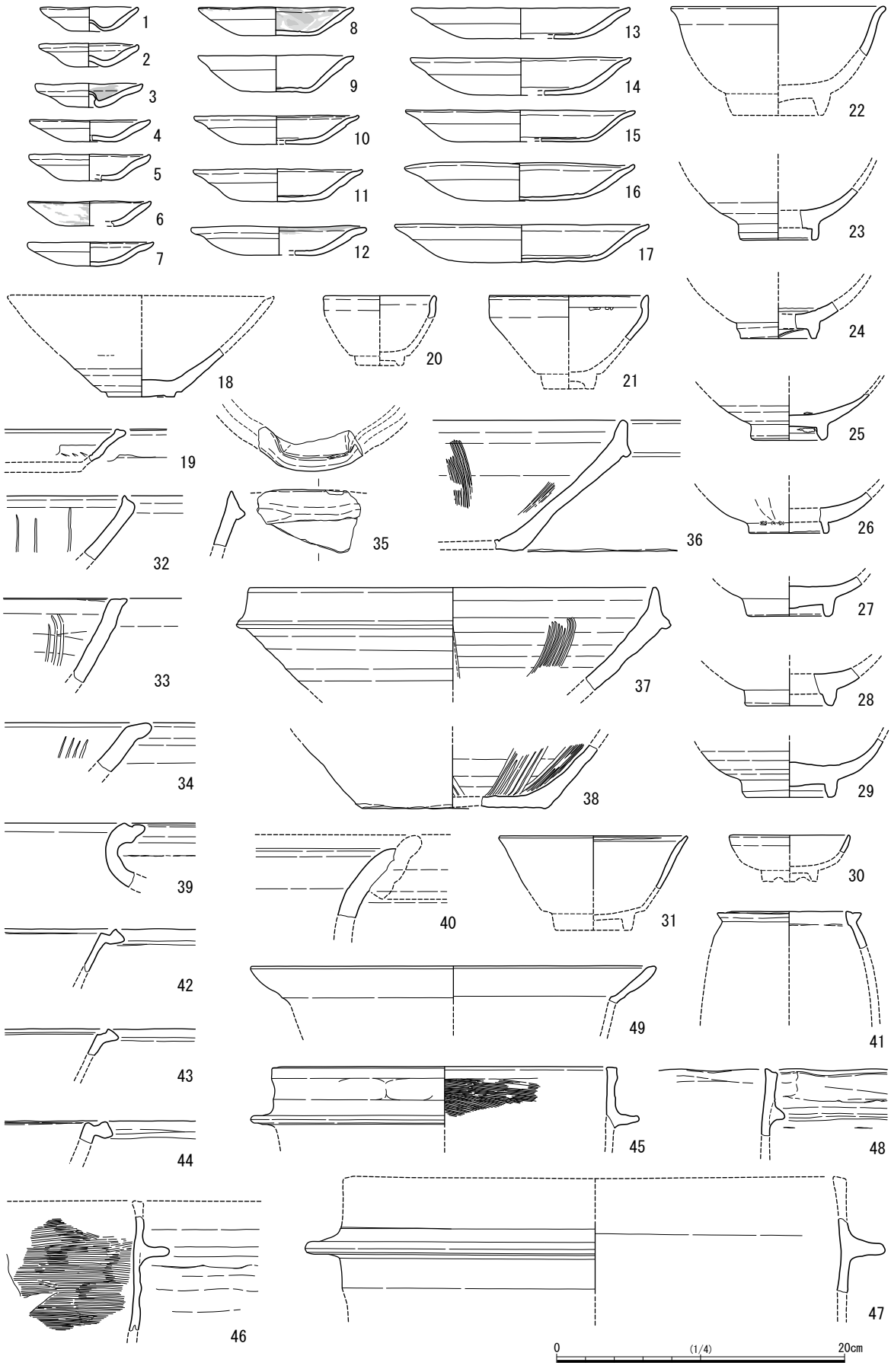
第 37･38 図は、第 1 調査区の東半北部で検出した井戸 S41 の、主に井筒内から出土した土器・陶磁器類を中心に掲載した。

第 37 図 1 ～ 17 は土師器食器類であり、まとまった量が出土している。1 ～ 3 は皿 S 小、4 ～ 17 は皿 S の中～大である。各型式を通じて器高は低下し、体部から口縁部の幅は狭くなり、口縁端部内面は端面化が進んでいる。先の溝 S14 の中にみられた少し深手に見えるものもより少なくなっている。

18・19 は美濃・瀬戸産の灰釉陶器である。18 はいわゆる平埦の底部であり、削り出し高台になっている。19 はいわゆるオロシ目皿であり､体部内面下端でヘラ描きオロシ目痕が確認できる。20 は小振りの鉄釉天目茶埦であり、これも美濃・瀬戸産である。

21 は口径 11.5㎝程の一般的な鉄釉天目茶埦であるが、胎土・釉調などからは中国の明からの輸入品と見ている。

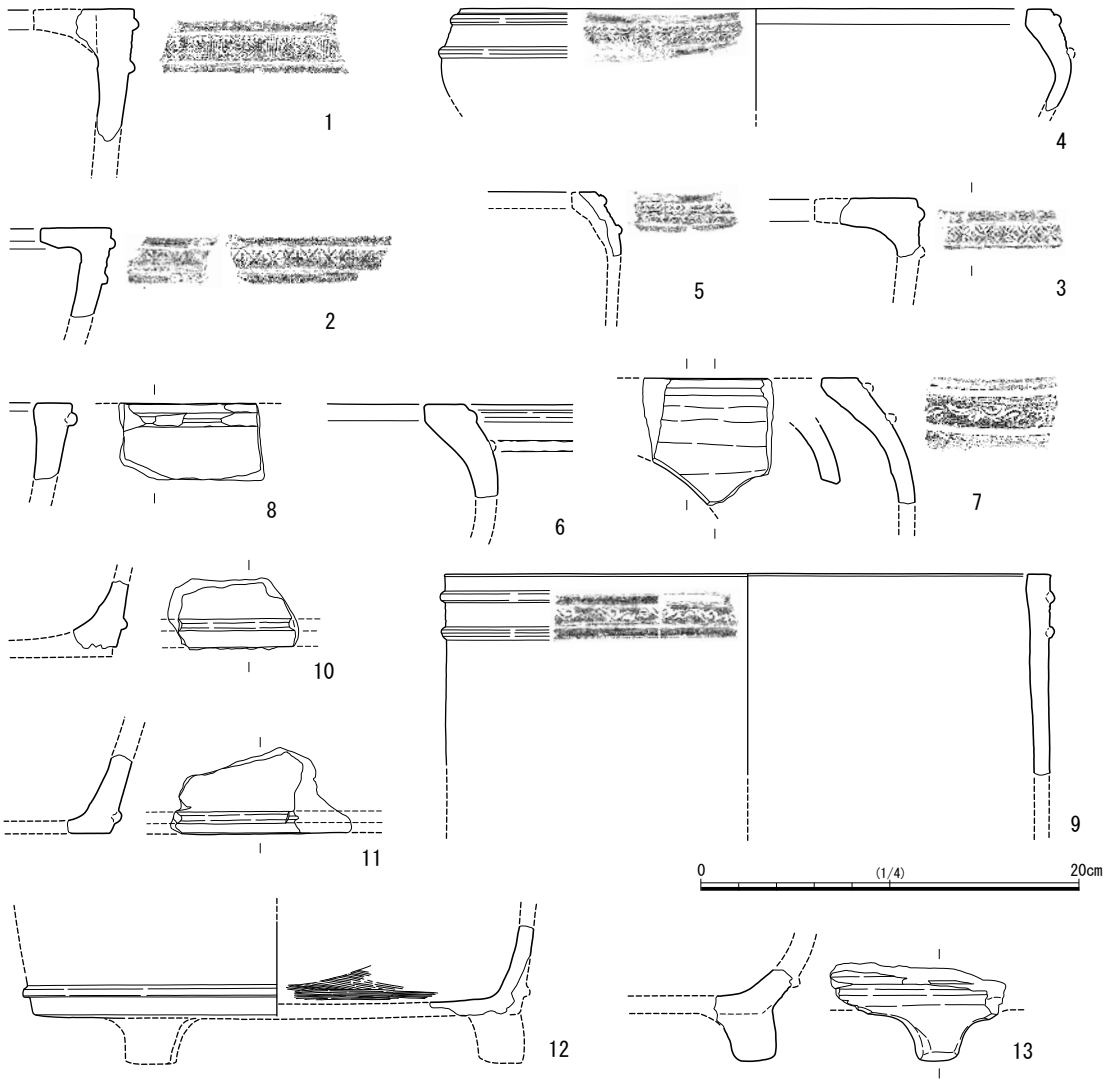
22 ～ 29 は青磁碗片であり、30 は白磁皿、31 は白磁碗である。これらはすべて明からの輸入品である。後代茶人の評価からいわゆる「天龍寺」青磁と称される釉調を持つものはなく、釉調的には中国元代のものに近い良品が中心である。年代的にも共伴出土している土師器皿類よりも古い。15 世紀後半から遅くとも 16 世紀初め頃の輸入品である。青磁碗類で底部内面（いわゆる見込み）が残っているものでは、釉下に花文を施したものが多いが、体部内外面は蓮弁を持つも



第 37 図　井戸 S41 出土土器・陶磁器類実測図

のも少量あるが、全体的には無地のものが多い。鉄釉天目茶垸同様に喫茶の茶垸として使用されたものが主体であろう。30 の輸入白磁皿は､いわゆる下駄高台の小皿である。出土量は少ないが、嵯峨や洛中での上述した青磁碗類との共伴出土例は多い。31 の輸入白磁碗は、古相品ともみられるが、下半が残存していれば、呉須絵を持った染付碗になる可能性もあると見ている。先の青磁碗類や白磁小皿などと共伴していてよいだろう。

32 ～ 40 は国産の焼き締め陶器類であり、鉢と壺甕を主体とする生活用具類と見ている。32 は、丹波産の 1 本目の擂目を持つ擂鉢である。年代的には 16 世紀中葉頃まで下がる可能性もある。33･34 は信楽産の擂鉢である。焼きは甘く硬度は低い。16 世紀前半から中葉頃の幅を持つ。35 ～ 38 は備前産の擂鉢である。35 は片口部分の口縁部片であり、口縁端部を含む断面三角形の形態からは、短い 35 が最も古相であり、端部が上方へ延びて長い直角三角形状を呈する 36・37 は、新相に位置する。8 本櫛目の擂目間の透間が大きく開いている。年代的には 35 を入れると 15 世紀末～ 16 世紀中頃の幅を持った見方となる。39 は信楽産の壺、40 は同じく信楽産の甕である。40 の甕は愛知常滑産の甕の口縁を写した口縁形状を持つもののようだ。15 世紀後～



第 38 図　井戸 S41 出土瓦器類実測図

16 世紀代の信楽甕は、常滑産を写したものが多い。

41 ～ 49 および第 41 図 1 ～ 13 は、瓦器の壺、鍋、羽釜、火鉢あるいは火舎・風炉である。41 の瓦器の壺は出土類例が少ない。形態的には中国の鉄釉あるいは褐釉がかけられた壺の模倣品と見ている。

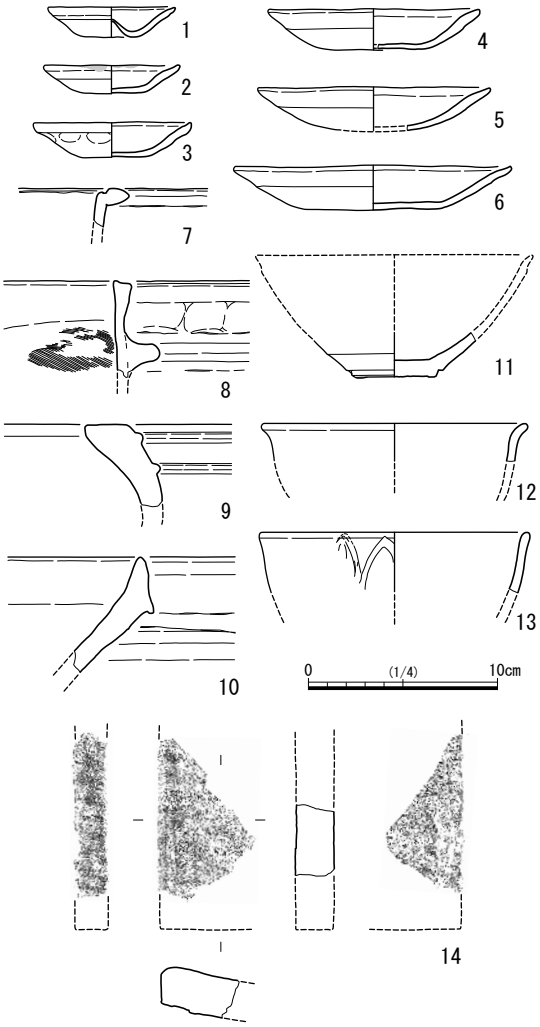
42 ～ 44 は枚方楠葉産の瓦器の鍋である。体部が大きく開き、口縁部は受け部と立ち上がりの一体化が完成した形状を呈する。45 ～ 48 は同じ楠葉産の瓦器の羽釜である。大型では鍔部に幅を残すが、中～小型では鍔部が大きく萎縮し、短い三角形状を呈するものが多くなっている。内面はハケ目調整のままとし、外面は口縁部から鍔部下まではナデ仕上げするが、体部にはオサエ痕跡をそのまま残す。これら楠葉産の鍋釜は、型式特徴の幅から 15 世紀後葉～ 16 世紀前葉頃の搬入品と見てよいだろう。49 は焙烙的な浅い体底部を持つ鍋の口縁部と見ている。洛中での出土例が少なく、嵯峨の以西のローカル産と見ておきたい。

第 38 図 1 ～ 13 は瓦器の火鉢、あるいは火舎・風炉などの火まわり品である。1 ～ 3 は内に折れる幅のある口縁部を持つ方形を呈する火鉢である。4 ～ 9 は円形の火鉢あるいは風炉や火炉であり、12・13 はそれらの脚の付く底部である。外面に小突帯を複数付け、その間に文様を施したものも多く、また外面全体は丁寧にヘラミガキを加えた後に炭素吸着させており、黒光りするものがほとんどである。これらはすべて大和系の産地の製品と見ている。

出土している土器・陶磁器類全体では、15 世紀後葉～ 16 世紀前半の時間幅を見込む必要があるだろう。しかし、土師器皿などの型式的位置（京都Ⅹ期古新相～同中古相）から室町時代末期の 16 世紀前半の内にまとめて処分された遺物群と見ておきたい。

溝 S26

第 39 図に掲載した土器・陶磁器類は、第 1 調査区の溝 S26 から出土している。1 ～ 6 は土師器皿であり、1 は皿 S 大、2・3 は皿 Sb、4 ～ 6 は皿 S 中～大である。各型式ともに器高も浅くなり、体部口縁部の幅が狭くなり、近世へつながる皿形が定型化しており、第 35 図の出土土師器皿と同型式と見てよいだろう。京都Ⅹ期古中～Ⅹ中中の幅には収まる。7 は瓦器の鍋であり、口縁部は受け部と立ち上がりが小さく一体化しきっている。8 は瓦器の釜であり、鍔部が幅を失せず断面が三



第 39 図　溝状遺構 S26 出土遺物実測図

角形的と成っている。いずれも枚方楠葉産である。9 は丸形の瓦器の火鉢、あるいは風炉であり、大和産の製品である。10 は焼き締め陶器擂鉢の口縁部片である。口縁端部が上方へ延び、断面形状は上方に長い三角形状を呈するものとなっている。

11 は美濃・瀬戸産の灰釉陶器の平埦である。天目茶埦の底部に近似した削り出しの輪高台となっており、15 世紀後半以降～ 16 世紀前半頃にあってよいだろう。

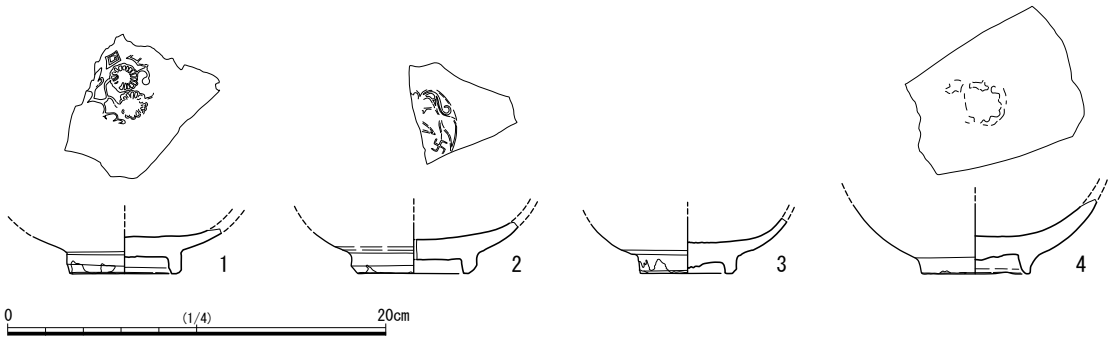
12・13 は中国の明からの輸入青磁碗である。12 は外面が無文だが、13 は外面に簡略化したヘラ描きの線表現の蓮弁を持つ。

14 は内外面とも均質に炭素が吸着しているいわゆるくすべ瓦の平瓦である。

年代観は、土師器皿類他の瓦質土器、国産灰釉陶器、焼き締め陶器、中国明からの輸入青磁碗、また瓦も含めて、一部 15 世紀後期頃に上げてもよいものも含むが、概ね室町時代末期の 16 世紀前半代には収まるものと見ている。

輸入青磁

第 40 図に掲載した輸入青磁碗は、包含層などから出土しているものをまとめた。これらの青磁碗もいわゆる天龍寺青磁より、釉調や発色は元の時代の青磁に近いものばかりである。再開された日明貿易で、15 世紀後葉～ 16 世紀初頃に日本へもたらされたものであろう。明の時代の青磁の中では良品に属するものが中心である。



第 40 図　発掘区出土青磁類実測図

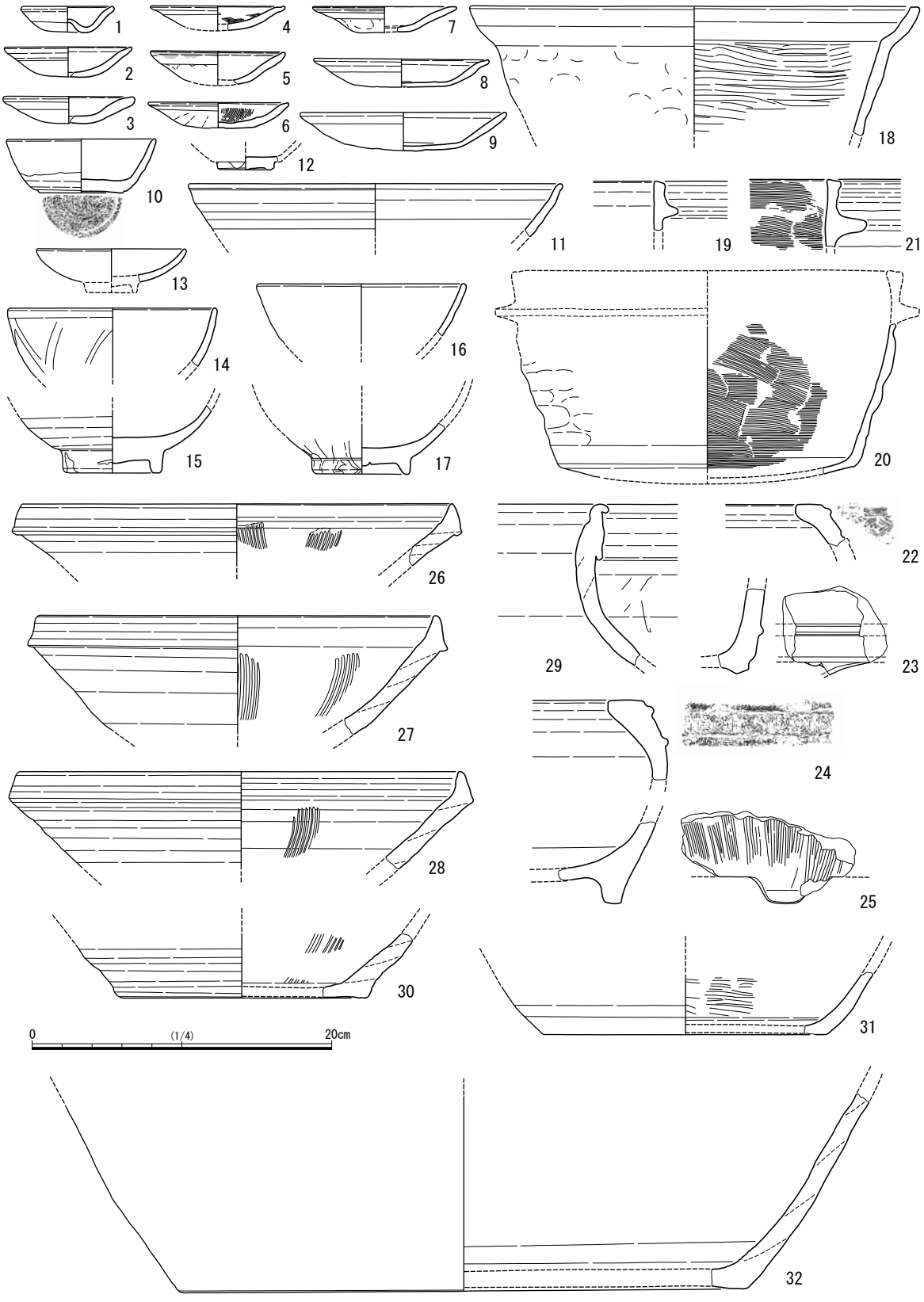
井戸 S509

第 41 図は第 2 調査区の井戸 S509 からまとまって出土した土器・陶磁器である。1 ～ 9 は土師器皿であり、1 は皿 S 大、2 ～ 7 は皿 Sb、8・9 は皿 S の中～大である。皿 Sb と S は第 35・36 図に掲載したものよりも、若干とはいえ縁端部内面の端面化や、体部から口縁部幅の萎縮化が進んでいる。1 の皿 S 大は古手混入品の可能性が高く、これを除くと土師器皿は型式的にもよくまとまったものと言え、それらは京都Ⅹ期の中～新の幅に収まる。

10 は灰釉系の坏であり、底外に回転糸切り痕を残す。11 は灰釉の平埦であるが、口径 25㎝を超え、大埦あるいは鉢とすべきものである。12 は削り出し高台を持つ鉄釉天目茶埦の底部片である。10 ～ 12 に関しては、型式的諸特徴から 3 点ともに、美濃･瀬戸産の国産陶器と言える。

13 の白磁皿、14 ～ 17 の青磁碗は、すべて中国の明からの輸入品である。13 の白磁皿は、い

わゆる下駄高台の皿である。14 ～ 17 の青磁碗は大きさもしっかりしており、体部外面の蓮弁文も古相なものが主であり、ガラス質感の強い釉調や深い緑味の発色なども古相を残すものが主で



第 41 図　井戸 S509 出土土器・陶磁器類実測図

ある。喫茶での使用品とみられる。

18 ～ 21 は瓦器で 18 は鍋、19 ～ 21 は羽釜である。18 は体部内面のハケ目痕跡が、19 ～ 21 の羽釜類と大きく様相を異にする。19 ～ 21 は枚方楠葉産の一般的な羽釜であるが、18 は口縁部形態も楠葉の一般的な鍋とは大きく異なる。18 に関しては嵯峨以西の産地からの製品と見ておきたい。

22 ～ 25 は丸形を主とする瓦器の火鉢あるいは火舎の破片である。すべて大和産もしくは大和系の製品とみられる。

26 ～ 32 は国産の焼き締め陶器である。26 ～ 28・30 は備前産の擂鉢類である。29 は、口縁形態は一見では常滑にも似るが、端部の処理や胎土などから信楽産の甕と見るのが妥当だろう。31・32 は壺あるいは甕の底部片と大甕の底部片である。両者ともに焼成レベルの共通性からも、擂鉢と同じ備前産と見ている。

これら井戸 S509 から出土した遺物類は、土師器皿類の主体が型式的にもよくまとまっており、16 世紀中葉頃を中心に位置付けられる。しかし、美濃・瀬戸産の陶器類、青磁碗を主体とする輸入陶器、備前産を中心とした焼き締め陶器類など、陶磁器類はほぼすべて土師器よりも少しだが古く、15 世紀後葉～ 16 世紀前葉を中心にするものが主体である。瓦質土器類もやや古相を呈し、16 世紀前半に収まるものが中心である。

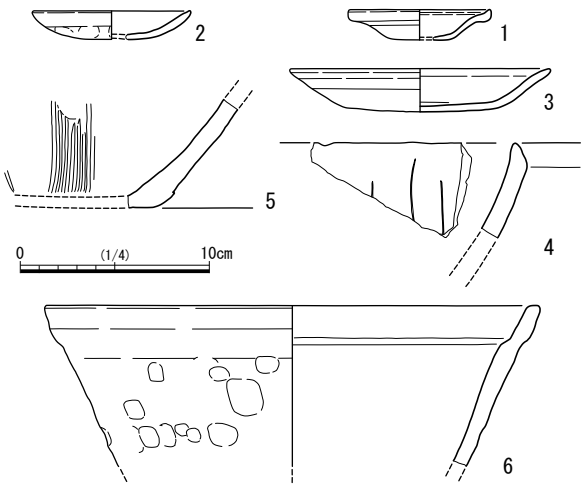
土師器皿類は、井戸廃絶の同時期的な時間に位置するが、焼き締め陶器を含めた陶磁器類は、早くに搬入されたものが一定期間伝世使用された後に、最新の土師器皿とともに処分されたものと見ておきたい。

土坑 S527

第 42 図に掲載した遺物は､第 2 調査区の墓の可能性のある土坑 S527 から出土したものである。1・2 は土師器皿 S 小と見ている。3 は土師器皿 S 大である。型式的には土師器皿は 1 を古手の混入品と見ると、京都Ⅹ期中か新の前半に収まるものとみられる。

4 は口縁形態と 1 本目の擂目から丹波産の擂鉢である。5 は櫛目の有様や体部の焼成の良好さから良く焼け締まっており、重量もかなりの重さを持った備前産の擂鉢と見てよいだろう。擂目の櫛目間に大きな幅を持っており、4・5 ともに 16 世紀代中葉～後半の古い方の内に位置付けられると見ている。

6 は瓦器の鍋の体部から口縁部であり、第 35 図 49 と第 39 図 18 に掲載した瓦器鍋と製作技法痕跡とその様相からは、同一産地の同じ技術で作られたものと言え、同型式に属するものと見ている。受け口状にまとめられる口縁形態的も同型式に属し、第 35 図 49



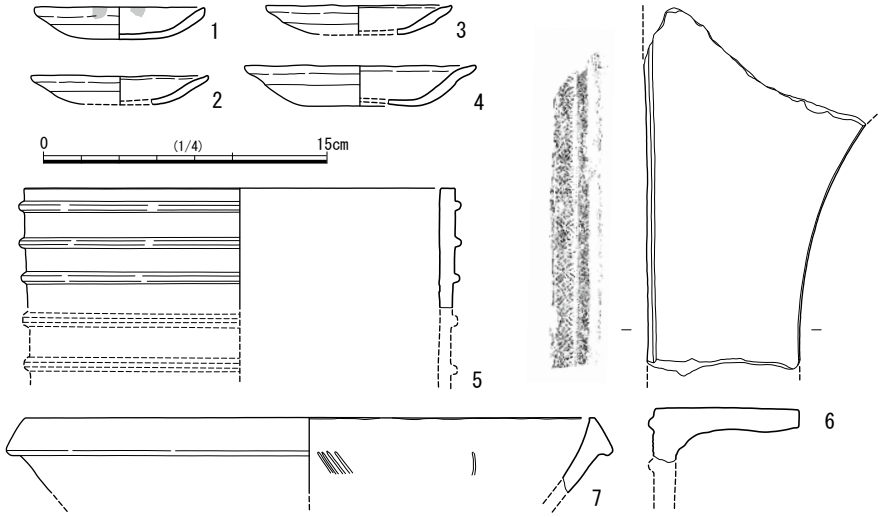
第 42 図　土坑 S527 出土土器・陶器類実測図

とは若干の型式差がある可能性もあるが、いずれにしろ 16 世紀代に位置付けられる。産地は先にも記したが、嵯峨を含む京都盆地北西部以西と見ておきたい。

これらの土器群全体の年代観は、16 世紀中葉～後半の幅の内に収まるものが主体である。

土坑 S79

第43図には第1調査区の土坑S79から出土した土器･陶器を掲載した。1～4は土師器皿であり、1～3は皿 Sb、4は皿 S 中とみられる。皿 Sb の法量からは京都Ⅹ期新～Ⅺ古古の内に位置するものと見ている。



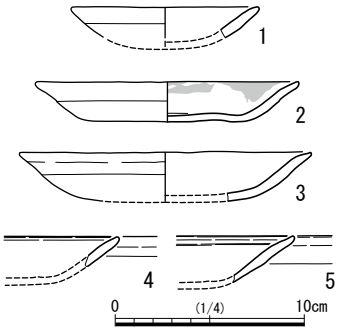
第 43 図　土坑 S79 出土土器・陶器類実測図

5は瓦器の行器形の火鉢であり、6は瓦器の方形火鉢あるいは（移動）炉である。6は方形の火鉢としてはかなり大振りなものとみられる。

7は国産の焼き締め陶器の備前産擂鉢である。二等辺三角形的な口縁形態からは、生産と購入年代が 15 世紀後半に遡る可能性が高い。他の土器類の年代観は、16 世紀後半頃に位置付けられる。この備前産擂鉢は、単に古手の混入品と見るよりは購入されてから 2～3 世代に渡って伝世使用され、新しい土器とともに廃棄された良品との見方も十分に考えられる。伝世使用例と考えられる出土品は、堅く焼き締まった形質の強い陶磁器類に多く認められる。今回の遺構出土資料においても枚挙にいとまがない程にその例は多い。

土坑 S548

第 44 図は第 2 調査区の北西部で検出した土坑 S548 から出土した土師器皿類である。1 は皿 Sb、2・3 は皿 S 大であり、断面のみとなった 4・5 についても皿 S 大と見ている。皿 Sb、S を問わず、口縁端部内面の端面化は定形化しており、皿 S では体部から口縁部が狭くなって短く開く。皿形の全形も京都Ⅺ期以降のプロポーションに定形化している。体部の立ち上がり部の内面に、明瞭な凹状圏線を持つものが主体となっている。皿 Sb・S ともに



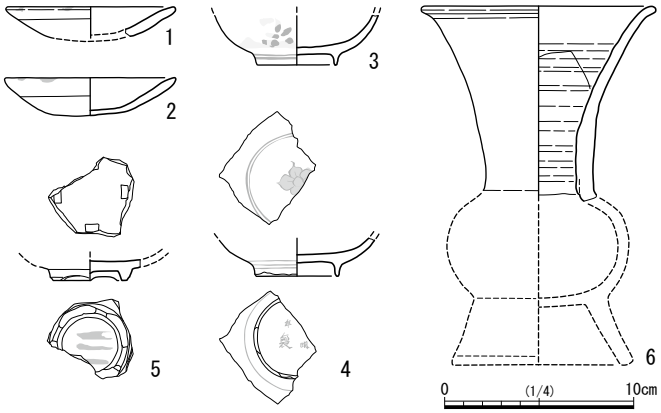
第 44 図　土坑 S548 出土土器・陶器類実測図

XI期古に収まってよいと見ているが、5など古相のものも一定量含むので、X期新～XI期古の幅で見ておき、16世紀後葉頃の安土桃山時代前半頃に位置付けておく。

第2調査区土採取坑

第45図はS568から出土した土器・陶磁器を掲載した。1・2は土師器皿Sbとみられ、両者ともに口径は9.0㎝程である。口縁端部に小さな煤が付着しており、灯明として使用されている。法量と形態的特徴からは古くなる可能性も残すが、京都XI期の新段階から同XII期頃のものと見ておきたい。

3・4は染付磁器の碗である。3は体部外面に呉須で文様と圏線を施し、4は高台内の底部外面に、「□明／年製」の稚拙な模倣文字が呉須で記されている。両者ともに肥前有田の17世紀中葉～後半期頃の製品であろう。



第45図　第2調査区土採取坑群出土土器・陶磁器類実測図1

5は中国の明から輸入された白磁小皿、あるいは小振りの坏とみられる。高台は削り込みの入る、いわゆる下駄高台である。古手からの混入品であり、16世紀前半頃の製品と見ておく。

6は国産の美濃・瀬戸産の灰釉陶器であり、体部以下を欠失しているが、独特の口縁部形態から、高い高台の付くいわゆる（仏）花瓶と見ることができる。大きさからはやはり寺院などでの使用が考えられる器物である。年代的には室町時代末期の16世紀前半頃を中心に位置付けておきたい。

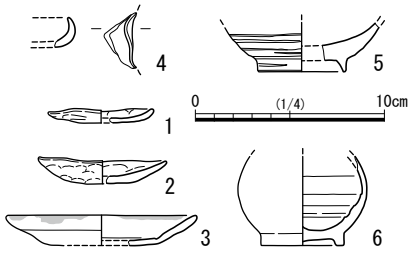
土師器皿や染付碗などと輸入白磁皿や美濃・瀬戸産の灰釉陶器花瓶の両群では、年代観に百年前後の時間差を生じるが、掘削された古い地層などからの古手の混入品と理解しておく。

第46図はS539・S575からの出土遺物である。1～4は土師器皿であり、1は皿Nr、2は皿Sb、3は皿S中、4は耳皿片である。3の皿Sは体部立ち上がりの角近くに明瞭な凹状の圏線を持ち、体部から口縁端部の幅がかなり狭くなっており、京都XII期中～新の幅に収まるものである。

5は肥前唐津の刷目手塊の底部片である。6も同様に肥前産の白磁小壺と見ている。

これらの土師器と陶磁器類は、江戸時代前期末～中期初頃となる17世紀後葉～18世紀初め頃に位置付けておきたい。

第47図は集石S508から出土した遺物である。1～5は土師器皿であり、1は皿Nr、2は皿Sb、3～5は皿Sの中である。1は皿Nrとしたが、京域主流のものではなく、嵯峨のローカルの可能性もある。2の皿Sbは口径8.7㎝程で、京都XII期新段階以降と見ている。3～5の皿S中も



第46図　第2調査区土採取坑群出土土器・陶磁器類実測図2

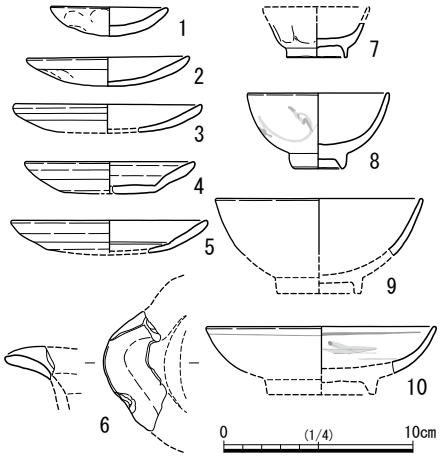
2 と同型式に属するものであろう。

6 は金属製の小鍋の片口を写した土器片と見ているが、さらに検討が必要である。

7 は白磁の小坏であり、8 は染付磁器の小碗、10 も染付磁器の皿の底部である。これらはすべて肥前有田産の磁器と見ている。

9 は灰釉系的陶器埦であり、淡褐色味を帯びて洗練された釉調とその色調などからは、京焼の埦の口縁部片と見ている。

これらの遺物については、土師器皿や陶磁器類の様相から、京都 XII 期新以降の同 XIII 期古の幅で、江戸時代中期の 18 世紀代のものを中心としていると見ておきたい。

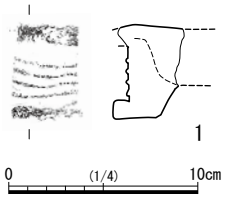


第 47 図　集石遺構 S508 出土土器・陶磁器類実測図

2. 瓦　磚　類

溝 S9 出土瓦類

瓦類の種類は、軒平瓦、丸瓦、平瓦および磚で、整理箱（コンテナバット）にして 3 箱程度の量であった。若干の平安時代の瓦類が混じるが、大半は鎌倉～室町時代のものと思われる。



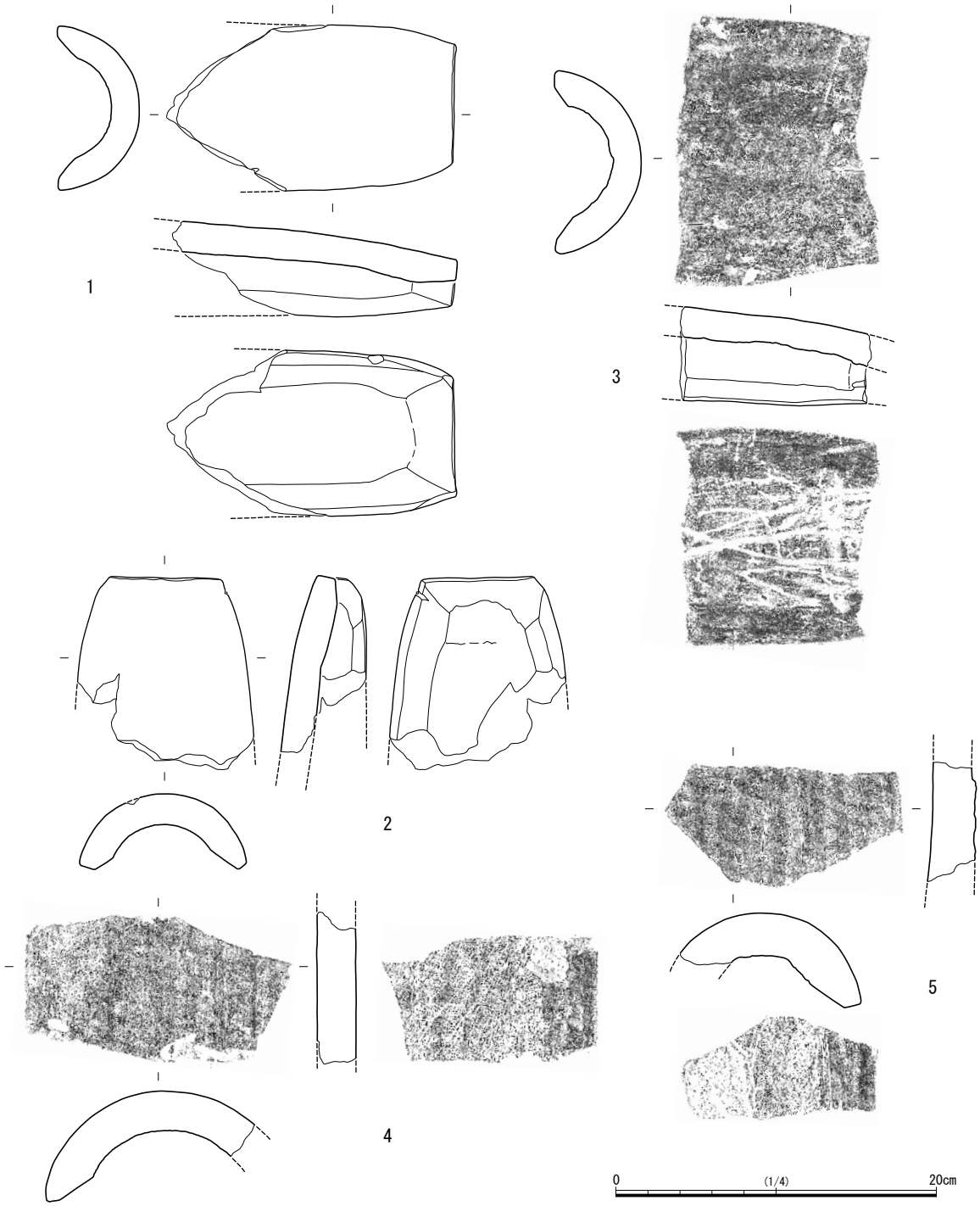
第 48 図　溝 S9 出土軒平瓦実測図

軒平瓦は小片 1 点（第 48 図）で、瓦当部は、厚めの平瓦端に粘土を付加して成形し、反転のやや緩い波文を表している。胎土にあまり砂粒を含まないが、瓦当面には細かい離れ砂が認められる。二次的な火を受けたようで、全体に淡赤褐色を呈している。

波文軒平瓦は、中世段階の嵯峨地域の諸寺院建築でよく用いられていたらしく、現在の天龍寺境内の勅使門脇の築地や、鹿王院の総門脇の築地に装飾的に埋め込まれた廃瓦の中にも数点の波文軒平瓦例がみられる。ただし、今回の出土品との同笵例は確認できない。

丸瓦はすべて破片で、端部の残るものもあるが全長のわかる例はなかった。いずれも葺き重ねのため一方の端部が細くなる「行基葺」式の丸瓦（第 49 図）で、端部の残っていない破片も、両端で径が異なっていることから行基葺式の丸瓦と判断された。溝 S9 から出土した瓦片の中には、一般的な有段式の丸瓦は見当たらなかった。

溝 S9 出土の丸瓦は、基本的に凸面は縦方向のヘラナデで調整され、凹面側の側縁・端縁は幅広にケズリで面取りされている。凹面の布目痕はあまり明瞭なものがなく、布皺も目立つ。行基葺式丸瓦は、成形時の芯になる模骨も上下で径が異なるものが使用されると考えられるが、模骨に被せる瓦衣の布袋は通用の円筒形であったためかと思われる。

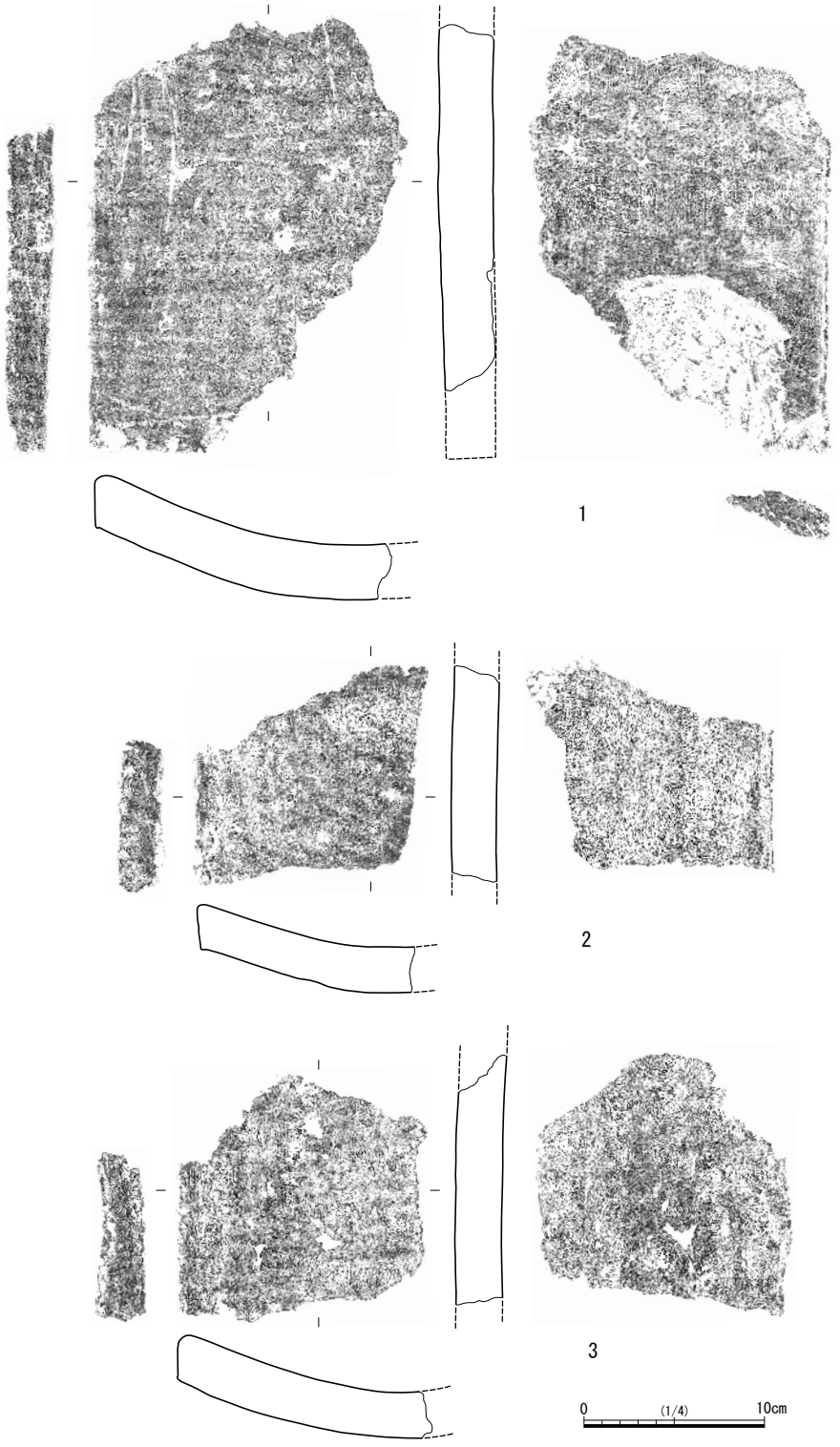


第 49 図　溝 S9 出土丸瓦実測図

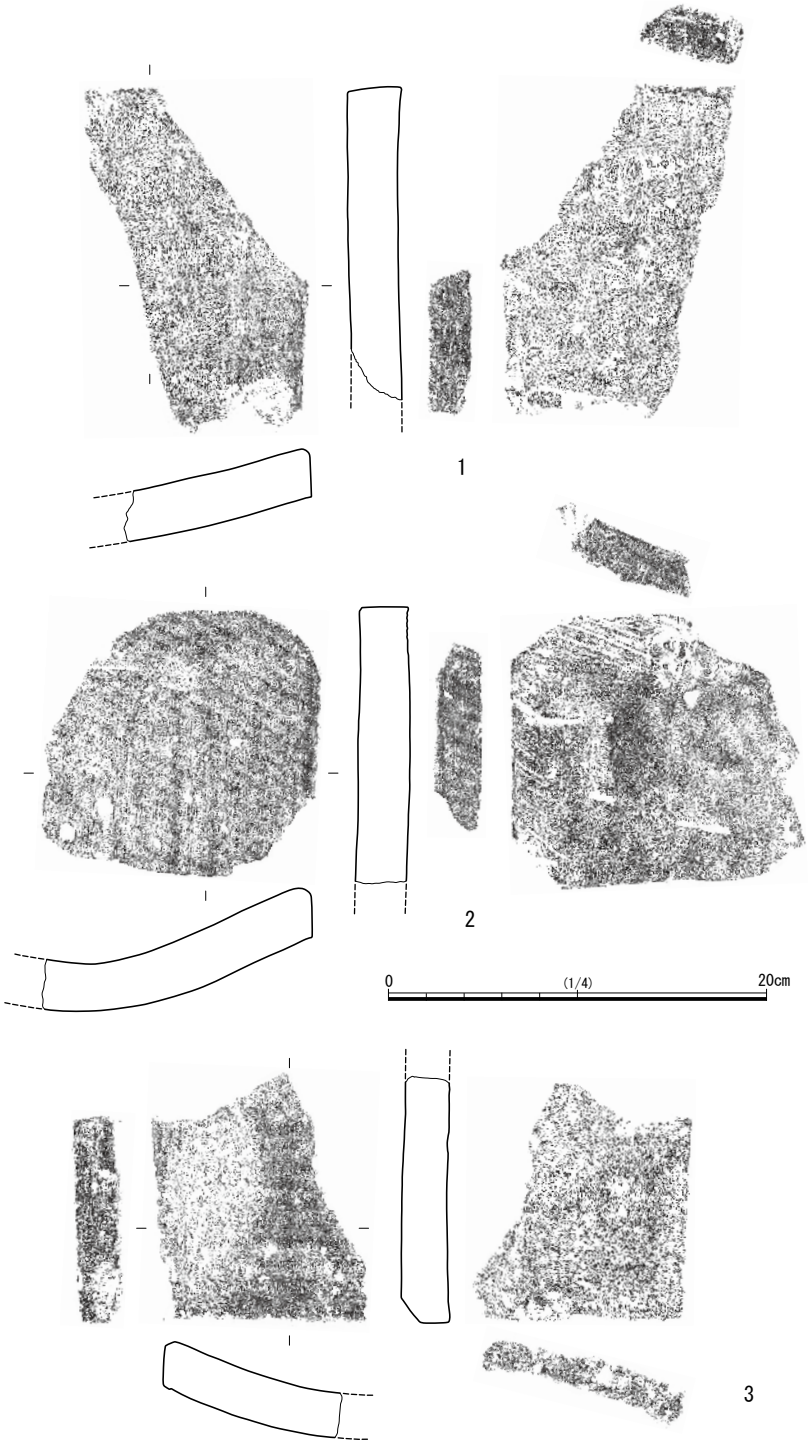
これらの丸瓦は、胎土に粗い砂を含むがあまり多くはない。焼成は軟質から硬質のものまでがあり、色調はもともと燻しの黒色や灰色であるが、全体に、あるいは部分的に火を受けたらしい橙色を呈するものが多い。

平瓦もすべて破片で全体の大きさがわかる例はなかった。厚さは、2.5㎝ほどの厚手のもの（第 50・51 図）と、2㎝程度のやや薄手（第 52 図）の 2 種があり、厚手の平瓦のほうが多かった。いずれも凹面は平滑にナデ調整され布目は認められず、凸面は顕著に離れ砂が付いていることか

ら、凹型台で成形されたと考えられる。凹面のナデ調整は、縦方向と横方向の両者がある。なお、第 51 図 2 の凸面端部の未調整部分には糸切り痕がみえる。図示していないが凹面側に糸切り痕の残る破片もある。側面と端面はケズリで、凹面側の側縁はナデ調整で丸みをもたせており、端面は狭端の凹面側のみ面取りされている。なお、第 50 図 1 は凸面もナデ調整されるもので、これは軒平瓦の平瓦部になる可能性がある。



第 50 図　溝 S9 出土平瓦実測図 1



第 51 図　溝 S9 出土平瓦実測図 2

薄手の平瓦も成形・調整などは厚手の瓦と基本的には同様であるが、第 54 図 2 の凹面には微かに布目痕のみえる部分がある。

厚手の瓦の胎土にはかなり粗い砂を含むが、薄手の瓦の胎土には砂の混入が少ない。焼成は丸瓦と同様に、軟質から硬質のものまでがあり、本来の色調も黒色や灰色であるが、火を受けて橙色を呈するものが多い。部分的に少量の焼け固まった葺き土が残っているものもあり、火災にあったことを示している。

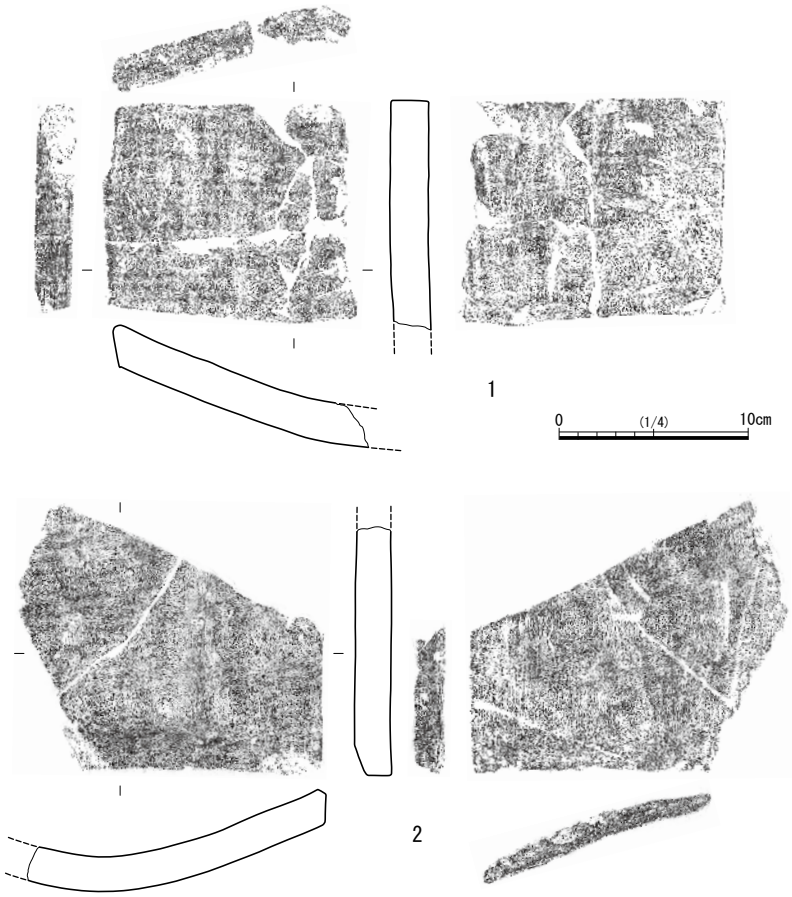
磚は 8 点で、全体のわかる例はないが、いずれも床材の方形の敷瓦（敷磚）とみられる。胎土は平瓦と同様に粗い砂を含み、焼成も軟質から硬質のものがある。多くが厚さ 3㎝ほどのもの（第 53 図 2・3）であるが、厚さ 4.5㎝のもの（第 53 図 1・4）もある。1 はやや軟質の焼成で片方の面の全面がかなり摩滅している。床面になっていたようである。また第 53 図 4 は硬質の焼成で、成形の際に箱状の型枠の中に、一掴みほどの粘土塊を型枠の隅から順次詰め込んでいる状況が明瞭にわかる例である。

溝 S14 出土瓦類

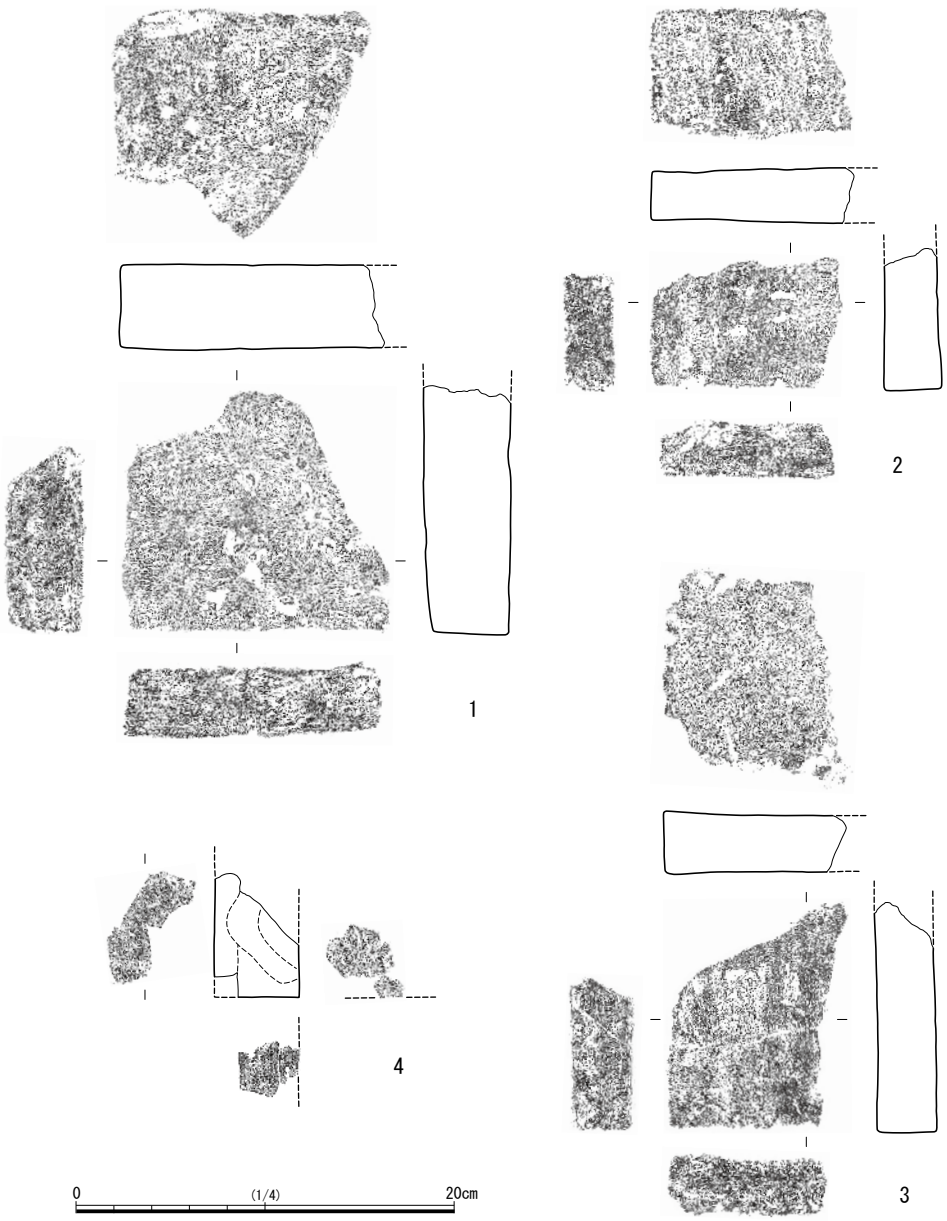
瓦類は 30 片程度の出土で、若干の平安時代のもの（第 59 図）を含むが、他は鎌倉～室町時代と思われる。軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。

軒平瓦（第 54 図 1）は瓦当部を失う平瓦部の破片である。凸面に、瓦座に掛ける突起の接合のため、横方向に強く指でナデつけた跡がある。瓦当部は平瓦端を斜めにして瓦当部分の粘土を付加して成形するもので、平瓦端の破面に接合強化のために指でつけた凹凸が認められる。胎土に砂を含むが多くはなく、火を受けたように淡赤褐色を呈している。この瓦の胎土・焼成・色調などは、溝 S9 出土の波文軒平瓦（第 48 図）とかなりよく似ていた。平瓦部の厚さも同様で、同一個体かとも思われたが、接合はしなかった。

丸瓦（第 54 図 2）は端部近くの破片であるが、有段式の丸瓦と思われる。厚さ 2.5㎝のやや厚



第 52 図　溝 S9 出土平瓦実測図 3

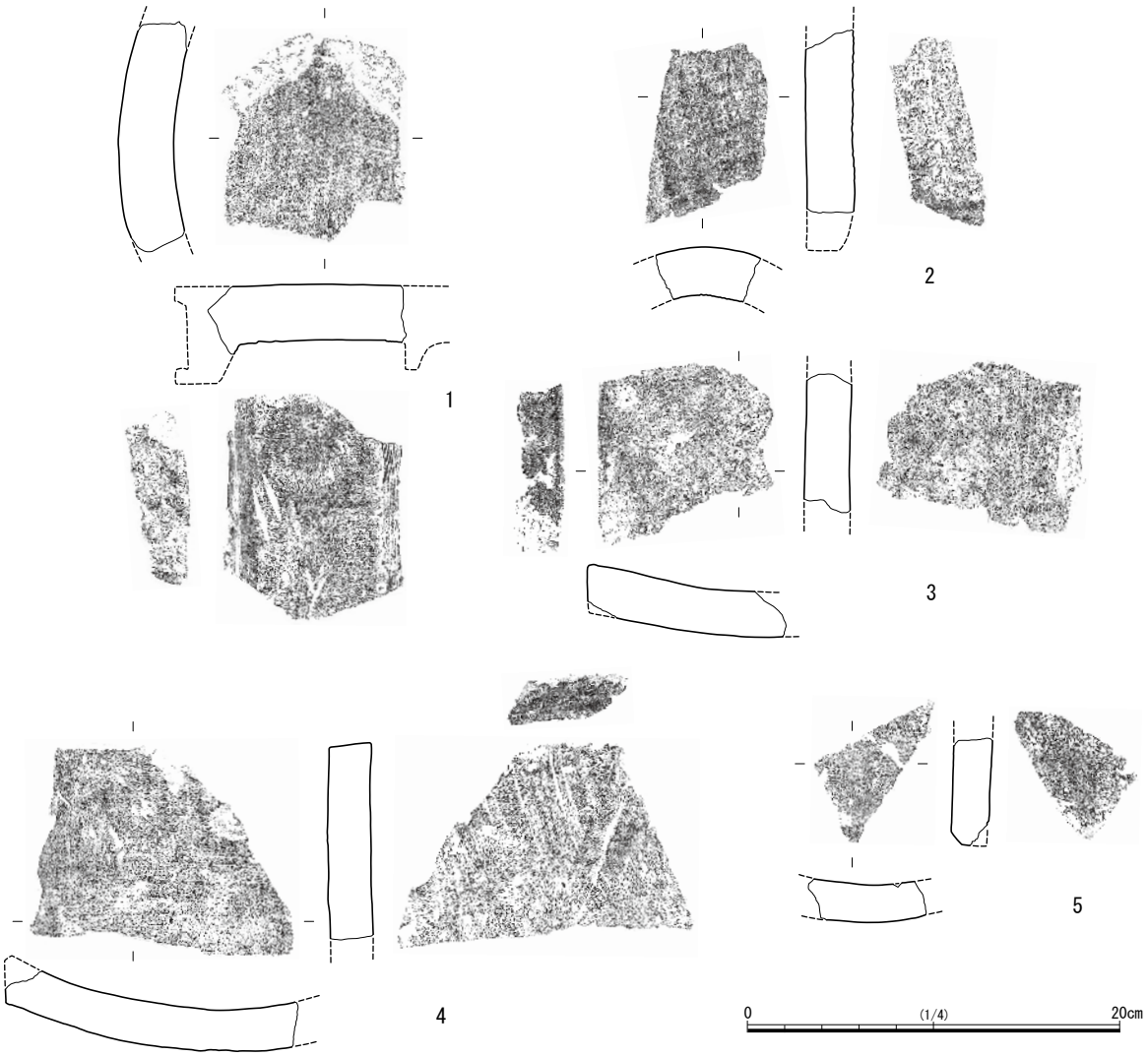


第 53 図　溝 S9 出土磚実測図

手の瓦で、胎土に砂を多く含み灰色を呈している。平瓦（第 54 図 3・4）も厚さ 2.5㎝前後のやや厚手の瓦で、3 は凹面に、4 は凸面に糸切り痕が認められる。離れ砂は使われているが少量である。胎土は縞模様が顕著で、粗い砂を含んでいる。どちらも全体に灰色を呈する。第 54 図 5 は、凹面に僅かに細かい布目が見える平瓦である。凸面に離れ砂を用いているようであるが多くはない。胎土には粗い砂を含み、薄い青灰色を呈している。

井戸 S41 出土瓦類

瓦類は小片が 15 点程度の出土で、いずれも室町時代の瓦類と思われる。丸瓦、平瓦、敷瓦がある。丸瓦（第 55 図 1・2）は有段式で、1 は玉縁部、2 は端部片で凹面端を 3.5 ～ 4㎝ほどの幅広に面取りしている。2 の凸面には微かに縄目叩き痕が見え、凹面には布目と糸切り痕が認められる。1 はやや軟質、2 は硬質の焼成である。どちらも胎土に粗い砂を含み灰色を呈している。1 は表



第 54 図　溝 S14 出土瓦類実測図

面の一部が黒色を呈する。敷瓦（第 55 図 3）は厚さ約 4㎝で、一方の面に離れ砂らしい砂粒が目立つ。胎土に粗い砂を含んでおり、火災のためか淡褐色を呈している。なお、平瓦はいずれも細片で図示できなかったが、厚さが 1.5 ～ 2㎝のものであった。

井戸 S509 出土瓦類

瓦類の出土は少なく、10 片程度の出土で、丸瓦、平瓦、雁振瓦および敷瓦がある。1 点だけは平安時代の瓦（第 59 図 10）で、他はいずれも室町時代の瓦類と思われる。

第 56 図 1 は、凹面の側縁を幅広く面取りす有段式丸瓦で、段部分から先の玉縁部分は失われている。厚さ 3㎝ほどの厚手のもので、布目には吊り紐の跡も見える。胎土に粗い砂を含み硬質の焼成で全体に灰色を呈している。

平瓦（第 56 図 2・3）は厚さ 2㎝ほどのものと、2.5㎝ほどのやや厚手のものがある。2 は火を受けたように淡褐色を呈している。

雁振瓦（第 56 図 4）は凹面に細かい布目痕がある。端部の欠損部分の凹凸両面がやや厚くなっており、玉縁部を作り出していたように見える。硬質の焼成で表面が暗灰色、内部は灰色を呈し

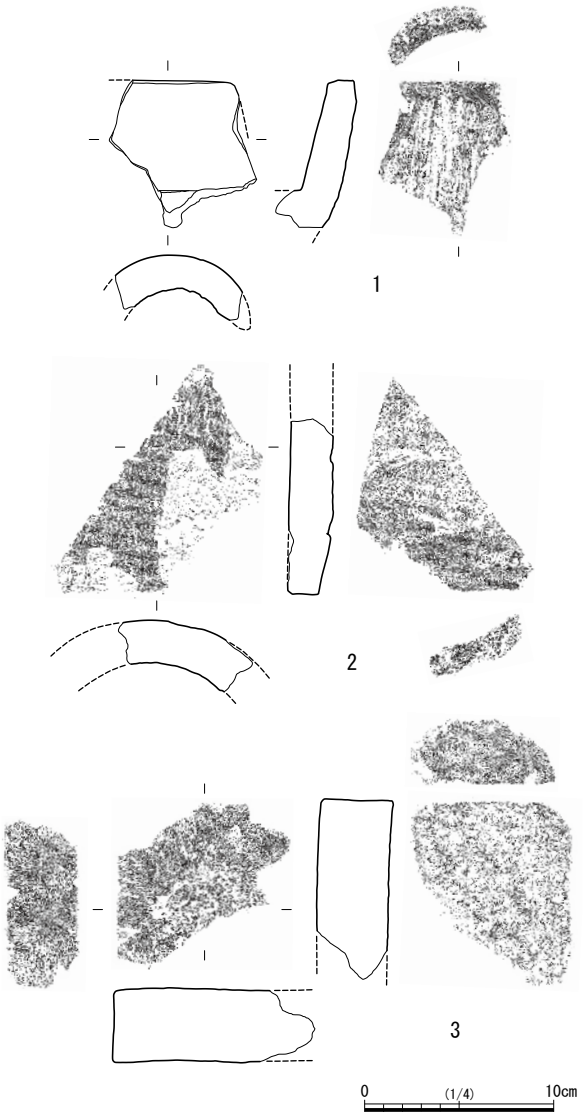
ている。敷瓦（第 56 図 5･6）は厚さ 3 ～ 3.5 ㎝である。胎土に砂を含み、成形の際に箱状の型枠に粘土塊を詰めている状況が見える。なお、6 は側面と割れ口のなす角度が 45 度になっており、四半敷の床のために三角形に打ち割り加工されたものかも知れない。

瓦溜 S11 出土瓦類

軒丸瓦、丸瓦、平瓦があり、整理箱（コンテナバット）にして 3 箱分の量であった。いずれも室町時代の瓦類と思われ、半数ほどは二次的な火を受けたらしく軟質で淡灰褐色を呈している。

軒丸瓦は部分的な破片であるが、文様はすべて連珠文を巡らす三つ巴文とみられる（第 57 図 1 ～ 6）。いずれも瓦当面に離れ砂が認められる。なお、6 は火を受けず硬質の焼成で灰色を呈している。

丸瓦（第 57 図 7 ～ 9）はいずれも玉縁部分をつくる有段式とみられ、「行基葺」の丸瓦は含まれていない。凸面はかなり丁寧にナデ調整され、凹面側の側縁・端縁は幅広く面取りしている。



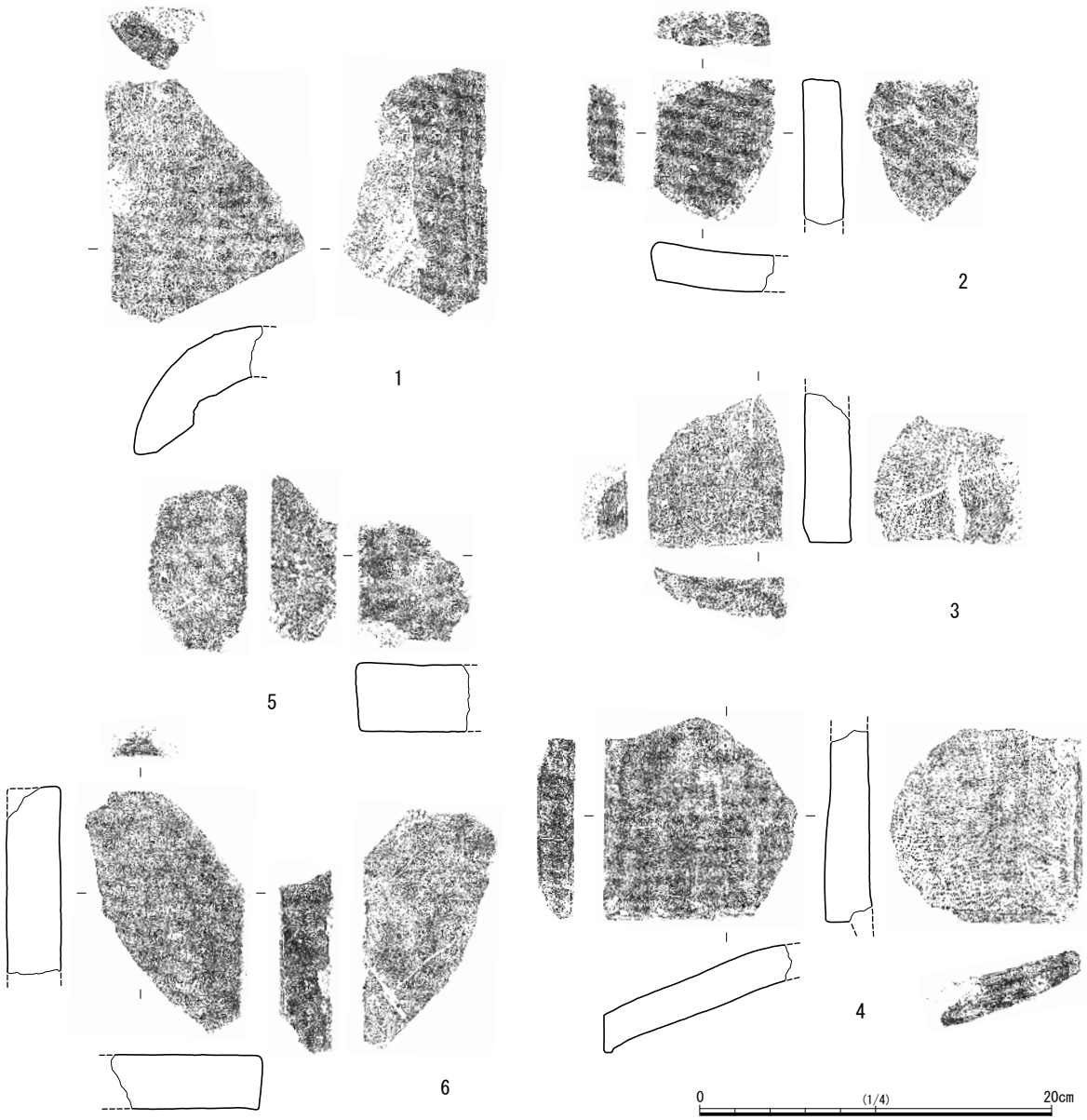
第 55 図　井戸 S41 出土瓦類実測図

平瓦（第 58 図）は、厚さが 1.5 ～ 2㎝程度で比較的薄手であった。大半の平瓦は凹面を丁寧にナデ調整し布目は認められないもので、胎土に砂を含むが多くはない。また粘土の縞模様が顕著である。ただし、第 61 図 3 はわずかに布目痕が見える平瓦で、この瓦の胎土には砂粒を多く含んでいる。

室町時代以前の瓦類

今回の調査で出土した瓦類の年代は主として室町時代と考えられるものであるが、室町時代以前の瓦類も量的に少ないながら出土している。いずれも小片で、平安時代から南北朝期頃のものが含まれるが、ほとんどは平安時代に属するとみられる。大半は後代の遺構や包含層から出土しており、特に第 1 調査区の南寄りと西寄り辺りからの出土が目立つ。

第 59 図 1 ～ 5 は丸瓦である。1・2 は軟質焼成で摩滅しているが、凸面に縦方向の縄目叩き痕が認められる。3 はやや硬質の焼成で、凸面に縦方向の粗い縄目叩きが施され、凹面の細かい布目痕には繕いの痕も認められるものである。4・5 は玉縁部分の破片で、4 は凹面に布の絞り皺痕が見えるが、5 の凹面の布目痕は細かいものであまり乱れがない。また、5 は硬質の焼成で

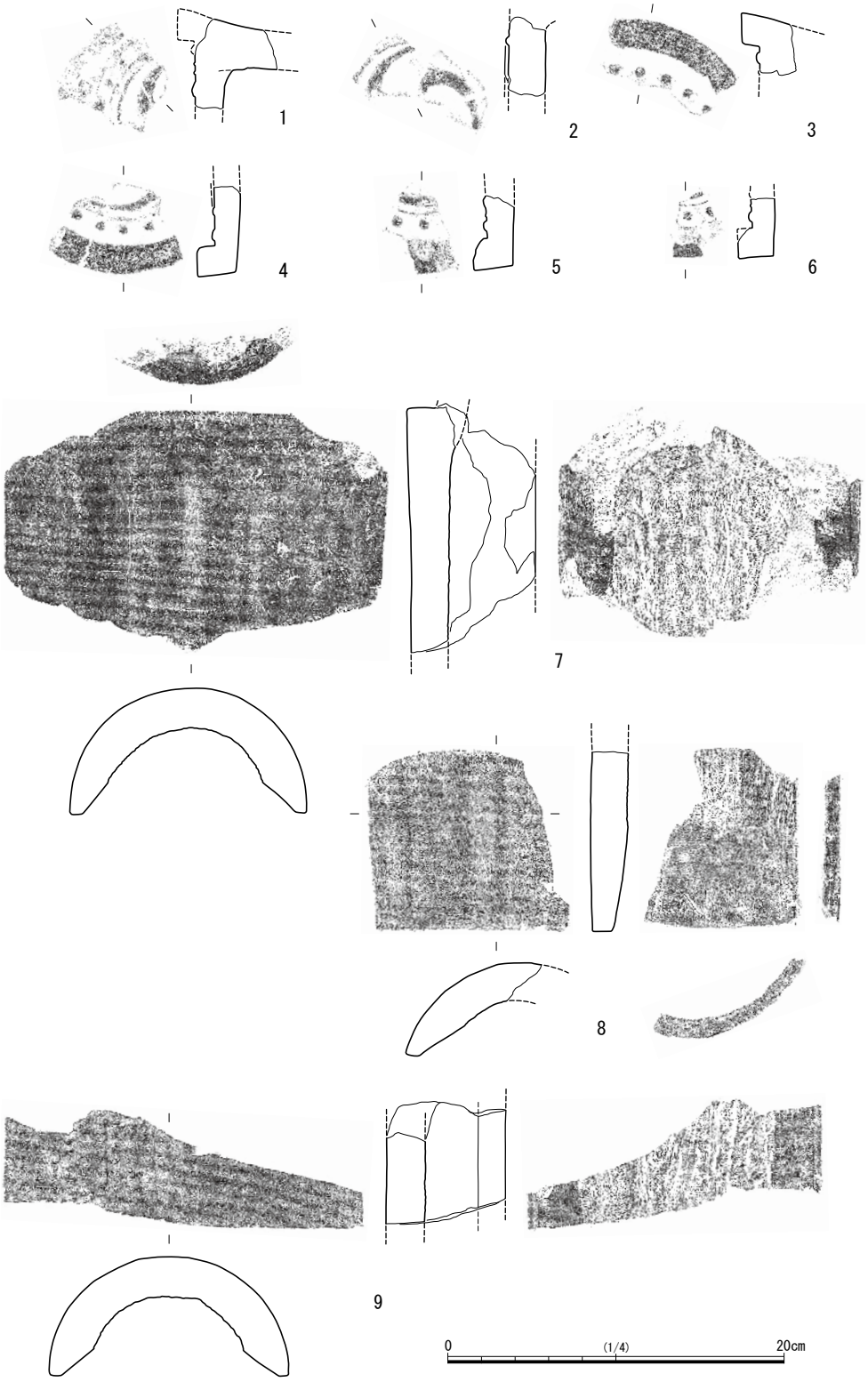


第 56 図　井戸 509 出土遺物実測図

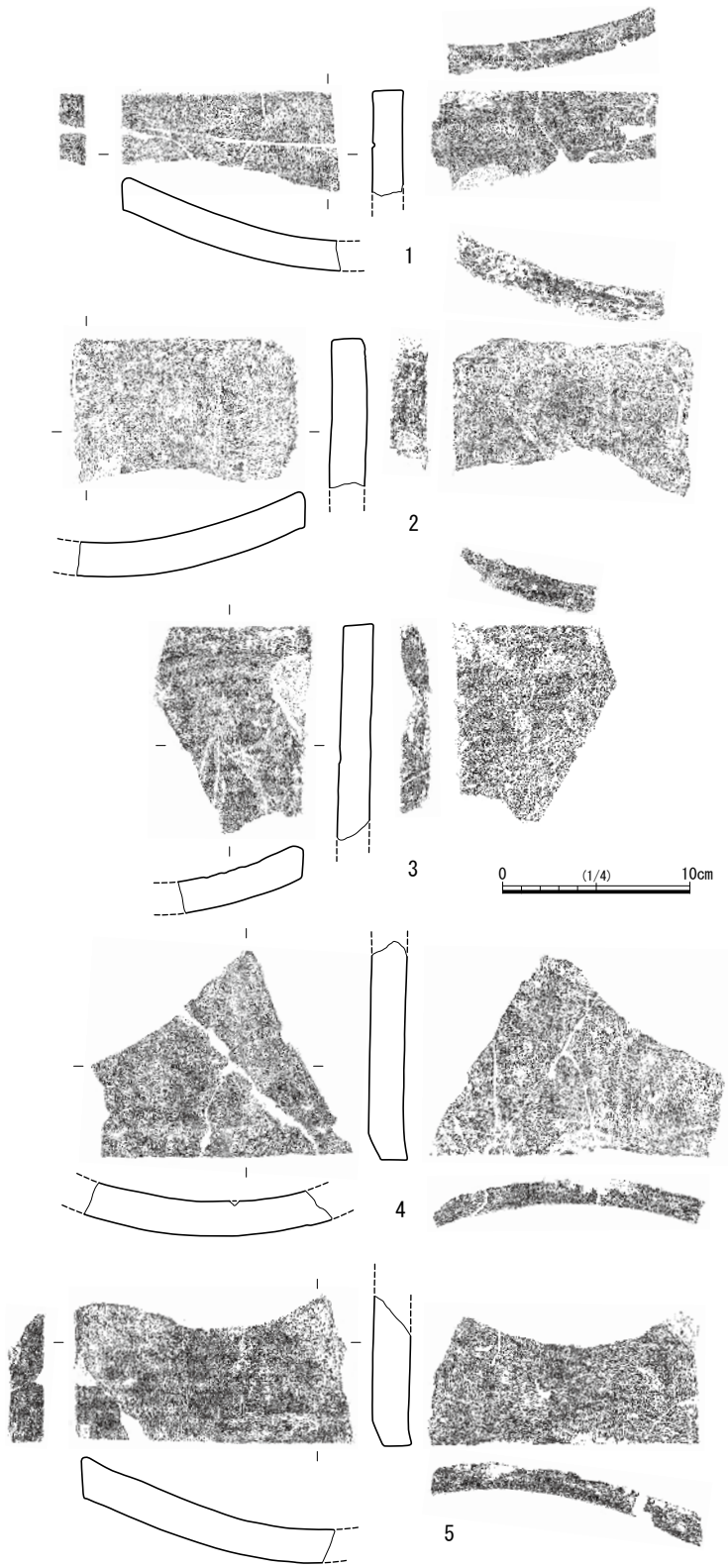
灰褐色を呈している。

第 59 図 6 ～ 13 は平瓦である。6 ～ 9 は、いずれも凸面に縦方向の縄目叩きを施していて、凹面の布目は比較的細かいものである。これらは平安時代前期段階のものかと思われる。10 は、凸面の縄目叩き痕が斜行しており、凹面には糸切り痕とやや粗い布目痕が見えるものである。凸面には離れ砂も顕著である。11 も凸面に離れ砂が顕著で、凹凸両面に糸切り痕が見える。12 の凹面には不明瞭ながら、細かい布目痕がある。また、凸面の離れ砂はかなり粗い砂粒が撒かれている。13 は凸面に叩き痕が認められず、指押さえで成形されているようで、これは軒平瓦の平瓦部になる可能性がある。

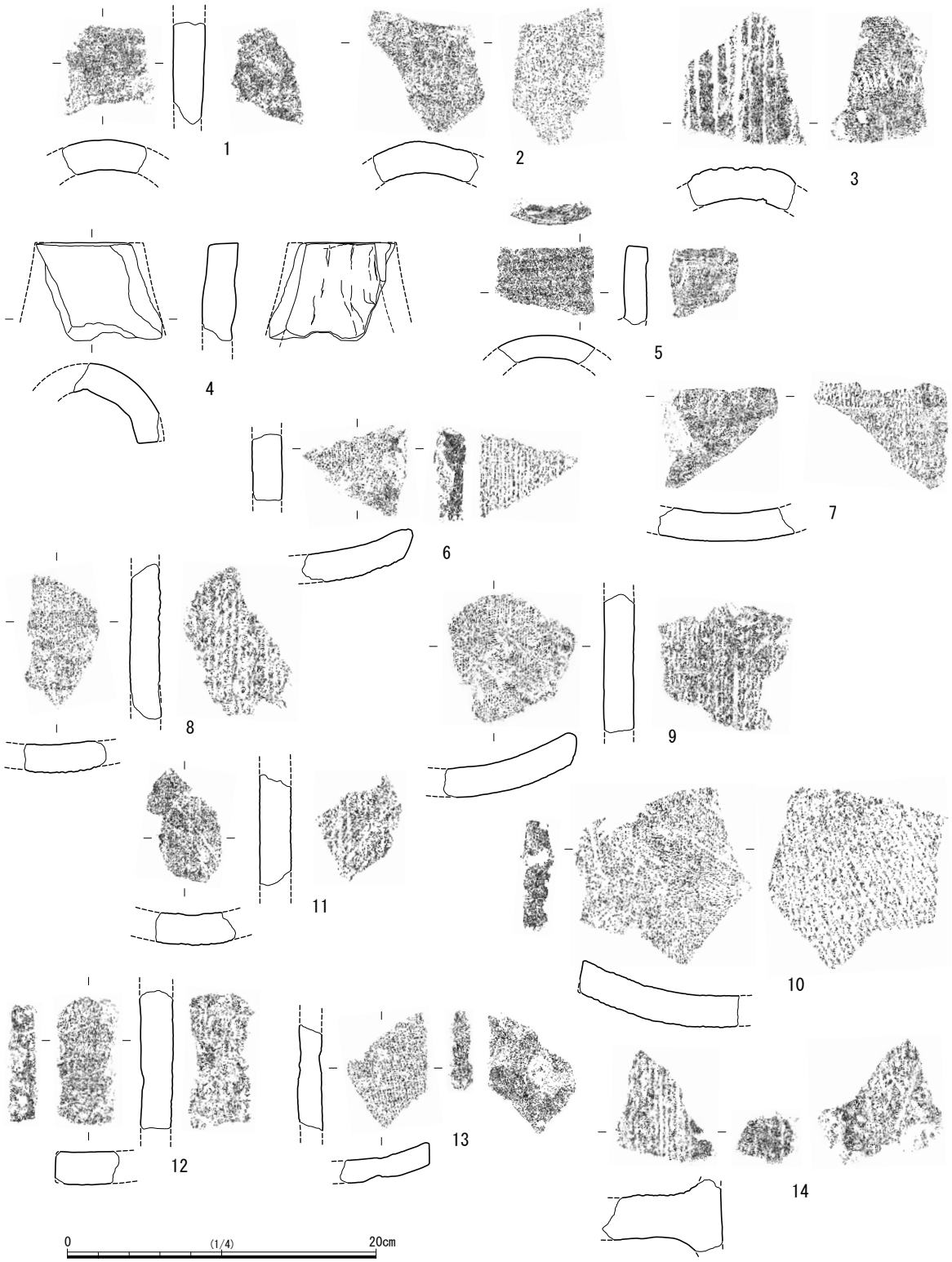
第 59 図 14 は、全面を縄目叩きで成形されている磚で、類例では中央部両面が窪み 2 箇所に孔のある用途不明の長方形の磚である。片面に指による記号の一部になる斜線が見える。



第 57 図　瓦溜 S11 出土瓦類実測図 1



第 58 図　瓦溜 S11 出土瓦類実測図 2



1・6・9・12　溝 S14
2・7　溝状遺構 S380
3　第 1 調査区南西隅部
4・5・11・14　溝 S9
8・13　井戸 S41
10　井戸 S509

第 59 図　平安・鎌倉時代の瓦類実測図

3. その他の出土遺物

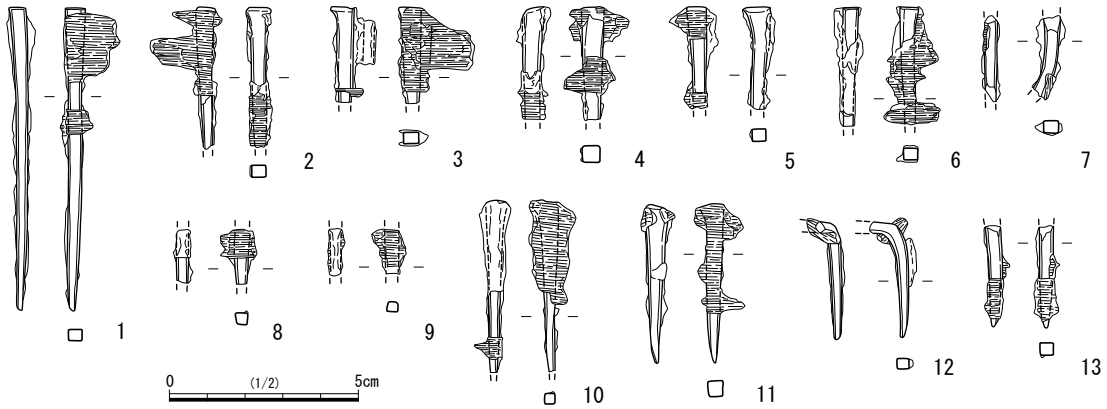
土坑 S307 出土鉄製品

いずれも鉄釘で 13 点出土した（第 60 図）。断面形は方形で、長さは約 8㎝のもの（1）と 4 ～ 5㎝のもの（10・11）がある。頭部はやや太く作られている。木質が銹着しており、木目が直交するものも多く、厚さ 2㎝程度の板材を組み合わせて釘打ちで箱状にしていたとみられるが、本来の使用状態はよくわからない。

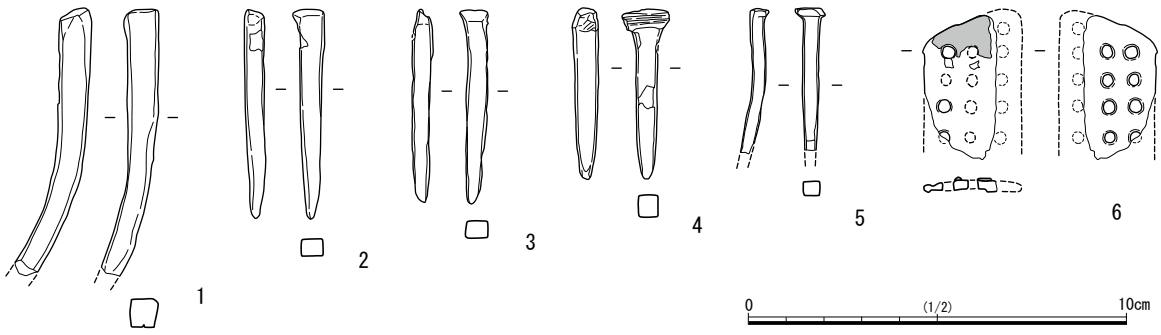
井戸 S41 出土鉄製品

第 61 図 1 ～ 5 は鉄釘である。いずれも断面形は方形で、1 は長さ 8㎝以上、2 ～ 5 は 4.5 から 5.5 ㎝であった。頭部はやや太く作り、端部を潰しているもの（4・5）もある。

第 61 図 6 は黒漆の塗膜が残る鉄片で、平行する 2 列の孔が開いている。割れ口の様子は、孔がもう 1 列あるようである。孔の列や頂部が片山形になるような形状から、「大鎧」の三つ目の鉄札と考えられる。想定される札の大きさは、平安時代の大鎧の小札に近いように思われる〔註 5〕。



第 60 図　土坑 S307 出土鉄製品実測図



第 61 図　井戸 S41 出土鉄製品実測図

井戸 S509 出土木製品

木製品は井戸の下層埋土中から出土しており、曲物と刃物の柄らしいものがある。第 65 図 1 は曲物の側材で、2 は下方の箍である。部分的に腐朽しており上下などに分かれていたが、下方は箍が嵌った状態で出土し全体が復元できる。3 は曲物の底板で、1 の径と一致するところから同一の曲物部材と思われる。底板の固定は嵌め込んだだけらしく、木釘跡などは認められない。4 は、1 ～ 3 を合成した復元図である。1 の内側には、重ね合わせる部分だけやや雑に縦方向の浅い刻みを入れているが、2 には刻みを入れていない。3 の底板の両面に、木目に対して斜めの同様の条線が見える。これは板材の表面仕上げで、刃こぼれのある台鉋で削ったためについたものであろう。また、一方の面に円周に沿って罫書き線が見え、木目に直交して中心から周縁までをつなぐような罫書き線もある。板材を丸く切り抜く際の目安と思われる。

5 も曲物側材の破片である。重ね合わせ部分だけであるため、径は分からない。上記曲物の箍かも知れないが、幅が 4㎝ほどで、内側の刻みが斜めに引かれるなどの違いがあり、別個体のように思われる。

6 は刀子などの刃物の柄の破片であろう。割れ口にわずかに鉄錆がついており、茎が差し込まれていたとみられる。

石製品・石材

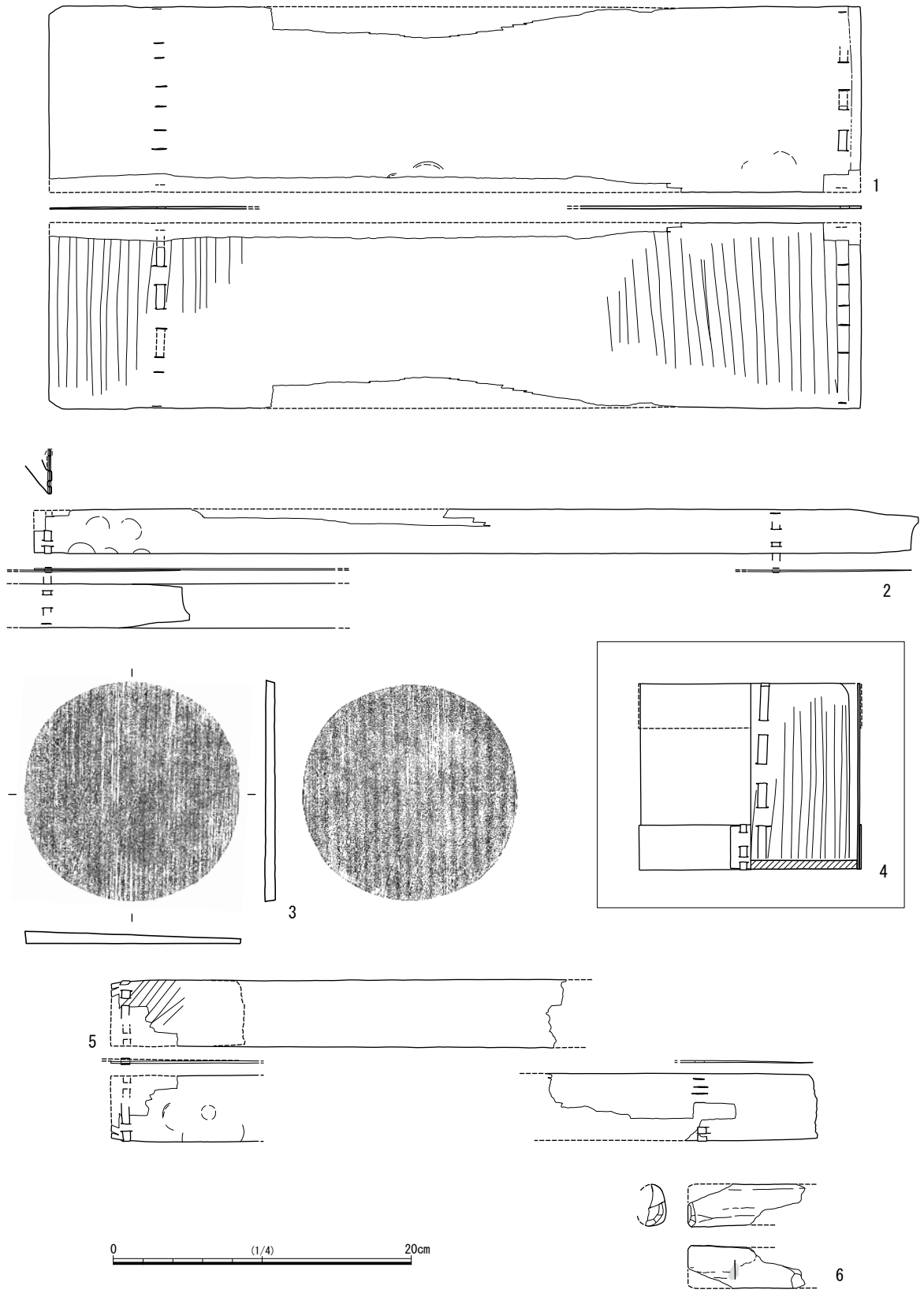
今回の調査で出土した石製品は硯と砥石があり、また、おそらくは硯の製造過程で出た端材かと思われる多数の粘板岩石材片がある。石材片は、特に第 1 調査区の井戸 S41 と第 2 調査区の井戸 S509 からの出土が目立った。

第 63 図 1 は比較的大型の硯の陸部である。使用されていた品で、磨った面はかなり滑らかになっている。平面形は陸部から海部に向かって少し幅が狭くなるようで、硯裏の両側に縁と同様の幅で足が作り出されており、陸部も傾斜することから風字硯になると思われる。淡赤褐色を呈する石材である。

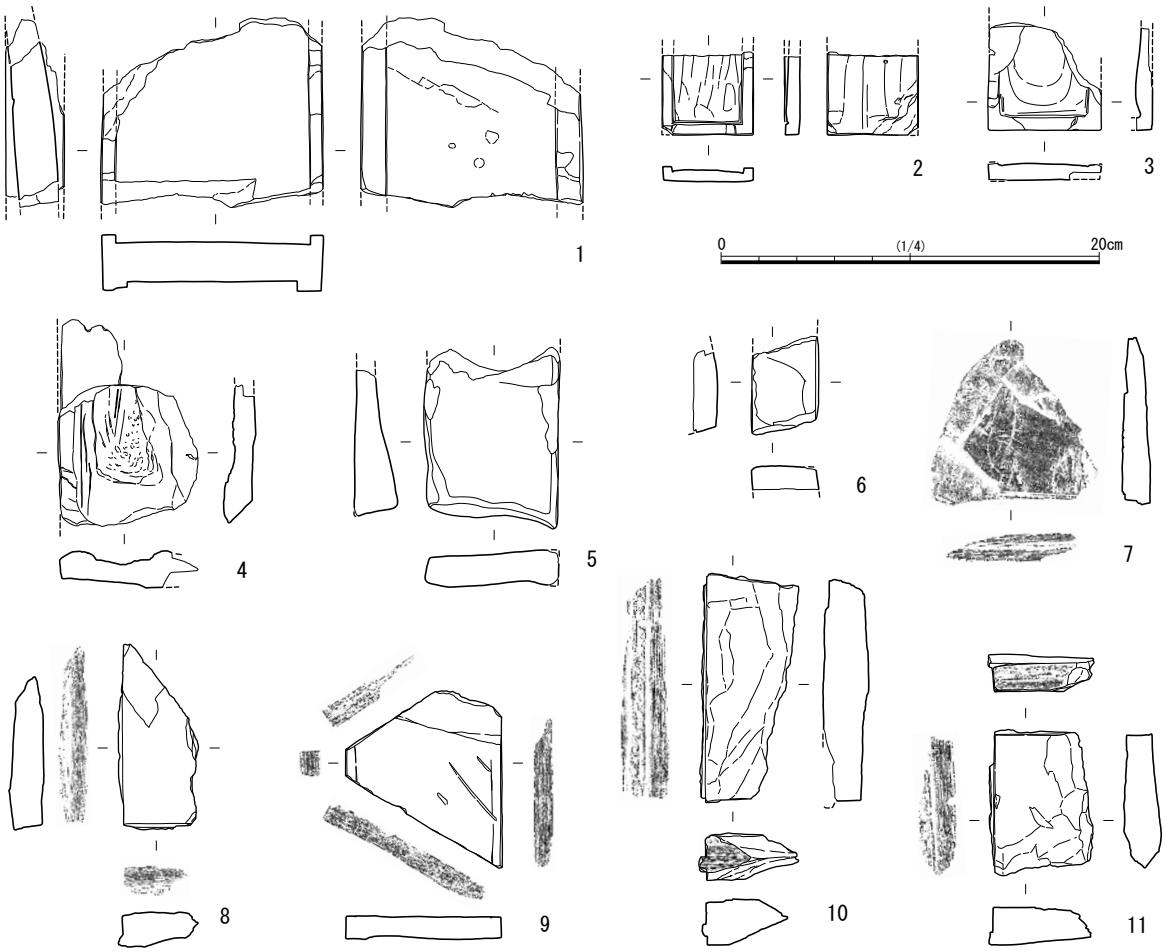
2・3 は灰黒色の粘板岩の小型の硯の未完成品である。2 は全面に鑿削りの痕が明瞭である。4 も硯の未完成品で、荒削りの段階までで放棄されたようである。

第 63 図 5・6 は砥石である。5 は砂岩質で、研ぎ面と思われる面があまり平坦ではなく、厚みが薄くなっていく部分的にかけて滑らかになっているようである。6 は灰白色の粘板岩で、両側面に鋸による切断痕が認められる。

第 63 図 7 ～ 11 は灰黒色の粘板岩の石材片である。いずれも、元の石材から製品になる部分を取った後の端材で、切断の跡を残している。切断は、石材の片側あるいは両側から厚さの 2 分の 1 から 3 分の 1 ほど工具（鋸）で切れ目を入れ、割っているものが多い。石材の厚さは 1 ～ 3㎝で、採掘した原石ではなく転石を採取してきたものと思われる。割り面の長さが 10㎝以上のものはあまりなく、主に比較的小型の硯を生産していたらしい。なお、7 は片面に記号のような針書きがある。



第 62 図　井戸 S509 出土木製品実測図



1・2　溝 S14　　3・5・6・8　井戸 S509　　4・7・9・10・11　井戸 S41

第 63 図　石製品・石材実測図

註

1. 同様の瓦灯かとみられる資料が、奈良県橿原市の石川土城遺跡から出土している。元興寺文化財研究所編『石川土城遺跡　平成 28 年度発掘調査報告書』（元興寺文化財研究所、2018 年 3 月 31 日）図 55-131。
2. この瓦器火鉢の表面は、風雨に曝されたようにかなり荒れている。中世の絵巻物に描かれる庭先の場面で、しばしば書院の縁先などに火鉢を転用したらしい植木鉢がみえるが、この火鉢も屋外で植木鉢に転用されていたように思われる。
3. 同様の端部に刳形を表す火鉢は京内からも出土する。この形態は、これも中世の絵巻物に描かれる縁先の前裁の木箱の形を焼物に写したものであろう。
4. 行器の形態を写した火鉢も京内から出土している。定森秀夫編『平安京左京六条三坊七町』（『京都文化博物館調査研究報告』第 11 集、京都文化博物館、1995 年 9 月 30 日）第 42 図 11。
5. 寺島孝一・片岡肇編『法住寺殿跡』（『平安京跡研究調査報告』第 13 輯、古代学協会、1984 年 3 月 1 日）

第５章　調査の成果

1. 遺構について

嵯峨は古代・中世の古絵図が多く残る地域で、さらに現代も古代・中世以来の位置を踏襲している道路も多い。今回の嵯峨遺跡の調査では、検出した主な遺構の年代は室町時代に属すると考えられる。そこで調査地周辺の現状と室町時代の状況を、絵図などを参考に確認しておきたい。

調査地北の丸太町通から北に蛇行して延びる細い道路（第 64 図 A）はいくつかの古絵図にも見える道で、現在の町名の、「嵯峨釈迦堂門前瀬戸川町」と「嵯峨大覚寺門前八軒町」の境になっている。また、調査地の西に南北に通る道路は、中世嵯峨の主要道路のひとつである「薄（芒）馬場」を踏襲した道と見なされる（第 64 図 B)。これらをもとに、中世嵯峨の最盛期を描いているとされる『応永鈞命絵図』で調査地付近を現在の地図に合わせ、絵図の注記を当てはめてみると、調査地は「在家」と註記された地点にあたる。また、調査地の周辺には多くの天龍寺の子院があり、第 64 図には、これを表示してみた。調査地の南は「永安院」となる。

この絵図全体には多数の「在家」の表示があるが、およそ 100m で 2 箇所程度の間隔になるようで、個々の住家の位置を正確に示すものではないかも知れない。しかし、調査地が当該期には寺家地や武家地でなかったことが確かめられる。なお、第 1 調査区南端で検出した溝 S9 の西の延長線上に南の隣地との境界があり、これに水路が伴っている。おそらく、この隣地境と溝 S9 を結ぶ線が「永安院」境内の北辺になると思われる。

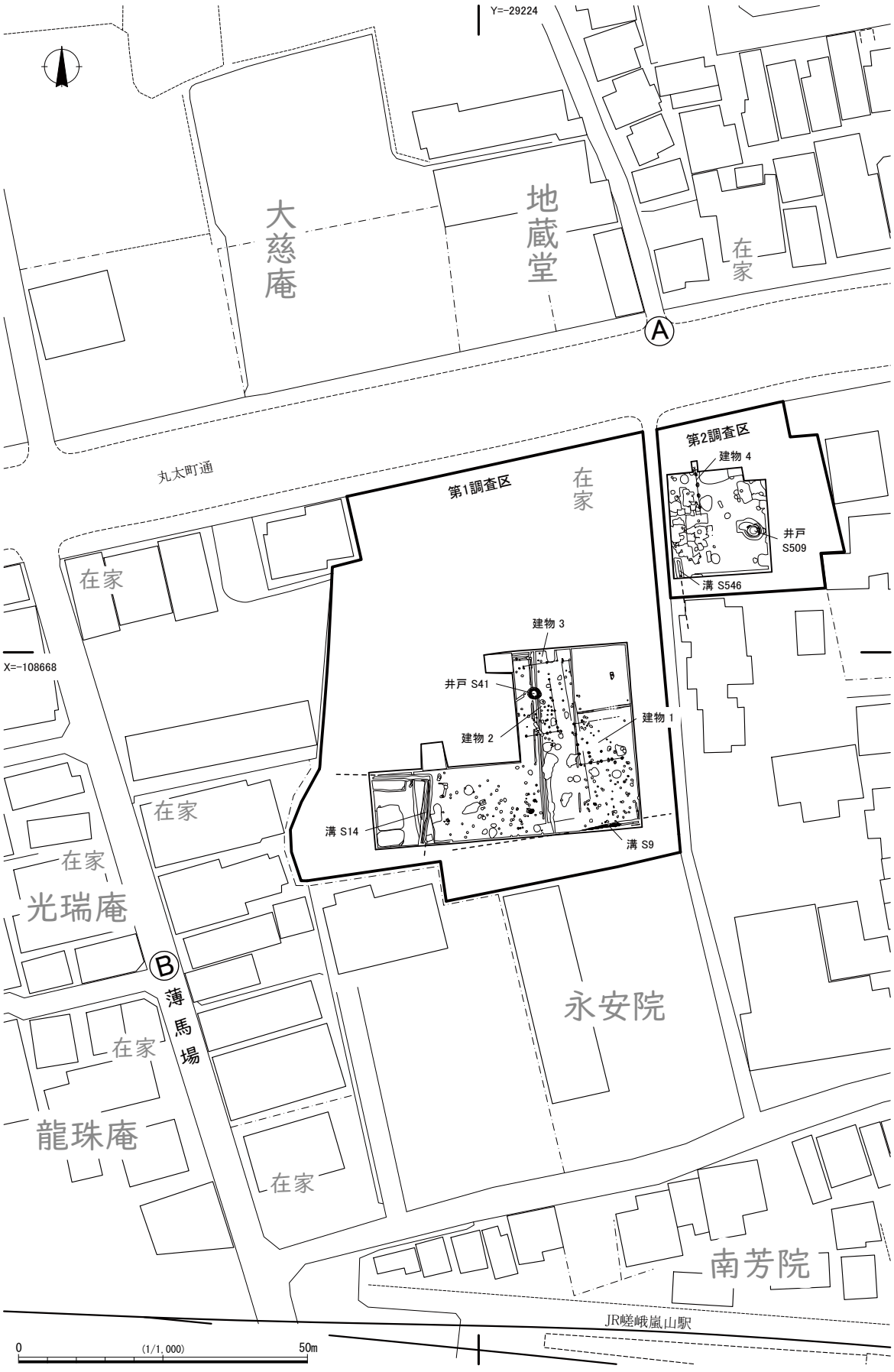
道路や耕地の畦畔などから復元される古代の嵯峨の条里は、南北軸が西に 15 度程度振れる方位をとるとされており、中世段階からは、正方位に合わせる道や建物がつくられてくると考えられている。江戸時代以降に再建された天龍寺や大覚寺の主な建物などは、ほぼ正方位になっているが、嵯峨地域では現在でも古代条里に基づく道路・地割が目立っている。

今回の調査では溝や柱穴列などの各種遺構が検出されたが、その遺構の軸線の方位は「嵯峨条里」の傾きと同様に、北が西に振れているものが多い。現代の耕作溝や第 2 調査区の江戸時代の土採取坑などは正方位に近いが、平安時代～室町時代の遺構のほとんどは北が西に振れている。

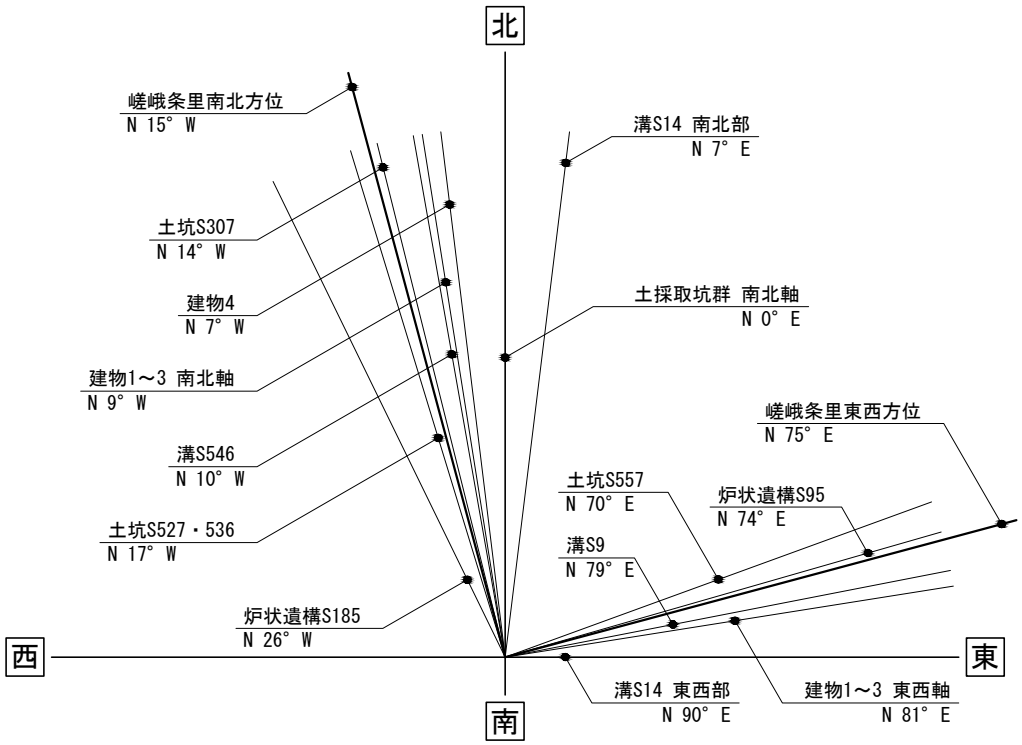
第 65 図は今回の調査で検出した主な遺構の方位をまとめたものである。出土した遺物から考えられる遺構の年代と方位の関係は次のようになる。

9 世紀後半代と考えられる S307 は墓の可能性が高い土坑で、この南北軸は N 14° W と、もとの嵯峨条里の方位に近い。9 世紀ころの平安時代前期段階では、土地区画とともに土坑なども基本的に嵯峨条里の方位が守られているようである。

建物 1 ～ 3 の柱穴列の南北方位は N 9° W で、条里方位と正方位の中間的な傾きになる。第 2 調査区の建物 4 の柱穴列方位は N 7° W、溝 S546 の南北軸も N 10° W と、比較的近い角度となる。第 1 調査区の建物 1 ～ 3 の東西方位は南北軸と直交する N 81° E であり、調査区南端の溝 S9 の



第 64 図　調査地と周囲の地割



第 65 図　検出遺構の方位

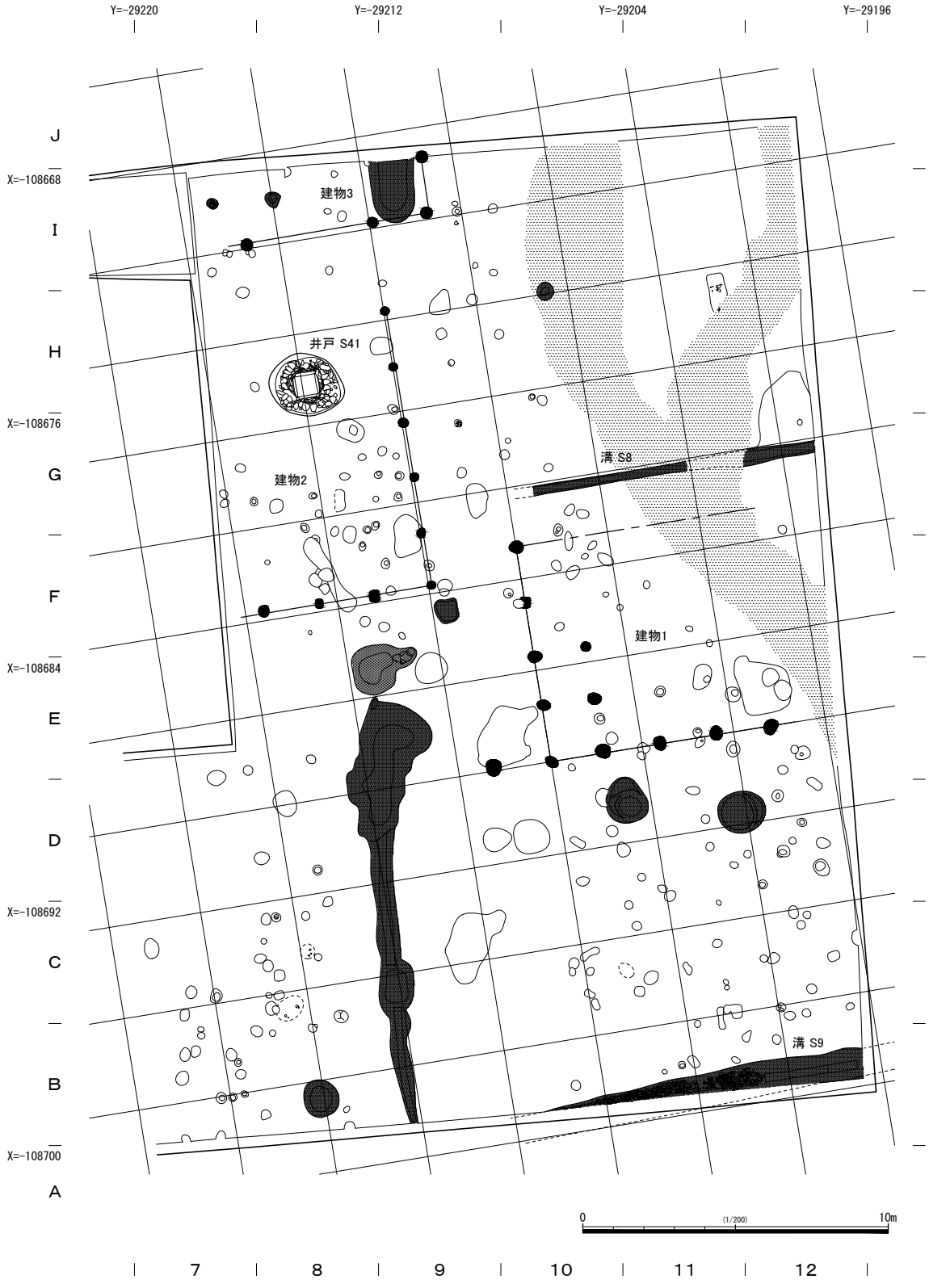
方位はＮ 79° Ｅとなる。建物 1 ～ 4 の年代は、柱穴からの遺物はほとんどなく、遺物からは構築年代を特定できない。しかし関連するかとみられる井戸 S41 や溝 S9・S546 がおよそ 16 世紀初め頃と考えられることから、建物 1 ～ 4 も 15 ～ 16 世紀代の室町時代後期の遺構になると思われる。この時期の周辺の地割や建物方位が正方位に近づいてきていることを反映しているのであろう。ただし、周辺の現在の道路や宅地の方向は嵯峨条里方位に近いものも多く、画一的に土地区画が整理されたのではないと思われる。室町時代の遺構で例外的な方位をとるのが、第 1 調査区西寄りで鍵の手に曲がる溝 S14 である。溝の年代は室町時代後期の 16 世紀初めと考えられるが、南北方向部分の方位はＮ 7° Ｅで、東西方向部分はほぼ正方位である。この南北の方位は、今回の調査の検出遺構では他に見当たらなかったが、調査地と西の隣地との境界がこの方位に近かった。あるいは､この西隣地境は室町時代の一部の地割りを踏襲している可能性も考えられる。

なお、第 2 調査区の室町時代後期の遺構で、墓の可能性もある土坑 S527・S536 は嵯峨条里方位より西に傾いている。この土坑の西で検出した土坑 S557 も東西軸が嵯峨条里方位より傾いている。また、第 1 調査区の炉状遺構 S95・S185 も嵯峨条里方位より傾いているが、この遺構の年代は特定できなかった。

遺構の方位と年代の関係は、基本的には嵯峨条里の方位（N 15° W）から、年代が降ると正方位へと変化していることが確かめられたが、必ずしも一律ではないことも認められた。ただ、近接した遺構で同様の方位をとる場合は、年代的にひとつのグループになる可能性も考えられる。

第 1 調査区で検出した柱筋の確認できる柱穴列群（建物 1 ～ 3）は、かなり計画的な割付けが認められ、同時に建てられたものと考えられる。第 66 図は、建物 1 の西と南の柱筋を仮に基準

として、ほぼ 10 尺にあたる 3m の方眼を重ねてみたものである。建物 1 ～ 3 の柱穴列がこの方眼の傾きに合い、柱筋の間隔もおよそこの方眼にのってくることから、建物の配置が 10 尺を基準にしているらしいことがわかる。



第 66 図　第 1 調査区 建物遺構の配置

第 2 調査区の柱穴列（建物 4）は、建物 1 ～ 3 と同様の柱穴列であるが、軸線方位が微妙に異なるため、同時期ではあっても別の区画になろう。なお、第 1 調査区東半部では柱穴とみられる多数の小土坑があったが（図版 11-3 ～ 8)、建物 1 ～ 3 とした遺構以外は纏まりを見出すことが困難であった。

2. 遺物について

(1)　土器・陶磁器類

年代別の出土土器・陶磁器の概括

古代前半期となる奈良時代以前の遺物は、可能性を指摘出来る程度にとどまる混入の小片以外には、出土がみられなかった。当地を含む嵯峨、太秦や桂川西岸の乙訓北部から桂などの京都盆地北西部地域の乾高地は、古墳時代後期頃には渡来系氏族とされている秦氏により、高度な水利技術を持って、開発が進んでいたことが知られている。先にも記しているようにこの地域全体では、古墳時代から古代前半期にかかる古墳群や、竪穴住居址群と複数以上の掘立柱建物からなる集落遺跡などが、数多く報告されている。今回の調査においてこの時代の土器類などがあまりみられなかった理由に関しては、この時代の早い段階から当地を含むこの地域は、耕作地的土地利用が主であり、生活用具などを廃棄処分する場とはなっていなかったことによるものと推測しておく。

古代の後半期となる 8 世紀末頃から 12 世紀後半の平安時代後半期に比定できる遺物は、9 世紀後半から 10 世紀初頭の同前期後半頃に比定できる土坑 S302・S364 から、遺構と直接的に関連した型式的なまとまりをもつ土師器坏、皿、甕、須恵器壺などが、少量ながら出土している。他にも､平安時代前期から同中期前半(8 世紀末～ 10 世紀代)に位置付けられる土師器食器類(坏･皿・埦・高坏など)、須恵器食器類（坏・蓋など)、壺・甕片、灰釉陶器埦、瓦片などが出土している。平安時代後半期となる 11 世紀から 12 世紀中葉頃に比定出来る遺物は、土師器食器類、須恵器甕・鉢、瓦器片などがみられるが、小片のものが多く出土量も少ない。

これら平安時代の出土遺物の大半は、新しい時代の整地層や遺構などへの混入品としての出土である。当地の西方あるいは北方の比較的近い地域には、大覚寺を始めとした天皇家や藤原家の別業や寺院などが、数多く建立されており、その周辺には文献的にはあまり知られていないが、子院などの関係施設も少なくないようだ。平安時代の遺構と出土遺物の様相からは、当地に邸宅あるいは寺院などの遺跡を推定することは難しいが、近接地には建立されていたものと見てよいだろう。

中世前半期となる平安時代末期、鎌倉時代、室町時代前半期頃の 12 世紀後半から 15 世紀半過ぎ（応仁期直前頃）の遺物には、土師器（赤色系・白色系の皿など)、瓦器（埦・釜・鍋など)、焼き締め陶器（壺・甕など)、輸入陶磁器（青磁・白磁・天目茶埦片）などの、各種の土器・陶磁器類がみられる他に、軒瓦を含む瓦類が溝 S9 からの出土品を中心にして、一定量まとまった

形で出土している。各時期ともに高級品を少なからず含んではいるが、使用痕もある日常的な生活用具類が量的にも基本となっている。遺構に伴わないものが中心であり、当調査地においてこの時期に宅地的土地利用が始まっていたと見ることはまだ難しいが、近辺地域では宅地的土地利用がかなり進んでいたことを示しているものと考えている。

室町時代後半期となる 15 世紀後半の応仁の大乱（1467 年～ 1477 年）が終焉した頃以降になると、第 1・第 2 調査区ともに整地層への混入品にとどまらず、遺構（溝・井戸など）からのまとまった資料を中心に、土器・陶磁器を主体とした遺物の出土量が大きく増加する。土器・陶磁器の内容は、土師器皿類や瓦器の鍋・釜などの煮炊き具、同じ瓦器の火鉢や風炉、また備前などの擂鉢・甕・壺片などがみられ、京内の出土遺物にほぼ通じる様相をもった生活用具類が基本的となっており、量的にも多数を占めている。これらの基本的な資料に加えて、中国からの輸入品である青磁碗や白磁皿類、鉄釉天目茶垸などの高級品、また、美濃・瀬戸産の灰釉陶器や写しの鉄釉天目茶垸など、輸入品に比べるとやや品質は劣る国産の施釉陶器類ではあるが、畿内以西では京内においてもまだ出土量の多くはない稀少品的価値の高い遺物が、それぞれかなりの数含まれている。これらの遺物も嵯峨の場合は、京内を経由して搬入されたものではなく、遣明船や東海からの海路の船使から淀川、桂川への河川交通の船便へと載せ換えて、直接的に舶載された物品の可能性が高い。

定性的感想ではあるが、国内外の天目茶垸を含むこれらの陶磁器類は、京内の公家層、上級の武士階層の高級邸宅的遺跡や大店商家的遺跡から出土している同様の資料に、十分に比肩出来るものであると考えている。さらに天目茶垸の出土量は、京内の諸遺跡の多くより勝っている印象もある。当時の調査地は天龍寺近辺ながら、今回の調査によって出土した輸入陶磁器類で主体を成す青磁類は、釉調・色調ともに中国の宋・元時代の輸入品に近似した水準のものが多く、質的にはいわゆる「天龍寺青磁」に優っているものが多く見える。このように天龍寺境内遺跡とも言える当調査地出土の輸入青磁を見ていると､なぜこれらよりも釉調･色調の劣るものを後代に「天龍寺青磁」と通称するようになったのか、解決すべき疑問が生じる。今後の課題としておくが、遣明船であった天龍寺船が、国内へ舶載した青磁類などの実体は、後代に「天龍寺青磁」と一価値的に評価されているものよりも品質に幅があり、より上級品もかなり多かった歴史実態を、今回の出土資料がよく示しているものと考えている。

図版上では示しきれなかったが、輸入品と国産品を合わせた鉄釉天目茶垸も、破片規模では、京内の一般遺跡よりも出土率は高い観が強い。先の輸入青磁碗の多さや天目茶垸が目に付くような様相は、1970 年代の天龍寺の西南に存在していた臨川寺や、2000 年代に入った後の現天龍寺境内や近接寺の寺院跡の既往発掘調査での出土様相にも通じるものである。嵯峨の天龍寺を始めとする大禅宗寺院やそれらの数多い塔頭（子院）では、天目茶垸や青磁碗での喫茶は日常的なものとして定着しており、当地の出土遺物にもその影響が表れていると見てよいだろう。

当地では、室町時代後半の初め頃となる応仁期以降の早い段階から始まるまとまった遺物出土量の増加傾向は、同末期に近い 16 世紀半頃過ぎまでは発展的に継続するようである。しかし、

室町時代末期から桃山時代前半頃に入ると徐々に減少傾向を示す。桃山時代後半から江戸時代には、遺物出土量は極めて少ないものとなる。第２調査区では江戸時代の遺物が、まとまったものを少数含み一定量は出土するが、土採取坑群からの出土が中心となっており、他の遺構からの出土はみられなくなる。

出土遺物の盛衰から見ると、中世段階から近世以降の当地の遺跡は、室町時代後半の 15 世紀後葉頃には、それまでの耕作地的土地利用から大きく変換し、工房を内包するような大型の宅地的土地利用が定着したものとなっている。16 世紀前半頃に発展的な状況を呈するが、16 世紀後半の室町時代末期頃から桃山時代頃の内には大きく衰退しており、再び耕作地帯へと回帰していくようである。さらに新しい時代の遺物があまりみられない点からも、耕作地的土地利用は近代にまで続くものと考えられる。近現代の再開発は、明治の山陰線の敷設や戦後の丸太町通の拡幅などが契機となるのだろう。

出土土器・陶磁器の生産地などの検討

京域内と同様に出土遺物の中にあっても常に多数の位置を占める土師器食器類から記す。

当調査地においては、時代別にも最も多く出土した室町時代後半頃の出土遺物の中でも、量的には土師器の小型食器類が最も多い。この時期の土師器の小型食器類は､赤褐色（～橙色）系（京内では主流派のＮとしている）のものと、ヘソ皿を含む白色系（同Ｓとしている）とに大別出来る２群が主体を構成している。出土量の多さや組成構造、形態（全形)、製作技法（Ｎ・Ｓとも手作りなど）の諸処の形式と型式（群）特徴は、やや厚手観のあるものなどの工房差程度とみられる違いは幾点か指摘出来るが、基本的には京域主流派と共通するものである。まとまった出土資料を含めて、多数出土した室町時代後半に比定出来る土器・陶磁器（群）は、京域主流派の型式（群）では京都 IX 期新（15 世紀後葉）～同Ｘ期中（16 世紀中葉頃）に属するものが量的主体を成しており、同Ｘ期新～ XI 期古（16 世紀後半）頃には減少傾向が明瞭となる。

室町時代頃の京域主流派の土師器小型食器類の生産地は、既往研究では橙色から赤褐色系（Ｎ系）は、伏見区深草町あたりを中心とした深草丘陵の南西辺部から同裾周辺低地部にかけての辺である。既往出土資料からは橙色から赤褐色系（Ｎ系）は、平安時代中期頃以降から中世を通じて、伏見深草において生産が続いたと断定的に理解してよいだろう。しかし、白色系（Ｓ系）に関しては、伏見深草からの出土資料では平安末期から鎌倉時代頃に、試行錯誤的な白色の深手のＮ系が少量みられるものの、その頃から以降も量産された痕跡を見出すことが難しい。

白色系（Ｓ系）に関しては、嵯峨地域の試掘・立会調査の報告で若干触れられている。嵯峨の東辺部となる双ヶ丘丘陵の西側隣接地、近辺には深草との地名（小字名）が残るとされている。同地域からの出土資料は、中世の白色系（Ｓ系）を主体としており、当調査地の最盛期頃の 15 世紀後葉～ 16 世紀前半頃には、この地域で白色系が生産されていたことがほぼ明らかとなっている。当調査地の土師器皿の白色系（Ｓ系）は、嵯峨の東辺部地域の生産地の製品でよいと考えている。

先に記した土師器食器の橙色から赤褐色のＮ系は、伏見深草との理解も可能と考えているが、

型式変遷の連続性からは嵯峨側の白色系の生産者は、すべてかは別にするが伏見深草の集団から分かれて移動した集団が含まれている、あるいは中心的集団となっていた可能性が高い。これらの点からは、当調査地出土のＮ系も嵯峨内の生産地の製品である可能性を含め、十分に検討が必要である。平安時代以前から嵯峨地域で、土師器の生産をしていた秦氏系の集団の存在も可視化されつつあるので、伝統的在地生産集団の変化成長、京域主流の土師器と大きな齟齬のない写し品の作製などの進展、区分の難しさも考慮し、実資料から結論を出すべきと考える。いずれにしろ当調査地出土のＮ系は、嵯峨産のものを少なからず含んでいる可能性は十分にあるだろう。結論は今後の課題としておく。

瓦器については、古い時期の混入品として出土している瓦器埦・盤などは、大阪府枚方市の楠葉産と見てよいだろう。室町時代後半では、器形的にはそれらの系譜上のものはみられなくなっているが、土製煮炊き具で主体を成す瓦器の羽釜・鍋は、大半が楠葉産としてよい。ただ少数しか出土はみられないが、第 1 調査区の溝 S9 から出土した鍋（第 32 図 28）と井戸 S41 から出土した鍋（第 35 図 49)、第 2 調査区の井戸 S509 から出土した鍋（第 39 図 18）と第 2 調査区土坑 S527 から出土した鍋（第 40 図 6）の計 4 点は､上述した多数の瓦器とは形態も大きく異なり、器表面にヘラミガキを施すなど、製作技法痕も異質である。この 4 点を含めても少数しか確認出来ていないこのタイプの瓦器鍋は、体部から口縁部が逆ハの字に開いて収める形態や、内器表面に粗いヘラミガキを施すなど、推定年代が室町時代前半に上る土師質仕上げの鍋と年代差はあっても、型式の基本的特徴が共通している。この古い土師器鍋と 4 点の瓦器鍋が、系譜のつながる同じ生産地の製品であると考えると、嵯峨を含む京域の西方から西北方の在地産の可能性があるとも考えられるが、結論は今後の課題としておく。

瓦器では他に、火舎、火鉢、風炉、行器写しなど数多くの火と関連した道具類が出土している。種類や出土量は、瓦器の中にあっては一番にも見えるかなり大きな位置を占めている。山際の嵯峨は、京内よりさらに寒い地域であるためだろうか。これらの火を扱う道具類の大半の瓦器は、大和盆地北部の奈良の製品（大和火鉢）とみている。奈良から木津川、桂川を遡る河川交通で、直接嵯峨へ搬入されていたものと見ておきたい。

擂鉢、壺、甕などで主体を占めている焼き締め陶器類は、ほぼすべて国産品であり、調理や貯蔵などの日常生活に欠かせない大事な生活用具である。擂鉢では、この時代備前産が主体を占めているが、16 世紀に入ると信楽産が少量含まれるようになっている。信楽産擂鉢の出土量は、京域内でも 16 世紀前半から登場するが、実際の量的増加は 16 世紀後半に入って下ってからである。備前産擂鉢がまとまって出土している第 1 調査区の溝 S9､溝 S14､井戸 S41 などでは、15 世紀後半から 16 世紀前半までの時間幅の広い擂鉢がまとまって出土している。備前産擂鉢は形質の堅さが売りであり、使用痕の確認出来るものも多く、使用期間も数十年以上に及ぶとみられ、伝世的使用実体を示す出土状況と理解される。

壺、甕類では、常滑産も残るが 16 世紀に入るとほとんどみられなくなり、備前産がさらに中心的となっている。16 世紀に入る頃から信楽産の甕が一定量出土するようになるが、15 世紀か

ら 16 世紀を通じて信楽産の甕が主体を占めることはない。京域と同様に備前産が大勢を占めるようである。

施釉陶磁器類は、先に別視点から見方をまとめた文章中で触れているので、ここではまとめるだけにとどめる。輸入の青磁碗、白磁坏・皿類、鉄釉天目茶垸類はすべて中国産である。しかし、天目茶垸で年代が中世前半に遡るとみられるものがあるが、建盞と断定出来るものは確認出来なかった。青磁碗類は、竜泉窯系が主体であり、白磁皿などは主に華南産である。基本的に京内出土品に通じる様相である。なお、16 世紀に入ると京内や西日本各地の城郭遺跡では、少数ながら中国・景徳鎮系の染付磁器（青花磁器）の出土がみられるようになり、16 世紀後半にはかなり増加してゆく。しかし当調査地では、この時期の輸入染付碗がほぼみられなかった。嵯峨の寺院遺跡などの嗜好性の影響なのか興味が尽きない。

鉄釉天目茶垸、花瓶や平垸、オロシ目皿・鉢などの国産陶器類は、すべてが美濃・瀬戸産である。国内では、この時期ほかの産地では施釉陶器類の生産が始まっていない稀少品ではある。しかし嵯峨では、天目茶垸、灰釉平垸・花瓶などともに、輸入品に次ぐ価値にとどまっていたようだ。

当調査地から出土する各種の土器・陶磁器類は、土師器や瓦器など在地産の可能性のあるものを含んでいるが、土師器皿 S など在地の一角で生産されたものであるとはみられるものの、純粋に在地産とは言えないものであり、伝統的な在地産は極めて限られたものであることが分かる。出土遺物のほとんどは、中国産のものと国内各地からの搬入品で占められている。

このような 15 世紀後葉から 16 世紀中葉頃の戦国時代の出土遺物の生産地や、その広がりと当地への搬入状況、また消費のあり方の様相は、京内とほとんど同様の水準であったことをよく示している。応仁の大乱以降の 15 世紀後葉から 16 世紀中頃は、勘合貿易船に天龍寺と同地域に居住した豪商角倉家が大きく関与し、日明貿易がさらに発展する。この時期に嵯峨は、経済的な力を持ち最も都市的な景観を持つに至り、経済的にも文化的にも洛中を先んじる程の位置を占める。しかし 16 世紀中葉頃には、室町幕府とその配下で発展した勘合貿易が急速に衰退する。今回の調査地で出土した青磁や青磁を中心とした遺物類の盛衰とその時代は、戦国時代の嵯峨の発展と衰退を端的に示した物質資料（歴史的物証）であり、出土状況であると考えている。

(2)　瓦　類

瓦類は量的には多くなかったが、平安時代から江戸時代のものがあり、その中で多いのは室町時代の瓦類であった。特に注目されるのは、「行基葺」式の丸瓦の出土である。「行基葺」式丸瓦を使用している古建築は全国に数棟あるが、京都では京都市伏見区深草宝塔山町に所在する宝塔寺の多宝塔（重要文化財）がある。この塔の部材には永享 10 年（1438）の墨書があり、これ以前の建立と考えられている。宝塔寺は、藤原基経の発願で藤原時平により昌泰 2 年（899）に建立された極楽寺が前身とされ、延慶年間（1308 ～ 1311）に日蓮宗に改宗し現在にいたる。宝塔寺は応仁の乱により諸堂を焼失するが、多宝塔と総門は火災を免れた室町時代の建物である。室町時代の 15 世紀前半の建物に、なぜ当時一般的ではない「行基葺」の瓦が用いられたのかはわ

からない。

宝塔寺例の他の現存の行基葺き瓦屋根建物は、元興寺極楽坊本堂・禅室（奈良市　国宝、奈良時代後期、鎌倉時代改修）、富貴寺大堂（大分県豊後高田市　国宝、平安時代後期、行基葺は復元）、来迎寺本堂（大阪府泉南郡熊取町　重要文化財、鎌倉時代後期）、孝恩寺観音堂（大阪府貝塚市　国宝、鎌倉時代後期）、鑁阿寺楼門（栃木県足利市　栃木県指定文化財、室町時代）の 5 件がある。各地に奈良時代から室町時代創建のものまであり、建物の種類も本堂（阿弥陀堂、観音堂）、塔、門など様々で、共通項が見出せない。

今回の調査で出土した「行基葺」式丸瓦の年代観は、宝塔寺多宝塔の時期に近いと思われる。「行基葺」式丸瓦の出土は第 1 調査区南端の溝 S9 からだけであった。溝の南側は、『応永鈞命絵図』によると天龍寺の子院「永安院」の敷地とみられ、溝埋土中の瓦類は永安院所用と考えられる。絵図の永安院の場所には西向きの門だけが描かれており、他にどのような建物があったかはわからないが、出土した瓦類からは、「行基葺」の瓦屋根建物、磚敷の土間床建物のあったことは想定される。第 1 調査区南西部の瓦溜 S11 からも室町時代の瓦類が出土しているが、これも永安院の別の建物に関わるかも知れない。また、出土した室町時代の瓦類の多くが二次的な火を受けていることも注目され、これは嵯峨一帯を焼いた「応仁の乱」による火災の可能性が高い。

平安時代の瓦は、いずれも後世の遺構や包含層に含まれていた小片であった。その多くは平安時代前期段階の瓦と思われる。室町時代の瓦に混じって出土したものは、同時に屋根に葺かれていた可能性も考えられるが決め手はない。調査区内各所から少しずつ出土しているが、第 1 調査区の南寄りおよび西寄りからの出土が比較的多い。平安時代の土器類も南西寄りからの出土が目立ち、調査地付近での平安時代の活動の場は今回の調査地の南あるいは西にあったと思われる。

江戸時代の瓦類は本瓦葺きの丸・平瓦と桟瓦があったが、少量で、ほとんどは第 2 調査区の土採取坑とその周辺から出土した。出土の状況からは、この地で使用されていたものかどうかはわからない。

(3)　石材片

今回の調査で特徴的な遺物として黒色の粘板岩の石材片がある。石材片は第 1、第 2 調査区とも各所で散見されたが、特に両区とも井戸（S41・S509）からの出土が目立った。小型硯の未製品もあるが、ほとんどは製品部分を取った後の端材の小片であった。嵯峨の北西方、愛宕山麓付近には粘板岩の層があり硯や砥石の原石として採掘されてきた。愛宕山麓を流れる清滝川には粘板岩の転石が多数あり、川原から採取した石からも硯や砥石が作られている。今回の出土石材片も岩盤層から採掘したものではなく、適当な厚さの転石を加工するものとみられる。

嵯峨地域で何時から硯・砥石の製作が行われたのかは明確にできないが、今回の調査から少なくとも 15 世紀末から 16 世紀初めにはこの地で生産されていたことが確かめられた。なお、現在は廃絶しているが、明治時代頃から粘板岩の小石を硯に加工して彩色した「人形硯」が、愛宕参りの土産物として販売されており、嵯峨の「郷土玩具」として人気の品になっていた。

参 考 文 献

【一般書・論考】

堀 永休『嵯峨誌』（嵯峨自治会、1932 年 6 月 15 日）

藤岡謙二郎・西村陸男『北白川と嵯峨野』（地人書房、1968 年 2 月 29 日）

京都市編『京都の歴史』3 近世の胎動（學藝書林、1968 年 10 月 10 日）

京都市編『京都の歴史』4 桃山の開花（學藝書林、1969 年 10 月 10 日）

京都市編『京都の歴史』1 平安の新京（學藝書林、1970 年 10 月 10 日）

京都市編『京都の歴史』2 中世の明暗（學藝書林、1971 年 5 月 31 日）

京都市編『京都の歴史』5 近世の展開（學藝書林、1972 年 4 月 20 日）

京都市編『京都の歴史』6 伝統の定着（學藝書林、1973 年 3 月 31 日）

京都市編『京都の歴史』8 古都の近代（學藝書林、1975 年 3 月 20 日）

横井 清『中世民衆の生活文化』（東京大学出版会、1975 年 4 月 30 日）

水上 勉・関 牧翁『天龍寺』（『古寺巡礼 京都』4、淡交社、1976 年 10 月 20 日）

小森俊寛「消費地の様相〈平安京〉」（中近世窯業調査課程講義資料、奈良国立文化財研究所、1990 年 6 月 21 日）

北田栄造編『山背の古墳 古墳の調査とその成果』（『京都市文化財ブックス』第 6 集、京都市文化観光局文化部文化財保護課、1991 年 3 月）

永瀬康博『皮革産業史の研究 – 甲冑武具よりみた加工技術とその変遷』（『御影史学研究会・民俗学叢書』6、名著出版、1992 年 12 月 23 日）

高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤 毅編『図集 日本都市史』（東京大学出版会、1993 年 9 月 10 日）

京都市編『史料 京都の歴史』第 14 巻 右京区（平凡社、1994 年 1 月 20 日）

小森俊寛「1 平安京の土器・陶磁器の概要」「2 土師器・黒色土器・瓦器」（『平安京提要』所収、角川書店、1994 年 6 月 15 日）

羽生田寂裕・小松真一『二尊院』（『京の古寺から』1、1994 年 11 月 20 日）

原田正俊「中世の嵯峨と天龍寺」（浄土真宗教学研究所・本願寺史料研究所編『講座 蓮如』第 4 巻所収、平凡社、1997 年 7 月 16 日）

渡邊秀一「山城国葛野郡班田図に描かれた古代景観 – 加筆内容をめぐって－」（『文学部論集』86 号所収、佛教大学文学部、2002 年 3 月 1 日）

大村拓生『中世京都首都論』（吉川弘文館、2006 年 1 月 20 日）

山田邦和「中世都市嵯峨の変遷」（金田章裕編『平安京－京都 都市図と都市構造』第 7 章、京都大学学術出版会、2007 年 2 月 25 日）

松尾大社編『松尾大社』（学生社、2007 年 2 月 30 日）

渡邊秀一・木村大輔・小林善仁・藤井 暁「嵯峨諸寺門前地の近代的変容に関する予備的考察」（『佛教大学アジア宗教文化情報研究所研究紀要』第 3 号所収、佛教大学アジア宗教文化情報研究所、2007 年 3 月 26 日）

平田精耕・玄侑宗久『天龍寺』（『古寺巡礼 京都』9、淡交社、2007 年 5 月 7 日）

樋口忠彦・山口敬太「京都・嵯峨野における景色の持続と変容」（『日文研叢書』第 41 集 共同研究報告書 75 所収、国際日本文化研究センター、2007 年 8 月 30 日）

繁田信一『庶民たちの平安京』（『角川選書』423、角川学芸出版、2008 年 5 月 10 日）

森 浩一『京都の歴史を足元からさぐる［嵯峨・嵐山・花園・松尾の巻］』（学生社、2009 年 4 月 20 日）

小川 功「嵯峨・嵐山の観光先駆者 – 風間八左衛門と小林吉明らによる嵐山温泉・嵯峨遊園両社を中心に -」（『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第 10 号所収、跡見学園女子大学、2010 年 10 月 15 日）

原田正俊編『天龍寺文書の研究』（思文閣出版、2011 年 3 月 31 日）

山田邦和『日本中世の首都と王権都市－京都・嵯峨・福原－』（『平安京・京都研究叢書』2、文理閣、2012 年 3 月 30 日）

野田泰三・肥留川嘉子・朝比奈英夫「角倉一族の歴史と文化的活動について」（『京都光華女子大学研究紀要』第 51 号所収、京都光華女子大学、2013 年 12 月 1 日）

河内將芳『歴史の旅 戦国時代の京都を歩く』（吉川弘文館、2014 年 3 月 1 日）

森 洋久編『角倉一族とその時代』（思文閣出版、2015 年 7 月 1 日）

林屋辰三郎『角倉素庵』（吉川弘文館、2017 年 7 月 1 日）

【発掘調査報告書等】

指宿真智雄『嵐亭敷地内亀山殿遺構発掘調査報告書』（緑地デザイン、1973 年 4 月）

指宿真智雄『天竜寺境内亀山殿遺構調査報告書』（緑地デザイン、1973 年 9 月）

江谷 寛「臨川寺旧境内」（『佛教藝術』115 所収、毎日新聞社、1977 年 10 月 30 日）

吉川義彦・石井 望・中村 敦『臨川寺旧境内跡発掘調査報告』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第Ⅳ冊、京都市埋蔵文化財研究所、1979 年 3 月 20 日）

家崎孝治「18 嵯峨院・大覚寺御所跡」（『昭和 59 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』所収、京都市埋蔵文化財研究所、1987 年 3 月 31 日）

小檜山一良「史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山 2」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 3 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』所収、京都市埋蔵文化財研究所、1995 年 3 月 31 日）

久世康博「史跡名勝嵐山」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 4 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』所収、京都市埋蔵文化財研究所、1995 年 9 月 1 日）

小檜山一良「10 史跡名勝嵐山」（『平成 5 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』所収、京都市埋蔵文化財研究所、1996 年 3 月 1 日）

小檜山一良「10 遍照寺跡」（『平成 6 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』所収、京都市埋蔵文化財研究所、1996 年 11 月 1 日）

前田義明他『特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園防災防犯施設に伴う発掘調査報告書』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告書』第 15 冊、鹿苑寺、1997 年 2 月 1 日）

京都市埋蔵文化財研究所編『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第 14 冊、京都市埋蔵文化財研究所、1997 年 2 月 28 日）

小檜山一良「8 史跡名勝嵐山」（『平成 7 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』所収、京都市埋蔵文化財研究所、1997 年 3 月 31 日）

本中 眞編『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告　大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』（大覚寺、1997 年 3 月 31 日）

菅田 薫・吉本健吾「史跡名勝嵐山」（京都市埋蔵文化財研究所編『京都市埋蔵文化財発掘調査概報』2002-10 所収、京都市埋蔵文化財研究所、2002 年 9 月 30 日）

立命館大学考古学研究会編『朝原山・長刀坂古墳群－京都市嵯峨野群集墳の分布・測量調査報告』（『立命館大学考古学研究会調査報告書』第 1 集、立命館大学考古学研究会、2004 年 2 月 1 日）

馬瀬智光「史跡名勝 嵐山 No.44」（京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市内遺跡試掘調査概報』平成 15 年度所収、京都市文化市民局、2004 年 3 月 31 日）

内田好昭『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査概報』2004-7、京都市埋蔵文化財研究所、2004 年 11 月 30 日）

本弥八郎・布川豊治・嵯峨井建『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2004-11、京都市埋蔵文化財研究所、2005 年 1 月 31 日）

堀 大輔「史跡名勝嵐山 No.95」（京都市埋蔵文化財調査センター編『京都市内遺跡試掘調査概報』平成 16 年度所収、京都市文化市民局、2005 年 3 月 31 日）

平尾政幸「史跡・名勝嵐山」（京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡発掘調査概報』平成 16 年度所収、京都市文

化市民局、2005 年 3 月 31 日）

小檜山一良『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2006-9、京都市埋蔵文化財研究所、2006 年 10 月 31 日）

丸川義広「5 史跡・特別名勝　天龍寺庭園」（『平成 16 年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』所収、京都市埋蔵文化財研究所、2006 年 12 月 28 日）

小檜山一良「6 史跡・名勝 嵐山」（『平成 17 年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』所収、京都市埋蔵文化財研究所、2008 年 2 月 29 日）

小檜山一良「8 史跡・名勝 嵐山」（『平成 18 年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』所収、京都市埋蔵文化財研究所、2009 年 2 月 20 日）

木下保明・櫻井みどり『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2008-14、京都市埋蔵文化財研究所、2009 年 3 月 31 日）

近藤奈央「史跡・名勝 嵐山」（京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡発掘調査報告』平成 20 年度所収、京都市文化市民局、2009 年 3 月 31 日）

宇野隆志「嵯峨遺跡 No.70」（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編『京都市内遺跡試掘調査報告』平成 20 年度所収、京都市文化市民局、2009 年 3 月 31 日）

加納敬二「8 史跡・名勝 嵐山」（『平成 19 年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』所収、京都市埋蔵文化財研究所、2010 年 2 月 25 日）

東 洋一『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2012-1、京都市埋蔵文化財研究所、2012 年 7 月 31 日）

小松武彦『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2012-3、京都市埋蔵文化財研究所、2012 年 8 月 31 日）

東 洋一『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2012-7、京都市埋蔵文化財研究所、2012 年 10 月 30 日）

尾藤徳行『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2012-16、京都市埋蔵文化財研究所、2013 年 2 月 28 日）

布川豊治『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2012-22、京都市埋蔵文化財研究所、2013 年 5 月 31 日）

南出俊彦『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2013-7、京都市埋蔵文化財研究所、2013 年 12 月 27 日）

古代文化調査会編『嵯峨遺跡』（古代文化調査会、2014 年 12 月 15 日）

近藤奈央『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2013-17、京都市埋蔵文化財研究所、2015 年 3 月 31 日）

津々池惣一・東 洋一『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財発掘調査報告』2014-7、京都市埋蔵文化財研究所、2015 年 3 月 31 日）

図　版

調査前全景（南東より）

調査前全景（北より）

図版2　第1調査区　検出遺構（2）

調査区東半部（北より）

調査区東半部（南より）

調査区東半部（南東より）

自然流路部分（南東より）

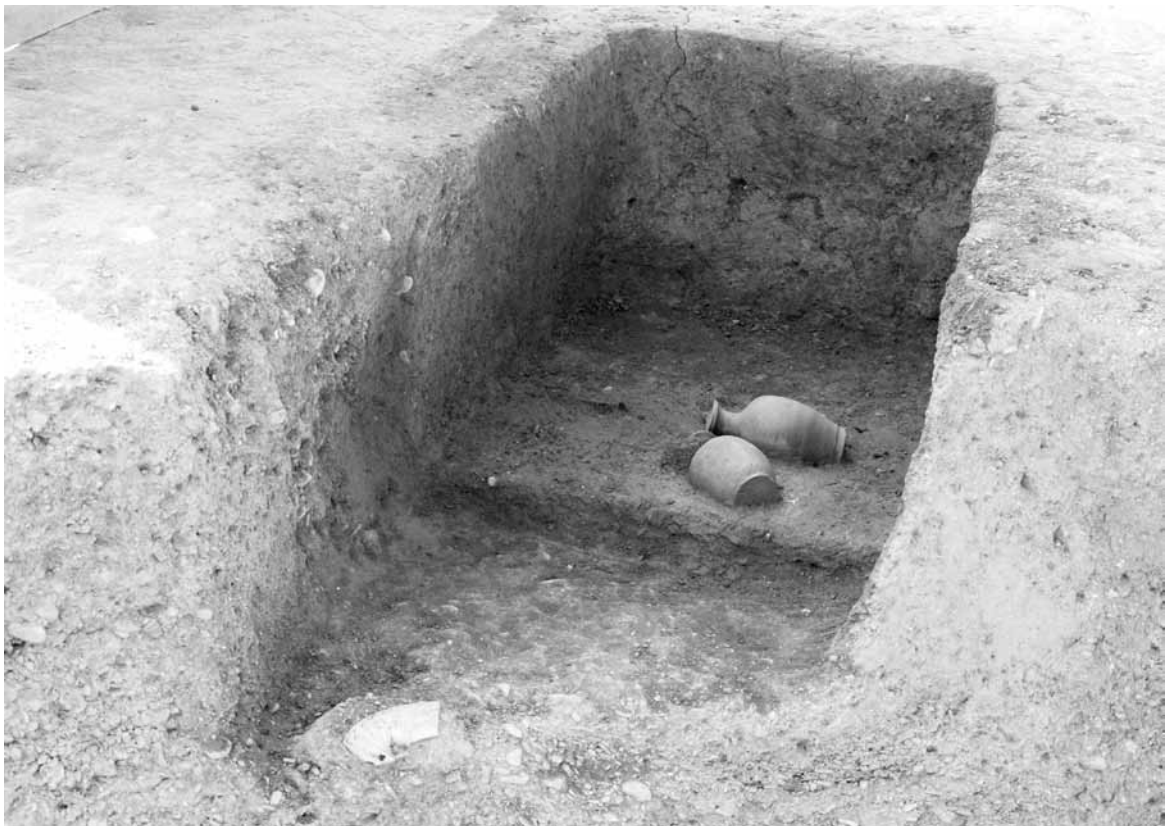
図版4　第1調査区　検出遺構（4）

調査区南半部（東より）

調査区南半部（西より）

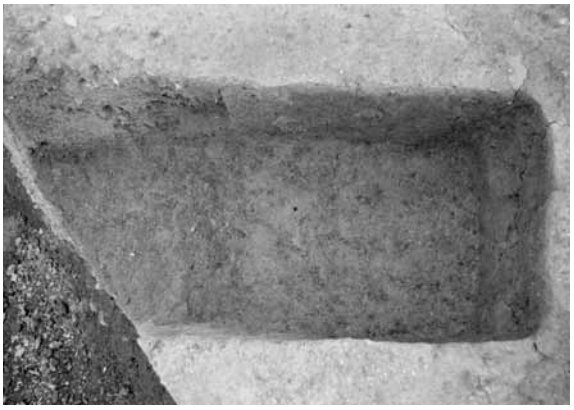
調査区下層裁ち割り（北端部）

調査区下層裁ち割り（東端部）

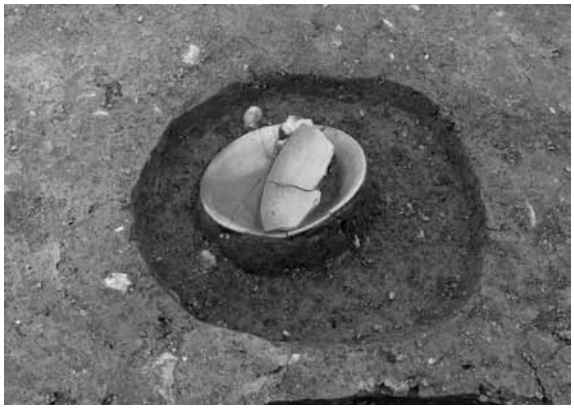


土坑 S307 遺物出土状況（東より）

土坑 S307 埋土断面（西より）

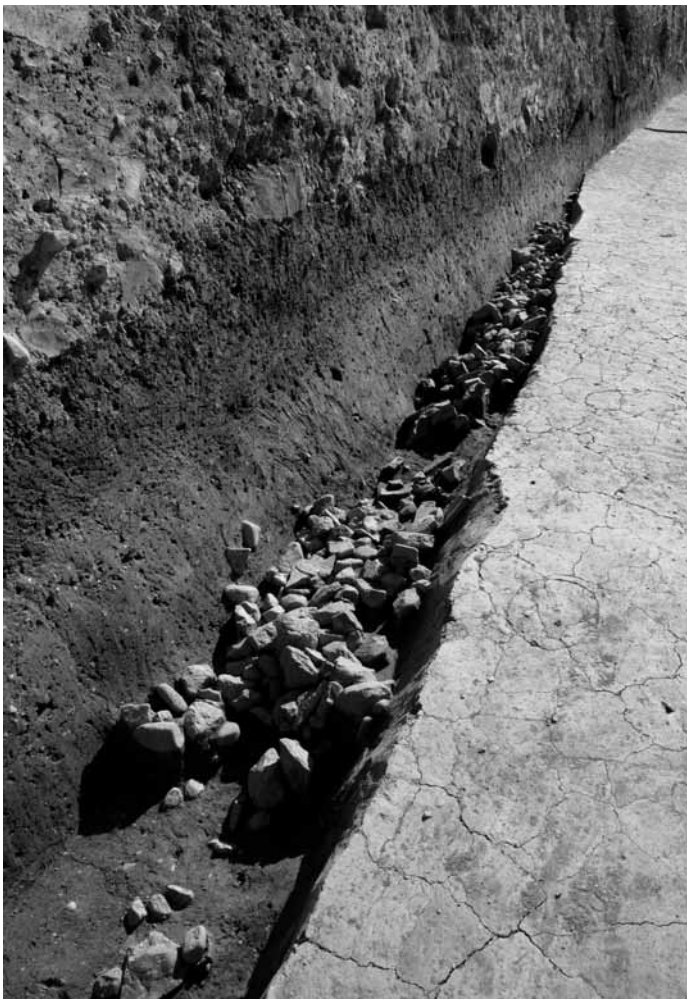


土坑 S307 完掘状況（北より）



土坑 S364（西より）

土坑 S380 付近（北西より）



溝 S9（東より）

溝 S9 東壁南端土層

溝 S9 埋土断面（東より）

溝 S9 埋土の堆積状況（東より）

溝 S9 完掘状況（東より）

溝 S14（北西より）

溝 S14（南より）

溝 S14（東南より）

溝 S14（南より）

溝 S14（西より）

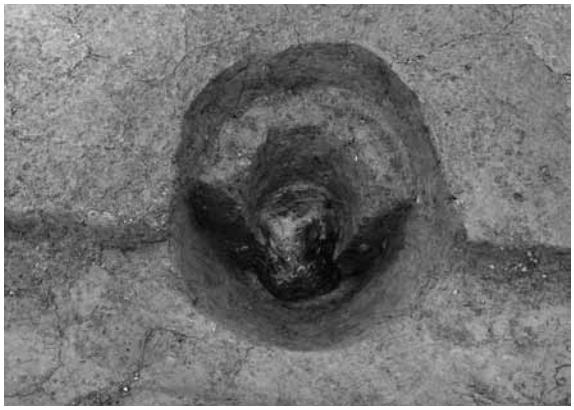
溝 S14 東西方向部埋土断面（西より）

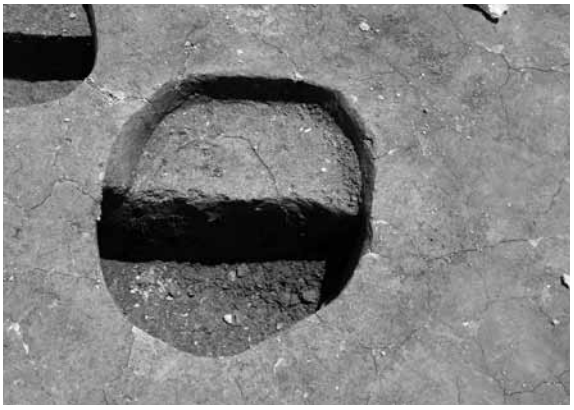
溝 S14 屈曲部遺物出土状況（北より）

溝 S14 南北方向部埋土断面（北より）

柱穴 S239（建物 1）

柱穴 S294（建物 1）


柱穴 S237（建物 1）


柱穴 S169（建物 1）

柱穴 S151（建物 1）

柱穴 S154（建物 1）

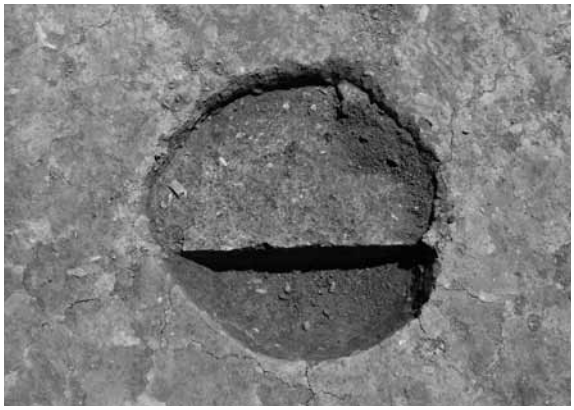
柱穴 S187（建物 1）

柱穴 S230（建物 2）

柱穴 S139（建物 2）

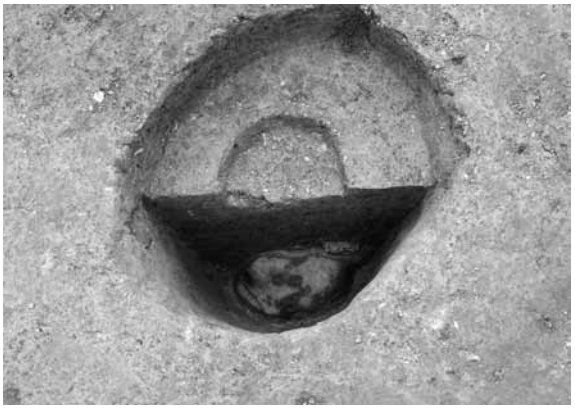
柱穴 S140（建物 2）

柱穴 S256


柱穴 S143

柱穴 S146

柱穴 S205


柱穴 S327

柱穴 S130

井戸 S41（北より）

井戸 S41 半裁状況（北より）

井戸 S41 半裁状況（北東より）

井戸 S41 最下部（北より）

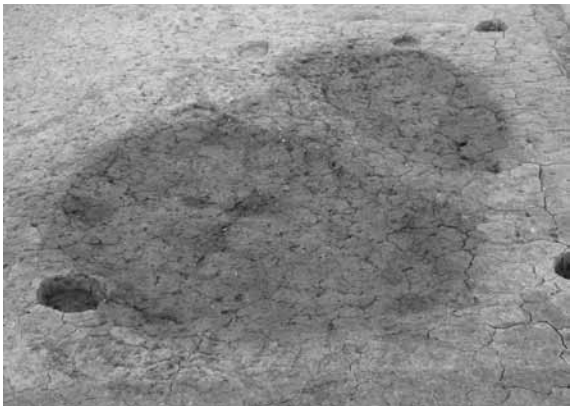
井戸 S41 石積と土台（北西より）

井戸 S41 石積の土台木材

炉状遺構 S95（南より）

炉状遺構 S95（東より）

炉状遺構 S185（北東より）


土坑 S345・346（南より）

土坑 S386（東より）

土坑 S98（南より）

土坑 S138・190（南より）

瓦溜 S11（北より）

調査前全景（北西より）

重機掘削後（南より）

図版16　第2調査区　検出遺構（2）

全景（北より）

全景（南より）

溝 S546（北より）

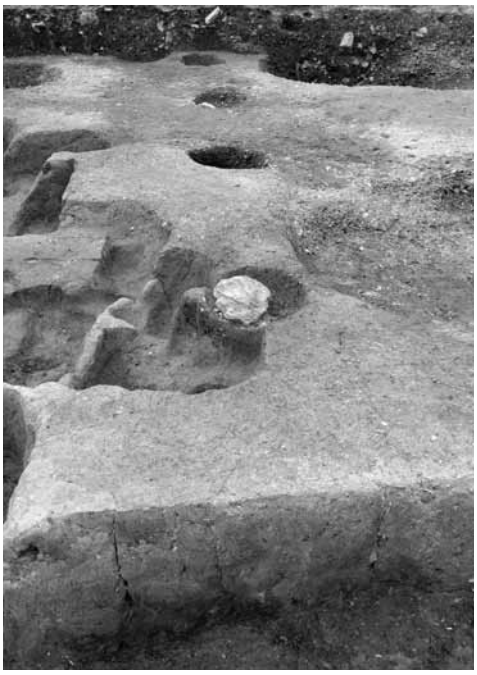
溝 S546（南東より）

溝 S546（北東より）

溝 S546 遺物出土状況（南より）

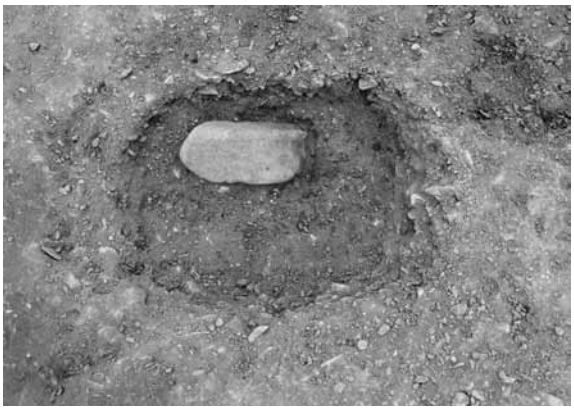
溝 S546 遺物出土状況（東より）

建物 4 柱穴列（東より）



建物 4 柱穴列（南より）

柱穴 S528（建物 4）



柱穴 S530（建物 4）

柱穴 S531（建物 4）

柱穴 S533（建物 4）

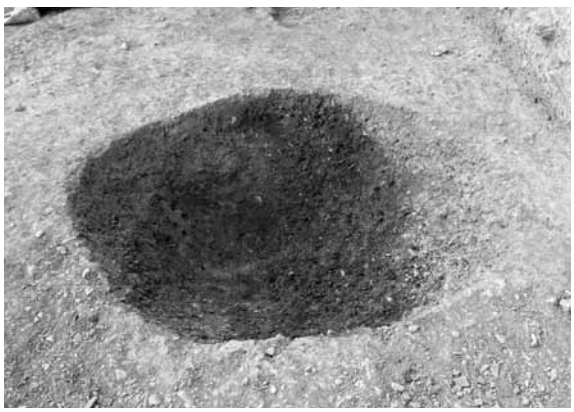
井戸 S509（北西より）

井戸 S509 石積残存部（西より）

土坑 S557（南より）

土坑 S527（東より）

土坑 S549（東より）



土坑 S548（東より）

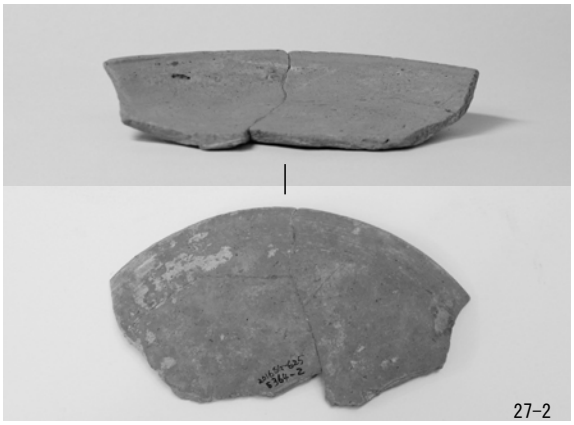
土坑 S582（南より）

土採取坑群（東より）

土採取坑群（西より）

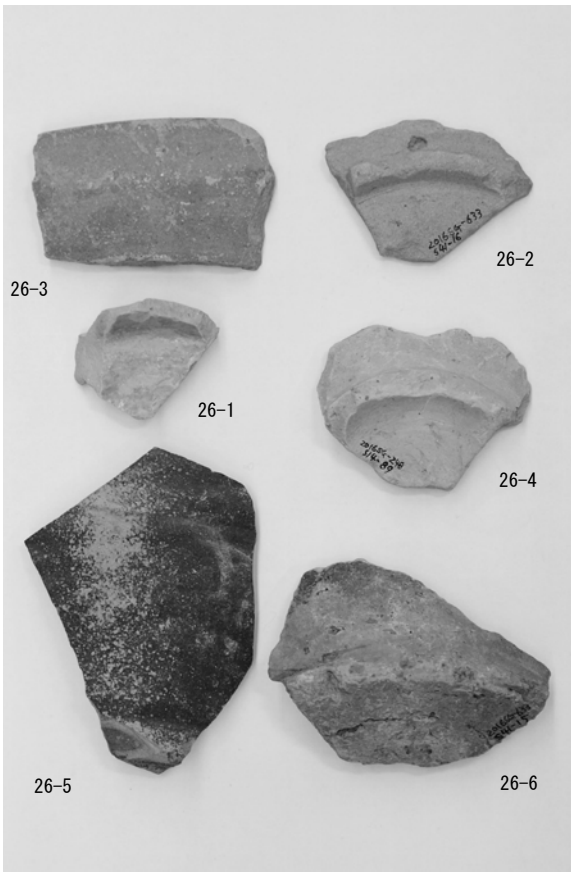
土採取坑群　中央部（東より）

土採取坑群　全景（北より）

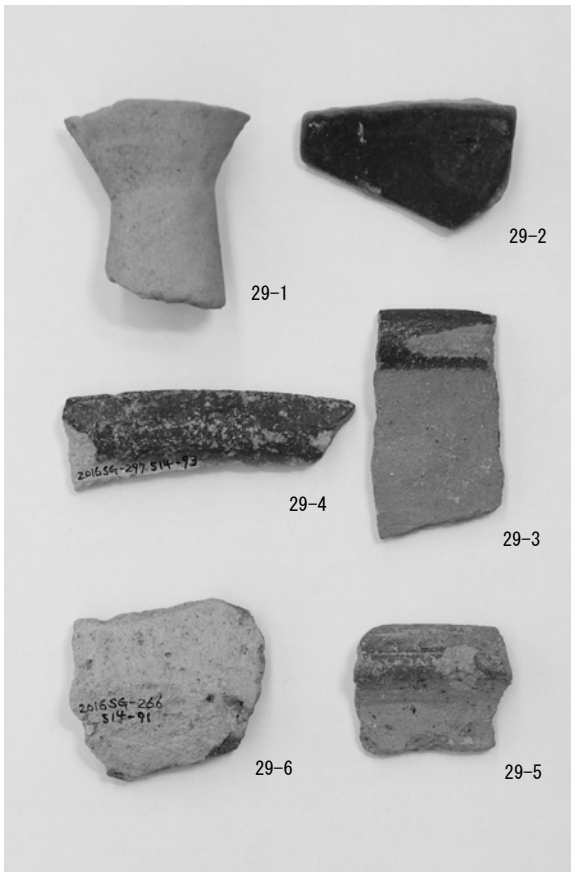


土坑 S364 出土土器

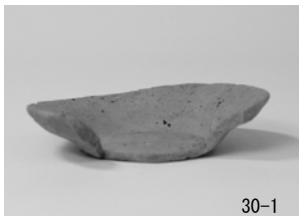
土坑 S307 出土土器



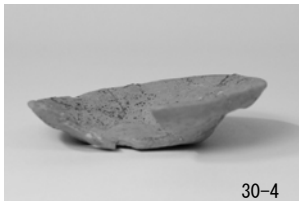
平安時代の土器



鎌倉時代の土器


30-1

30-5

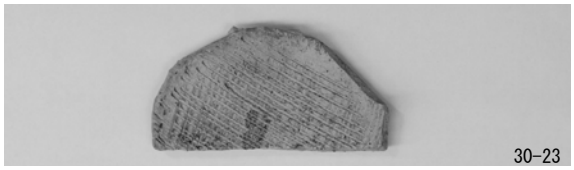

30-4

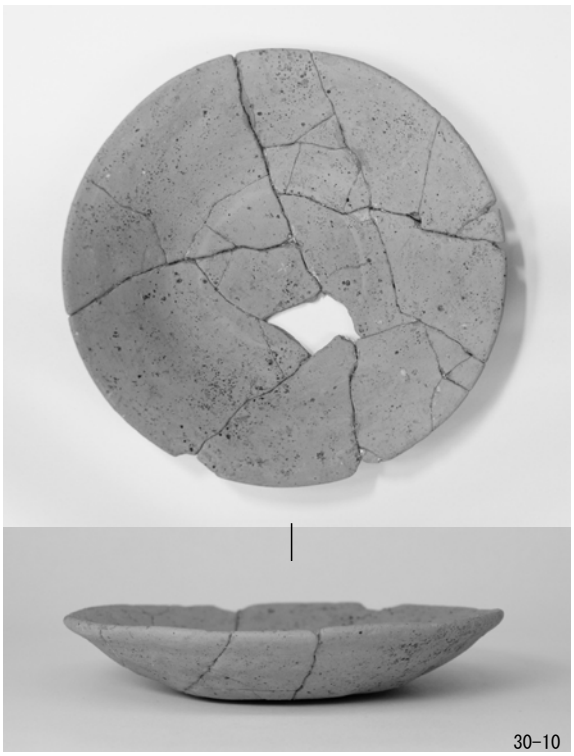
30-6

30-3

30-8

30-24


30-23


30-10

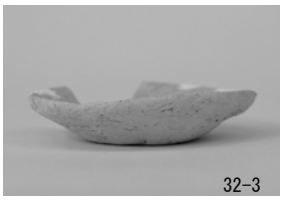
30-11

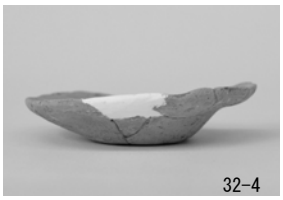
30-14

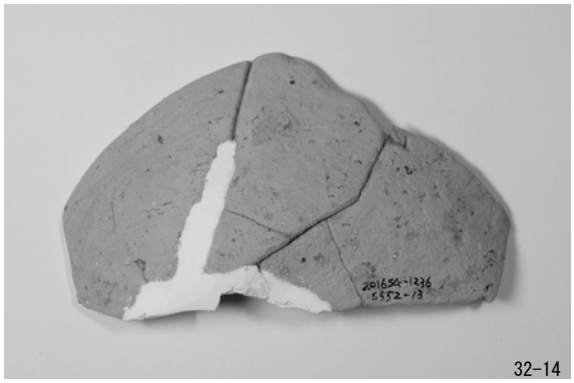
溝 S546 出土土器

溝 S546 出土土器

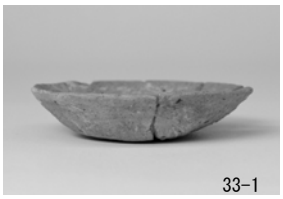
土坑 S574 出土土器

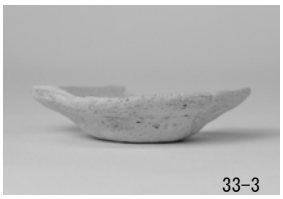


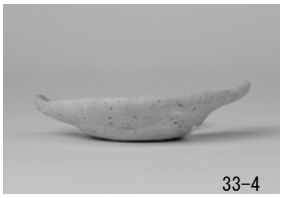




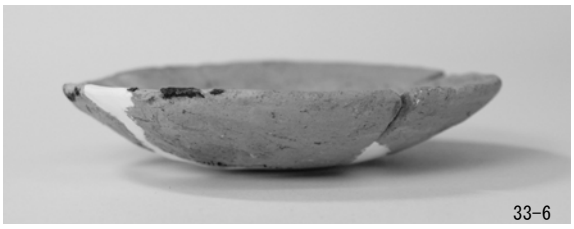
土坑 S552 出土土器



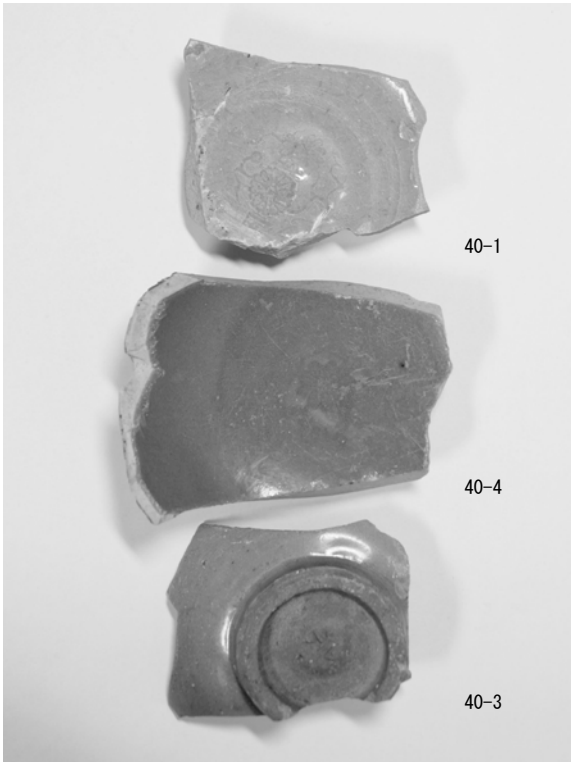




土坑 S576 出土土器



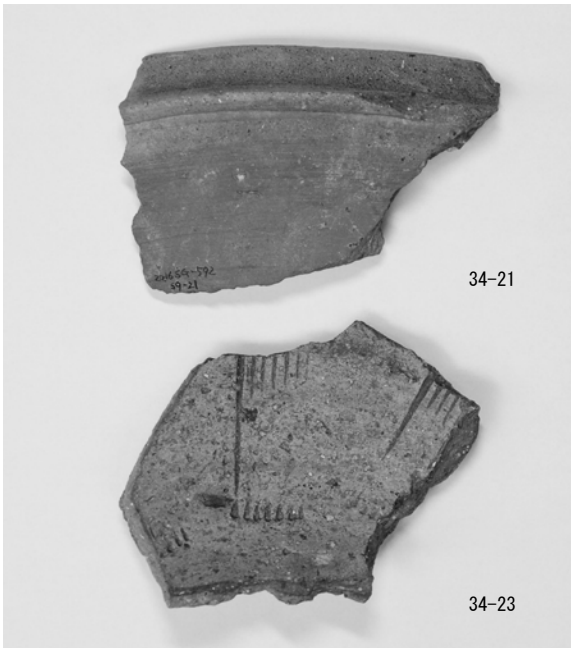
土坑 S549 出土土器・軒平瓦

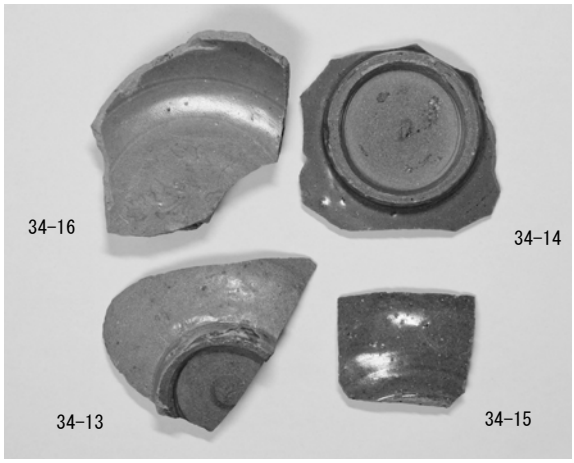


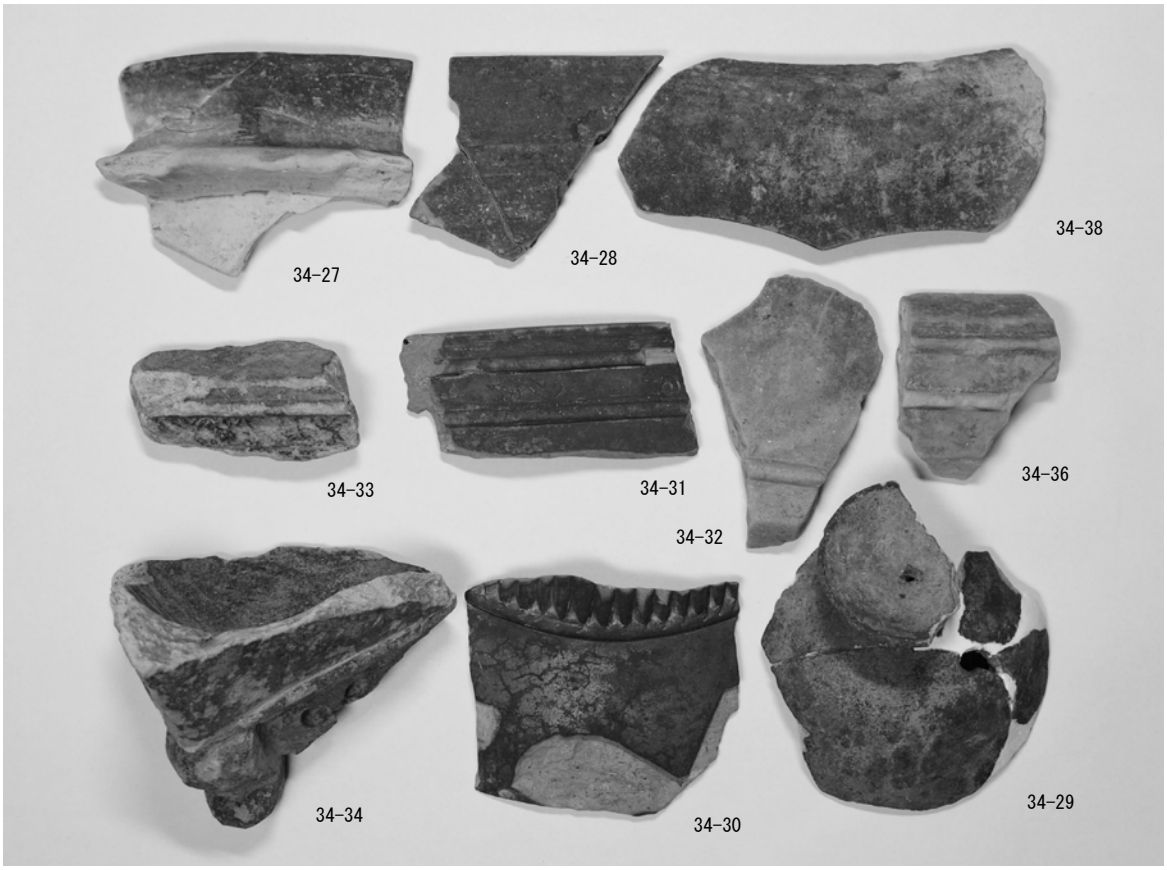
発掘区出土 青磁

34-4

34-11
34-9
34-10


34-21
34-23


34-16
34-14
34-13
34-15


34-27
34-28
34-38
34-33
34-31
34-32
34-36
34-34
34-30
34-29

溝 S9 出土土器・陶磁器

35-1

35-8

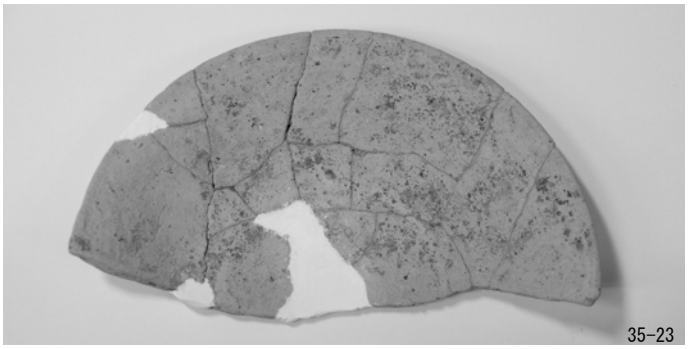
35-15

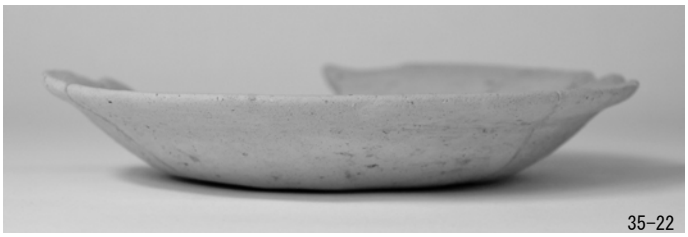
35-9

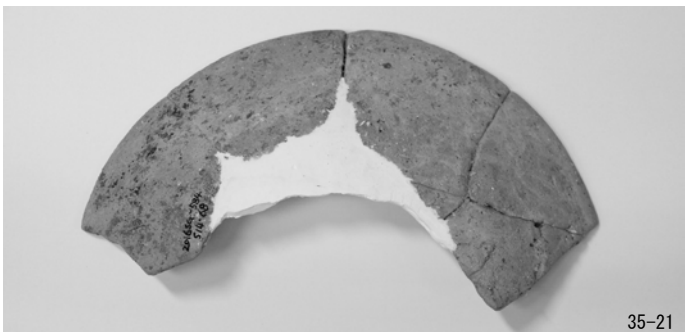
35-3

35-11

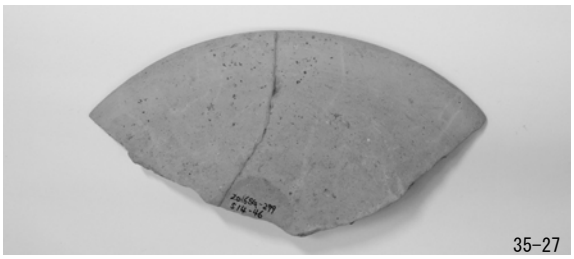
35-18


35-23

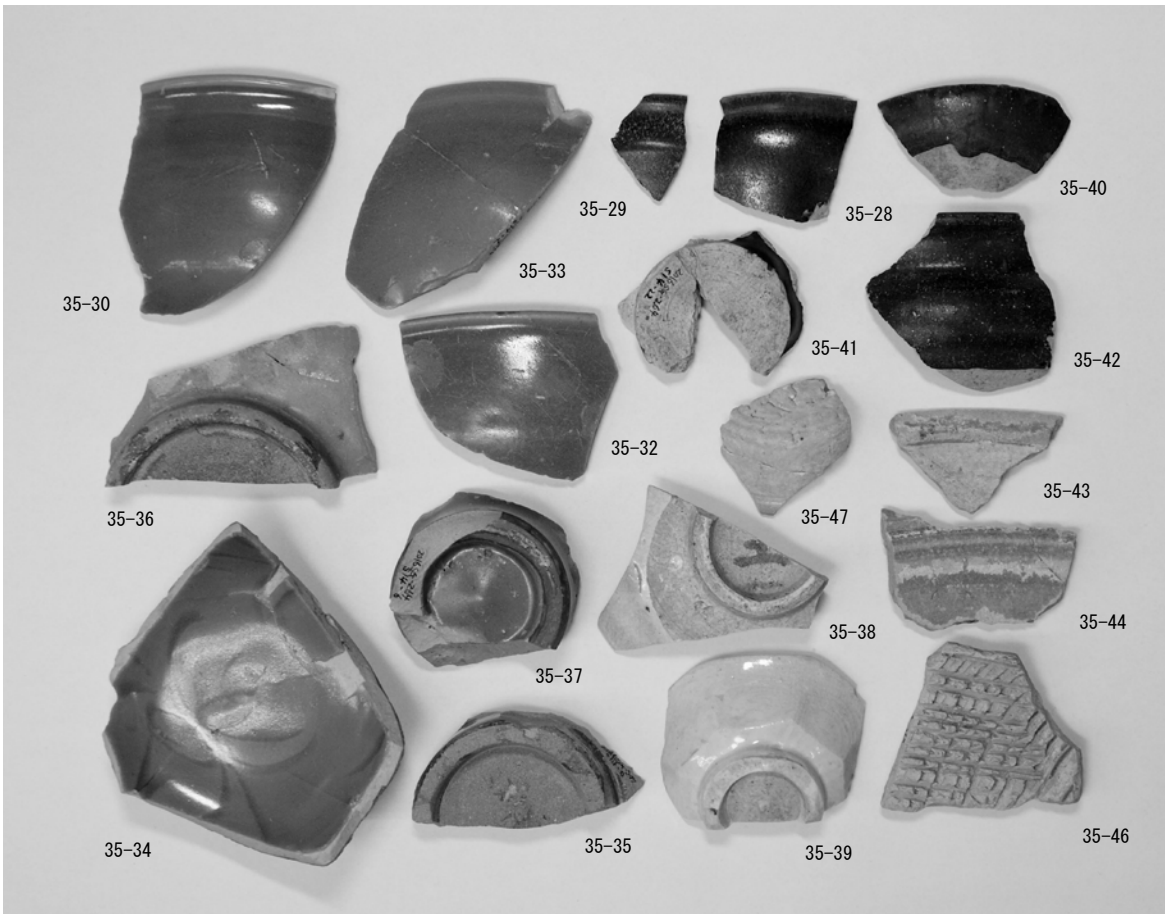

35-22

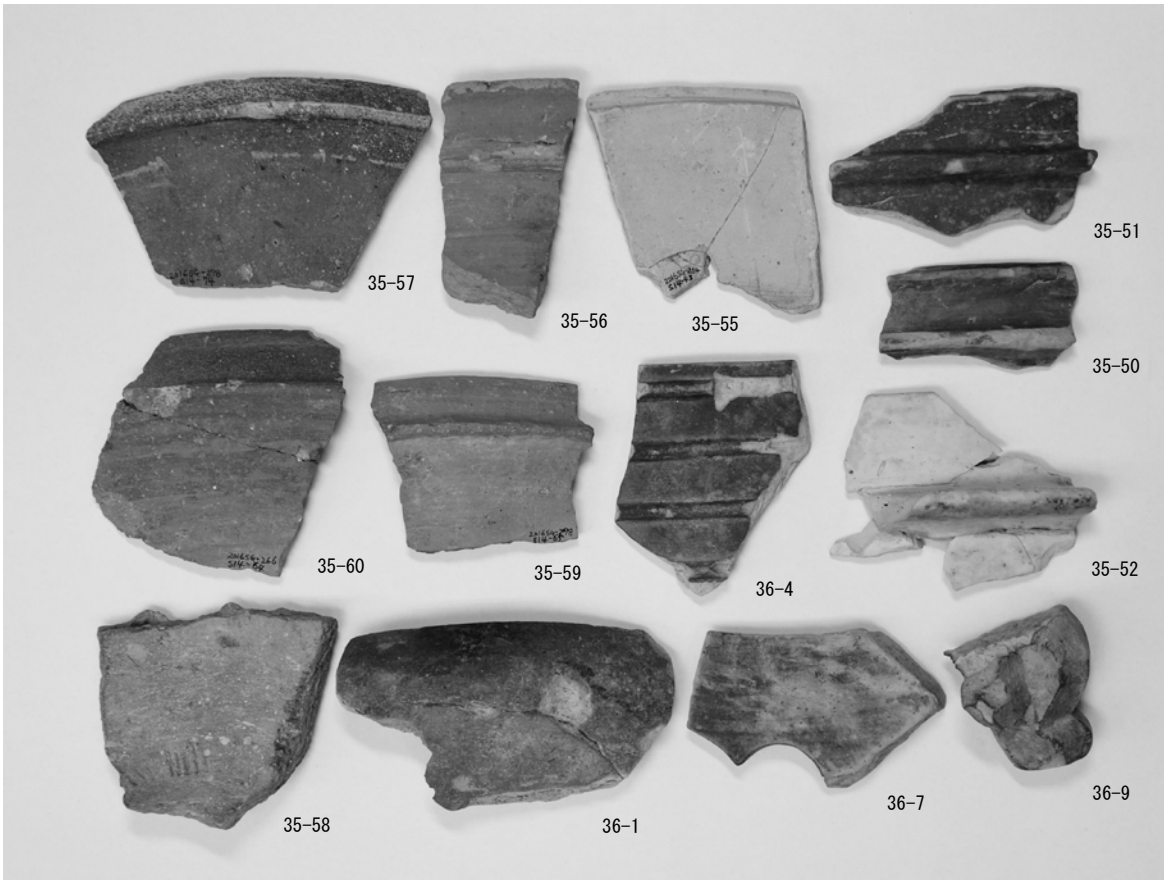

35-21

35-26

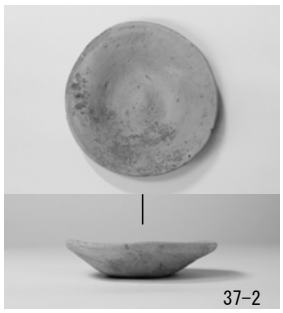

35-27

溝 S14 出土土器



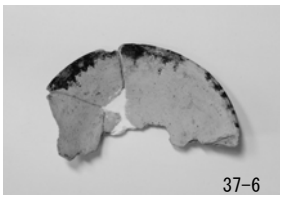


溝 S14 出土土器・陶磁器

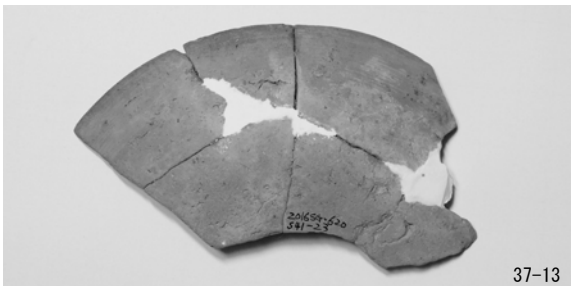

37-2

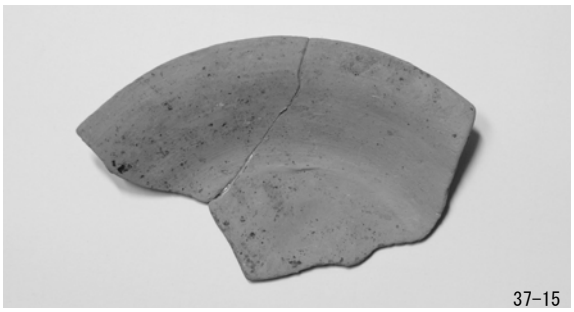
37-3

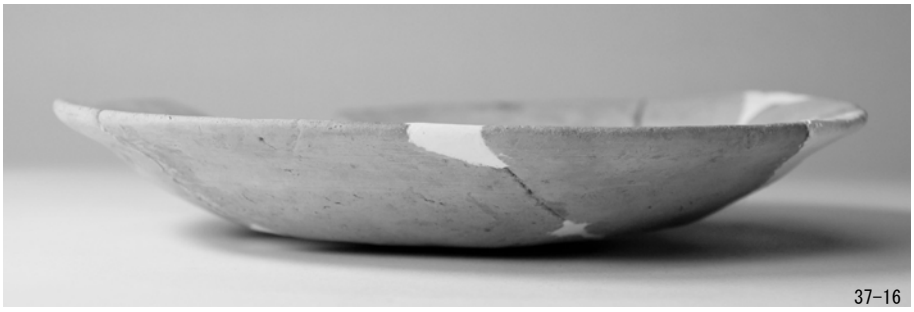
37-1


37-6

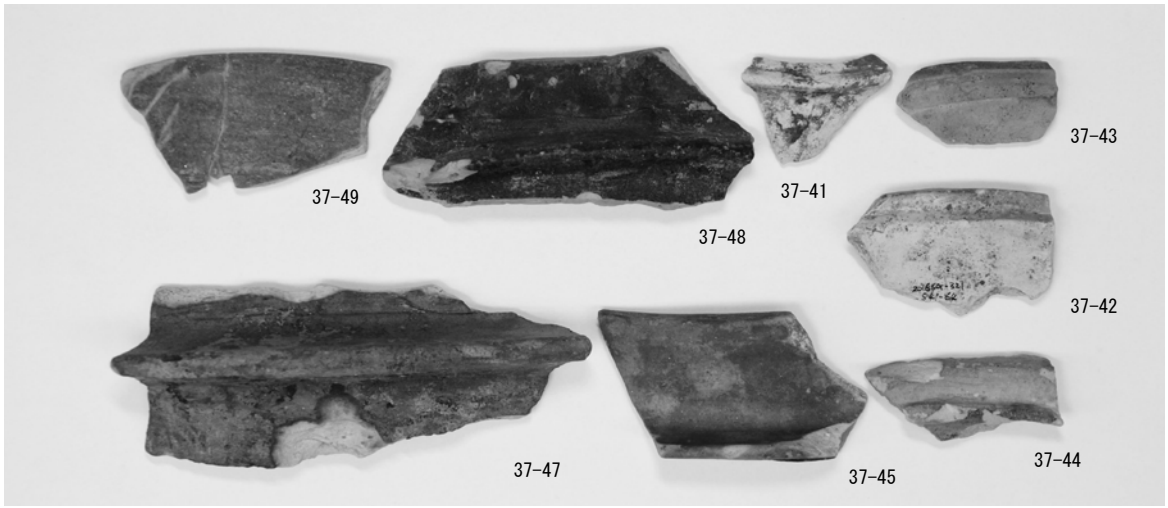
37-7


37-13

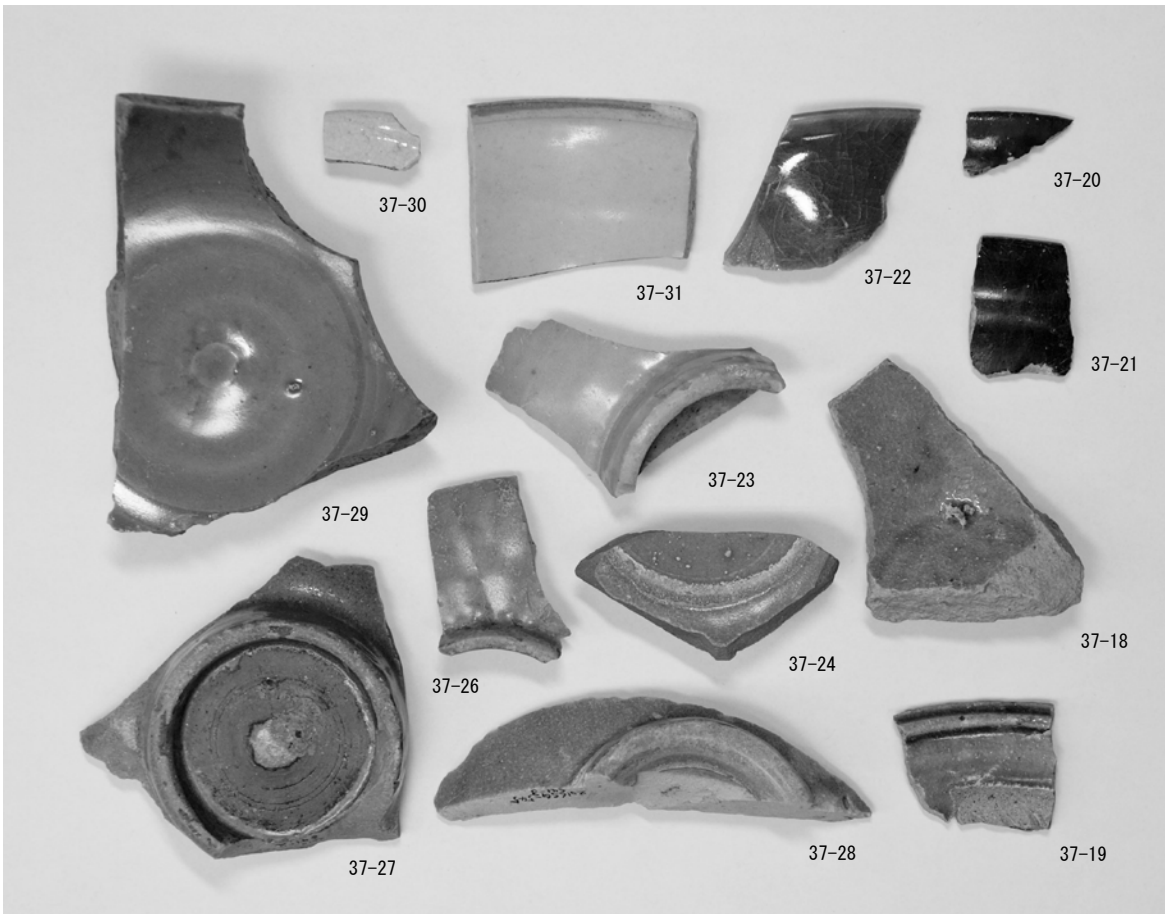

37-15

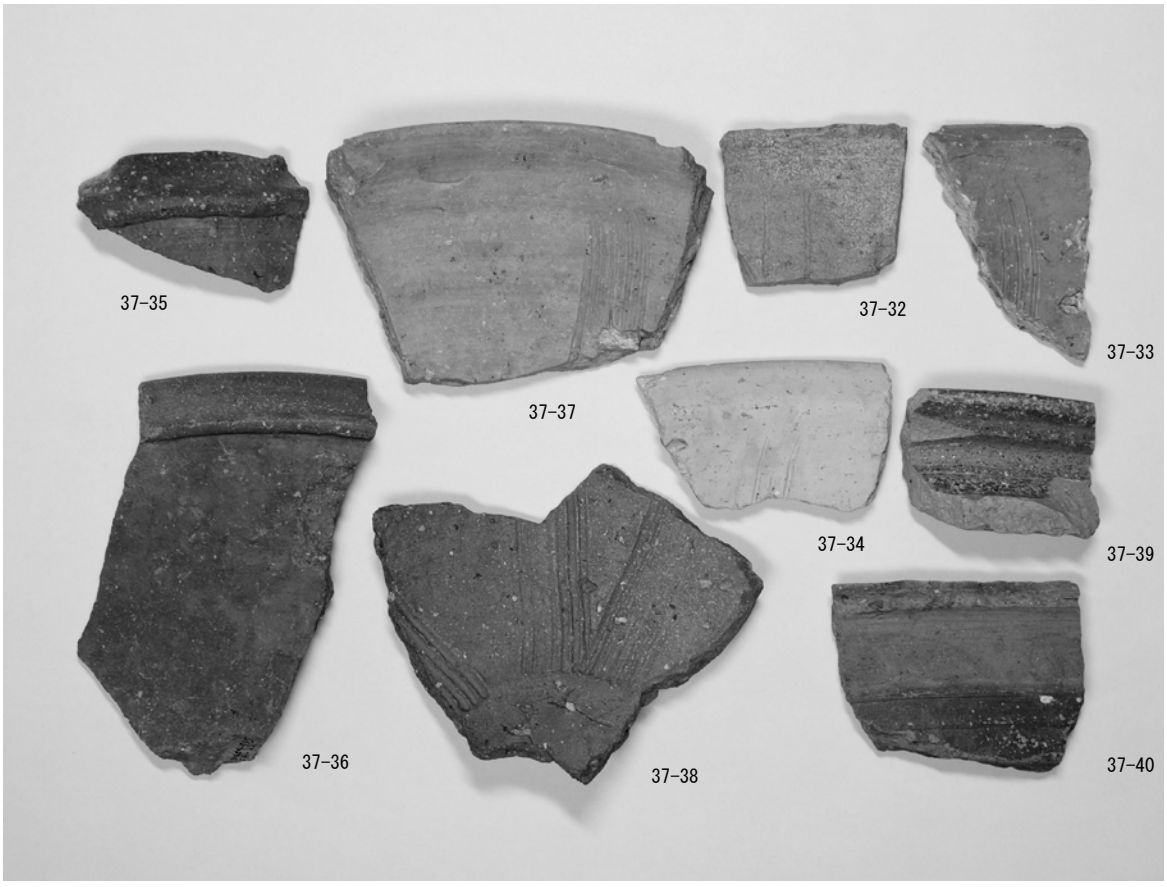

37-16

37-17

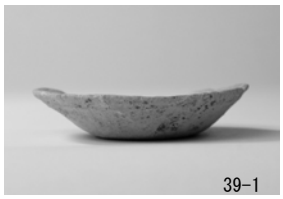


井戸 S41 出土土器

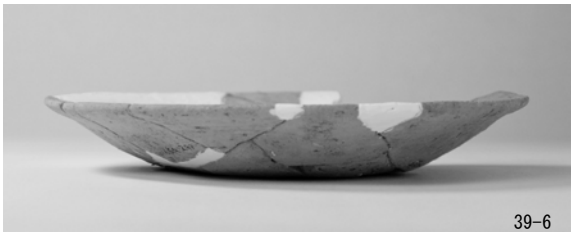




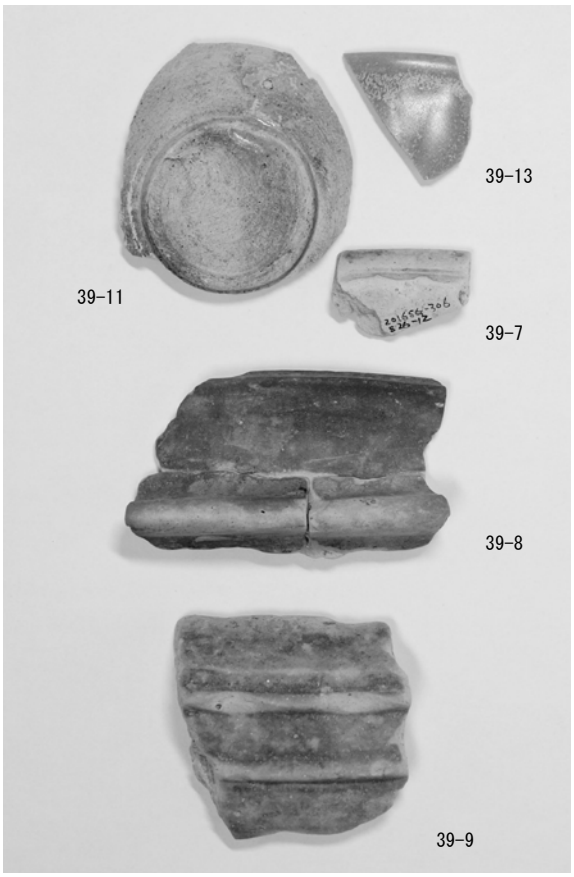
井戸 S41 出土土器・陶磁器


39-1

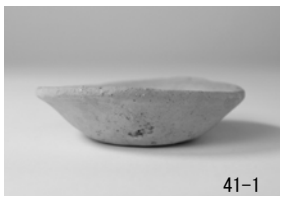
39-3


39-6

39-10


39-13
39-11
39-7
39-8
39-9

溝状遺構 S26 出土土器・陶磁器

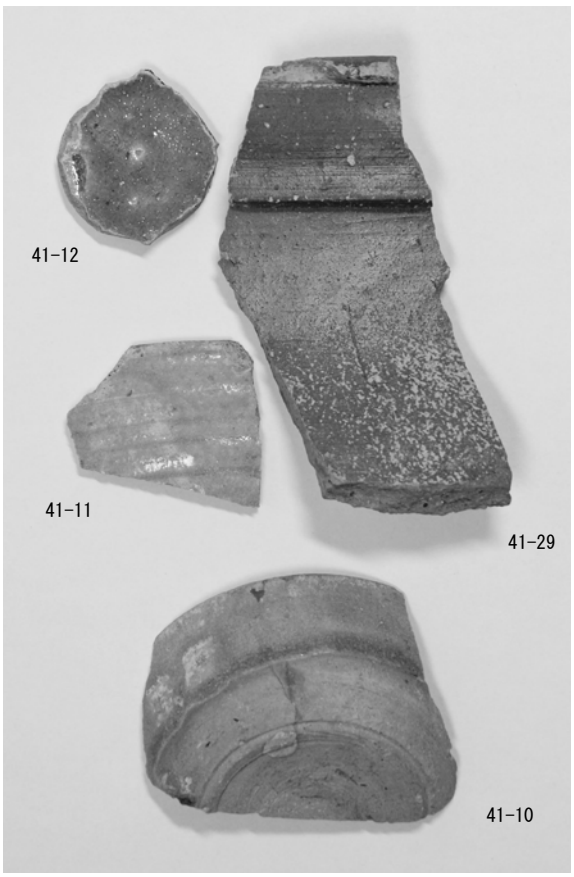

41-1

41-7

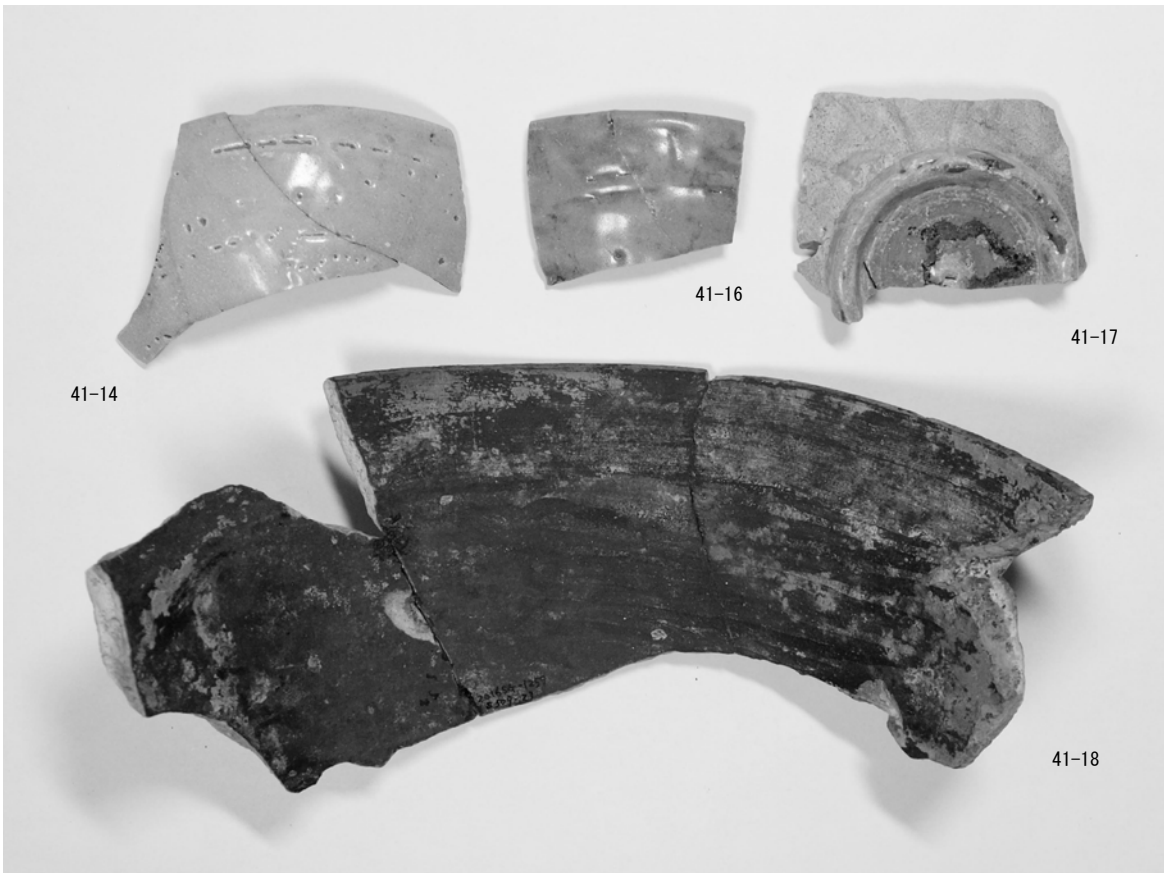
41-8

41-9

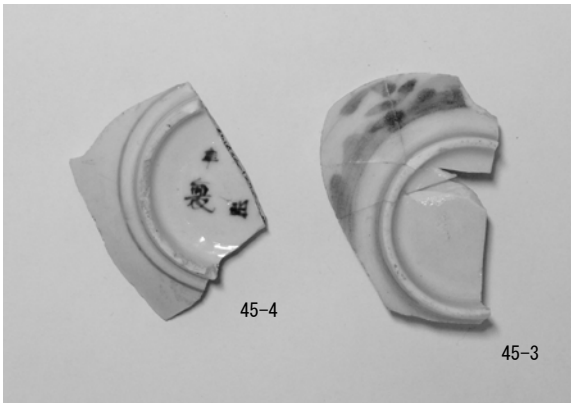
41-3


41-12
41-11
41-29
41-10

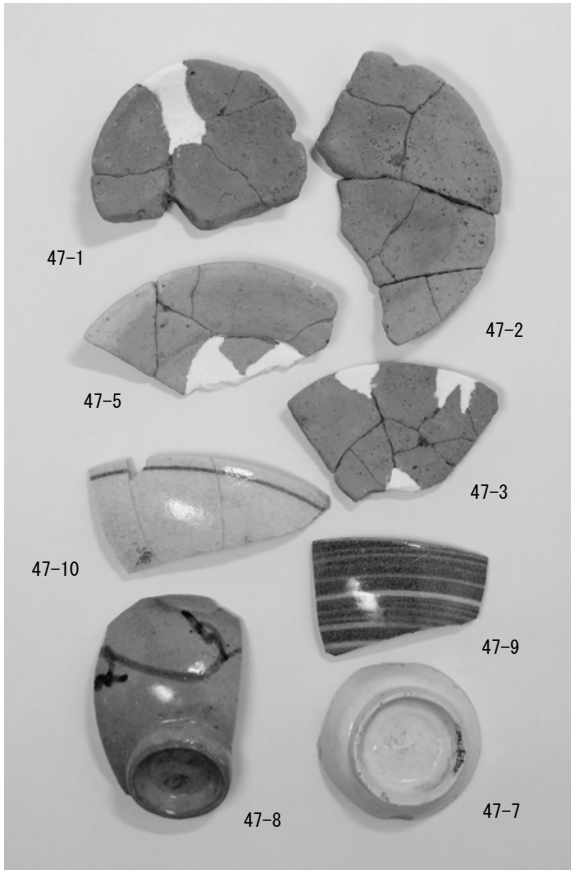
井戸 S509 出土土器・陶磁器



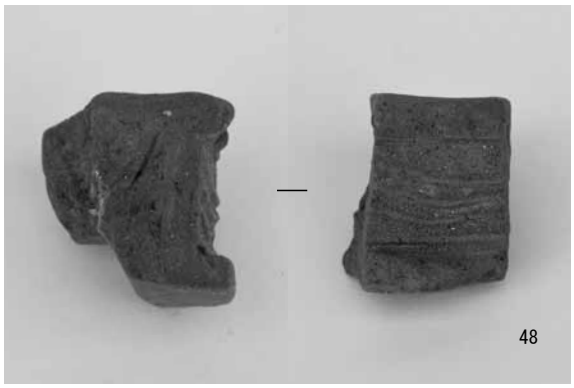
井戸 S509 出土土器・陶磁器



第 2 調査区 土採取坑群出土陶磁器

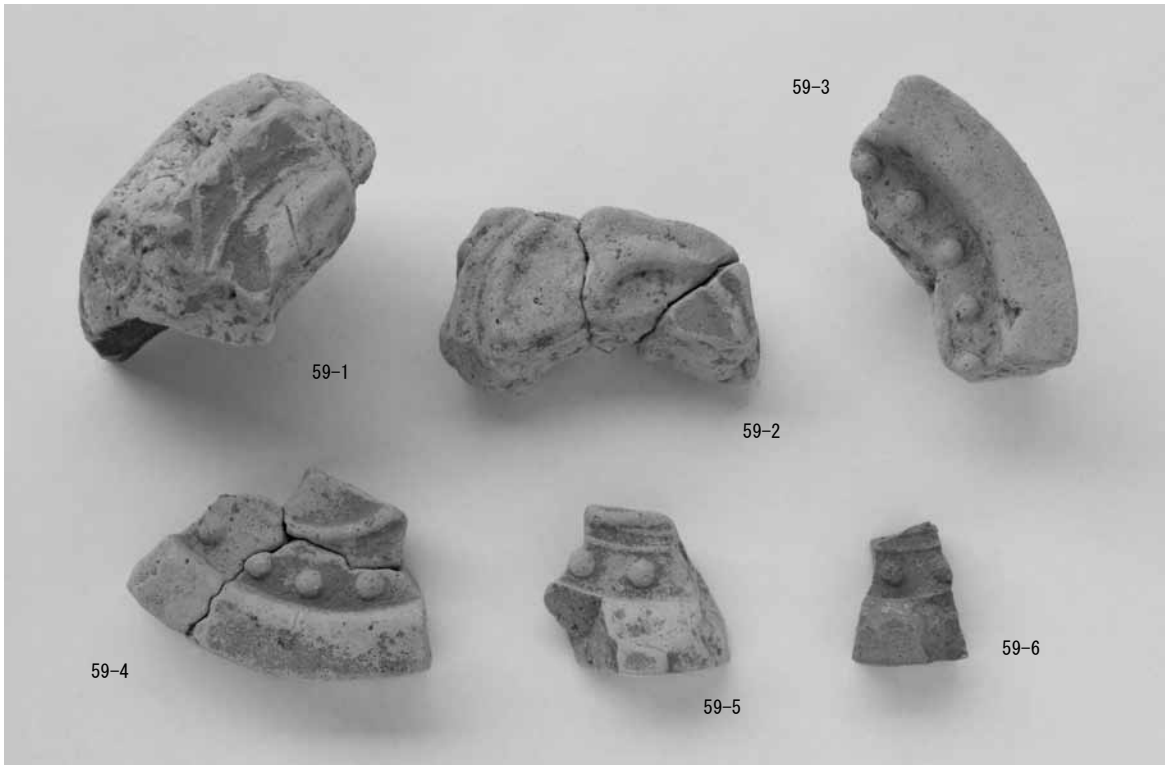


集石遺構 S508 出土土器・陶磁器

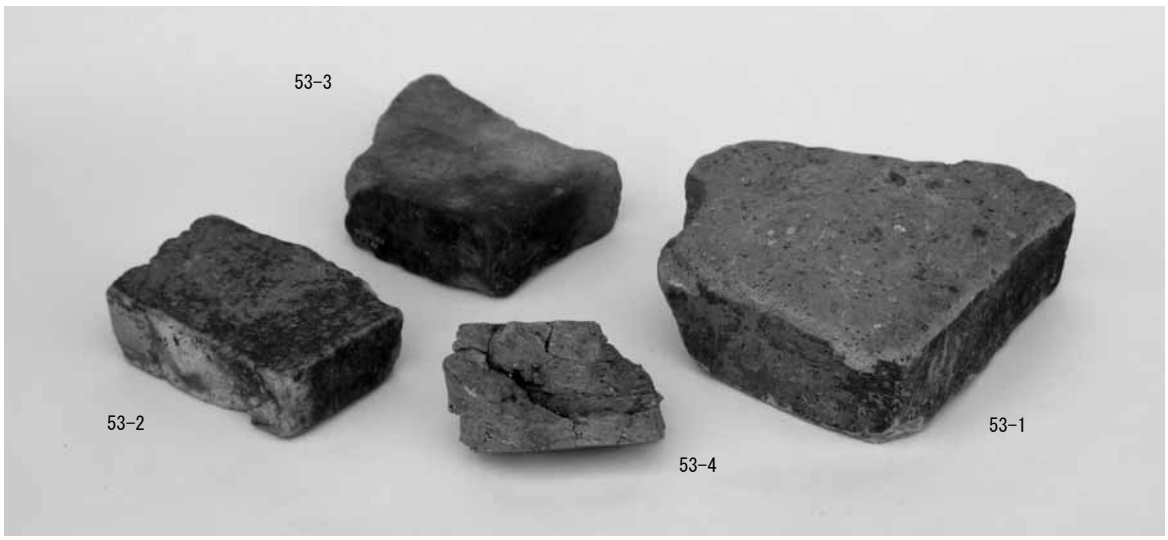


溝 S9 出土軒平瓦

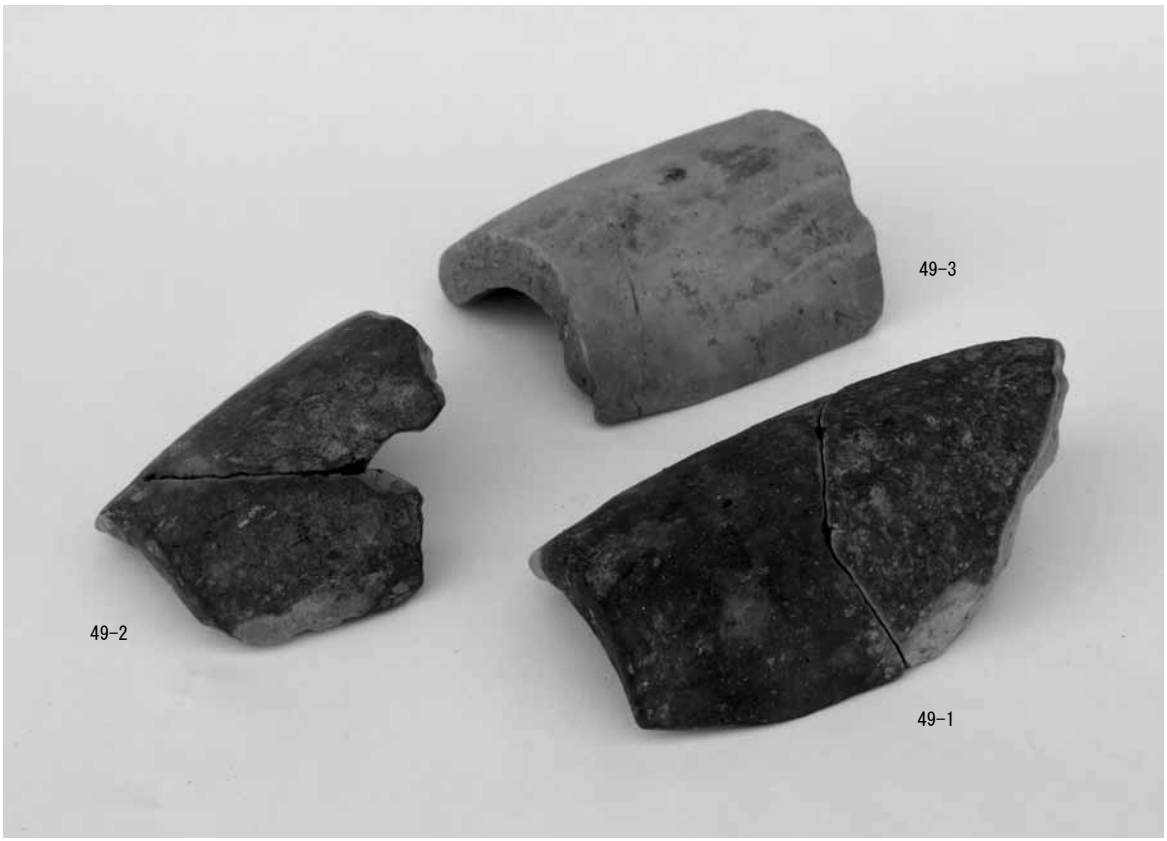
溝 S14 出土軒平瓦



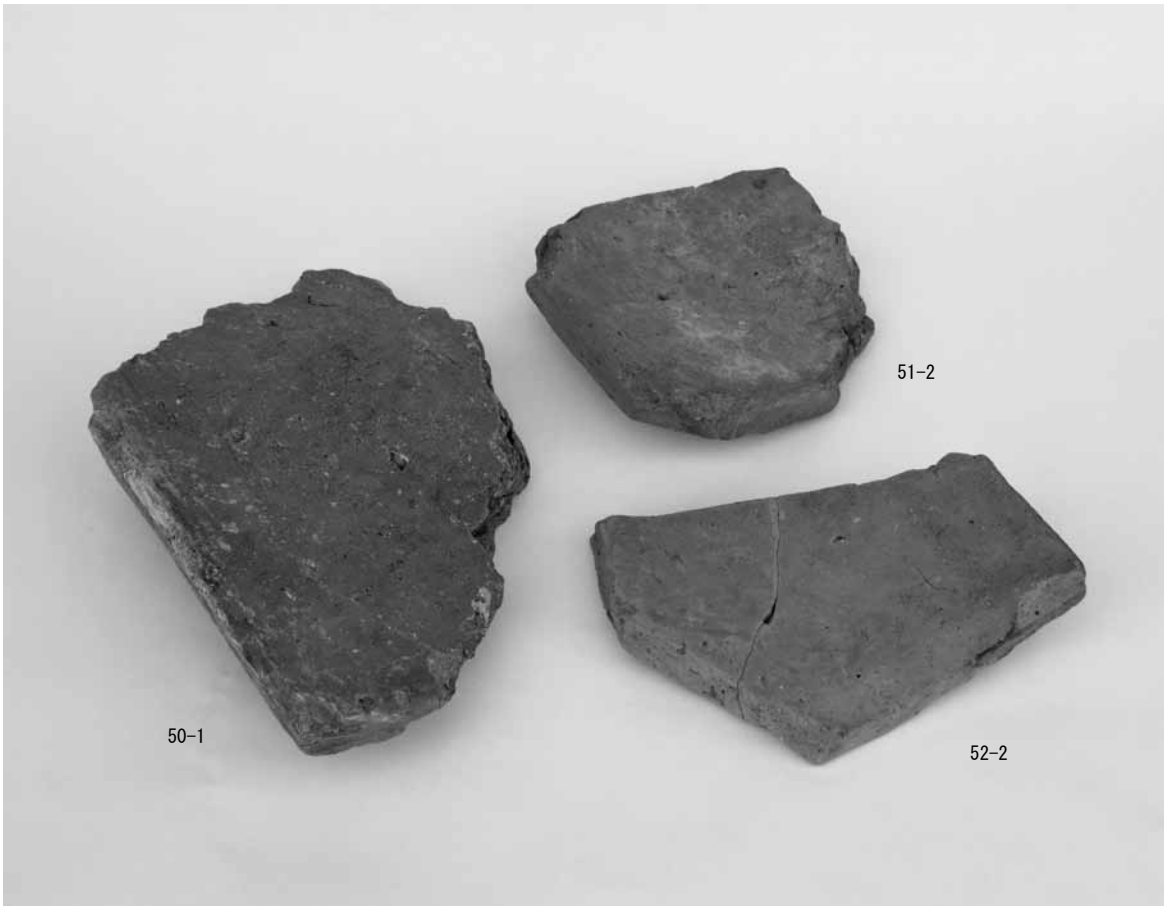
瓦溜 S11 出土軒丸瓦



溝 S9 出土磚

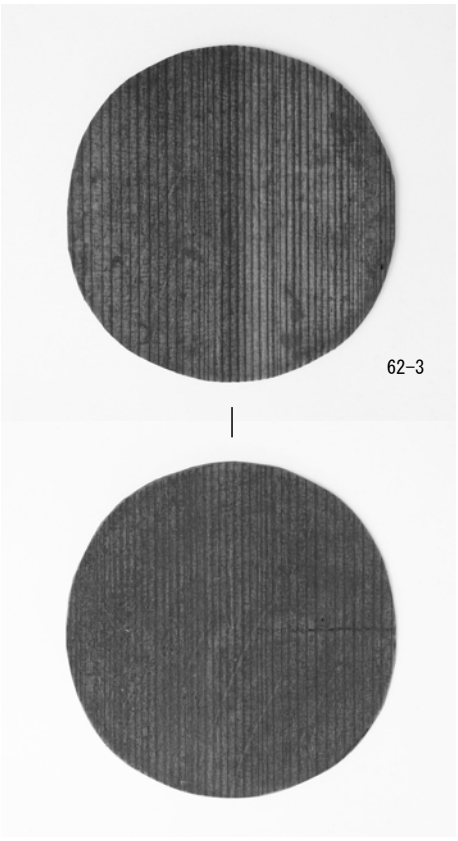


溝 S9 出土丸瓦



溝 S9 出土平瓦

62-1・2・3

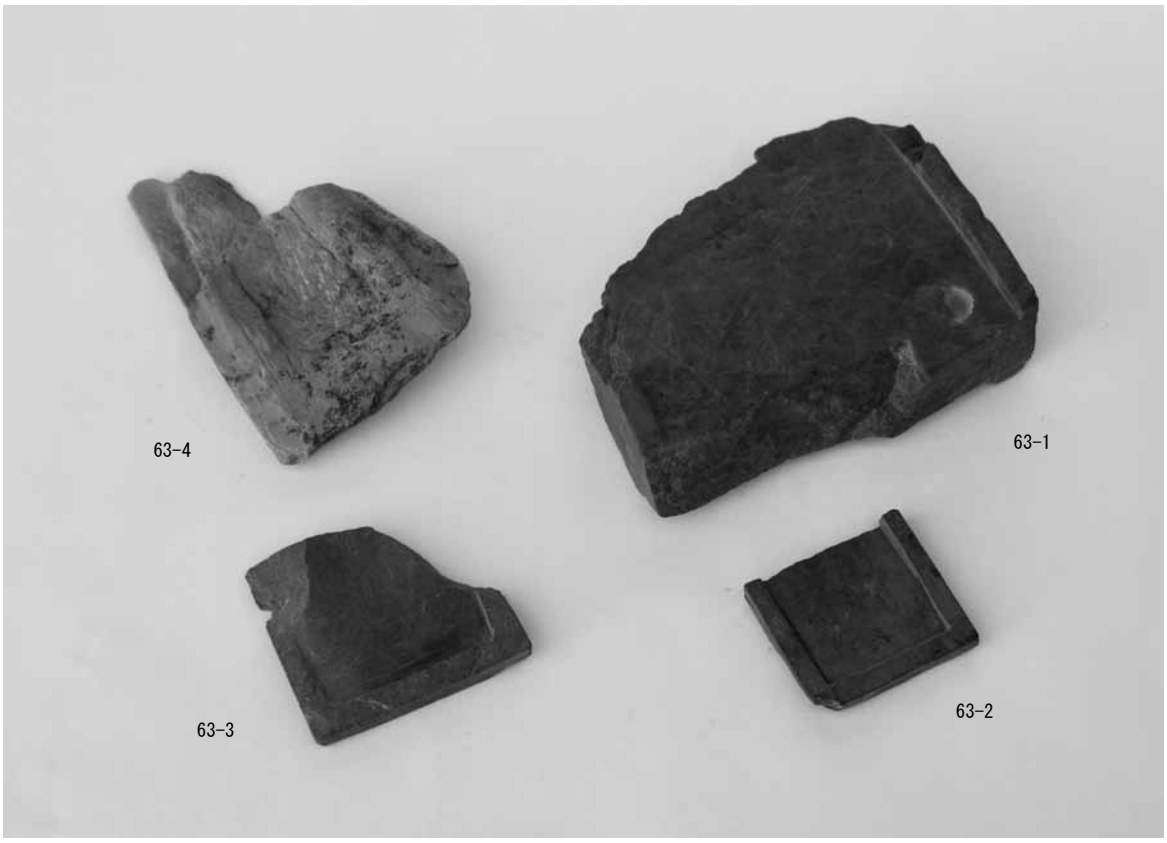


62-3

62-2

62-1

井戸 S509 出土木製品



石製硯

石材片

報 告 書 抄 録

ふ り が な	さがいせき
書　　名	嵯峨遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	京都平安文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第 6 集
編 著 者 名	植山 茂・小森俊寛
編 集 機 関	有限会社 京都平安文化財
所　在　地	〒 612-8018　京都府京都市伏見区桃山町丹後 20-4
発 行 年 月 日	2020 年 1 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
嵯峨遺跡	きょうとしうきょうくさが 京都市右京区嵯峨 てんりゅうじわかみやちょう 天龍寺若宮町 25-1,3,4,6,7, 29-9,20-71,21-1,33	26108	937	35 度 40 分 13 秒	135 度 40 分 48 秒	2016 年 3 月 22 日 ～ 2016 年 10 月 21 日	1,302㎡	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嵯峨遺跡	寺院	平安時代 ～ 江戸時代	土坑墓 掘立柱建物 井戸 溝 土採取坑	須恵器小壺 土師器皿 瓦器類 中国製青磁類 国産陶磁器類 瓦磚類 石材・石製硯 木製品	

要　　約	平安時代の遺構で墓と見られる土坑を単独で検出したが、今回の調査で検出した遺構のほとんどは、応仁の乱後の 15 － 16 世紀に属すると考えられる。主な遺構に、計画的な配置の建物、溝、井戸などがあり、中世嵯峨遺跡の変遷の一端を明らかにできた。

令和２年（2020 年）1 月 31 日発行

嵯峨遺跡
（京都平安文化財調査報告　第６集）

編集　有限会社京都平安文化財
〒 612-8018　京都市伏見区桃山町丹後 20 番地 4
電話　075―644―6600

印刷　あおぞら印刷株式会社
〒 604-8431　京都市中京区西ノ京原町 15
電話　075―813―3350